鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（108）

堂園遺跡A地点・古殿諏訪陣跡
折戸平遺跡・山神迫遺跡

二〇〇七年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（108）

南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）

堂園遺跡A地点
古殿諏訪陣跡
折戸平遺跡
山神迫遺跡

2007年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

堂園遺跡Ａ地点遠景

堂園遺跡Ａ地点出土土器

堂園遺跡Ａ地点出土遺物（弥生時代中期後半）

堂園遺跡Ａ地点出土遺物（弥生時代後期後半）

壺形土器

蓋形土器

ジョッキ形土器

壺形土器

堂園遺跡Ａ地点出土遺物

序　　文

この報告書は，主要地方道鹿児島川辺線地域高規格道路南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴って，平成15年から17年度にかけて実施した堂園遺跡Ａ地点，古殿諏訪陣跡，折戸平遺跡及び山神迫遺跡の発掘調査の記録です。

これらの遺跡は，川辺町神殿・古殿に所在し，湧水の豊富な鳴野原台地の中央部に位置しています。

堂園遺跡Ａ地点では，弥生時代から古墳時代にかけての土坑と，これらに伴うと想定される壺などの遺物が多数発見され，当時の墓域ではないかと注目されました。南九州ではこの時期の墓や葬送儀礼に関する資料は限られており，今回の発見は，こうした問題を解明する糸口になると思われます。さらに，多彩な遺物から，この土地の特徴や他地域との交流の足跡をたどることができます。

このほかの遺跡からも，数こそ少なかったものの今後につながる情報を得ることができました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた加世田土木事務所，川辺町教育委員会，関係各機関並びに発掘に従事された地域の方々に厚くお礼申しあげます。

平成19年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　宮原　景信

報　告　書　抄　録

ふりがな	どうぞのいせきえいちてん，ふるとんすわじんあと，おりとびらいせき，やまがみさこいせき
書名	堂園遺跡Ａ地点，古殿諏訪陣跡，折戸平遺跡，山神迫遺跡
副書名	南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅰ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	108
編集者名	前迫亮一，　横手浩二郎，日高正人，八木澤一郎
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森　２番１号　TEL 0995－48－5811
発行年月日	2007年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査起因
どうぞのいせきえいち 堂園遺跡Ａ地点	かごしまけんかわなべぐん 鹿児島県川辺郡 かわなべちょうこうどん 川辺町神殿 あざどうぞのぼり　せとぐち 字堂薗堀，瀬戸口	463451	27－137	31° 25′ 21.2″	130° 24′ 58.9″	20050816 ～ 20061007	4200	南薩縦貫道（川辺道路）建設
ふるとんすわじんあと 古殿諏訪陣跡	かごしまけんかわなべぐん 鹿児島県川辺郡 かわなべちょうふるとん 川辺町古殿		27－36	31° 24′ 36.6″	130° 24′ 39.5″	20050705 ～ 20050810	900	
おりとびらいせき 折戸平遺跡	かごしまけんかわなべぐん 鹿児島県川辺郡 かわなべちょうこうどん 川辺町神殿		27－７	31° 26′ 10.6″	130° 25′ 46.7″	20050203 ～ 20050204	14	
やまがみさこいせき 山神迫遺跡	かごしまけんかわなべぐん 鹿児島県川辺郡 かわなべちょうこうどん 川辺町神殿		27－109	31° 26′ 18.7″	130° 25′ 52.1″	20040217 ～ 20040218	12	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂園遺跡Ａ地点		縄文時代後期・晩期	集石遺構	黒川式土器・石鏃・打製石斧	本調査
		弥生時代中期 ～古墳時代初頭	土坑（墓）	山ノ口式土器・黒髪式土器・彩文土器 松木薗式土器・中津野式土器	
		古墳時代		成川式土器 鉄鏃	
		古代～中世	道跡	土師器・須恵器・青磁	
古殿諏訪陣跡		古代	焼土跡	土師器	本調査
		中世		須恵器・青磁・染付	
折戸平遺跡		縄文時代	なし	なし	確認調査
山神迫遺跡		古墳時代	なし	なし	確認調査

遺跡の概要	堂園遺跡Ａ地点では，北東から南西に遺跡を縦断する古代の道跡が発見された。また，弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての土坑墓が64基発見され，県内では類例の少ない時期の墓域として注目される。 古殿諏訪陣跡は，応永24年９月11日の島津豊久と伊集院頼久の合戦の際，伊集院氏が敗走する島津氏を追撃するために布陣した地とされている。遺構は，本陣と伝えられる諏訪神社から西に約50m離れているためか明瞭な遺構は発見されなかった。 折戸平遺跡，山神迫遺跡は遺構・遺物とも発見されなかったが，周知の遺跡の一部であるので，今後開発等に当たっては，事前に調査する必要がある。

第１図　遺跡の位置図（Ｓ＝１／25,000）

例　　言

1　本書は，南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴う堂園遺跡Ａ地点・古殿諏訪陣跡・折戸平遺跡・山神迫遺跡の発掘調査報告書である。

2　各遺跡は，鹿児島県川辺郡川辺町神殿・古殿に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，鹿児島県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は，折戸平遺跡と山神迫遺跡がそれぞれ平成16年２月の３，４日と17，18日に実施し，古殿諏訪陣跡は平成16年７月５日から８月10日まで，堂園遺跡Ａ地点は平成16年８月16日から平成17年10月７日まで実施した。整理作業・報告書作成は平成18年度に実施した。

5　遺物番号は，通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は，各図面に示した。

7　本書で用いたレベル数値は，鹿児島県土木部が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　発掘調査における実測図の作成，写真の撮影は，調査担当者が行った。空中写真撮影は，平成16年度は有限会社ふじた，平成17年度はスカイサーベイ九州株式会社に委託した。

9　遺構実測図のトレースは，郷田千秋が行い，監修は前迫亮一が行った。

10　土器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て横手浩二郎が行った。
　　土器の実測・トレース：今村智子・志和池和恵・新徳より子・東国原ゆかり・別府祐子
　　松平ひとみ
　　土器の実測：立山佳代子・長友みゆき・末吉智子　　土器トレース：郷田

11　石器の実測・トレースは，株式会社パスコに委託し，監修は横手が行った。また，実測・トレースの一部を志和池が行った。

12　遺構内外の土壌分析及び遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また，赤色顔料については，永濱功治・森雄二が担当した。

13　遺物の写真撮影は，横手・鶴田静彦・福永修一・西園勝彦が行った。

14　本書の執筆・編集は，第Ⅰ，Ⅱ章を日高正人・八木澤一郎が，第Ⅲ～Ⅶ章を横手・前迫が担当した。

15　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，堂園遺跡Ａ地点の遺物注記の略号は「ドウＡ」，古殿諏訪陣跡の遺物注記の略号は「フル」である。

目　　次

巻頭図版
序文
報告書抄録
例言
目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 2
　第３節　調査の経過 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 8
　第２節　歴史的環境 …… 11

第Ⅲ章　山神迫遺跡
　第１節　発掘調査の概要 …… 12
　第２節　層位 …… 12
　第３節　小結 …… 13

第Ⅳ章　折戸平遺跡
　第１節　発掘調査の概要 …… 14
　第２節　層位 …… 14
　第３節　小結 …… 14

第Ⅴ章　古殿諏訪陣跡
　第１節　発掘調査の概要 …… 15
　第２節　発掘調査の成果 …… 15
　第３節　層位 …… 16
　第４節　古代～中世の調査 …… 17
　　⑴　遺構 …… 17
　　⑵　遺物 …… 19
　第５節　小結 …… 21

第Ⅵ章　堂園遺跡Ａ地点
　第１節　発掘調査の概要と成果 …… 23
　第２節　層位 …… 23
　第３節　縄文時代の調査 …… 30
　　⑴　遺構 …… 30
　　⑵　遺物 …… 31
　第４節　弥生～古墳時代の調査 …… 57
　　⑴　遺構 …… 57
　　⑵　遺物 …… 94
　第５節　古代～中世以降の調査

⑴　遺構 …… 122
⑵　遺物 …… 122
第６節　分析・同定 …… 126

第Ⅶ章　まとめ …… 176

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置図
第２図　関係遺跡の位置図 …… 9
第３図　山神迫遺跡トレンチ配置図 …… 12
第４図　山神迫遺跡土層断面図 …… 13
第５図　折戸平遺跡トレンチ配置図 …… 14
第６図　古殿諏訪陣跡トレンチ配置図 …… 15
第７図　古殿諏訪陣跡トレンチ土層断面図 …… 16
第８図　古殿諏訪陣跡本調査範囲図 …… 17
第９図　古殿諏訪陣跡土層断面図 …… 18
第10図　古殿諏訪陣跡遺構配置図 …… 19
第11図　古殿諏訪陣跡出土遺物実測図 …… 20
第12図　堂園遺跡Ａ地点本調査範囲図 …… 24
第13図　堂園遺跡Ａ地点土層断面図⑴ …… 25
第14図　堂園遺跡Ａ地点土層断面図⑵ …… 26
第15図　堂園遺跡Ａ地点土層断面図⑶ …… 27
第16図　堂園遺跡Ａ地点土層断面図⑷ …… 28
第17図　堂園遺跡Ａ地点土層断面図⑸ …… 29
第18図　堂園遺跡Ａ地点検出の集石遺構実測図… 30
第19図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑴ …… 31
第20図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑵ …… 32
第21図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑶ …… 32
第22図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑷ …… 34
第23図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑸ …… 35
第24図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑹ …… 36
第25図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑺ …… 38
第26図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑻ …… 39
第27図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑼ …… 40
第28図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑽ …… 41
第29図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑾ …… 42
第30図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⑿ …… 43
第31図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⒀ …… 44
第32図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⒁ …… 46
第33図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⒂ …… 47
第34図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⒃ …… 48
第35図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⒄ …… 49
第36図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⒅ …… 51
第37図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⒆ …… 52
第38図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代⒇ …… 53
第39図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代(21) …… 54
第40図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代以降⑴ …… 55
第41図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
縄文時代以降⑵ …… 56
第42図　堂園遺跡Ａ地点検出土坑配置図 …… 58
第43図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑴ …… 62
第44図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑵ …… 63
第45図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑶ …… 64
第46図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑷ …… 65
第47図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑸ …… 66
第48図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑹ …… 67
第49図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑺ …… 68
第50図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑻ …… 69
第51図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑼ …… 70
第52図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑽ …… 71
第53図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑾ …… 72
第54図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⑿ …… 73
第55図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⒀ …… 74
第56図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⒁ …… 75
第57図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⒂ …… 76
第58図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⒃ …… 77
第59図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⒄ …… 78

第60図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⒅ …… 79
第61図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⒆ …… 80
第62図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図⒇ …… 81
第63図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図(21) …… 82
第64図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図(22) …… 83
第65図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図(23) …… 84
第66図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図(24) …… 85
第67図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図(25) …… 86
第68図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図(26) …… 87
第69図　堂園遺跡Ａ地点土坑実測図(27) …… 88
第70図　堂園遺跡Ａ地点土器出土状況図(1) …… 89
第71図　堂園遺跡Ａ地点土器出土状況図(2) …… 90
第72図　堂園遺跡Ａ地点土器出土状況図(3) …… 91
第73図　堂園遺跡Ａ地点土器出土状況図(4) …… 92
第74図　堂園遺跡Ａ土器土器出土状況図(5) …… 93
第75図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(1) …… 95
第76図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(2) …… 96
第77図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(3) …… 98
第78図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(4) …… 99
第79図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(5) …… 100
第80図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(6) …… 102
第81図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(7) …… 103
第82図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(8) …… 105
第83図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(9) …… 106
第84図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(10) …… 107
第85図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(11) …… 108
第86図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(12) …… 110
第87図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(13) …… 111
第88図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(14) …… 113
第89図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(15) …… 114
第90図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(16) …… 115
第91図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(17) …… 116
第92図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(18) …… 117
第93図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(19) …… 118
第94図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(20) …… 119
第95図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(21) …… 120
第96図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
弥生～古墳時代(22) …… 121
第97図　堂園遺跡Ａ地点出土道跡平面図 …… 123
第98図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
古代～中世以降(1) …… 124
第99図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図
古代～中世以降(2) …… 125
第100図 縄文時代前期～中期　土器出土分布図… 137
第101図 縄文時代後期　土器出土分布図 …… 138
第102図 縄文時代晩期　土器出土分布図(1) …… 139
第103図 縄文時代晩期　土器出土分布図(2) …… 140
第104図 縄文時代晩期　土器出土分布図(3) …… 141
第105図 縄文時代晩期　土器出土分布図(4) …… 142
第106図 縄文時代晩期～弥生時代
出土石器分布図(1) …… 143
第107図 縄文時代晩期～弥生時代
出土石器分布図(2) …… 144
第108図 縄文時代晩期～弥生時代
出土石器分布図(3) …… 145
第109図 弥生時代中期　土器出土分布図(1) …… 146
第110図 弥生時代中期　土器出土分布図(2) …… 147
第111図 弥生時代中期　土器出土分布図(3) …… 148
第112図 弥生時代中期　土器出土分布図(4) …… 149
第113図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図(1) …… 150
第114図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図(2) …… 151
第115図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図(3) …… 152
第116図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図(4) …… 153
第117図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図(5) …… 154
第118図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図(6) …… 155
第119図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図(7) …… 156
第120図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図(8) …… 157
第121図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図(9) …… 158
第122図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図(10) …… 159

第123図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図⑾ …… 160
第124図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図⑿ …… 161
第125図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図⒀ …… 162
第126図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図⒁ …… 163
第127図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図⒂ …… 164
第128図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図⒃ …… 165
第129図 弥生時代後期～古墳時代初頭
土器出土分布図⒄ …… 166
第130図 古代～中世　出土遺物分布図 …… 167
第131図 タイプ別土坑位置図 …… 178
第132図 器種別土器出土分布図 …… 179

表　目　次

表１　遺跡地名表 …… 10
表２　集石遺構構成礫データ …… 30
表３　堂園遺跡Ａ地点土坑観察表⑴ …… 60
表４　堂園遺跡Ａ地点土坑観察表⑵ …… 61
表５　古殿諏訪陣跡遺物観察表 …… 168
表６　堂園遺跡Ａ地点縄文土器観察表⑴ …… 169
表７　堂園遺跡Ａ地点縄文土器観察表⑵ …… 170
表８　堂園遺跡Ａ地点石器観察表 …… 171
表９　堂園遺跡Ａ地点弥生～古墳時代
土器観察表⑴ …… 172
表10　堂園遺跡Ａ地点弥生～古墳時代
土器観察表⑵ …… 173
表11　堂園遺跡Ａ地点弥生～古墳時代
土器観察表⑶ …… 174
表12　堂園遺跡Ａ地点古代中世遺物観察表 …… 175

図　版　目　次

図版１　折戸平遺跡確認調査状況 …… 181
図版２　堂園遺跡Ａ地点遠景 …… 182
図版３　堂園遺跡Ａ地点（上空から） …… 183
図版４　堂園遺跡Ａ地点調査前状況・土層断面　184
図版５　堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑴ …… 185
図版６　堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑵ …… 186
図版７　堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑶ …… 187
図版８　堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑷ …… 188
図版９　堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑸ …… 189
図版10　堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑹ …… 190
図版11　堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑺ …… 191
図版12　堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑻ …… 192
図版13　堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑼ …… 193
図版14　堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑽ …… 194
図版15　堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑾ …… 195
図版16　堂園遺跡Ａ地点遺物出土状況⑴ …… 196
図版17　堂園遺跡Ａ地点遺物出土状況⑵ …… 197
図版18　堂園遺跡Ａ地点遺物出土状況⑶ …… 198
図版19　堂園遺跡Ａ地点遺物出土状況⑷ …… 199
図版20　堂園遺跡Ａ地点出土遺物集合⑴ …… 200
図版21　堂園遺跡Ａ地点出土遺物集合⑵ …… 201
図版22　堂園遺跡Ａ地点出土遺物集合⑶ …… 202
図版23　堂園遺跡Ａ地点出土遺物集合⑷ …… 203
図版24　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑴他 …… 204
図版25　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑵ …… 205
図版26　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑶ …… 206
図版27　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑷ …… 207
図版28　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑸ …… 208
図版29　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑹ …… 209
図版30　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑺ …… 210
図版31　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑻ …… 211
図版32　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑼ …… 212
図版33　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑽ …… 213
図版34　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑾ …… 214
図版35　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑿ …… 215
図版36　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⒀ …… 216
図版37　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⒁ …… 217
図版38　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⒂ …… 218
図版39　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⒃ …… 219
図版40　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⒄ …… 220
図版41　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⒅ …… 221
図版42　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⒆ …… 222
図版43　堂園遺跡Ａ地点出土遺物⒇ …… 223
図版44　堂園遺跡Ａ地点出土遺物㉑ …… 224
図版45　堂園遺跡Ａ地点出土遺物㉒ …… 225
図版46　堂園遺跡Ａ地点出土遺物㉓ …… 226
図版47　堂園遺跡Ａ地点出土遺物㉔ …… 227
図版48　堂園遺跡Ａ地点出土遺物㉕ …… 228
図版49　堂園遺跡Ａ地点出土遺物㉖ …… 229
図版50　堂園遺跡Ａ地点出土遺物㉗ …… 230

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財保護・活用をはかるため，各開発機関との間で事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，県土木部道路建設課（加世田土木事務所）は，主要地方道鹿児島川辺線地域高規格道路南薩縦貫道（川辺道路）整備事業で川辺郡川辺町内において計画した事業に先立ち，対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下文化財課）に照会した。

当該事業の予定地内には，鳴野原遺跡，宮ノ上遺跡などの周知の遺跡がすでに知られていたが，平成13年に文化財課が埋蔵文化財分布調査を実施した結果，前述の２遺跡のほかに山神迫遺跡，折戸平遺跡，堂園遺跡，古殿諏訪陣跡，馬場田遺跡の計７遺跡が所在することが判明した。この結果を受けて，道路建設課，文化財課，埋蔵文化財センターの三者でこれらの遺跡の取扱いについて協議を行い，対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために確認調査を実施することとした。なお，馬場田遺跡については，町道拡幅工事であるため川辺町教育委員会が確認調査等を担当することとなった。

確認調査は，平成15年度と平成16年に実施し，埋蔵文化財センターが担当した。その結果，鳴野原遺跡，宮ノ上遺跡，堂園遺跡，古殿諏訪陣跡の４遺跡であわせて26,500㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。特に鳴野原遺跡と堂園遺跡では包蔵地内において２か所が事業対象区となったため，それぞれにＡ，Ｂの地点名を付記することとなった。なお，山神迫遺跡及び折戸平遺跡では工事計画範囲には遺跡が広がらないことが判明した。

そこで，道路建設課，文化財課，埋蔵文化財センターは再度協議し，現状保存や設計変更が不可能であることから，記録保存のため埋蔵文化財センターが本調査を実施することになった。

今回報告する堂園遺跡Ａ地点と古殿諏訪陣跡の本調査については，堂園遺跡Ａ地点が約4,200㎡を対象に，平成16年８月16日から平成17年３月18日まで（実働128日間）と，平成17年６月14日から10月７日まで（実働76日間）実施し，古殿諏訪陣跡が約900㎡を対象に，平成16年７月５日から８月10日まで（実働23日間）実施した。

なお，本調査にあたっては，調査期間の短縮と事業のより円滑な実施を図るために，埋蔵文化財センターの指導のもと発掘調査事業を民間業者に委託して実施した。委託契約にあたっては，年度ごとに埋蔵文化財センターと加世田土木事務所が覚書を交わしたうえで加世田土木事務所が事務を行った。

報告書作成については，平成18年度は平成18年４月から平成19年３月まで，堂園遺跡Ａ地点と古殿諏訪陣跡のほか，折戸平遺跡と山神迫遺跡も含めて埋蔵文化財センターで実施した。

第２節　調査の組織

平成15年度（確認調査）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（加世田土木事務所）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	木原　俊孝
調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	田中　文雄
		調査課長	新東　晃一
		調査課長補佐	立神　次郎
		主任文化財主事兼第１調査係長	池畑　耕一
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事	中村　耕治
		文化財主事	元田　順子
		文化財主事	岩戸　孝夫
		文化財主事	吉岡　康弘
		文化財主事	石原田高広
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	平野　浩二
		主事	福山恵一郎

平成16年度（本調査）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（加世田土木事務所）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	木原　俊孝
調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	賞雅　彰
		調査課長	新東　晃一
		調査課長補佐	立神　次郎
		主任文化財主事兼調査第１課第１調査係長	池畑　耕一
		文化財主事	中村　耕治
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	日高　正人
		文化財主事	森　雄二
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	平野　浩二
		主事	福山恵一郎

調査指導

平成16年12月７日	鹿児島大学法文学部助教授	本田　道輝
平成17年２月15日	東京大学大学院人文社会研究科助手	安斎　正人

平成17年度（本調査）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（加世田土木事務所）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	上今　常雄
調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	有川　昭人
		次長兼調査第1課長	新東　晃一
		主任文化財主事兼調査第1課第1調査係長	池畑　耕一
		主任文化財主事	中村　耕治
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	八木澤一郎
		文化財主事	石原田高広
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主幹兼総務係長	平野　浩二
		主事	寄井田正秀

調査指導

平成17年8月11，12日	文化庁美術学芸課考古資料部門調査官	原田　昌幸
平成17年8月16，17日	西南学院大学文学部教授	高倉　洋彰
平成18年2月7日	鹿児島大学法文学部助教授	本田　道輝

平成18年度（報告書作成）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（加世田土木事務所）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	上今　常雄（～8月）
			宮原　景信（9月～）
調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長	有川　昭人
		次長	新東　晃一
		主任文化財主事兼調査第1課長	池畑　耕一
		主任文化財主事兼調査第1課第1調査係長	長野　眞一
作成作業担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	前迫　亮一
		文化財研究員	横手浩二郎
作成事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主幹兼総務係長	寄井田正秀
		主事	蒲池　俊一

調査指導

平成18年12月8日	鹿児島大学埋蔵文化財調査室助教授	中村　直子

平成18年12月12日　　鹿児島大学法文学部助教授　本田　道輝
鹿児島大学埋蔵文化財調査室助手　新里　貴之

第３節　調査の経過

発掘調査の経過は，日誌抄から略述する。

⑴　平成16年度

平成16年５月６日（木）

調査開始。環境整備を行う。レンタカーを受け取り，ベルトコンベアーを設置する。重機の使用を開始する。

平成16年６月25日（金）～29日（火）

古殿諏訪陣跡：本調査の範囲を設定し，環境整備及び表土剥ぎを行う。

この間，宮ノ上遺跡の調査を併行して行う。

平成16年７月１日（木）～27日（火）

古殿諏訪陣跡：本調査の範囲を設定し，環境整備及び表土剥ぎを続行する。Ⅱ層で発見した遺構（溝状遺構，焼土遺構及び硬化面など）・遺物の調査を行う。

この間，宮ノ上遺跡の調査を併行して行う。

平成16年８月３日（火）～12日（木）

古殿諏訪陣跡：Ⅱ層で発見した遺構（土坑・掘立柱建物など）・遺物の調査を続行する。遺構の断面及び完掘状況の写真撮影，図面作成を行う。土層断面図を作成し，調査を終了する。

この間，宮ノ上遺跡の調査を併行して行う。

平成16年８月16日（月）～26日（木）

堂園遺跡Ａ地点：堂薗堀地区の調査開始。環境整備，表土剥ぎを行い，Ⅱ層の調査を行う。

この間，宮ノ上遺跡の調査を併行して行う。

平成16年９月１日（水）～28日（火）

堂園遺跡Ａ地点Ⅱ層で発見した遺構（硬化面など）・遺物の調査を続行する。進捗状況に応じてⅢ層で検出した遺構（ピット，柱穴列など）・遺物の調査を行う。遺構の断面及び完掘状況の写真撮影，図面作成を行う。

平成16年10月４日（月）～28日（木）

堂園遺跡Ａ地点：Ⅲ層，Ⅳ層の調査を行う。土層断面図及びⅤ層上面の地形測量図を作成し，堂薗堀地区の調査を終了した。

堂園遺跡Ａ地点：瀬戸口地区の調査を開始する。環境整備，表土剥ぎ，Ⅱ層の調査を行う。

平成16年11月１日（月）～29日（月）

堂園遺跡Ａ地点：Ⅱ層で発見した遺構（古道，硬化面など）・遺物の調査を続行する。土層断面図の作成を行う。

・11月26日（金）航空写真撮影。

・11月27日（土）現地説明会開催。

平成16年12月１日（水）～24日（金）

堂園遺跡Ａ地点：Ⅱ層からⅢ層で発見した遺構（土坑など）・遺物の調査を続行する。遺構の断面及び完掘状況の写真を撮影する。遺構の平面図，断面図を作成する。土器集中状況図を実測し，Ⅲ層上面の地形測量図を作成する。

・12月７日（火）　鹿児島大学　本田道輝助教授現地指導。

平成17年１月５日（水）～28日（金）

堂園遺跡Ａ地点：Ⅱ層からⅢ層で発見した遺構（土坑など）・遺物の調査を続行する。遺構の断面及び完掘状況の写真を撮影する。遺構の平面図，断面図を作成する。土器集中状況図を実測する。

12日（水）より，宮ノ上遺跡の調査を併行して行う。

平成17年２月１日（火）～25日（金）

堂園遺跡Ａ地点：Ⅱ層からⅢ層で発見した遺構（古道，土坑など）・遺物の調査を続行する。遺構の断面及び完掘状況の写真を撮影する。遺構の平面図，断面図を作成する。

この間，折戸平遺跡の確認調査を２月３日（木），４日（金）に行う。

この間，宮ノ上遺跡の調査を併行して行う。

・２月15日（火）東京大学　安斎正人大学院助手現地指導。

平成17年３月１日（火）～25日（金）

堂園遺跡Ａ地点：Ⅱ層からⅢ層で発見した遺構（古道，土坑など）・遺物の調査を続行する。遺構の断面及び完掘状況の写真を撮影する。遺構の平面図，断面図を作成する。

この間，宮ノ上遺跡の調査を併行して行う。

・３月25日（金）　平成16年度調査終了。

⑵　平成17年度

平成17年６月１日（水）

調査開始。環境整備を行う。レンタカーを受け取り，ベルトコンベアーを設置する。重機の使用を開始する。

平成17年６月14日（火）～28日（火）

堂園遺跡Ａ地点：Ⅲ層で発見した遺構（土坑など）・遺物の調査を行う。

この間，宮ノ上遺跡の調査を併行して行う。

平成17年７月１日（金）～28日（木）

堂園遺跡Ａ地点：Ⅲ層で発見した遺構（土坑など）・遺物の調査を続行する。遺構の断面及び完掘状況の写真撮影，図面作成を行う。

この間，宮ノ上遺跡の調査を併行して行う。

・７月23日（土）現地説明会開催　参加者数215名。

平成17年８月２日（火）～26日（金）

堂園遺跡Ａ地点：Ⅲ層で発見した遺構（土坑・竪穴住居跡・ピットなど）・遺物の調査を続行する。遺構の断面及び完掘状況の写真撮影，図面作成を行う。

この間，宮ノ上遺跡の調査を併行して行う。

・８月11日　文化庁美術学芸課　原田昌幸文化財調査官現地指導。
・８月16・17日　西南大学　高倉洋彰教授現地指導。
・８月18日　航空写真撮影
鹿児島大学本田道輝助教授来跡
埋蔵文化財専門職員養成講座「初級講座」及び新任教職員研修「考古学講座」現地研修開催。

平成17年９月１日（木）～28日（水）

堂園遺跡Ａ地点：Ⅲ層で発見した遺構（土坑・ピット・炉跡など）・遺物の調査を続行する。遺構の断面及び完掘状況の写真撮影，図面作成，遺構配置図作成を行う。

この間，宮ノ上遺跡及び鳴野原遺跡Ｂ地点の調査を併行して行う。

平成17年10月４日（火）～７日（金）

堂園遺跡Ａ地点の調査を全て終了する。

この間，鳴野原遺跡Ｂ地点の調査を併行して行う。

・10月４日　宮ノ上遺跡及び堂園遺跡Ａ地点を加世田土木事務所に引き渡す。

⑶　平成18年度

平成18年４月10日（月）～平成19年３月30日（金）

堂園遺跡Ａ地点，古殿諏訪陣跡，折戸平遺跡及び山神迫遺跡の４遺跡について県立埋蔵文化財センター内において整理・報告書作成作業を実施し，平成19年３月末埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行した。

12月８日（金）

鹿児島大学埋蔵文化財調査室助教授　中村直子氏　遺物指導

12月12日（火）

鹿児島大学法文学部助教授　本田道輝氏　遺構，遺物指導

鹿児島大学埋蔵文化財調査室助手　新里貴之氏　遺物指導

平成19年１月９日（火）

入札

発掘調査及び報告書作成作業従事者

⑴　発掘調査作業従事者（平成15～17年度）

赤峰明生，赤峰クニ子，鰺坂他賀子，有薗トシ，板坂京子，市ノ瀬ハス子，井出ヶ原洋子，上田洋子，内門よう子，宇都憲一，宇都マサ子，大坪サチ子，大山健一，門之園イツ子，角正年，金蔵佐津美，上塩入和代，木落よし子，北薗洋子，北薗義治，清永久子，倉狩イツ子，小園盛雄，五反スミ子，五反田景春，五反田登美子，小松イツ子，酒瀬川文子，柞木千代子，迫幸子，鮫島千賀子，重野夏代，篠原秀治，芝原節子，芝原マサ子，芝原マリ子，下園政幸，下園操，白澤節子，新家エミ子，新家チエ，瀬戸口一美，高取都，高良ムス子，中禮アヤ子，中禮レイ子，堂園信子，轟木国夫，鳥越信広，中島春美，中迎孝市，中村トミ子，西勝蔵，西御建田茂，西貞子，

西田ユミ子，二宮久志，二宮ふみ子，野入高美，萩原康司，畠野耕一，花牟禮イツ子，花山尚子，早川武人，原之園三男，久永マリ子，東美智子，日吉昭男，平原節子，深野木ツヤ子，深野木義光，福留隆子，福永キヨ子，福永健一，古市静江，堀川シズ子，本田親史，松薗かず子，松薗サエ子，松薗節子，燃脇朋美，森田幸子，山口真喜子，吉留美紀子，吉留ミチ子，吉永五月子

⑵ **報告書作成作業従事者**（平成18年度）

志和池和恵，末吉智子，立山佳代子，長友みゆき，永野愛子

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

堂園遺跡Ａ地点は鹿児島県川辺郡川辺町大字神殿字堂薗堀及び字瀬戸口に所在し，古殿諏訪陣跡は鹿児島県川辺郡川辺町大字古殿字諏訪に所在し，山神迫遺跡及び折戸平遺跡は鹿児島県川辺郡川辺町大字神殿に所在する。

遺跡の所在する川辺町は，川辺郡の東側北西部に位置し，薩摩半島のほぼ中央部にあたり，南東は知覧町，南は枕崎市，北西は南さつま市（旧加世田市・日置郡金峰町），北東は鹿児島市と接している。また町内を，鹿児島市と枕崎市を結ぶ国道225号線が通り，主要地方道が知覧町・加世田市へと通じている，薩摩半島における交通の要衝である。

川辺地方の地形の特徴としては，北側，東側，南側の三方を400～500m級の山々に囲まれる盆地を形成し，西側へは緩やかに傾斜しながら吹上浜へと続く地形をなしていることが挙げられる。また，南薩地方の代表的な一級河川である広瀬川（万之瀬川）は，川辺町北部で清水川，野崎川と合流し，さらに神殿川・小野川（麓川）・高田川（氷里川）などをあわせて，川辺郡を貫流しながら吹上浜へ西流し，東シナ海へ注ぎ込んでいる。

また地質の特徴として，まず，薩摩半島全域の基盤をなす「川辺層群」といわれる四万十層（白亜紀層）が広く発達し，砂岩や頁岩および砂岩・頁岩互層などを主とし，一部に礫岩や蛇紋岩を挟む地層がみられることが挙げられる。次に薩摩半島南部，特に笠沙町から知覧町南部・頴娃町から指宿市にかけて，川辺層群の上位に「南薩層群」といわれる新第三紀中新世後期に属する地層が発達し，この地域では主に，石英安山岩溶岩・同質火山砕屑岩・輝石安山岩・同質火山砕屑岩および火山礫凝灰岩・凝灰岩・凝灰岩質シルト岩・泥岩などの水成堆積層が広くみられる。また，角閃石安山岩溶岩は点在的に分布し，粗粒の角閃石の斑晶がみられ，川辺町小野では，安山岩の崖中から角閃石の結晶がみつけられている。この「南薩層群」の上部には，溶結凝灰岩からなる阿多火砕流が台地を形成し，この溶結凝灰岩の崖に刻まれたのが「清水摩崖仏」である。その上層にはシラスと呼ばれる姶良カルデラの噴出物が厚く堆積し，万之瀬川の本支流により解析されて，現在のような地形となっている。

堂園遺跡Ａ地点は，神殿川と万之瀬川に挟まれた標高約120mの鳴野原台地中央部に立地する。現在は県道により東西に二分されている宮ノ上遺跡がある丘陵地の南側斜面の裾部と，南西側斜面の裾部が交わるところに位置し，また南西部から谷が延びている。

古殿諏訪陣跡は，堂園遺跡Ａ地点から南西に約1.3㎞のところにあり，万之瀬川が形成する平野部を見下ろす微高地上に立地している。

山神迫遺跡と折戸平遺跡は，堂園遺跡Ａ地点から北東に約２㎞のところにあり，いずれも神殿川を見下ろす小丘陵上に立地している。

第２図　関係遺跡の位置図（Ｓ＝１／25,000）

表１　遺跡地名表

№	遺跡番号	遺跡名	所　在　地	時　代	地形	遺　物　等	備　考
1	27 － 7	折戸平	鹿児島県川辺郡川辺町神殿折戸平617	縄文	台地	土器片散布	
	27 － 8	萩久保	鹿児島県川辺郡川辺町神殿萩久保	縄文	台地	土器片散布	平成元～３年確認調査
	27 － 9	法師原	鹿児島県川辺郡川辺町神殿法師原	縄文	台地	土器片散布	平成元～３年確認調査
	27 － 10	上桑持野	鹿児島県川辺郡川辺町下山田上桑持野	弥生	台地	弥生土器	
	27 － 14	木場田	鹿児島県川辺郡川辺町清水木場田	縄文	台地		
	27 － 15	東ヶ迫	鹿児島県川辺郡川辺町清水東ヶ迫3694－２	縄文，古墳	台地		
	27 － 16	尾立	鹿児島県川辺郡川辺町清水尾立4290－１	弥生	台地	弥生土器片散布	
	27 － 17	高船	鹿児島県川辺郡川辺町神殿高船2，409	弥生	台地	弥生土器片散布	旧名「上ノ段中須」「地ノ目」を併合
	27 － 18	山神下	鹿児島県川辺郡川辺町神殿山神下	古墳	台地	成川式	
	27 － 19	平野上	鹿児島県川辺郡川辺町神殿平野上	古墳	台地	成川式	
	27 － 20	上ノ原	鹿児島県川辺郡川辺町神殿上ノ原	古墳	台地	成川式	
	27 － 32	野崎陣跡	鹿児島県川辺郡川辺町野崎陣平	中世	台地		
	27 － 34	市崎野小城跡	鹿児島県川辺郡川辺町清水小城平	中世	台地		
	27 － 35	内青折城跡	鹿児島県川辺郡川辺町清水池ノ谷	平安～中世	台地		
2	27 － 36	古殿諏訪陣跡	鹿児島県川辺郡川辺町古殿内陣	中世	台地		
	27 － 37	野間陣之尾城跡	鹿児島県川辺郡川辺町野間陣之尾	中世	台地		
	27 － 38	大田尾館跡	鹿児島県川辺郡川辺町野間尾形久保	中世	台地		
	27 － 40	向城寺跡	鹿児島県川辺郡川辺町両添山添		低地		
	27 － 41	玉泉寺跡	鹿児島県川辺郡川辺町平山本町		低地		
	27 － 46	雲朝寺跡	鹿児島県川辺郡川辺町清水桜元		低地		
	27 － 49	神殿寺跡	鹿児島県川辺郡川辺町神殿下里		山麓緩斜面		
	27 － 50	龍泉寺跡	鹿児島県川辺郡川辺町野崎北原		低地		
	27 － 51	瑞朝寺跡	鹿児島県川辺郡川辺町神殿		山麓緩斜面		
	27 － 52	全勝寺跡	鹿児島県川辺郡川辺町野崎松尾城下		低地		
	27 － 53	長江庵跡	鹿児島県川辺郡川辺町神殿園田山下		山麓緩斜面		
	27 － 60	宝光院跡	鹿児島県川辺郡川辺町清水宇都	中世（鎌倉）～近世	山麓緩斜面	礎石一部残存	（町）昭和33. 6. 6
	27 － 61	川辺氏居館跡	鹿児島県川辺郡川辺町清水小栗栖	中世	低地		（町）昭和33. 3. 1
	27 － 62	平山城跡	鹿児島県川辺郡川辺町平山天神	中世，近世	河岸段丘		（町）昭和142. 3. 25，昭和158年度確認調査
	27 － 63	松尾城跡	鹿児島県川辺郡川辺町野崎松尾城	中世（鎌倉）	丘陵	空堀・曲輪	（町）昭和33. 6. 1
	27 － 64	矢掛松	鹿児島県川辺郡川辺町両添宮下		低地		（町）昭和142. 3. 25
	27 － 70	田代	鹿児島県川辺郡川辺町田代小学校上	縄文（早）	山麓緩斜面	前平式	
	27 － 71	神殿小上	鹿児島県川辺郡川辺町神殿小学校上	古墳	扇状地	成川式	
	27 － 72	桜馬場	鹿児島県川辺郡川辺町清水桜馬場	古墳～中世（鎌倉）	低地	成川式・青磁・白磁	
	27 － 73	北中横	鹿児島県川辺郡川辺町清水旧北中横	平安～中世（鎌倉）	低地	土師器・青磁・白磁	平成10年農政分布調査
	27 － 74	東俵作野	鹿児島県川辺郡川辺町野崎東俵作野	縄文（早）	丘陵	押型文	
	27 － 75	大田尾	鹿児島県川辺郡川辺町清水大田尾	縄文（後）	台地	市来式	吹上高校所蔵
	27 － 97	宮ノ上	鹿児島県川辺郡川辺町神殿宮ノ上	旧石器～縄文	丘陵	前平式・指宿式	
	27 － 98	高船山頂	鹿児島県川辺郡川辺町神殿高船	縄文（早）	山頂緩斜面	前平式・集石	
	27 －103	平山	鹿児島県川辺郡川辺町平山六丁	古墳	後背湿地	散布地	平成６年度農政分布調査
3	27 －109	山神迫	鹿児島県川辺郡川辺町神殿山神迫	古墳	台地	成川式	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －110	大丸	鹿児島県川辺郡川辺町神殿大丸	古墳	台地	成川式	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －111	上五反田	鹿児島県川辺郡川辺町神殿上五反田	古墳	台地	成川式	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －112	市崎原	鹿児島県川辺郡川辺町清水市崎原	古墳，古代	台地	成川式・土師器	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －113	市崎野	鹿児島県川辺郡川辺町清水市崎野	縄文，古墳	台地	成川式・縄文土器	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －114	西ノ平後	鹿児島県川辺郡川辺町清水西ノ平後	古墳	台地	成川式	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －115	横堀	鹿児島県川辺郡川辺町神殿横堀	古墳	台地	成川式	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －116	中之平	鹿児島県川辺郡川辺町清水中之平	古墳	台地	成川式	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －117	中須	鹿児島県川辺郡川辺町神殿中須	古墳	台地	成川式	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －118	内青折	鹿児島県川辺郡川辺町清水内青折	古墳	台地	成川式	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －119	石川路平	鹿児島県川辺郡川辺町清水石川路平	縄文	山麓緩斜面	押型文・前平式・石鏃	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －121	仮集	鹿児島県川辺郡川辺町清水仮集	縄文，古墳，古代	山麓傾斜面	縄文土器・成川式・須恵器	平成６年サン・オーシャン・リゾート分布調査
	27 －123	草葉	鹿児島県川辺郡川辺町野間草葉ほか	縄文～古墳	台地		平成10年農建
	27 －124	鳴之原	鹿児島県川辺郡川辺町神殿鳴野原	縄文	台地		平成10年土木
	27 －136	馬越原	鹿児島県川辺郡川辺町平山馬越原	縄文，中世	台地	前平式・土師器	平成８年確認調査
4	27 －137	堂園	鹿児島県川辺郡川辺町神殿	縄文	台地		平成13年分布調査
	27 －138	馬場田	鹿児島県川辺郡川辺町両添	中世	台地		平成13年分布調査
	27 －140	馬渡	鹿児島県川辺郡川辺町清水馬渡4125・4151	縄文	台地	土器片散布	平成12年確認調査，遺跡なし
	27 －141	大蔵	鹿児島県川辺郡川辺町神殿大殿1986	縄文	山麓	土器片散布	消失
	27 －145	黒葛木ヶ迫	鹿児島県川辺郡川辺町清水黒葛木ヶ迫4639	弥生	台地	弥生土器片散布	

第２節　歴史的環境

先史時代の遺跡は川辺町内では，万之瀬川の周辺台地に点在する。特に縄文時代に属する遺跡は数量においても，その内容においても共に豊富であり，当時の人びとが積極的に活動していたことが明らかになりつつある。上山田に所在する鷹爪野遺跡では縄文時代草創期に属する炉跡が多数検出されている。永田に所在する永田西遺跡，清水に所在する小崎遺跡，神殿に所在する萩久保遺跡など縄文時代早期に属する遺跡数は多く，特に小崎遺跡では貝や獣骨なども発見されていることが注目できる。田部田に所在する廻り淵遺跡や南田代に所在する遺跡などでは縄文時代前期に属する遺物が多量に出土しており，南田代遺跡では玦状耳飾も出土している。縄文時代後期に属する指宿式土器や市来式土器などが出土した上山田に所在する田中堀遺跡では，貯蔵穴と考えられる土坑が検出されている。下山田に所在する苔石遺跡では縄文時代後期後半の御領式土器が採集されている。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は，万之瀬川や　殿川・大谷川などの流域にあたる台地から発見されており，下山田に所在する堂山遺跡などでは弥生前期の土器も採集されている。古墳時代になると遺跡数が増加して，各地に存在している。

古代には，『和名類聚抄』によると，「加波乃部」と訓じられる河辺郡に属し，稲積・川上の２郷があったとされる。現在の川辺町は，河辺郡川上郷と阿多郡か例郷に属していたと考えられている。

平安末期から鎌倉中期にかけては，薩摩国建久図田帳によると河辺郡は府領社と公領とからなる。地頭は島津忠久が，府領社下司・公領郡司は平（伊作）道房を粗とする河辺氏の子孫である河辺道綱（通綱）が治めている。府領社は現在の宮に鎮座する飯倉神社の前身である。なお河辺道綱は，承久の変後に郡司職を没収されている。鎌倉末期に北条得宗領になった河辺郡は，南北朝期には地頭職が再び島津氏に与えられ，島津氏のうちでは総州家から奥州家，そして薩州家の所領となった。

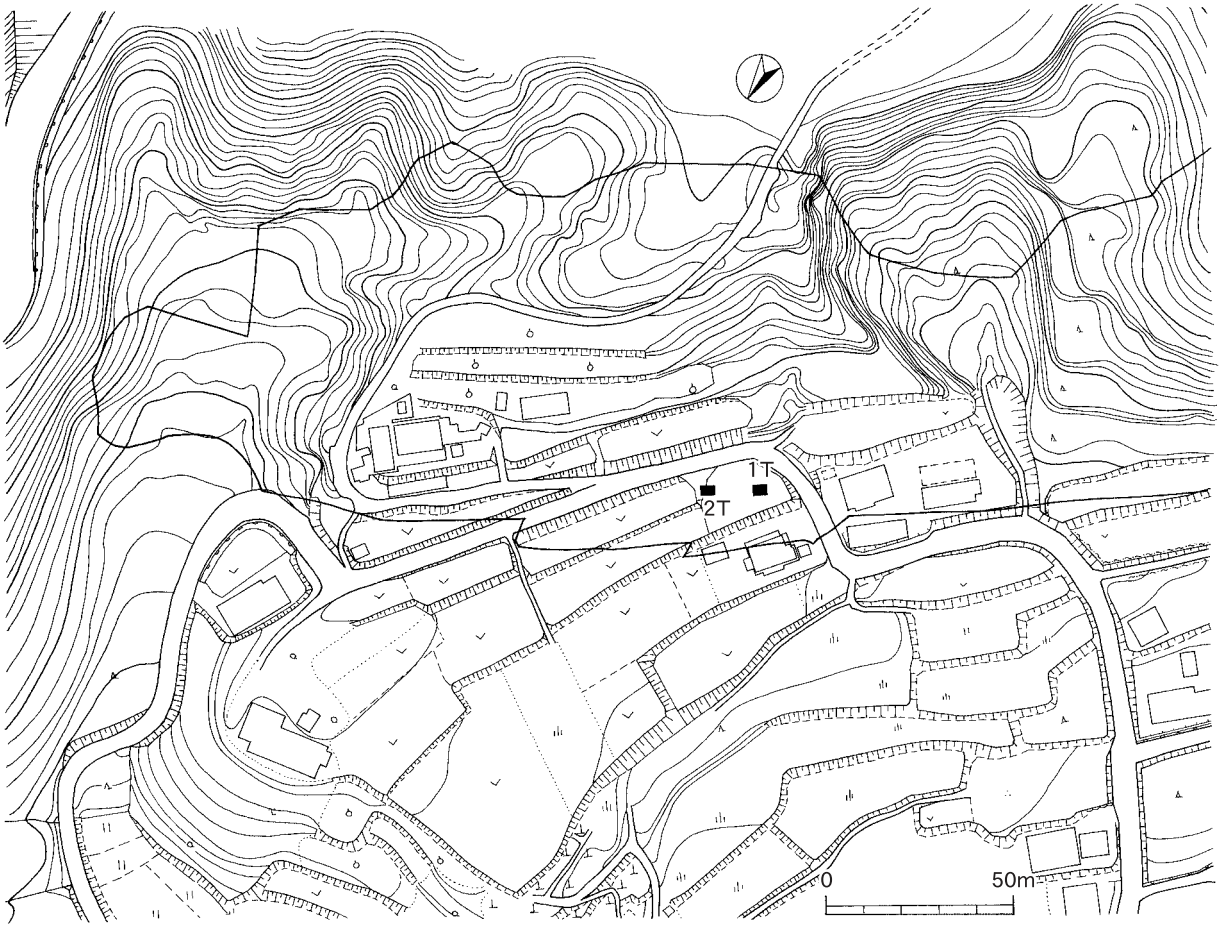
その後，伊作家の島津忠良（日新斎）が島津氏の内紛を収め，三州統一の基礎をつくり，以後川辺も直轄地となった。万之瀬川流域は南薩の米どころであり，江戸時代には多くの堰や用水路が造られて水田が開かれ，また，明治末期から大正にかけては暗渠排水による乾田化と田区改正の耕地整理が行われた。

第Ⅲ章　山神迫遺跡

第１節　発掘調査の概要

山神迫遺跡は，遺跡の一部が南薩縦貫道（川辺道路）の道路整備事業区内に含まれることがわかったため，平成16年２月17日と18日の２日間確認調査を実施した。

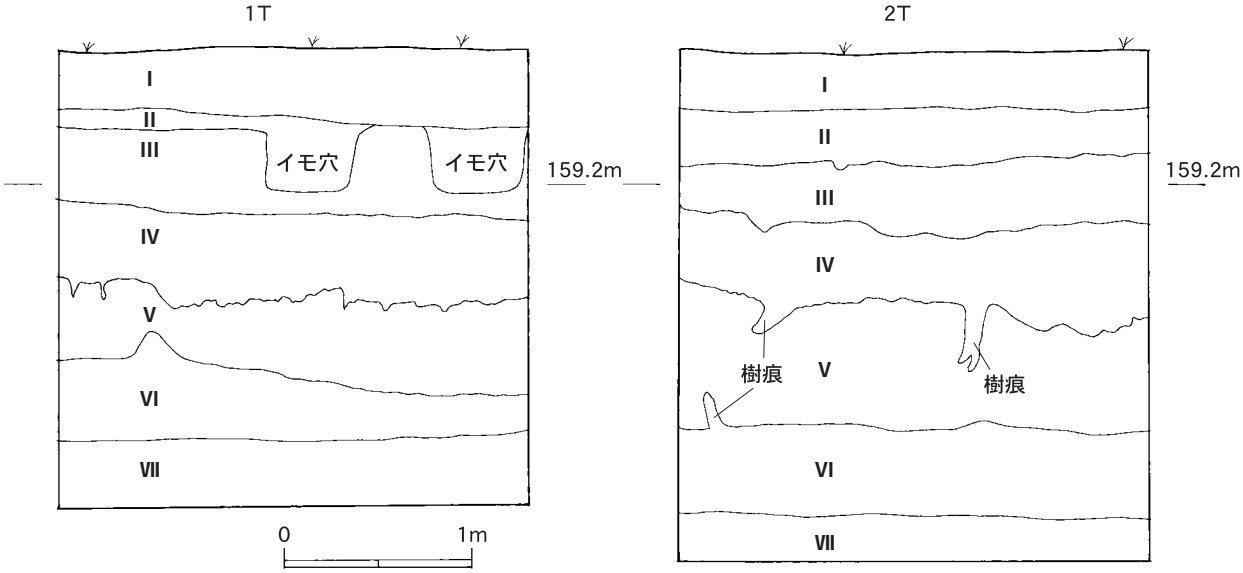
調査は，比較的地形の改変度合いが少ないと想定した畑について２ｍ×３ｍを基本とするトレンチを２か所設定し，人力で掘り下げた。



第３図　山神迫遺跡トレンチ配置図

第２節　層位

山神迫遺跡の層位は，南薩縦貫道整備事業に伴い調査された他の遺跡の状況とおおむね合致するが，弥生時代から中世にかけての包含層であるⅡ層が他の遺跡と比べてあまり堆積しておらず，旧石器時代の包含層であるⅥ層以下の堆積も薄いのが特徴である（Ｐ23を参照）。



第４図　山神迫遺跡土層断面図

第３節　小結

確認調査の結果，遺構，遺物は発見できなかった。調査中にも周辺で古墳時代の成川式土器を採集できたものの，現地形をみると，調査対象地は斜面の傾斜角がなだらかに変化する変換点にあり，土層の堆積も前項で述べたように必ずしも良好とは言い切れない状況であった。これらのことから，今回の調査対象地内には遺跡はほとんど残存していないと考えられる。なお，対象地外の北側はなだらかな斜面が広がっており，遺物の採集状況を考えあわせると，北向きの斜面ではあるものの遺跡が存在する可能性がある。

第Ⅳ章　折戸平遺跡

第１節　発掘調査の概要

南薩縦貫道（川辺道路）の建設に伴い，折戸平遺跡の一部が開発にかかることが分かり，平成17年２月３日と４日の２日間，確認調査を実施した。

調査は，尾根状の調査対象地に２m×３mの長方形を基本とするトレンチを３か所設定し，人力で掘り下げた。

第５図　折戸平遺跡トレンチ配置図

第２節　層位

折戸平遺跡では，表土下はすぐにシラス層となっており，遺物包含層に比定できるような土層は堆積していなかった。調査対象地は，北，西，南側が急斜面となっている比較的細い尾根状の地形を呈しているため，土層の堆積が発達しなかったか，流失してしまったものと考えられる。

第３節　小結

今回の調査対象地では，前項で述べたように包含層がまったく堆積しておらず，遺構，遺物ともに発見されなかった。折戸平遺跡は，この尾根部分までは広がっていないことが判明した。

なお，事業区の外となる調査対象地の南東側には台地が広がっており，折戸平遺跡の中心部はこちらに存在するものと想定される。

第Ⅴ章　古殿諏訪陣跡

第１節　発掘調査の概要

鹿児島川辺線（川辺道路５工区）改良工事に伴う盛土部分について，平成16年２月に確認調査を実施した。調査は，２m×３mのトレンチを基本として任意に４か所設定し，人力で掘り下げた。

その結果，もっとも北側に設定した１トレンチのみⅡ層から遺物が出土したため，平成16年７月５日から同年８月10日まで１トレンチの周辺約900㎡を対象として本調査を実施した。調査は，まず重機を用いて表土を除去したのち，対象地全体に10m×10mのグリッドを設定し人力で掘り下げを行った。

第２節　発掘調査の成果

表土を除去した時点で，調査区の南側ではすでにⅢ層まで削平されており，古代～中世の包含層であるⅡ層は残存していなかった。上面を人力で精査したが，遺構等は発見できなかった。

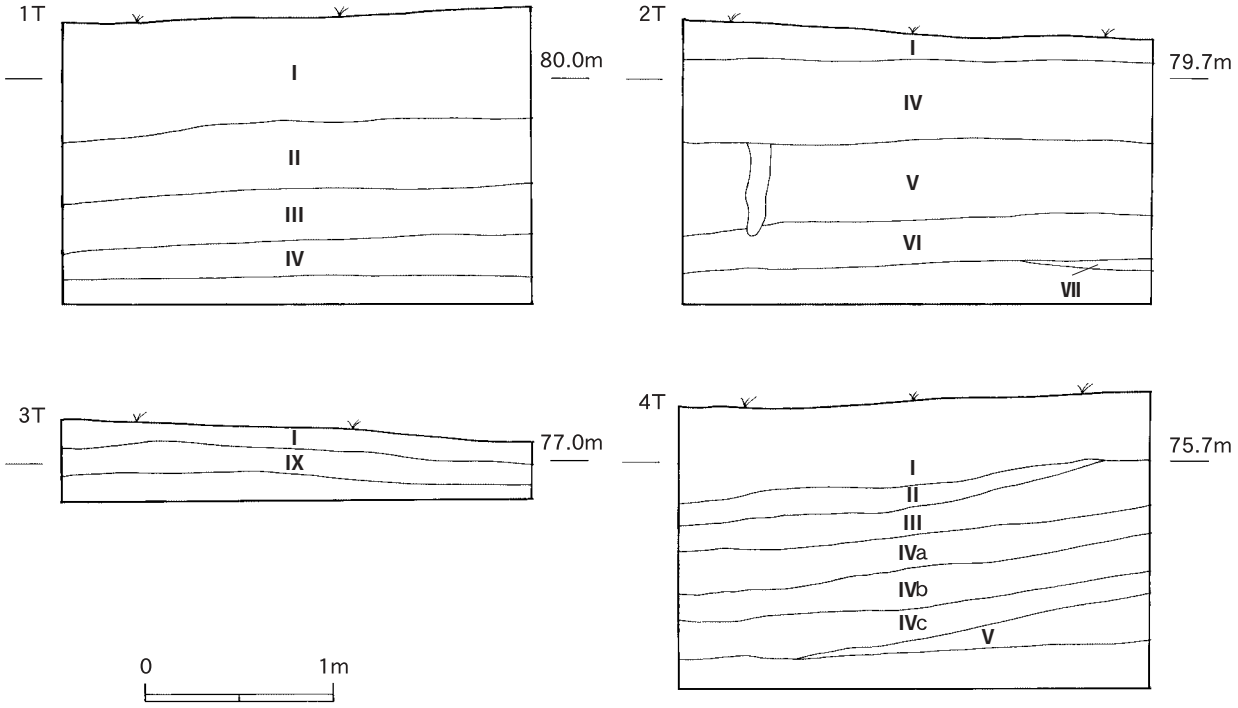
一方，調査区北側のＣ・Ｄ－５・６区にはⅡ層が残存していたため，調査を実施した。その結果，古代～中世頃と思われる硬化面と焼土域および青磁・白磁，須恵器，土師器，成川式土器等を発見した。

その後，Ⅲ層以下について下層確認トレンチを地形を考慮して任意に設定しⅩ層（シラス上面）まで調査したが，遺構，遺物は発見できなかったため，全体の工程を終了した。

第６図　古殿諏訪陣跡トレンチ配置図

第３節　層位

基本的には，本事業に伴い発掘調査が実施された他の遺跡の堆積状況とおおむね一致する。しかし，Ⅳ層以下については，主に南側で堆積がやや不安定で薄くなっているのが特徴である。北側についても，Ⅲ層上面で確認した谷地形がⅣ層以下ではより深く開析されており，旧石器時代の包含層は確認できるものの，谷へ向かって落ち込んでいて良好な堆積とは言い難い状況であった。



第７図　古殿諏訪陣跡トレンチ土層断面図

第４節　古代～中世の調査

⑴　遺構

古殿諏訪陣跡からは，Ⅱ層掘り下げ中に硬化面が１条，焼土域が２か所発見された。以下，それぞれについて説明を行いたい。

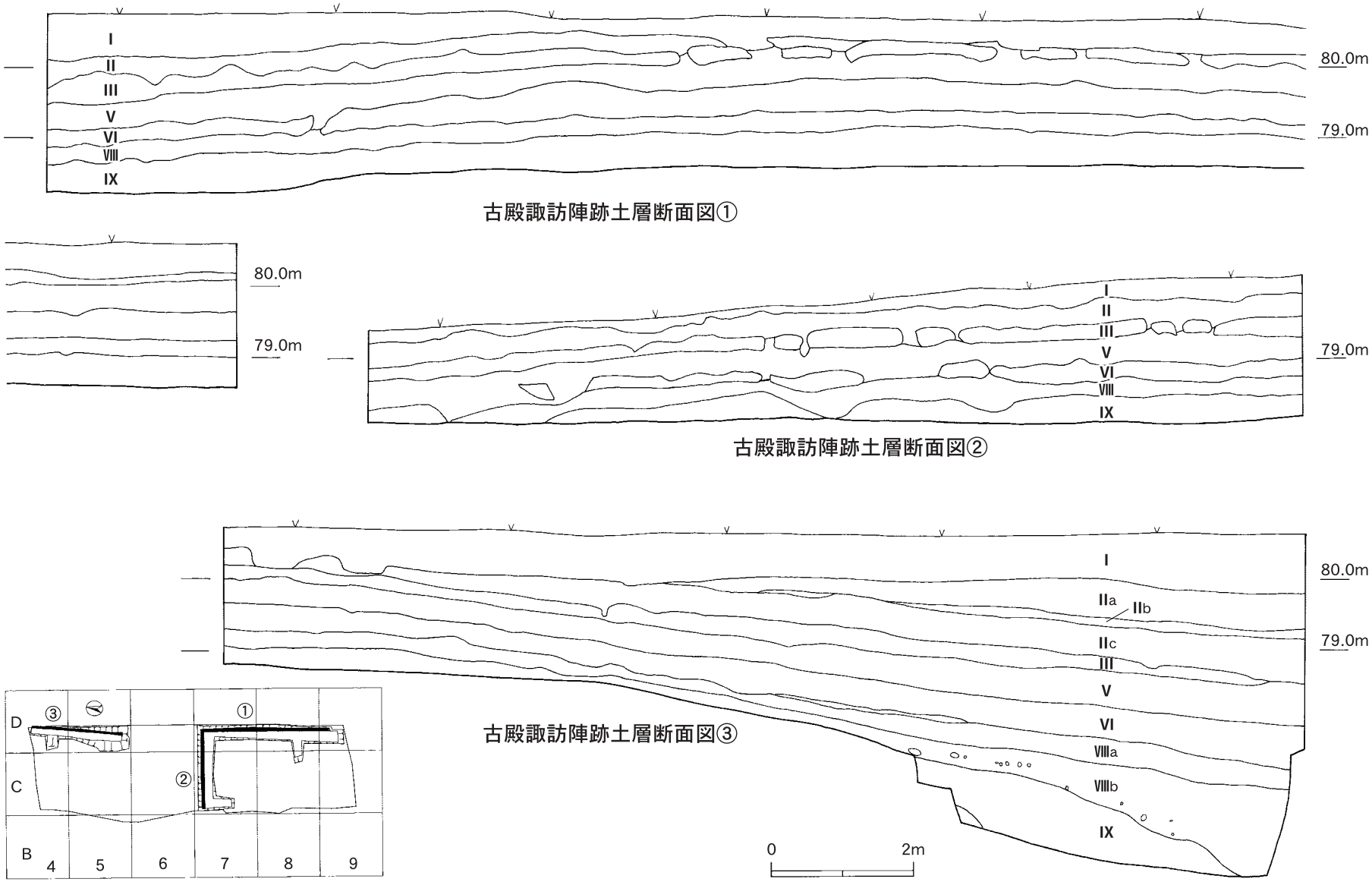
硬化面

Ｃ－５区～Ｄ－４，５区にかけて発見された。厚さは，最も厚い部分で10㎝程あり，狭いところは50㎝前後，広いところは１ｍ前後の幅で，５・６区の境にある浅い谷部からやや離れて，谷部の方向に沿って形成されている。また，Ｄ・Ｃ区の境あたりからは，20㎝弱の幅で，谷部にくだるかのように硬化面が枝分かれしている。この細いほうの硬化面は途中で確認できなくなったため，延びた先については判然としなかった。

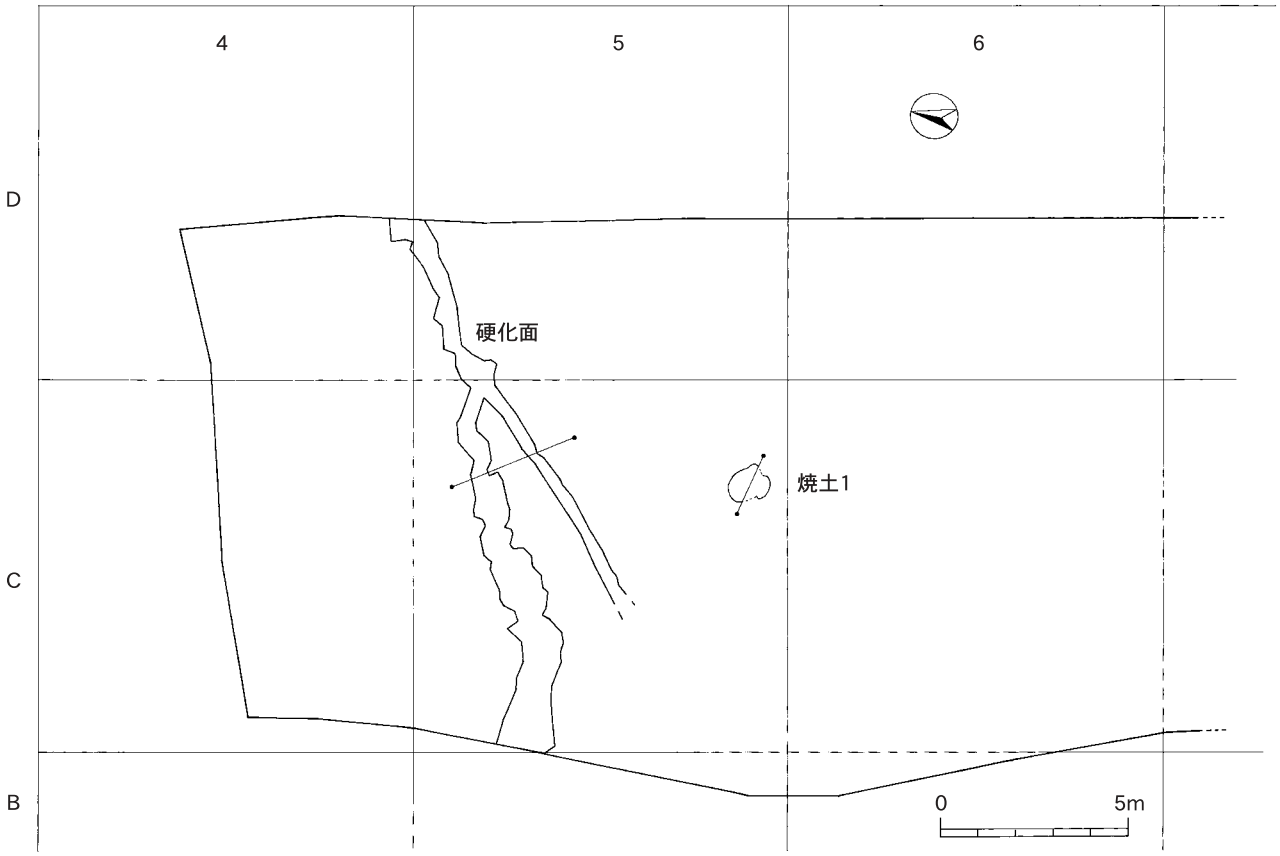
第８図　古殿諏訪陣跡本調査範囲図

焼土域

Ｂ－５区とＣ－５区で１か所ずつ発見された。Ｂ－５区のものが長径約50㎝程の不定形，Ｃ－５区のものが長径約１ｍ程の略円形を呈している。どちらも赤褐色に土が焼けており，さらに赤橙色の焼土ブロックが混在している。炉壁のようなものはみあたらず，何らかの整地等がなされた痕跡もなかった。



第９図　古殿諏訪陣跡土層断面図



第10図　古殿諏訪陣跡遺構配置図

⑵　**遺物**

今回の古殿諏訪陣跡の調査では，第２節でも述べたように，主にⅠ～Ⅱ層中から青磁・白磁，須恵器，土師器，成川式土器等が出土した。しかし，いずれも小片がほとんどで，遺跡の性格等を具体的に類推することはできなかった。以下，種別ごとに簡単に説明していきたい。出土区と層については表５を参照していただきたい。

なお，図化していないが，Ｃ・Ｄ－５区Ⅰ層より鉱滓が２点，Ｄ－６区Ⅰ層より鉄滓が１点出土している。Ⅱ層中より発見された焼土域とあわせて，本遺跡の性格等を考える上で留意すべき情報と言えるかも知れない。

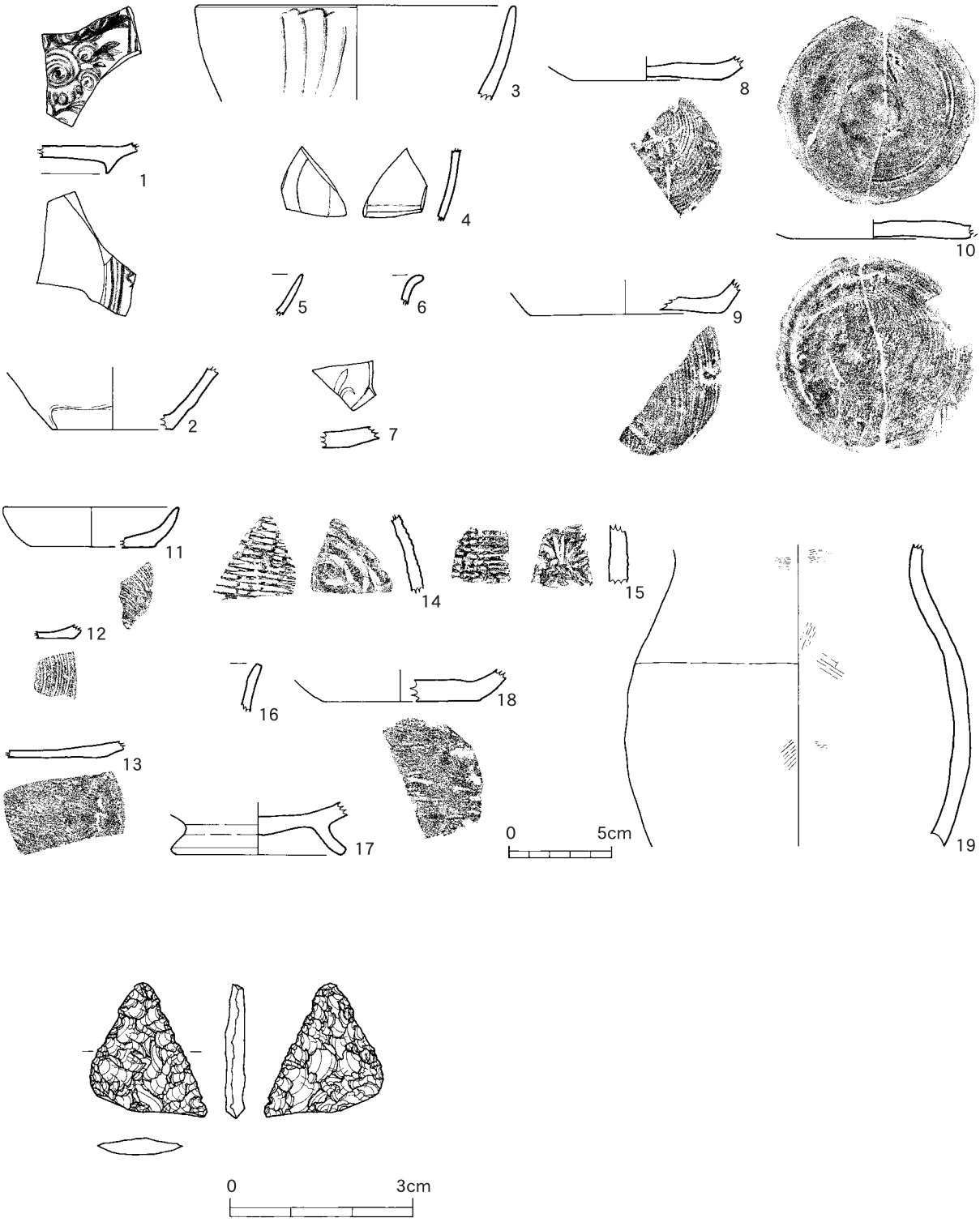
近　世

染付，天目，陶器が出土した。１は，見込み部の文様や高台内面の釉のきれぐあいなどから「嘉靖染付」と称される製品と思われる。２は，釉の色合いやたれぐあいからみて，天目碗の胴部片と思われる。

古代～中世

青磁，白磁，須恵器，土師器などが出土した。数量としては本遺跡でもっとも多く出土しているが，すでに述べたようにほとんど小片で詳細は判然としない。

３～６は龍泉窯系青磁と思われる。３は碗で，外面に線刻で鎬連弁を表現している。４にも連弁が確認できる。７は白磁皿である。



出土区	層	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
C・D－7・8	Ⅰ・Ⅱ	黒曜石	2.18	1.94	0.32	1.17

第11図　古殿諏訪陣跡出土遺物実測図

８～13は土師器皿である。11をのぞき底部片で，器形復元できなかったものがほとんどである。底径で比較すると10㎝弱のもの（８～10）と６㎝以下のもの（11・12）の２群に分けられるようである。

14，15は須恵器の甕と思われる。14は内面に同心円タタキ痕をわずかに観察できる。

16～18は土師器である。16は内面に赤色顔料が塗布されている。17は外開きでやや長めの高台がつく。18は皿の底部と思われ，ヘラ切痕が確認できる。

古　墳

19は中津野式土器の壺の胴部片と思われる。頸部下半から肩部にかけてくびれずなだらかに湾曲する器形である。調整はよくわからない。

第５節　小結

本遺跡は，前章で述べたように土層の堆積が良好ではなく，遺物もⅠ～Ⅱ層から古墳時代から近世まで明瞭な傾向を示さずにわずかずつ出土しているため，遺跡の性格や変遷を明らかにすることは困難であった。

第Ⅵ章　堂園遺跡Ａ地点

第１節　発掘調査の概要と成果

堂園遺跡Ａ地点については，平成13年度に土木部からの依頼を受けて分布調査を実施し，協議のうえ平成15年度に確認調査を実施したのち，その取扱いについて土木部と再度協議し，平成16年度から本線の盛土部分について本調査を実施した。

調査対象地は中央を県道が南北に通っているが，それを含めて10m×10mの調査グリッドを設定し，重機で表土を除去したのち，人力で掘り下げて調査を実施した。なお，対象地の字名は，県道を境界として東側が瀬戸口，西側が堂園堀と呼称されていたため，本調査中は，この地名も利用して調査を進めた。グリッド名と字名を照合すると，Ｂ－２区～Ｆ－13区までが瀬戸口地区，Ｇ－11区からＨ－18区までが堂園堀地区となる。

平成16年度は，両地区のⅡ～Ⅲ層の本調査と堂園堀地区のⅣ層以下の調査を実施した。期間は，平成16年８月16日～平成17年３月18日まで実働119日間であった。Ⅱ～Ⅲ層にかけては，古代の道跡のほか，弥生時代後期～古墳時代初頭の土坑などの遺構と土器や鉄器等の遺物が出土した。土坑は，完形土器を出土する例が多いことや埋土中から赤色顔料が検出されたことなどから，木棺土坑墓である可能性が高く，包含層出土土器にも完形に復元可能なものが多く土坑墓との関係が想起されるなど，遺構・遺物ともに興味深い出土状態を示した。Ⅲ層から縄文時代の集石遺構１基と土器片が発見された。また，Ⅳ層以下の層については確認トレンチを設定して調査したが，遺構・遺物ともに発見されなかったため，調査を終了した。

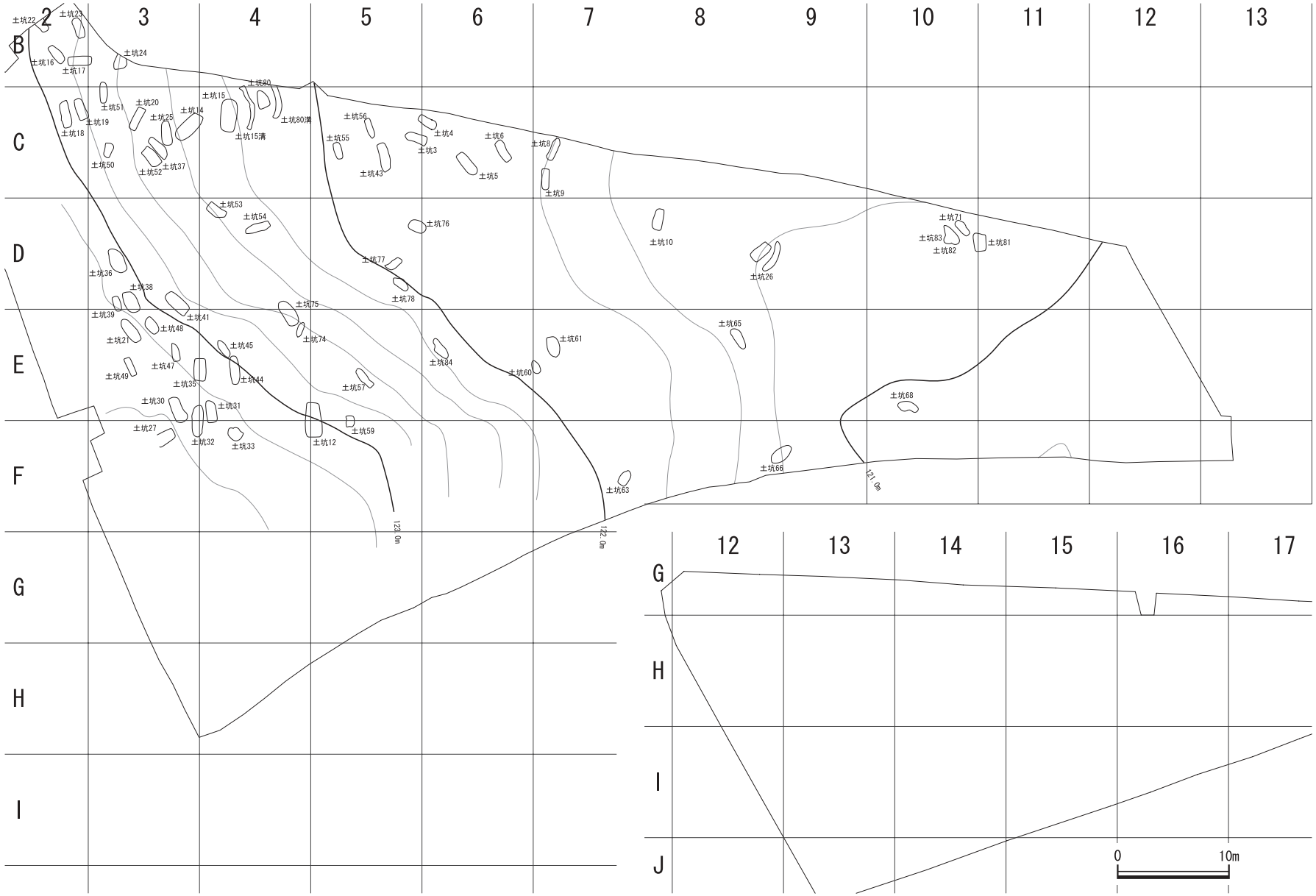
平成17年度は，瀬戸口地区の調査を実施した。期間は平成17年６月14日～平成17年10月７日まで実働66日間であった。Ⅱ～Ⅲ層にかけては，平成16年度に出土した土坑墓群の調査の継続とあらたに出土した土坑墓群の調査を実施した。Ⅳ層以下の調査では，遺構・遺物ともに発見できなかったため，調査を終了した。

第２節　層位

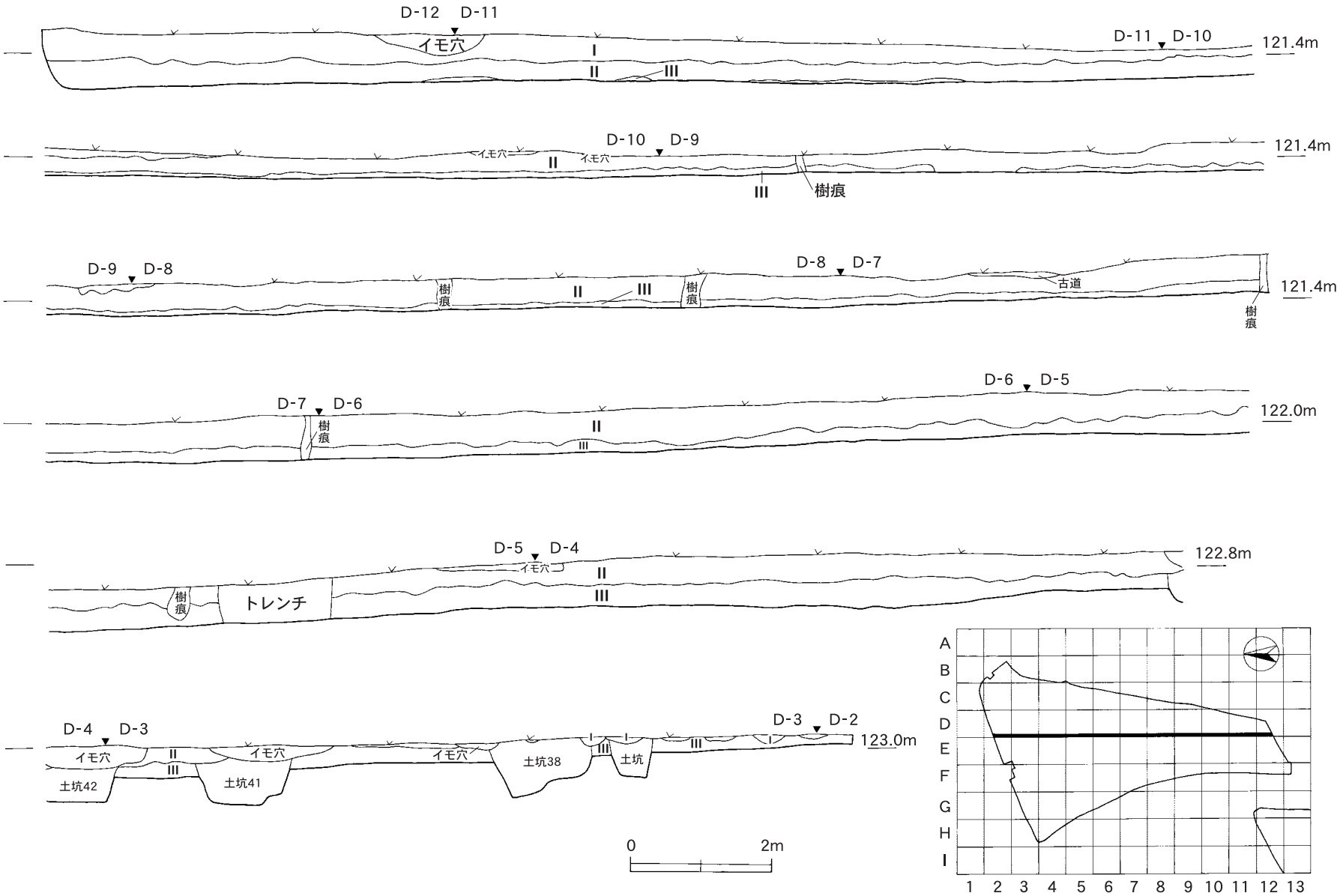
堂園遺跡Ａ地点の土層堆積状況は，背後に小丘があり鳴野原台地の中央部に位置しているという地形が関係しているためか，おおむね安定しているものの，火山灰層の堆積については発達していないしあまり明瞭でもない。また，Ⅱ層についても，隣接する堂園遺跡Ｂ地点では４枚に細分が可能だったが，Ａ地点では不可能だった。以下，層ごとの特徴を柱状図で略述する。

Ⅰ　層	灰黒色土 現代の耕作土である。
Ⅱ　層	黒茶褐色土 弥生～古墳時代の包含層である。
Ⅲ　層	黄茶褐色火山灰腐植土（アカホヤ火山灰ベース） 縄文時代後期の包含層である。
Ⅳ　層	暗褐色土
Ⅴ　層	黒褐色硬質土 無遺物層である。
Ⅵ　層	黄褐色火山灰（薩摩火山灰） 下部は軽石が堆積している。無遺物層である。
Ⅶ　層	暗赤褐色土 無遺物層である。
Ⅷ　層	暗茶褐色粘質土 無遺物層である。
Ⅸ　層	砂質土 無遺物層である。
Ⅹ　層	砂礫混火山灰土（シラス） 無遺物層である。

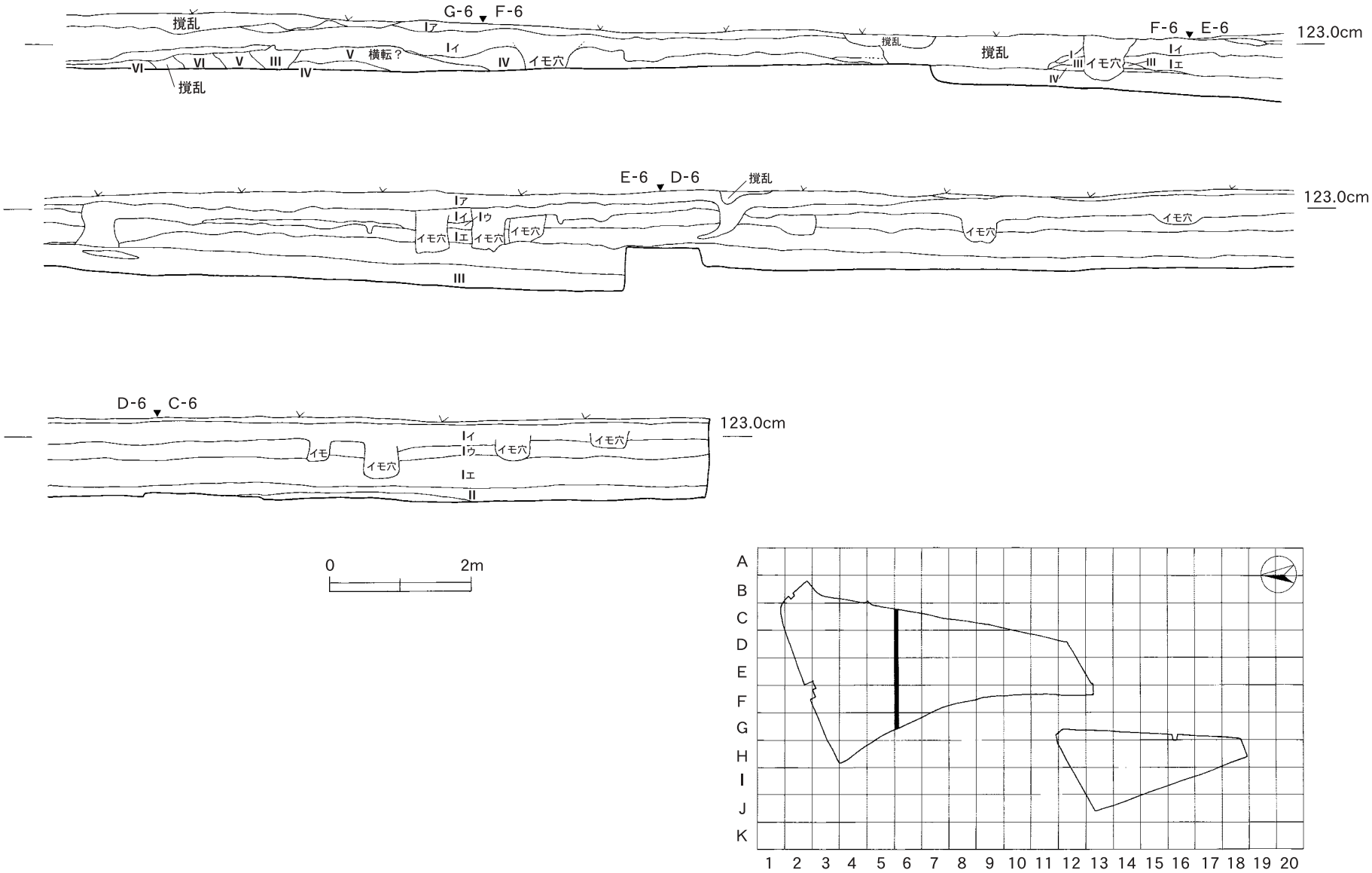
土層模式図



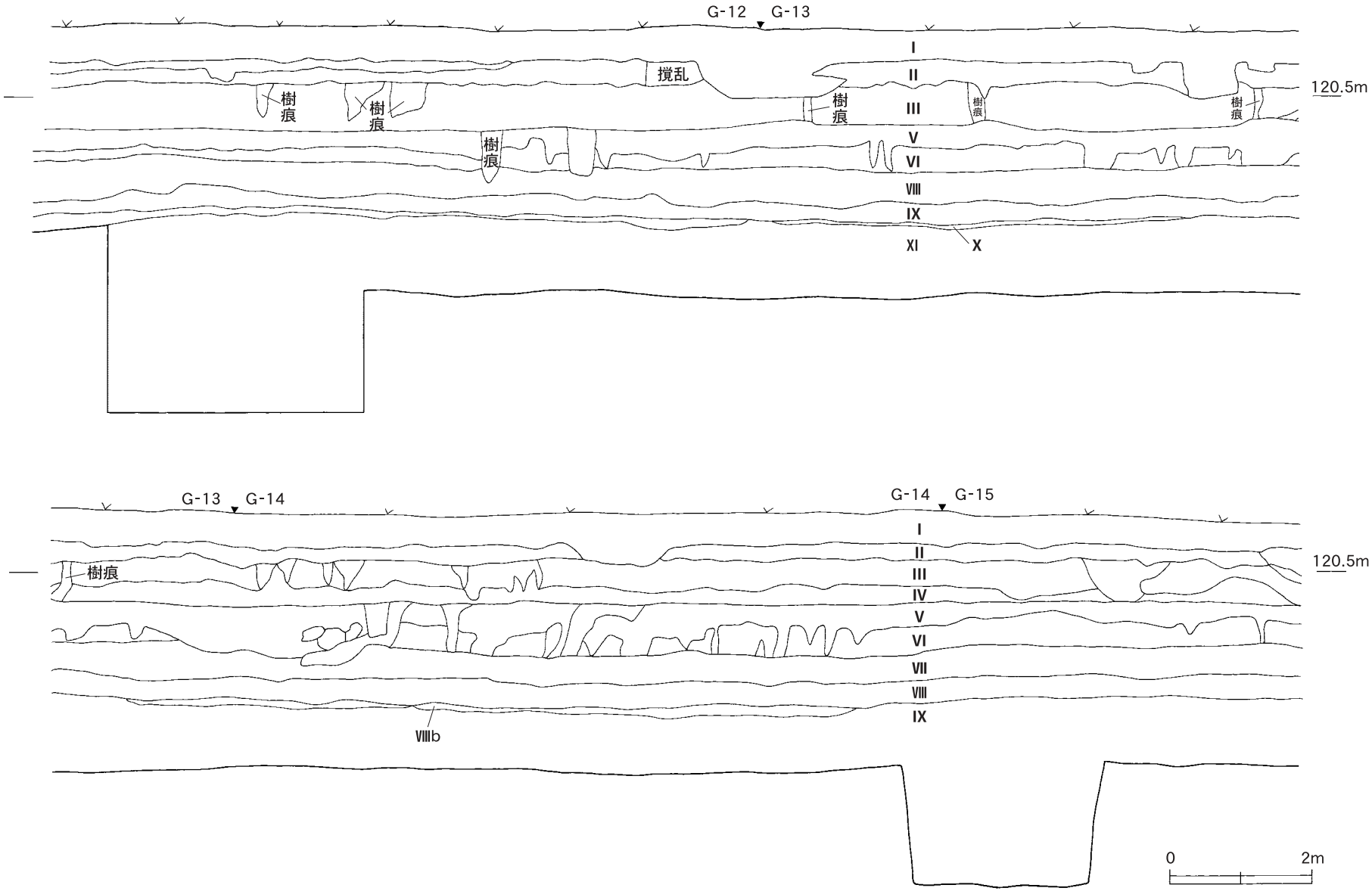
第12図　堂園遺跡Ａ地点本調査範囲図



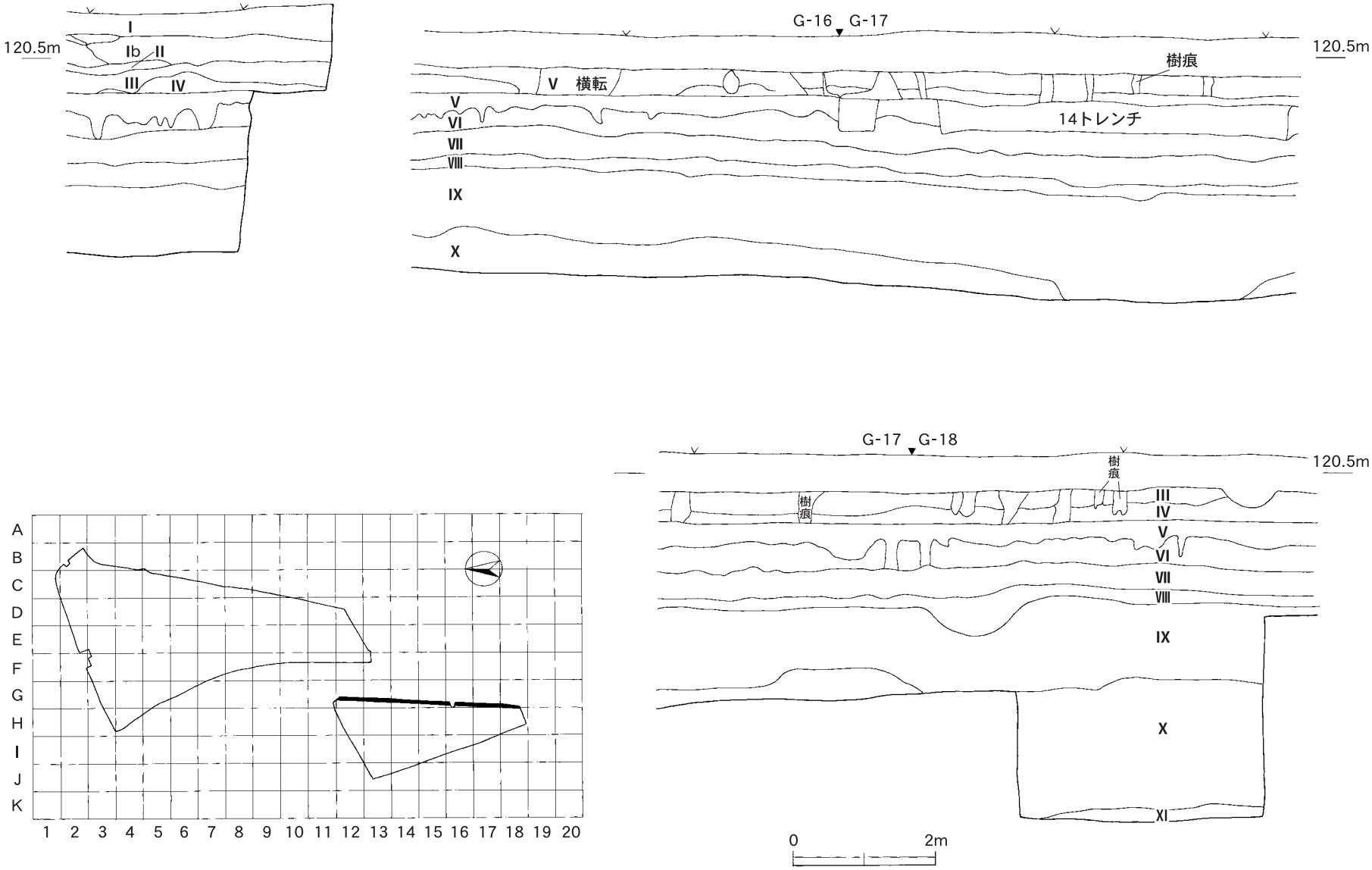
第13図　堂園遺跡Ａ地点土層断面図(1)



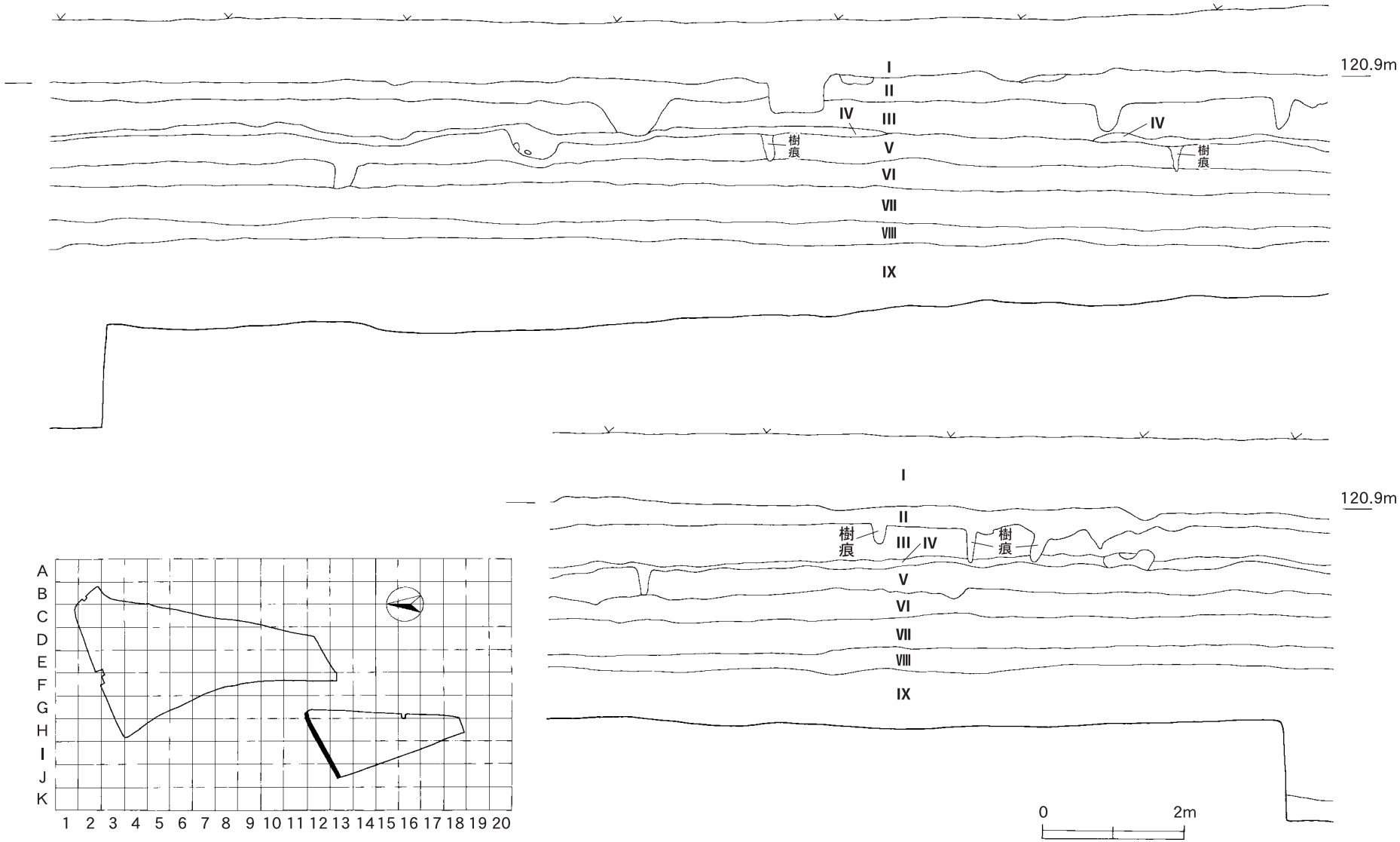
第14図　堂園遺跡Ａ地点土層断面図(2)



第15図　堂園遺跡Ａ地点土層断面図(3)



第16図　堂園遺跡Ａ地点土層断面図(4)

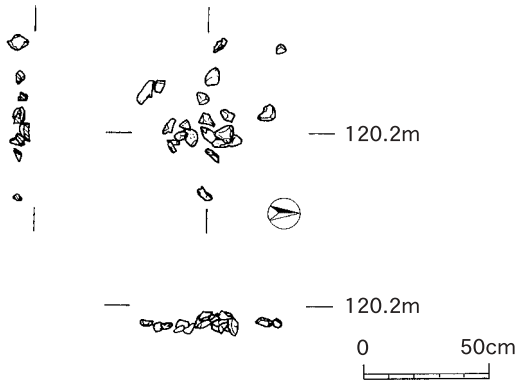


第17図　堂園遺跡Ａ地点土層断面図(5)

第４節　縄文時代の調査

⑴　遺　構

Ｈ－16区のⅢ層から集石遺構が１基検出された。掘り込みはみられず，どちらかといえば散在している状態であった。周辺に炭化物等は発見できなかった。礫数は21点あり，そのうち焼けているのが肉眼で確認できたものは６点である。構成礫の素材は，砂岩・粘板岩・安山岩の３種類で，約75％を砂岩・粘板岩が占めている。礫の重量の平均は101ｇで，平均を超える重さの礫は８点である。



第18図　堂園遺跡Ａ地点検出の集石遺構実測図

表２ 集石遺構構成礫データ

№	石材	重量（ｇ）	備　　考	№	石材	重量（ｇ）	備　　考
1	砂岩	150	火を受け割れている	12	砂岩	95	
2	粘板岩	80	剥離面が赤褐色に変色	13	安山岩	165	
3	粘板岩	50	剥離面が赤褐色に変色	14	安山岩	190	薄く熱を受け赤く着色あり
4	粘板岩	80	剥離面が赤褐色に変色	15	安山岩	120	
5	粘板岩	95		16	砂岩	140	
6	安山岩	125	熱を受け赤く色が上面のみついている	17	砂岩	105	
7	砂岩	70		18	砂岩	70	
8	安山岩	90		19	砂岩	140	
9	砂岩	77		20	砂岩	59	
10	砂岩	80		21	安山岩	50	
11	砂岩	90					

⑵　遺　物

①　土　器

縄文時代の土器は，Ⅱ～Ⅲ層にかけて約100点出土した。土器の調整や文様をもとに，便宜的に10類に分類した。この分類は，層位的出土状況ともおおむね一致する。以下，分類ごとに略述したい。

１　類

20～24を抽出した。D－10～12区にかけて出土している。比較的薄い器壁であり，内外面ともに貝殻で器面調整を行っていると思われるが，器面が摩耗しているため，詳細はわからない。

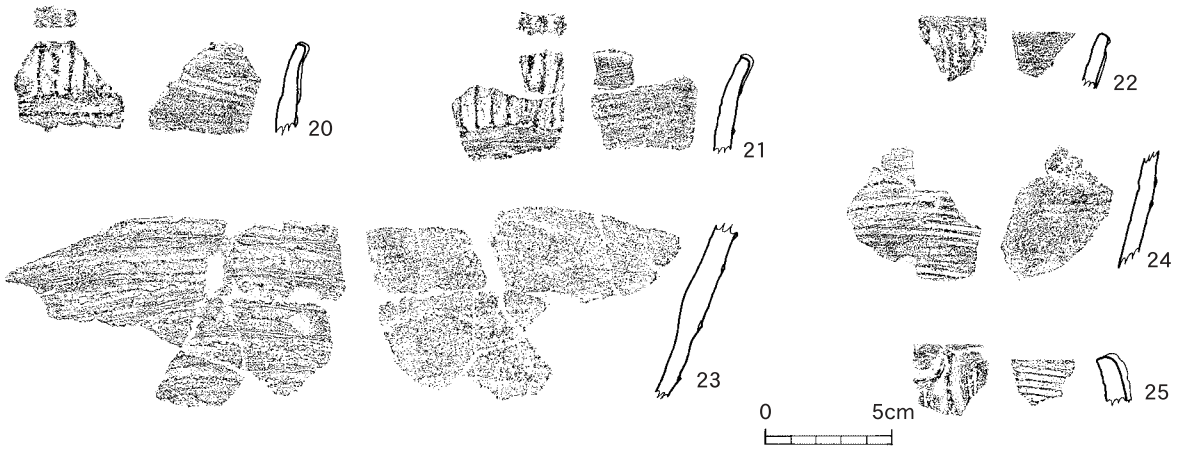
20～22は口縁部片である。文様は，20～22には連続する縦位の微隆起突帯が口唇部から口縁部にかけて施文され，その下位に同じような微隆起突帯が横位に施文されている。23，24には微隆起突帯が横位に施文されている。いずれの突帯文も，整形は粗い。

これらの特徴から，１類は前期の轟式土器と思われる。

２　類

25の口縁部片１点のみの出土である。１類と比べると，やや内湾する口縁形状であり，胎土・色調も異なる。器面調整は貝殻であるが，外面は縦方向の調整である。文様は１類と同様突帯文であるが，１類のそれに比べ丁寧に整形されており，口縁上端から垂下する突帯と同じ起点から途中で横に曲がる突帯の２条で構成されている。さらに突帯上には縄文が転がされている。

これらの特徴から，２類は前期後半の深浦式土器と思われる。

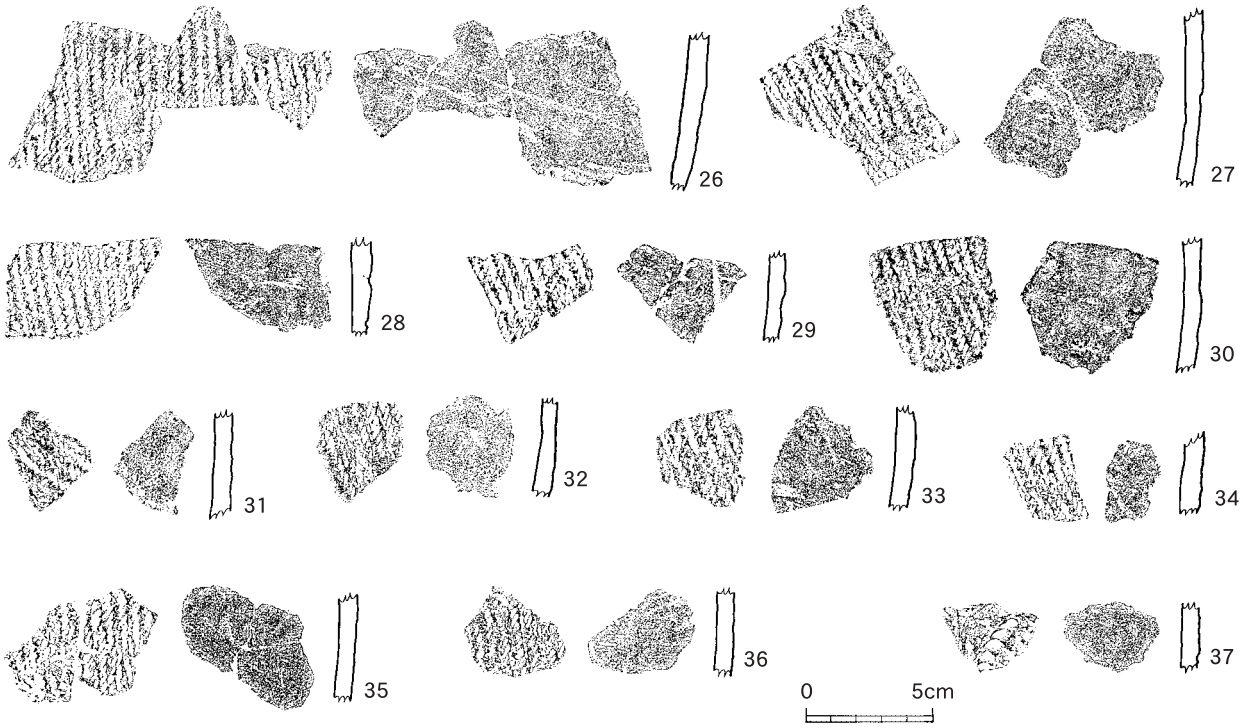


第19図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代⑴

３　類

26～37を抽出した。H－17区からのみ出土しており，接合できず器形の復元等できなかったため確証はないが，個々の資料に見える特徴から，同一個体の破片である可能性がある。比較的薄い器壁であり，胎土に石英のような白色粒が混じる。色調はおおむね褐色ないし暗褐色である。内面は丁寧なナデ調整が施されている。文様は，単節の縄文を外面全体に施文しており，37にはさらにそのうえから結節部が転がされている。施文は器面が柔らかい状態で行われているようで，施文による胎土の盛り上がりなどが顕著で縄文は鮮明でない。

これらの特徴から，３類は中期前半の船元式土器と思われる。

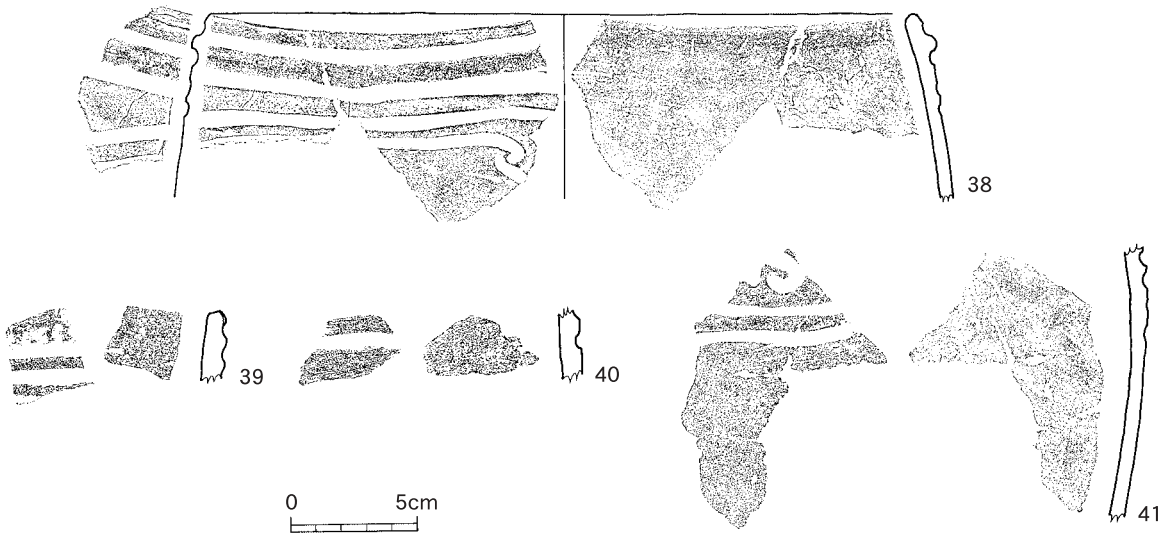


第20図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(2)

４　類

38～41を抽出した。Ｂ－４区からＥ－５区にかけて出土している。やや薄い器壁で，内外面とも丁寧な器面調整がなされており，口縁部がやや内湾し胴部が張る器形を有するようである。文様は太めの精緻な仕上げの沈線で描かれている。

38は口縁部片である。横位の平行沈線文が４条施文され，うち胴部側の２条は部分的に下方へ曲がり，頂部で渦巻き状のモチーフへ変化しているようである。沈線内には煤が遺存している。39も口縁部片であるが，38とは断面形状が異なる。口縁部外端に貝殻刺突文が連続して施文される。沈線文は平行に３条施文されるが，口縁に対しやや右下がりに施文される。41は胴部片である。41に



第21図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(3)

は，38で部分的に確認された沈線文の渦巻き状のモチーフが認められ，その下位に２条の平行沈線文が施文されているのが確認できる。ただ，この２条の平行沈線文は口縁部のそれに比してやや蛇行しており，雑な印象を受ける。40は胴部片と思われるが，部位の詳細は不明である。２条の平行沈線文が施文される。

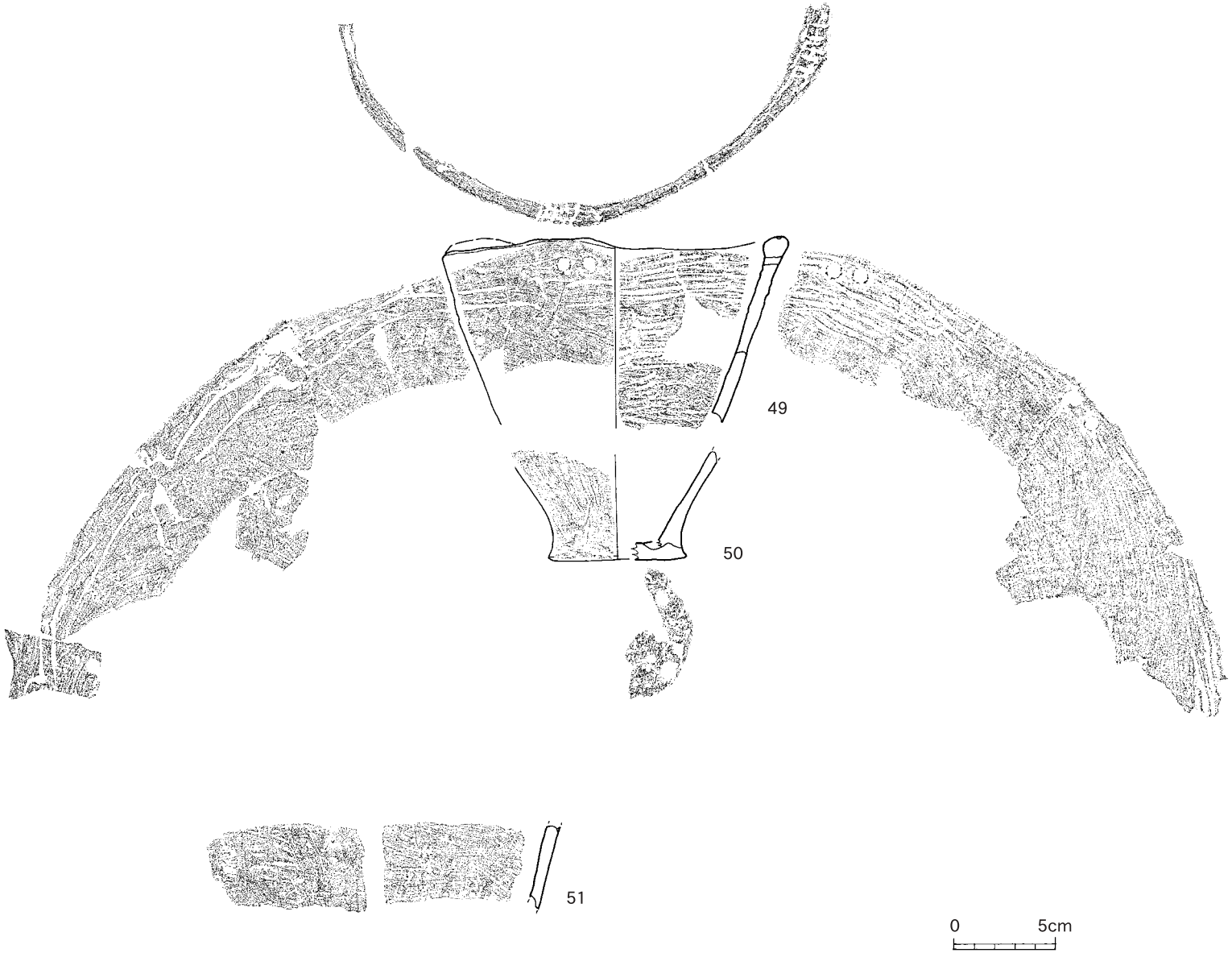
４類にみられるこれらの特徴は，後期初頭～前半に位置づけられる土器群と類似する。

５　類

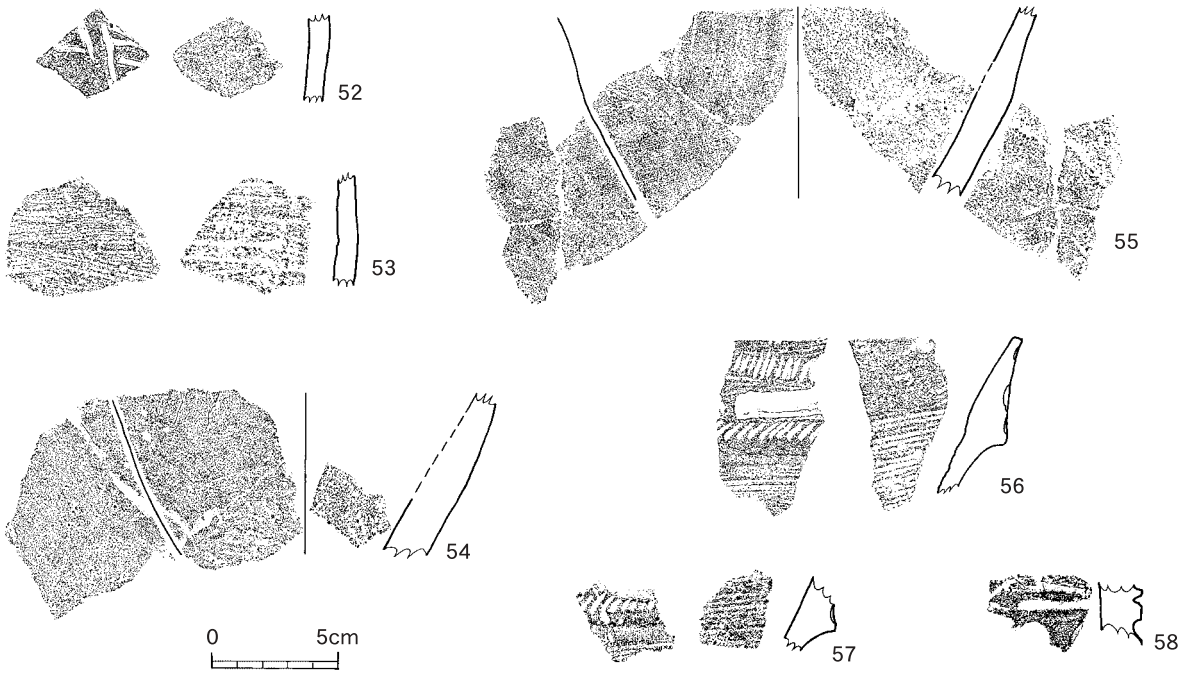
42～54を抽出した。Ｃ区～Ｈ区にかけて出土している。直行ないしやや内傾する口縁部からそのまま胴部へ移行し，ゆるやかにすぼまりながら底部へいたる器形を有するようである。内外面とも貝殻や板状の工具による粗い器面調整がなされ，そのうえから４類よりもやや細く鋭利な工具による沈線で文様が施文される。

42は，口縁部に平行する２条の沈線文を基本とし，さらに下位の沈線が連続的に矩形のモチーフを下側に展開させる文様が施文される。上位の沈線も一気に引かれているのでなく，細かく継ぎ足されて１条の沈線文を描いている。どちらの沈線もつなぎの仕上げは４類に比べ雑である。復元口径約33㎝である。43は，口縁部と胴部の２か所にそれぞれ平行する２条の沈線文を基本として文様が施文され，さらに，上側の沈線文には渦巻き状のモチーフが間隔をあけて連続的に展開し，そこから下側の沈線文に向かうような斜位の曲線状の沈線が１条，間隔をあけて連続的に施文されている。下側の沈線文にも，上側より小さい渦巻き状のモチーフが展開するが，位置どりは上側とずれるようである。また，口縁部には１か所山形の突起がつくられている。この部分にのみ，内面に１か所の凹点と，凹点から口縁部にむけて放射状に３条の沈線が施文されている。復元口径は約33㎝である。44は，口縁部に沈線で流水文様のモチーフが展開される資料である。この資料も口縁部が１か所山形に隆起しさらに肥厚させている。流水文様のモチーフは，この部分を中心に展開されるようである。またこの肥厚部分には，口唇部に連続刻目文が施文され，内面にも６条の沈線で「Ｖ」字状の文様が施文されている。45は口縁部下に４条の平行沈線文が施文される。口縁部の整形は断面方形で，胴部よりも肥厚する。口唇部はやや凹んでいるので，本来は連続刻目文等が施文されていた可能性がある。46は口縁部下に２条の平行沈線文が施文される。口縁部断面はやや鋭い舌状に整形されている点が，5類の他の資料とやや異なる特徴である。49～51は，胎土や色調などに強い類似性が認められたため同一個体の可能性を想定してレイアウトしている。内外面ともにケズリのような器面調整がなされ，胎土には白色や赤色の粒子が混じる。器壁は，特徴的な器面調整によるせいもあろうが，比較的薄い。底部はあまり残っていないが，平底と想定される。接地面は凹凸が強いが，これが回転台等の痕跡によるものか判断できない。端部がやや外に張っている。白色の粉状の鉱物が一面に付着しているが，これは南九州の後期土器の底部に時折認められる特徴と一致する。口縁部下には２条の平行沈線文が施文される。部分的に小さく鋭角に蛇行させながら施文されているが，全体に粗雑で完成度は高くない。また，３か所で口唇部を山形に隆起させ粗い連続刻目文を施文し，さらに隆起部分の下方に円形すかし文を２つ施文している。これらの施文は，この３か所のみの可能性が高いと思われるが，施文の完成度が高くないことを考えると，合計が４か所になる可能性も想定される。復元口径は約17㎝，想定される器高は15㎝前後と，やや小振りの資料である。

第22図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(4)



第23図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(5)



第24図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(6)

47・48・52・53は５類の胴部片と思われるものをまとめた。47には４条の平行沈線文が施文される。48には，２条一組で３条，もしくは３条ないし６条の平行沈線文が施文される。この資料にみられる施文具は繊維の硬い素材が用いられているのが特徴で，沈線の断面もU字形というよりは方形かV字形をしている。内面調整もあらい。52は，右下がりの斜位の短沈線を２条施文し，そこから２～３条の沈線文を左右に展開させている。54・55は底部付近の破片で，胎土や色調等の特徴から本来は同一個体と想定される資料である。ナデ調整がなされている。被熱の痕跡が外面の色調に認められるが，劣化は観察できず，むしろ内面のほうに広く剥離が観察される。

これらの特徴から，５類はおおむね後期前半の指宿式土器に比定できると思われる。

６　類

56～58の３点が出土している。貝殻状の工具による器面調整，「く」字状に肥厚し屈曲する器形や文様構成に共通性が認められる。56は口縁部片で，端部に２点の刻目を施した太い凹線の上下に，それぞれ角度を変えた連続刻目文が施文されている。これらの文様は口縁部から「く」字状に肥厚し屈曲した部分に施されている。外面全体に煤がよく付着している。57は，「く」字状に肥厚し屈曲した部分の破片と思われる。斜位の連続刻目文が施文されている。56・57に施文される連続刻目文は，器面に工具を押しつける際の角度もしくは強弱を工夫することによって，まるで跳ね上げているかのような視覚的効果を持たせているのも特徴である。58は台付皿形土器の一部と想定した資料である。上部に深いV字の沈線が１条横位に施文され，その下位に竹管状の施文具による円形刺突文が施文されている。色調も淡赤褐色で特徴的である。

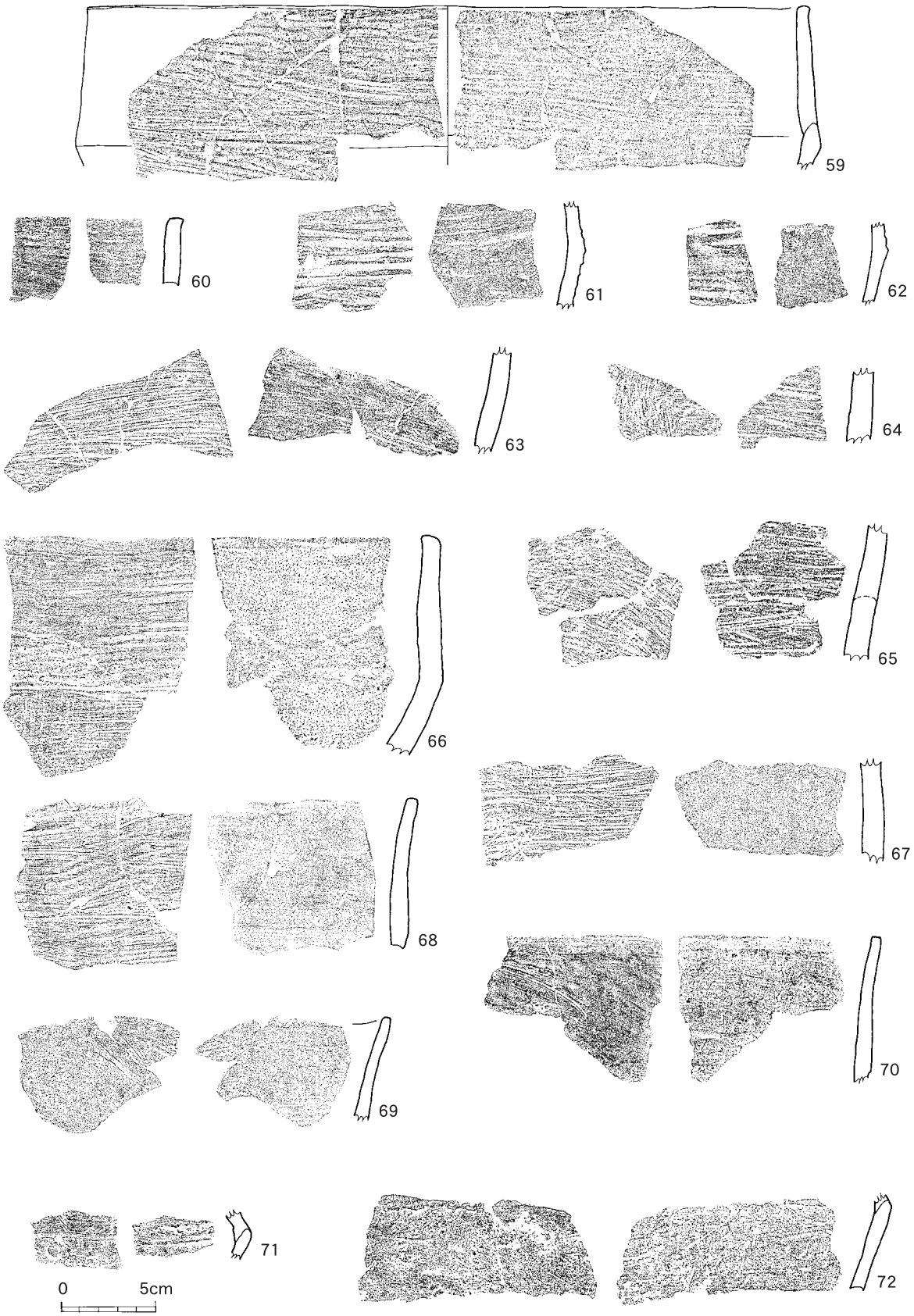
これらの特徴から，6類は後期前半の市来式土器と思われるが，58についてはやや疑問も残る。

７　類

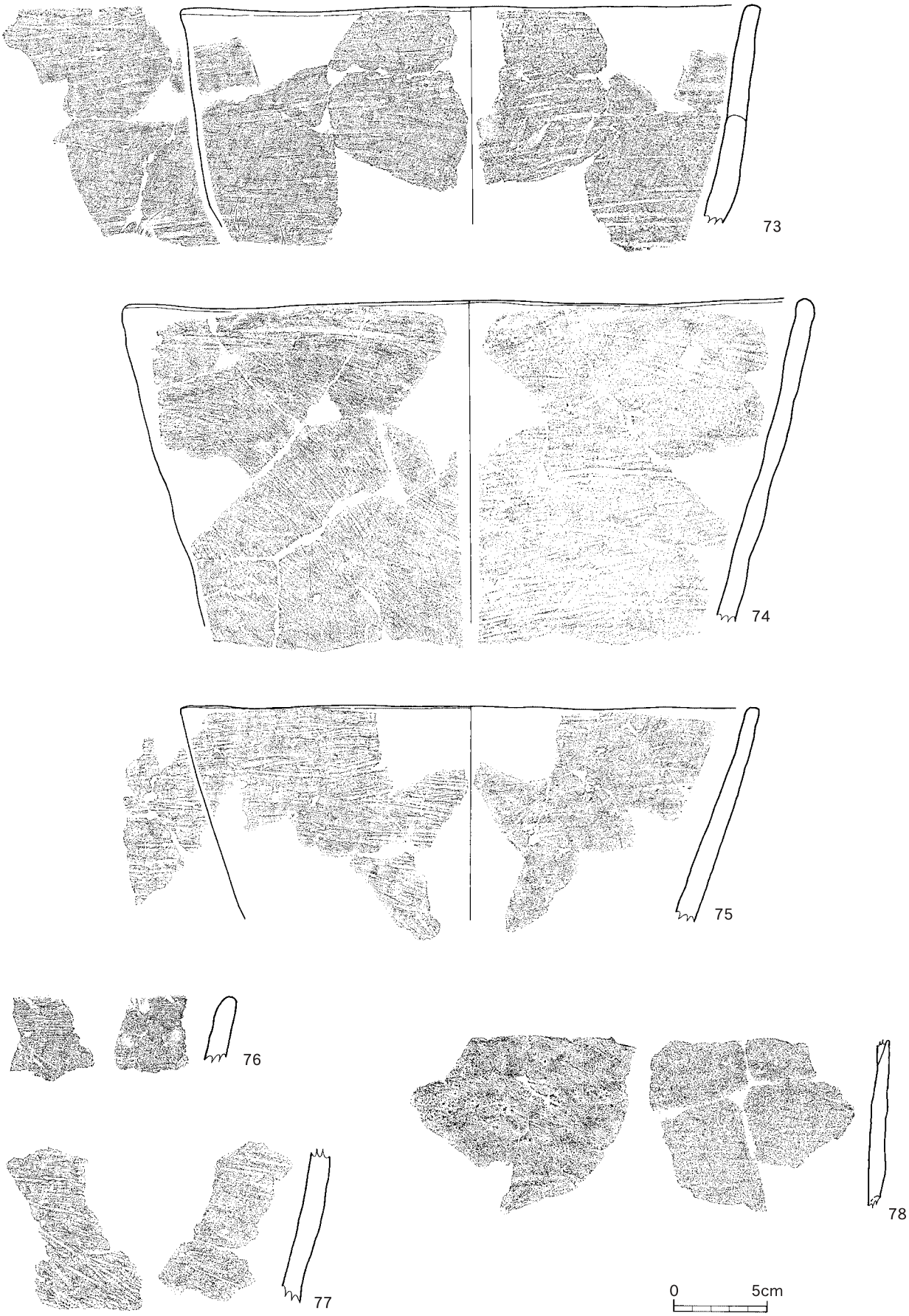
59～84を抽出した。C～H区にかけて調査区内で広く出土している。器壁は比較的厚く，貝殻状

の工具などで粗い条痕が内外面ともに横方向になされるようである。器形はおおむね単純で一部にやや屈曲させている資料がみられる程度である。文様は施文されない。

59は口縁部から胴部にかけての破片である。胴部には屈曲部があり，口縁部までは湾曲などせずにやや内傾する器形である。口縁部は略方形につくり，外端はやや張り出す。内面と外面で器面調整具が異なっている。屈曲部以下には煤は付着するようである。復元口径約39㎝である。60は59と同一個体の可能性がある。61・62は屈曲部の資料で，同一個体の可能性がある。外面には間隔の空いた横方向の条痕が確認できる。内面はナデられているが，61では外面と同じと思われる工具による条痕が消し残されているのを確認できる。63は胴部片である。器面調整具は内外面とも同じ工具のようであるが，内面は調整ののち軽くナデられているようである。外面には煤が付着している。64・65は条痕の特徴や胎土などの特徴から同一個体の可能性がある。外面の条痕は特に不規則な方向で残っている。器壁も厚いが，大きさの割に持ち重りのする資料である。66は口縁部から胴部にかけての破片である。外面の条痕は，比較的乱れのないものである。口縁部は略方形で，内面端部が内側にやや張り出す。59よりも重い資料である。屈曲部周辺に煤の付着が確認できる。67は胴部片である。内面はナデ仕上げである。細い工具による斜位の沈線が観察できるが，規則性はないようで，文様との判断はできかねる。68は口縁部片で，７類のうちでは比較的器壁の薄いつくりである。口縁断面は略方形を基本とするようだが達成されておらず，部分的に舌状の仕上げとなっている。内面はヘラ状の工具によるナデ調整がなされる。外面には，間隔の空いた大きな条痕のうえに間隔の狭い小さな条痕がのっており，種類の違う工具で器面調整をしていることがわかる。整形の工程を考察する上で有意な情報を提供してくれる資料である。外面全体に煤が付着している。69・70は胎土や調整などの特徴から同一個体の可能性がある。内外面とも条痕はごく浅くほとんど確認できない。器壁も薄く，口縁断面は角丸方形に仕上げられ，若干外反するようである。さらに，69は口縁部をやや山形に隆起させている可能性がある。文様は69・70ともに明らかなものは確認されないが，70には，外面に長さと角度の異なる斜位の条痕が２条口縁部下に観察できる。周辺の調整の方向が同じであるため，結果的についたものの可能性もあり，にわかに評価しかねる情報である。外面に煤の付着を確認できる。71は屈曲部の資料であるが，外面は屈曲部を境にして仕上げの丁寧度合いが大きく違っている。内面は接合部が観察できるなど，粗い仕上げである。72も屈曲部の資料である。条痕はあまり確認できない。内面は丁寧にナデられているが，外面は胎土の取り残しが放置されており，雑な調整である。71・72ともに煤の付着を確認できる。73は口縁部から胴部にかけての破片である。比較的厚い器壁で，口縁断面は角丸方形に仕上げる。内外面ともに間隔のあいた大きな条痕の残る工具で整形したのち，別の工具でさらに整形しているようであり，部分的にミガキのような状態になっているのが観察できる。また，胎土には赤色粒が含まれている。外側には屈曲部がわずかに観察できるが，内側がそれに対応しておらず，直線的な成形であるため，屈曲部分が他の部位よりやや分厚くなっている。口縁部や口唇部に煤の付着を確認できる。74は直線的に外傾する器形を有する資料で，残存部内では屈曲部を観察できない。口縁断面は丸く仕上げる。条痕は外面と内面で種類が異なっており，外面の条痕は細かくやや不規則である。内面には成形時の指頭押圧の痕跡も確認できる。75も74と同様な器形を有する資料である。直線的に外傾し，口縁断面は丸く仕上げる。内外面ともに種類の違う工具で整形され，部分的に軽いミガキのような状態を



第25図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(7)

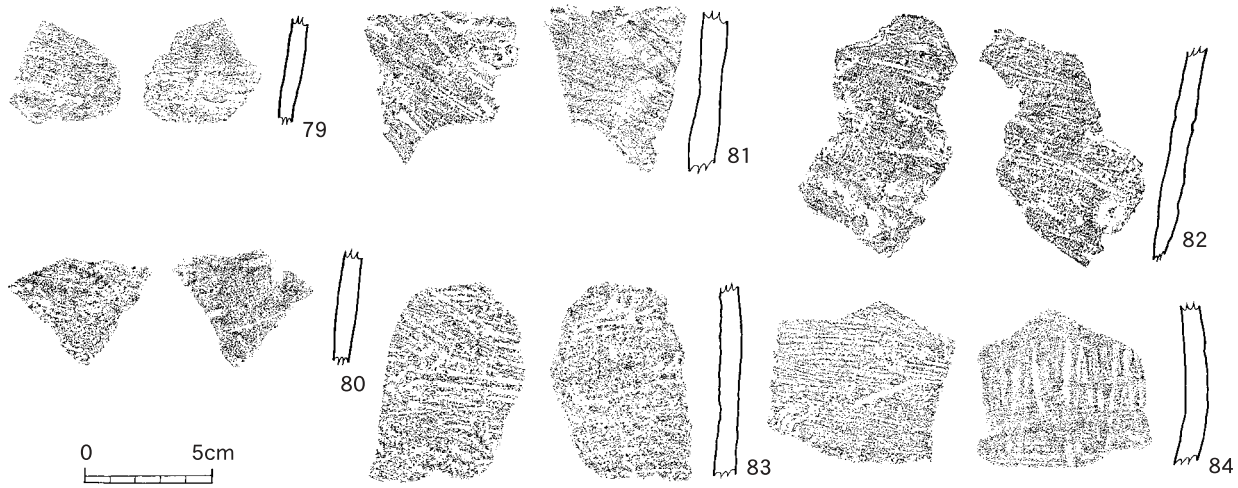


第26図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(8)

呈している。76は口縁部片である。やや分厚く，ナデ調整がなされる。口縁断面は舌状に整形されている。口唇部内側に連続刻目文のようなものが観察できる。77は胴部片で，器面の特徴や色調などから75と同一個体である可能性がある。78も胴部片で，比較的薄い器壁である。外面は条痕のうえから別の工具でナデられているが，ミガキにみえるほどの光沢はない。内面は横方向のきれいな条痕が観察される。

79～84は胴部片である。外面に煤が付着しているものや，付着が確認できる資料はない。83・84は内外面ともに細かい条痕が残されている。表面の劣化が認められる。84も細かい条痕が残されているが，83よりもきれいに残されている。また，内面には横方向の条痕のうえから棒状の工具によって縦方向の短かい条線が連続して残されているのが観察できる。部位もわからないので，この条線についての詳細を明らかにすることができない。この資料も表面の劣化が認められる。

これらの特徴から，７類はおおむね晩期の粗製深鉢に比定できると思われる。



第27図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(9)

８　類

85～96を抽出した。Ｃ区からＨ区にかけて広く出土している。小片が多いため器形の復元はできなかった。器壁は薄く，外面調整は粗いが，内面調整は丁寧にナデられている。いずれの資料も，外面には煤が付着しているか，付着を確認することができる。

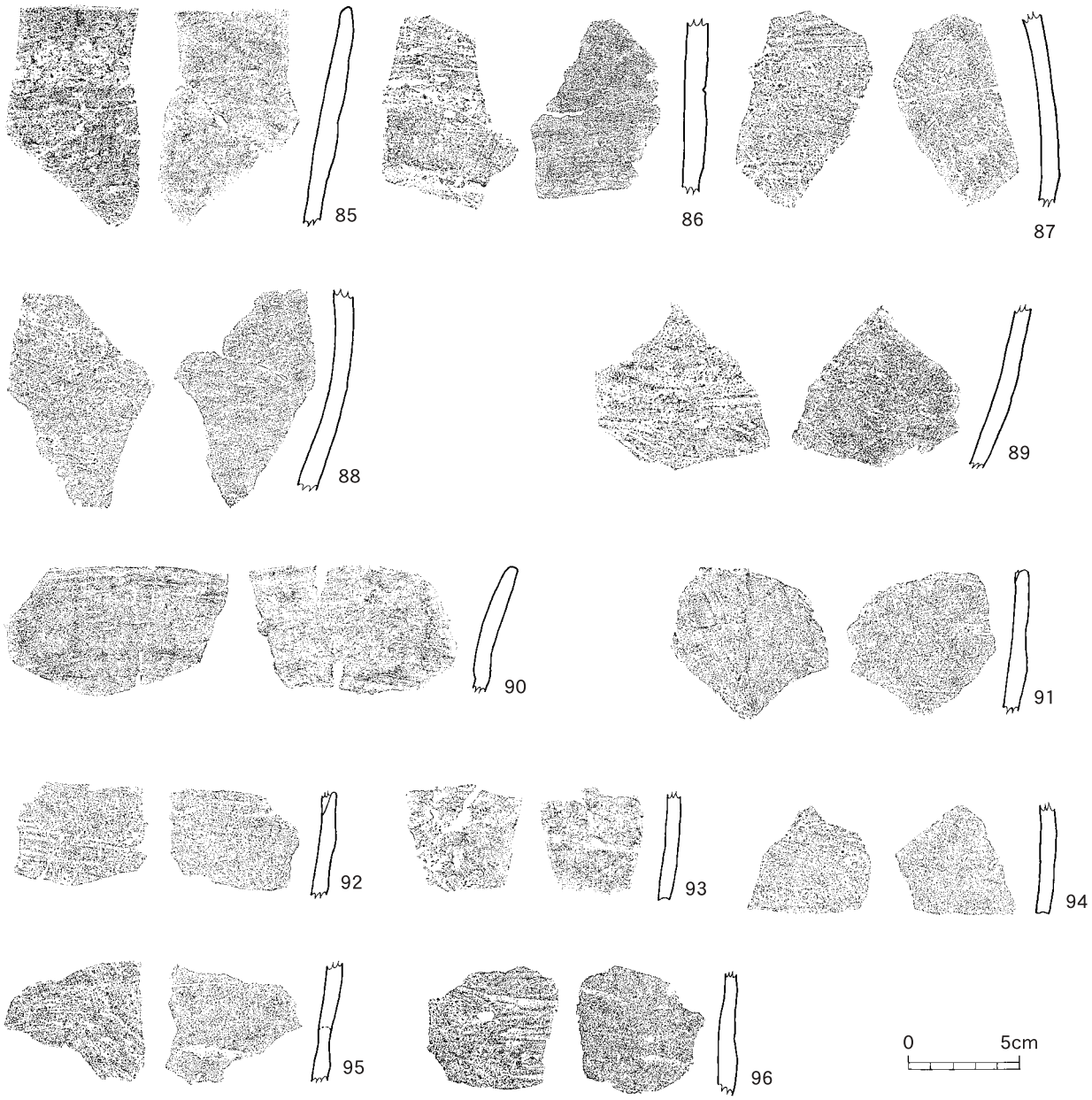
85～89は，接合できなかったものの器面調整や胎土の特徴から同一個体の可能性がある。85は口縁部片で，鋭い舌状に仕上げられている。86～89は胴部片である。外面は，程度の差はあるものの，いずれも粗い調整ののちに異なる工具でさらに整形しており，部分的にミガキのような仕上げとなっている。内面は，ミガキ調整であるがやや雑な部分も観察される。87・88はやや湾曲した資料である。90は口縁部片である。口唇部は略方形に仕上げられ，破片の下位には屈曲部が確認できる。内外面ともにミガキ調整がなされるが，外面は丁寧ではない。外面全体に煤が付着している。91～96も胴部片で，条痕や胎土，色調などの特徴から，91～94が同一個体，95・96が同一個体の可能性がある。

これらの特徴から，８類はおおむね晩期の組織痕土器の一部であると考えられる。

9　類

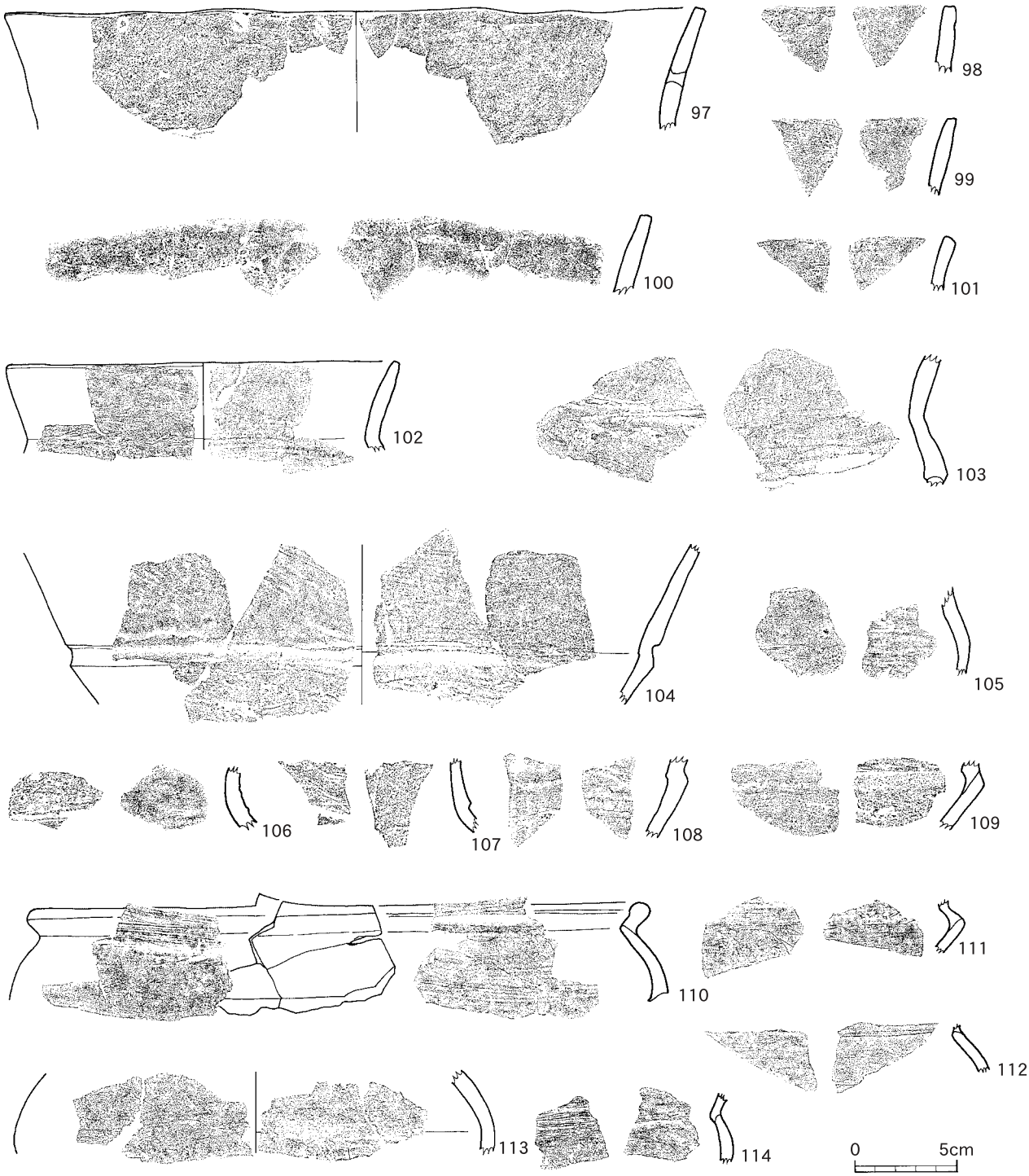
97～114を抽出した。Ｂ区からＨ区にかけて出土しており，H13～15区に比較的分布の集中する範囲が観察される。

97は口縁部である。やや外湾する器形で，口唇部は方形に仕上げるが，平坦面の仕上げは粗い。内外面とも丁寧なナデ調整がなされる。破断面に回転穿孔による補修孔が１か所確認される。また，破片の下端には沈線が１条確認される。98・99・101は略方形の口唇部形状，外面がやや粗いナデで内面がナデという器面調整，胎土の特徴から同一個体の可能性がある。100は外面調整がやや粗いナデ調整であるが，口唇部形状などは略方形である。これらは，あるいは同一個体であるかも知れない。102は口縁部片で屈曲部も残存している。口唇部は略方形であるが，端部にむけてやや細



第28図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代⑽

まる。内外面ともミガキ調整がなされる。屈曲部に煤の付着をわずかに確認できる。復元口径は約19.4㎝である。103は頸部～胴部屈曲部の破片である。内外面ともナデ調整がなされるが，内面には接合部が観察されるなど丁寧な調整ではない。104は小さいが明瞭な屈曲部のある胴部片である。内面は丁寧なナデ調整がなされるが，外面は屈曲上部が斜位の調整，下部がヘラ状工具による粗いナデ調整がなされる。屈曲部および屈曲上部に煤が付着している。復元径は屈曲部上端で約29.2㎝である。107～109は同一個体の可能性がある。105・106は胴部屈曲部の破片である。



第29図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(11)

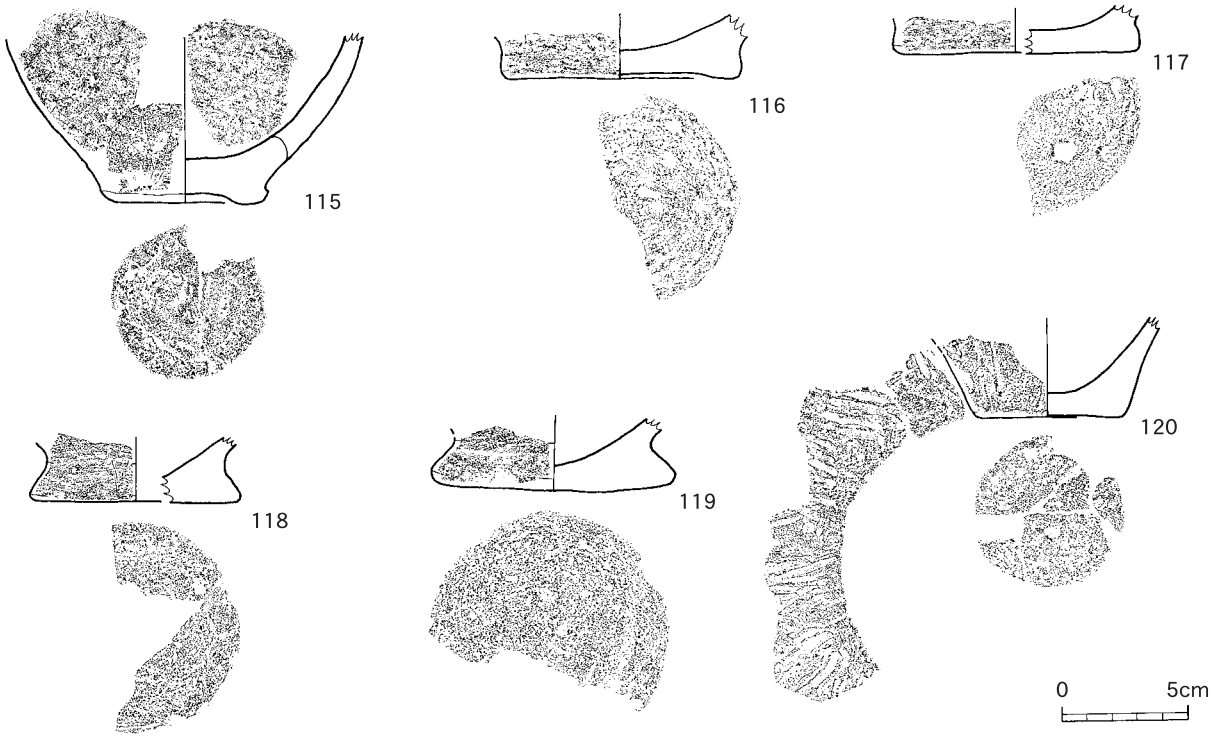
110は浅鉢の口縁部である。内外面とも器面の面取りを意識したような丁寧なミガキ調整がなされ，器壁は薄く仕上げられる。口縁部から頸部は短く，頸部から胴部はやや丸みをおびた器形をしている。特に文様はないが，口縁部には突起がついていたと思われる。112・114も，同様の器形や特徴を持っていたと思われる。111も丁寧なミガキ調整がなされるが，屈曲が110などよりも鋭角である。

これらの特徴から，９類はおおむね晩期の精製鉢ないし浅鉢と思われる。

10　類

７～９類の底部と思われる資料を一括した。

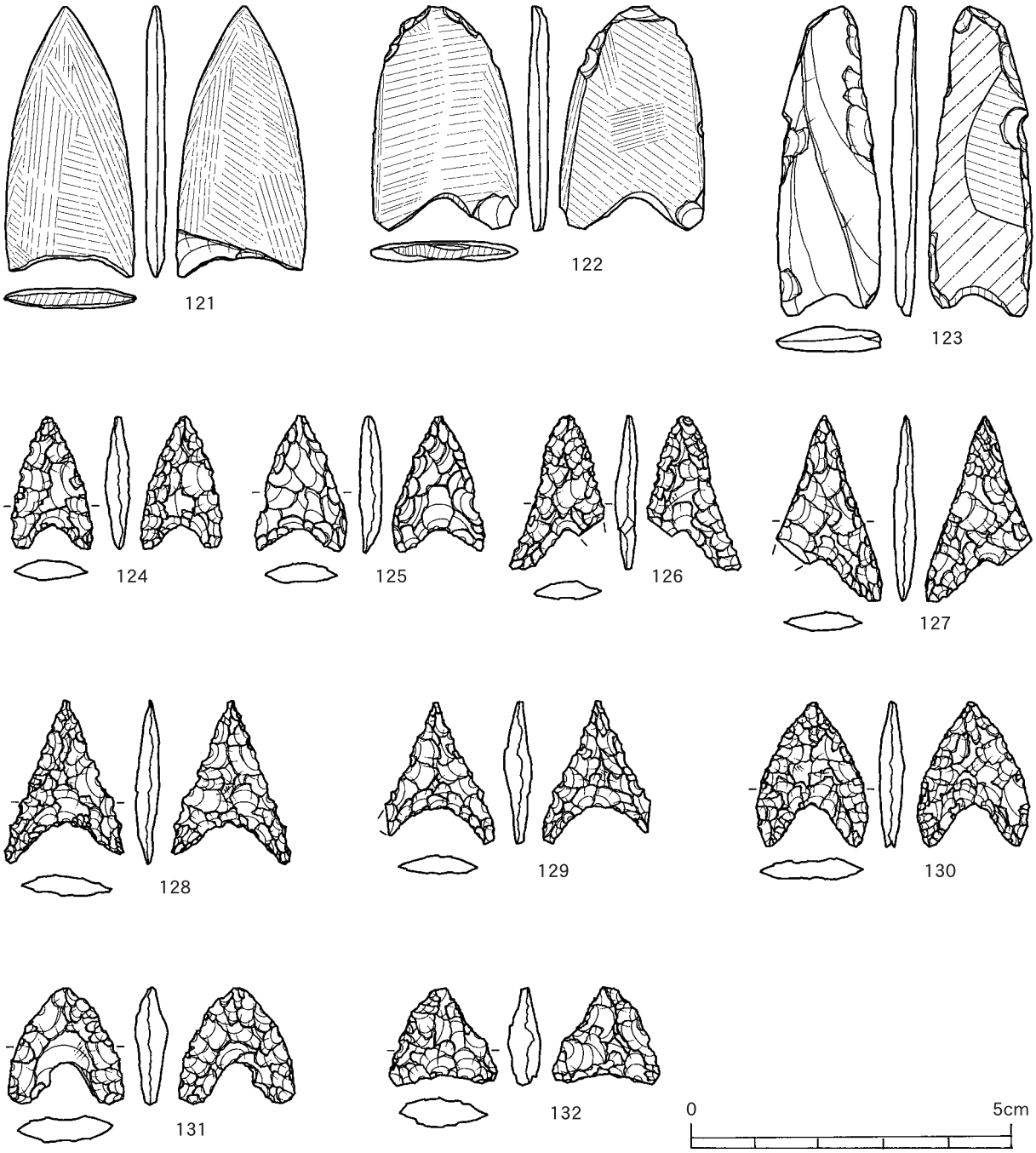
115は上げ底からやや胴部が張る器形である。外面は被熱により劣化しているほか，内面も若干の剥離が観察される。ヘラ状工具による器面調整がなされているようである。116も上げ底であるが，より平坦なつくりである。117～119は平底で端部がやや張り出す底部形態をしている。119は若干レンズ状の底面形状となっているが，接地面は平滑に仕上げられている。116～119はいずれも内面は丁寧なナデ調整がなされ，接地面には白色の粉末がほぼ全面に付着している。120は，小さい平底からまっすぐ立ち上がる器形をしており，端部の張り出しを持たないのが他の資料と異なる特徴である。外面は貝殻状の工具による粗い条痕が観察され，内面は丁寧なナデ調整がなされる。この資料にも底部接地面と外面の一部に白色の粉末が付着している。



第30図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代⑫

② 石　器

堂園遺跡Ａ地点からは，Ⅱ～Ⅲ層を中心に70点あまりの石器が出土した。遺跡自体の文化層堆積が漸移的であるため時期比定が困難であり，出土した石器の多くは縄文後期～晩期に属するものと想定されるが，軽石製品や磨・敲石類など，石器の一部は弥生時代に属する可能性も想定される。ここでは，出土した石器について形態を中心に分類したうえで，個々の遺物については特徴的なものを取り上げて説明することとしたい。



第31図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代⒀

石　鏃

121～123は磨製石鏃とその未製品と思われるものである。いずれも頁岩質ホルンフェルスを石材として用いている。Ⅱ層から出土しているし，形態等の特徴から見ても弥生時代に属する資料である。121は全面に研磨痕が観察されるが，鎬などは明瞭に削り出されておらず，先端部にわずかに稜線が観察できる程度である。122は側辺に刃部が削り出されているほか，抉り部分には２～３面の研磨面が観察されることから，整形過程を推定することができる。また，２については未製品ではなく一旦先端部が欠損したものを再加工する途中のものである可能性もある。123は縁辺に剥離成形がみられる。

124～132は打製石鏃である。頁岩や安山岩が利用石材の多くを占め，黒曜石の利用度が低いのは周辺の石材環境を反映している可能性がある。Ⅱ～Ⅲ層にかけて出土している。便宜上，平面形態から次のように分類した。①抉りが比較的浅いもの（124・125），②抉りが比較的深く直線的に入っているもの（126・127），③抉りが比較的深く半円状に入っているもの（128・129），④側辺が弧状に張り出し抉りが比較的深く入るもの（130・131）である。131はいわゆる「鍬形鏃」の可能性も想定できる。132は未製品と思われる資料だが，大きさが他の石鏃と異なっているのが特徴といえる。

石　匙

133～135は石匙である。いずれも横長薄片を素材として作られているが，形態としては縦型（133）と横型（134・135）の２形態に仕上げられている。133・134は西北九州系安山岩を石材として利用している。いずれもつまみ部の整形は丁寧とはいえず，細かい調整等はなされていない。135は西北九州系黒耀石が利用されている。133・134と比べると丁寧なつくりで，横型の典型的形態をなしている。この遺跡から出土した利器のうち，石匙だけが西北九州系の石材を利用している点が興味深い。

石　錐

136は使用部分を欠損しているが石錐と思われる。頁岩のやや厚みのある縦長薄片を素材とし，先端部に刃部調整を行っている。残存部に使用痕は観察されなかった。

石　核

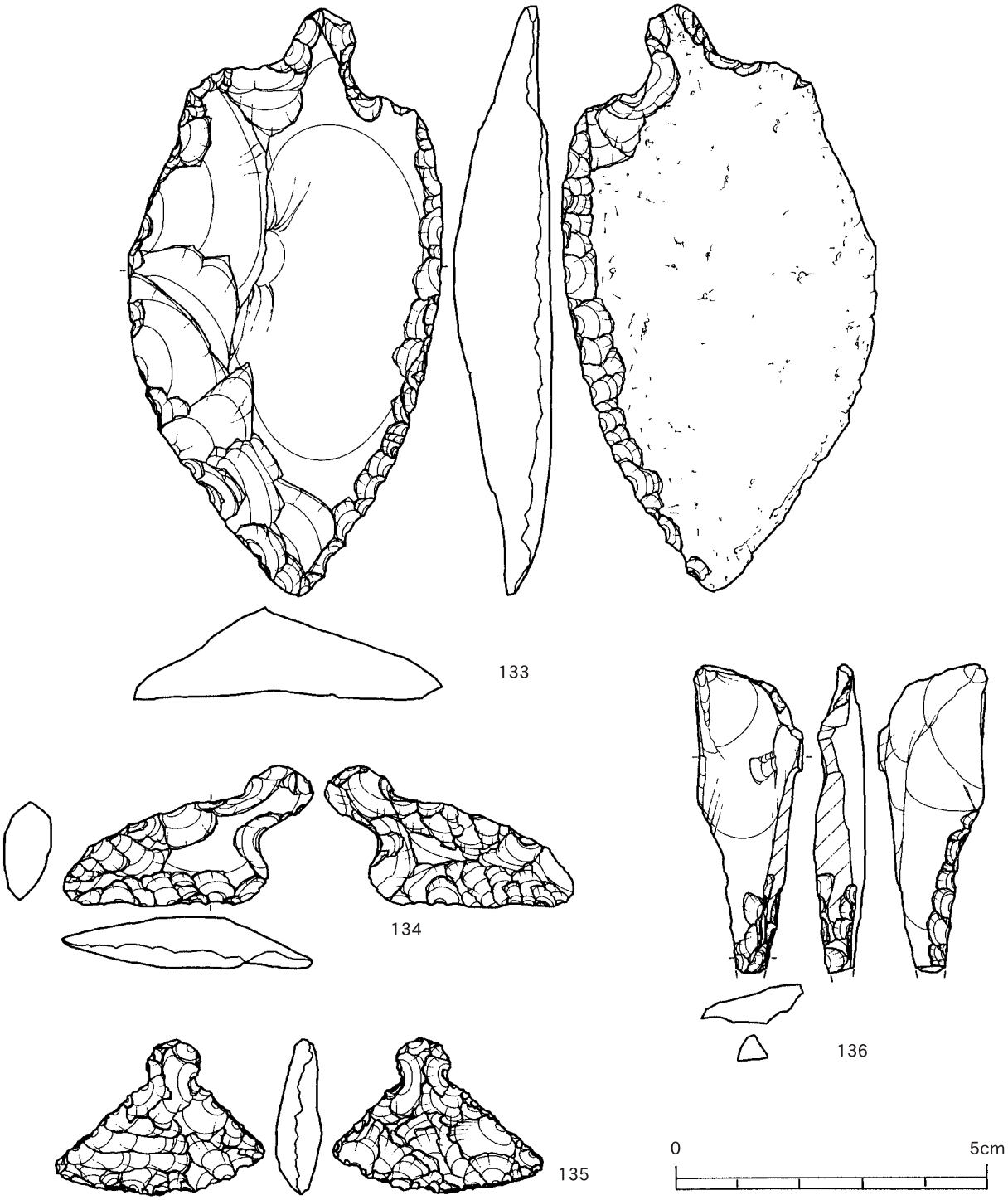
137～139は石核である。137は砂岩を利用した石核で，上面と下面に打面を形成し縦長の薄い剥片を連続してとっている。139は，礫器の可能性もあるが，打点が観察され，使用痕等が観察されなかったため，ひとまず石核として分類した。

140・141は接合資料である。砂岩の転礫が母岩として利用されており，連続して縦長剥片をとっていたことがわかる。141は，素材となった剥片の下端がやや潰れていたことから，礫器として利用された可能性もある。

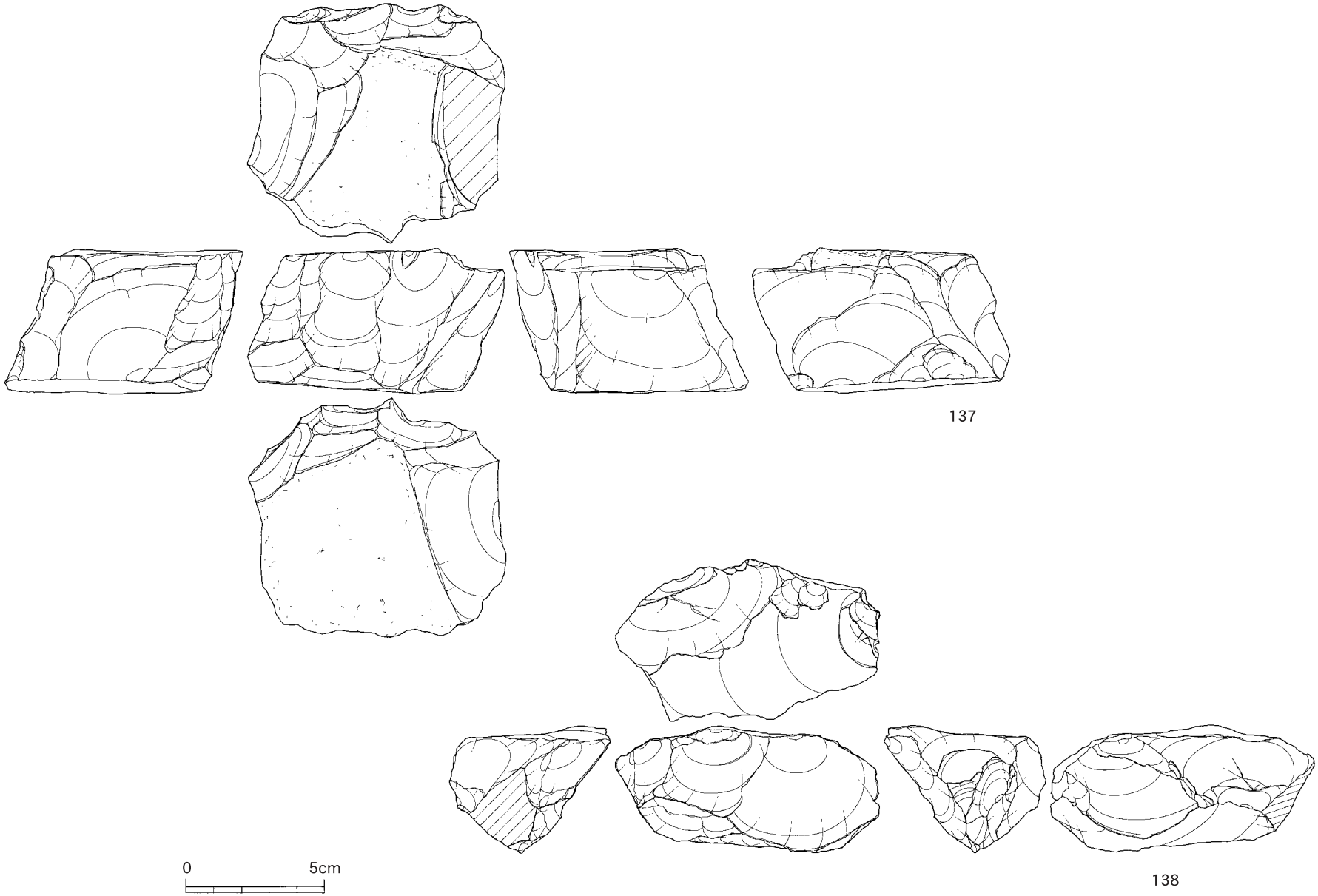
なお，残念ながらこれらの石核や接合資料と同じ石材の石器は今回の調査では発見されておらず，これらの石核がどのような目的で利用されたのか明らかにできなかった。ただし，接合資料については，後で紹介する礫器が砂岩製であるので，この礫器を作る過程でできた資料かもしれない。

石　斧

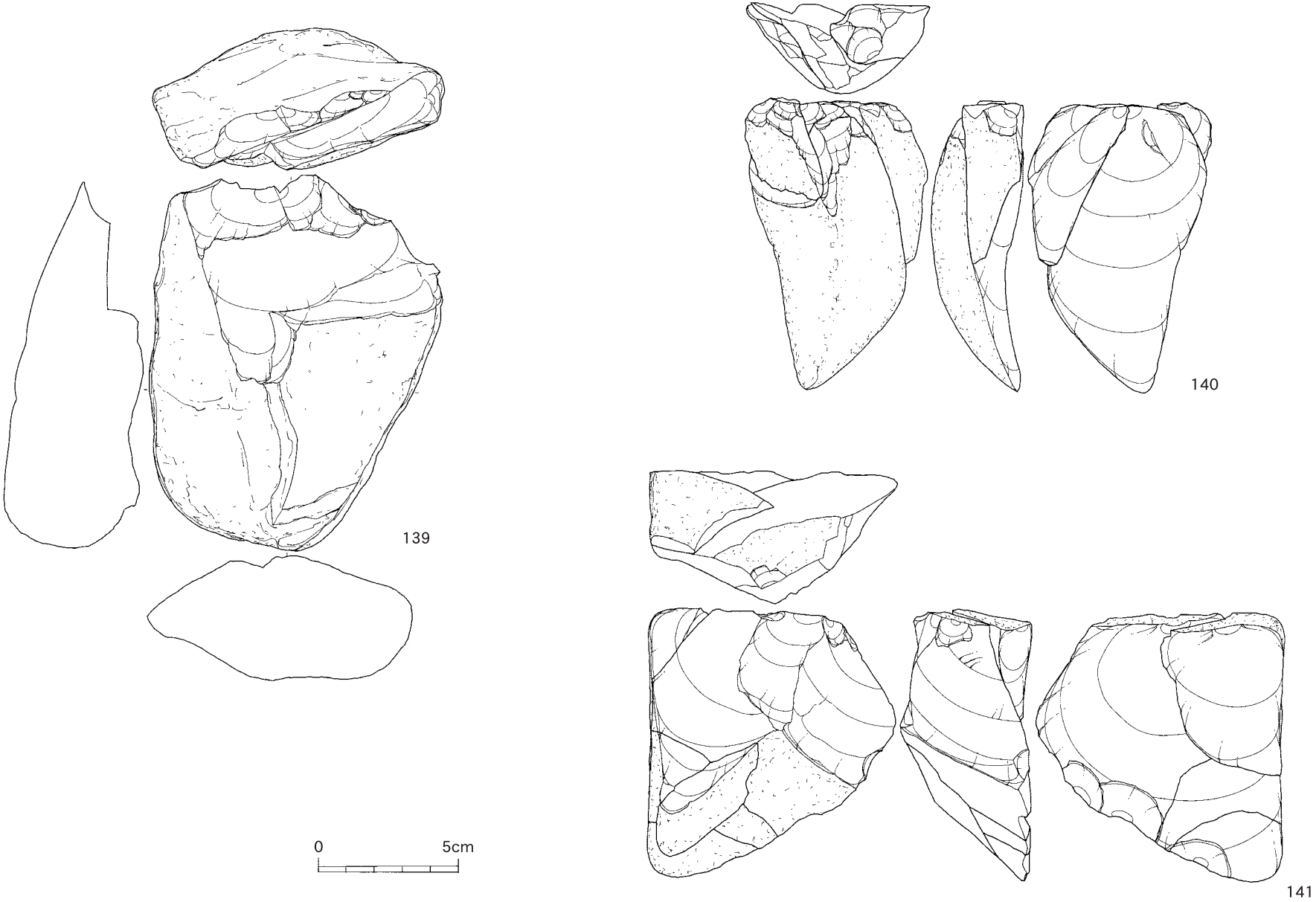
142～144は磨製石斧である。いずれも砂岩質ホルンフェルスを利用している。144のみⅤ層から



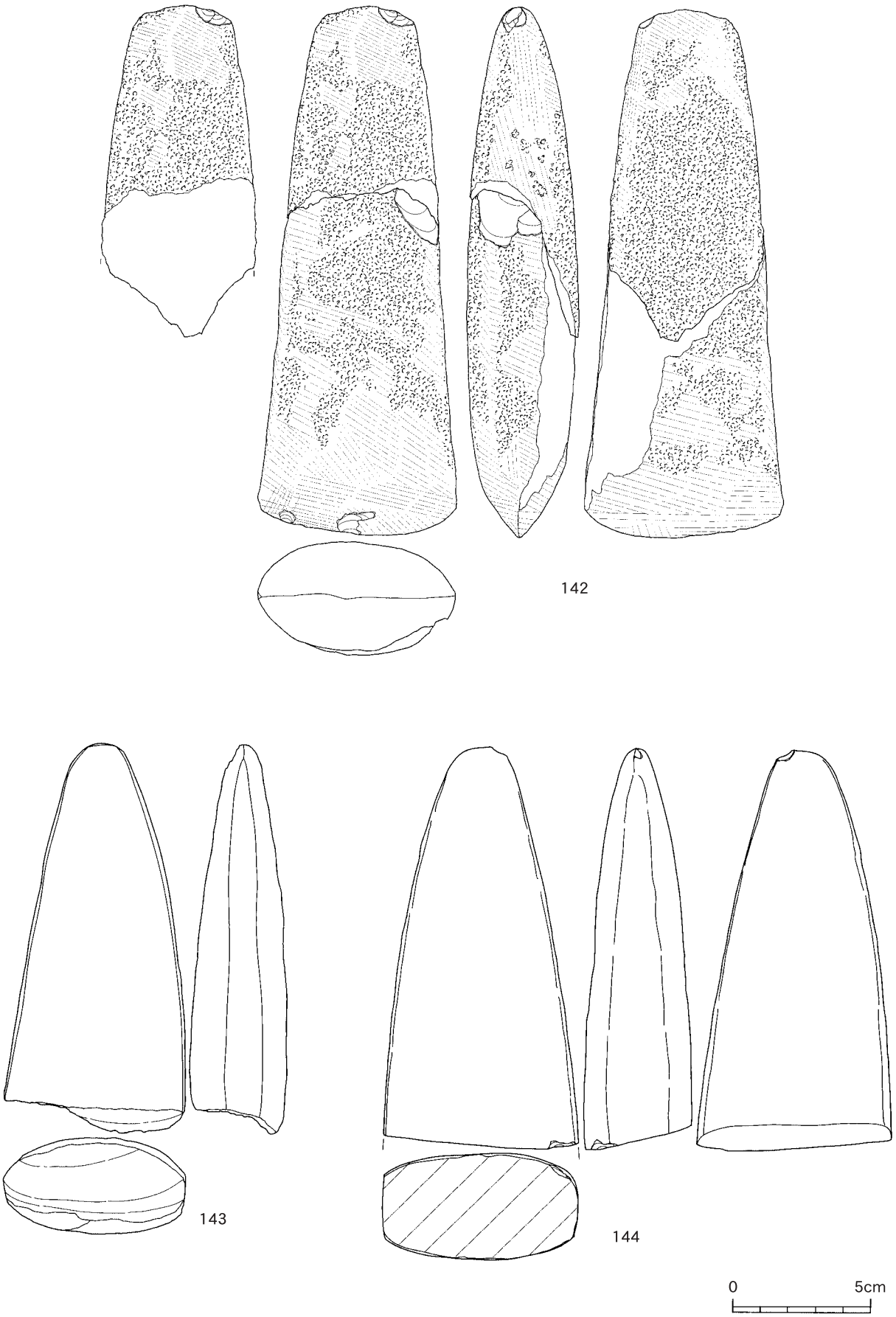
第32図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代⒁



第33図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(15)



第34図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代⑯



第35図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(17)

出土している。142は接合資料である。敲打による整形ののち刃部と基部周辺を研磨して仕上げている。刃部は摩耗しており，特に左側は顕著で刃部がやや直線的に変形している。この部分への詳細な観察を行えなかったが，使用による変形であろうか。143・144は表面が風化しているため整形工程を詳細に観察できなかったが，研磨して仕上げていたようである。どちらも破断して刃部がない。144は摂理面で破断したと思われる。

145～152は打製石斧およびその素材剥片と思われる資料である。主に頁岩質ホルンフェルスが利用されている。145・146のみ完全品である。145には，刃部形成のための平坦剥離が施されている。使用による微細な剥離も観察される。146は接合資料である。右下端がやや凹んでいるが，この部分のみ微細な剥離が多く観察されるため，本来は撥形をしていた可能性もある。この部分を含め刃部に顕著な擦痕は観察できなかった。また，背面中央に破断面からの小さな剥離が観察されるのは，この石斧が割れたときの状況を示しているのかも知れない。148には左側縁下端に，149は刃部に擦痕が観察され，特に149は鈍い光沢も観察できる。150は破断した資料であるが，下端部に調整剥離が観察される。擦痕等はみられない。151・152は，石斧の素材剥片と思われる。他の資料より薄く小振りなため，使われなかったのであろうか。

掻　器

153は掻器と思われる。幅のある頁岩の剥片を利用し，刃部は全体的に潰れ，微細な剥離も顕著に観察できる。また中央付近の稜線には，一部光沢を伴う摩滅か所が観察される。同様な摩滅か所は刃部には見られないので，柄ないし持ち手の装着状況を示している可能性がある。

礫　器

154～157は砂岩の剥片を利用した礫器である。転礫を母岩として幅のある剥片を剥出し下端もしくは側辺に簡単な刃部調整を施しているのが共通する特徴で，刃部には刃潰れも観察される。155は左下端部に錐状の加工を施している。157は他の資料より小形の剥片を用い，刃部調整もなされないが，砂岩を用い，下端には刃潰れが観察できることから図化した。

158・159は使用痕が観察できた大形の剥片で，顕著な刃潰れ等はないものの，全体形状や使用痕の位置が類似している点が特徴である。この２点はⅡ層から出土している。

磨・敲石類

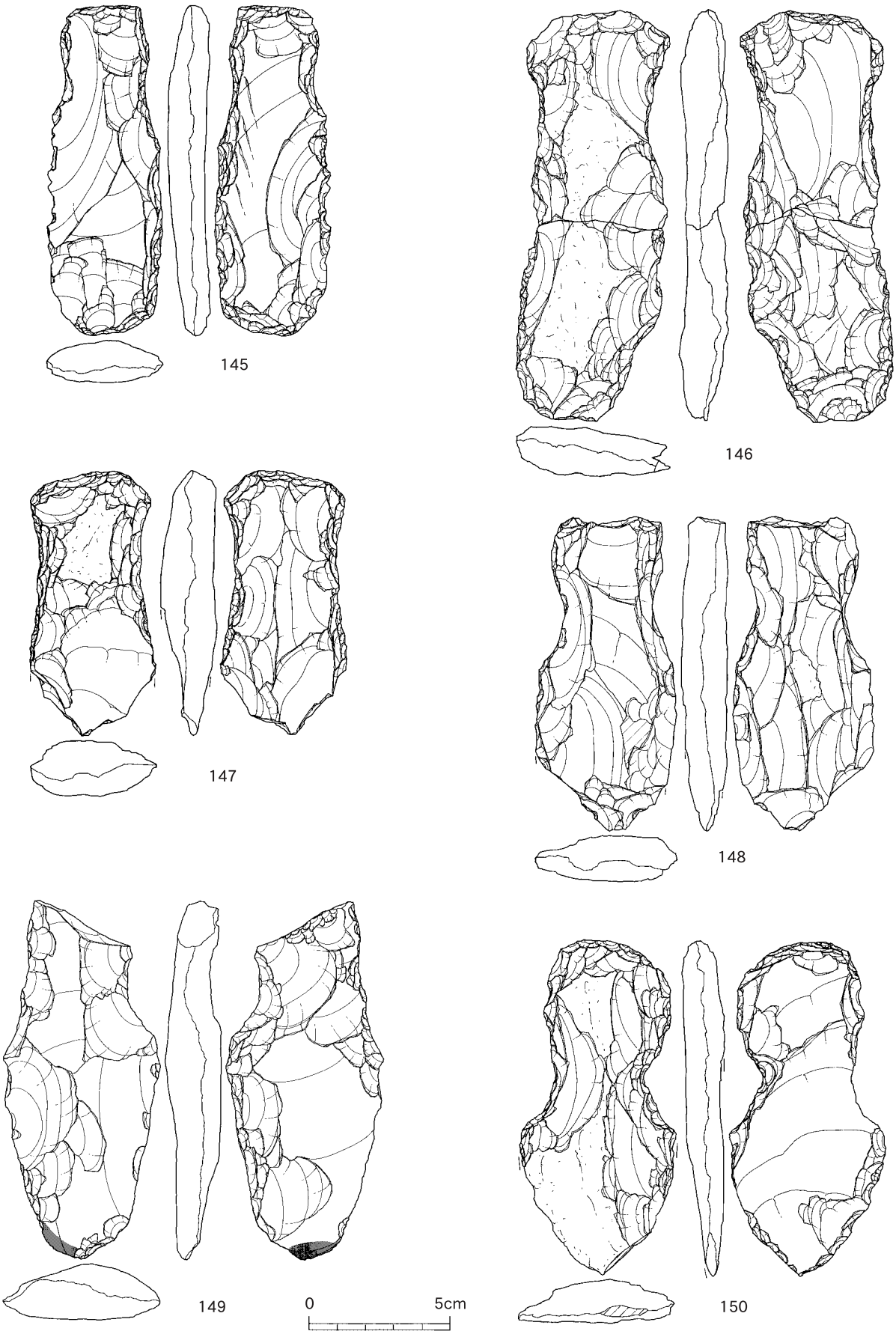
160～168は磨・敲石類をまとめた。石材はほとんどが砂岩を利用しており，163・167・168のみホルンフェルスを利用している。163～168はⅡ層から出土している。

160～162は，側辺に敲打痕が観察されるが，磨面はさほど明瞭ではない。163は上下端の作業面には，敲打痕は観察されるが微細剥離等はみられない。164～168は，160～162に比べかなり小形であるが，磨面が顕著に観察される資料である。最近指摘されているような，土器の研磨具と想定するのが妥当かも知れない。

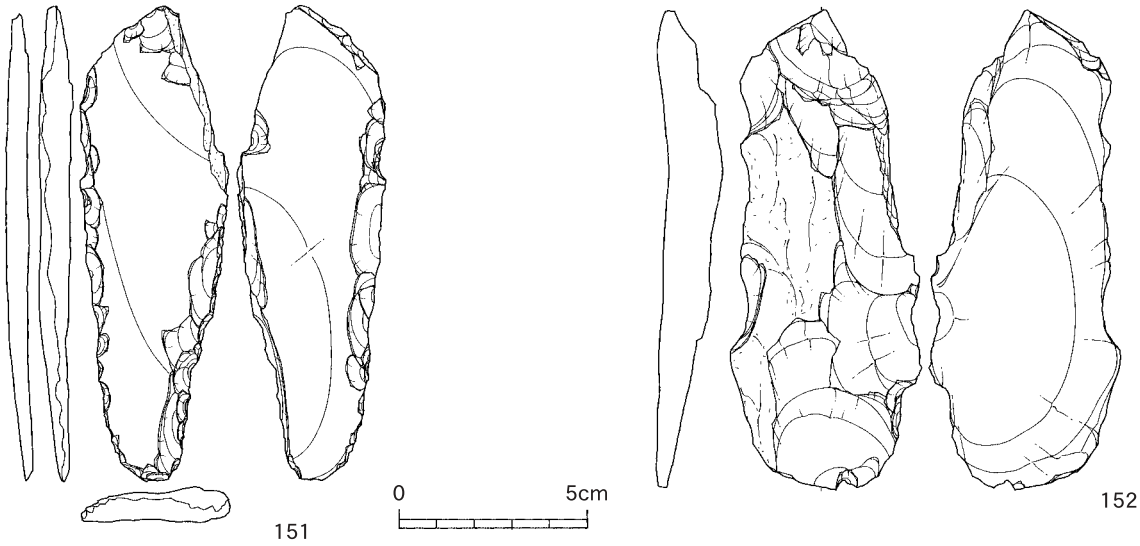
砥石・石皿

169は砥石と思われる。方柱形の砂岩の各側面とも使用されている。上面には剥離面があることから，長さを整えた可能性がある。

170は石皿である。砂岩の板状礫を利用しているが，整形や面取りなどの加工は行っていない。平坦面のほぼ全面を作業面として使用している。



第36図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代⑱



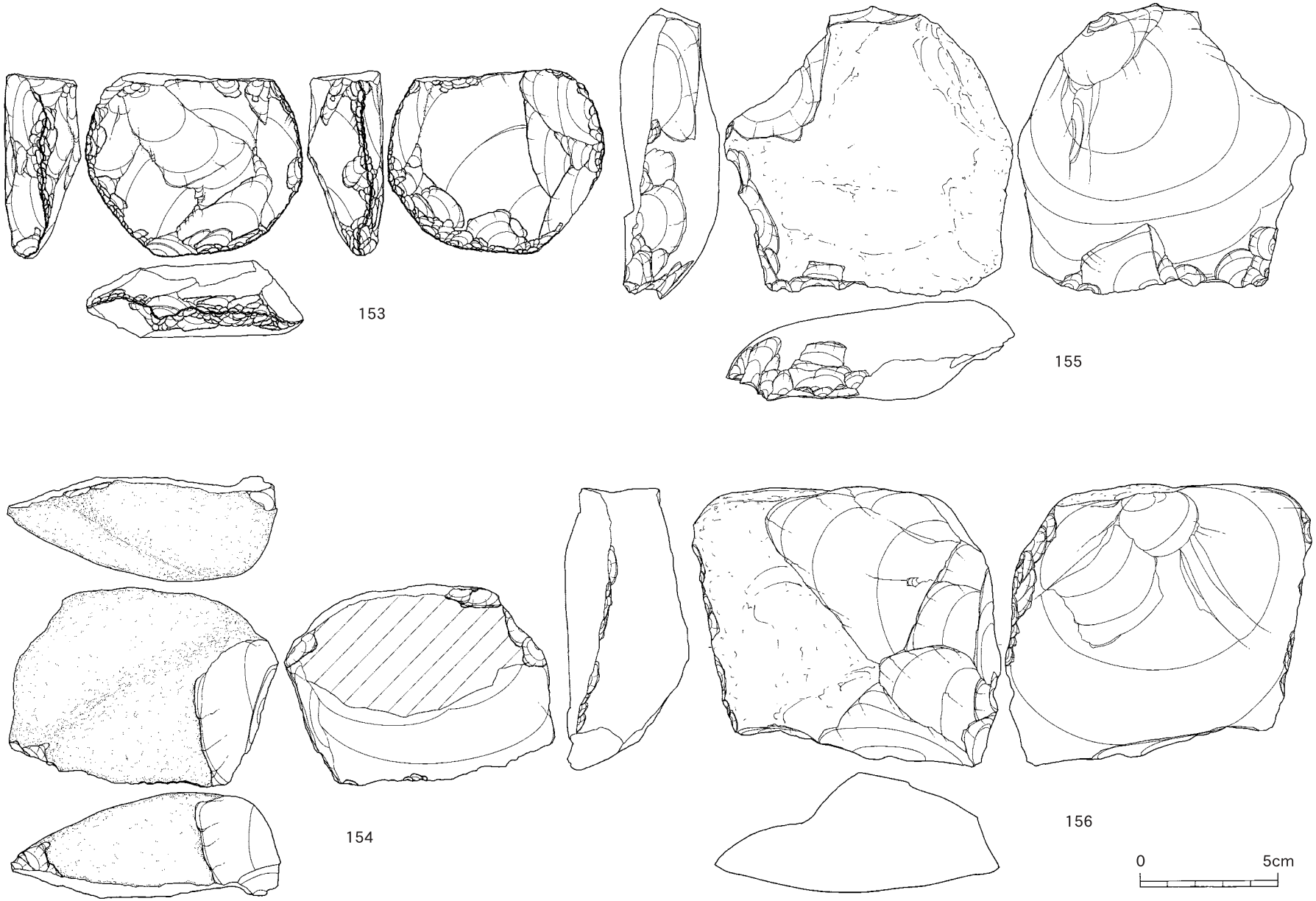
第37図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代⒆

その他の石器類

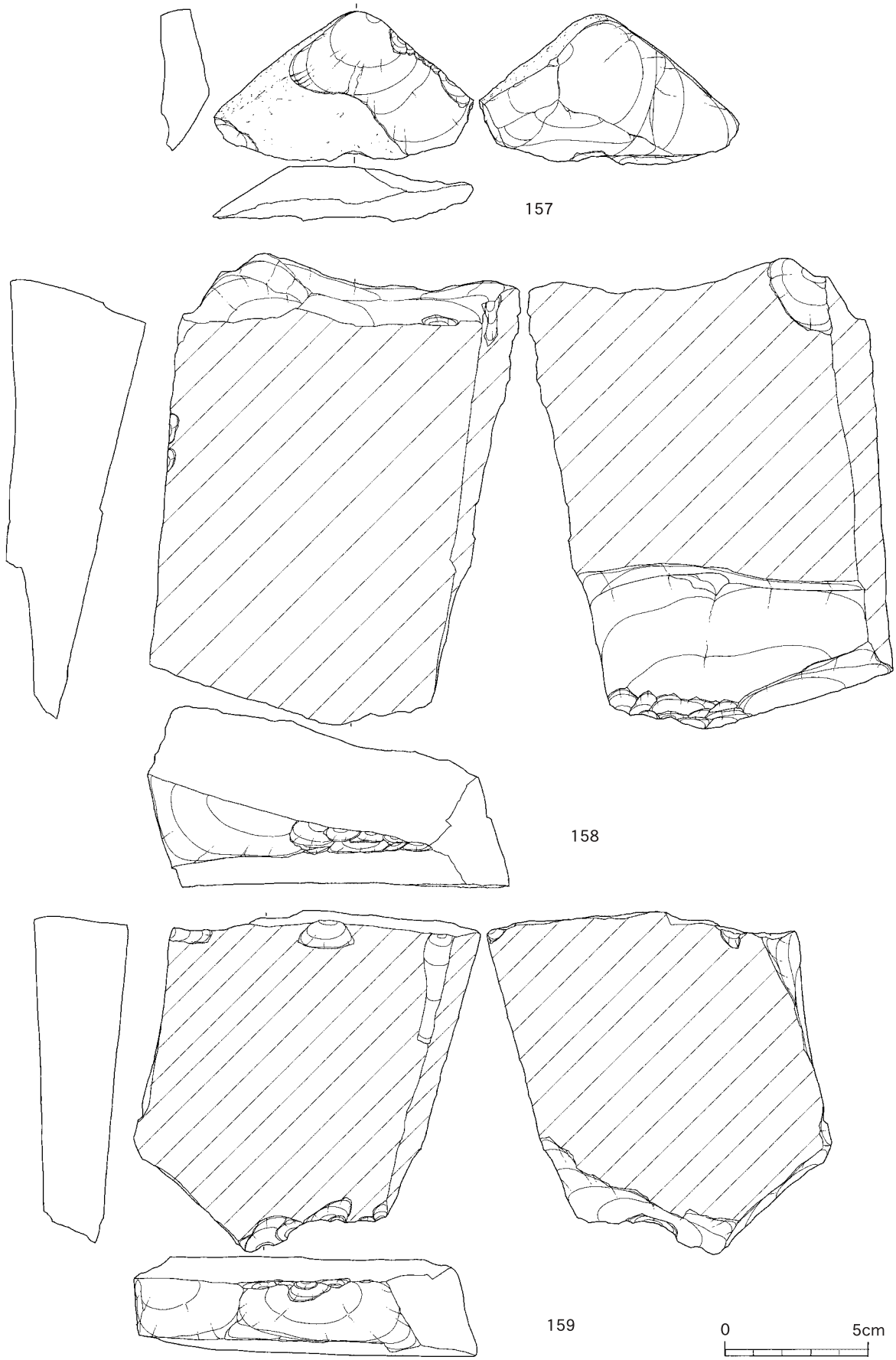
171は石錘の可能性がある石器である。安山岩の円礫を用いており，平坦面も観察できる。大きさは164～168で紹介した石器に類似するが，磨面が顕著でなく，２か所に認められる剥離が対称の位置にあることから，石錘と想定した。Ⅱ層から出土している。

172は三角柱形の礫器である。下端部に微細な剥離と若干の摩耗が確認できるので，この部分を何らかの用途のために利用したと考えられる。Ⅱ層から出土している。

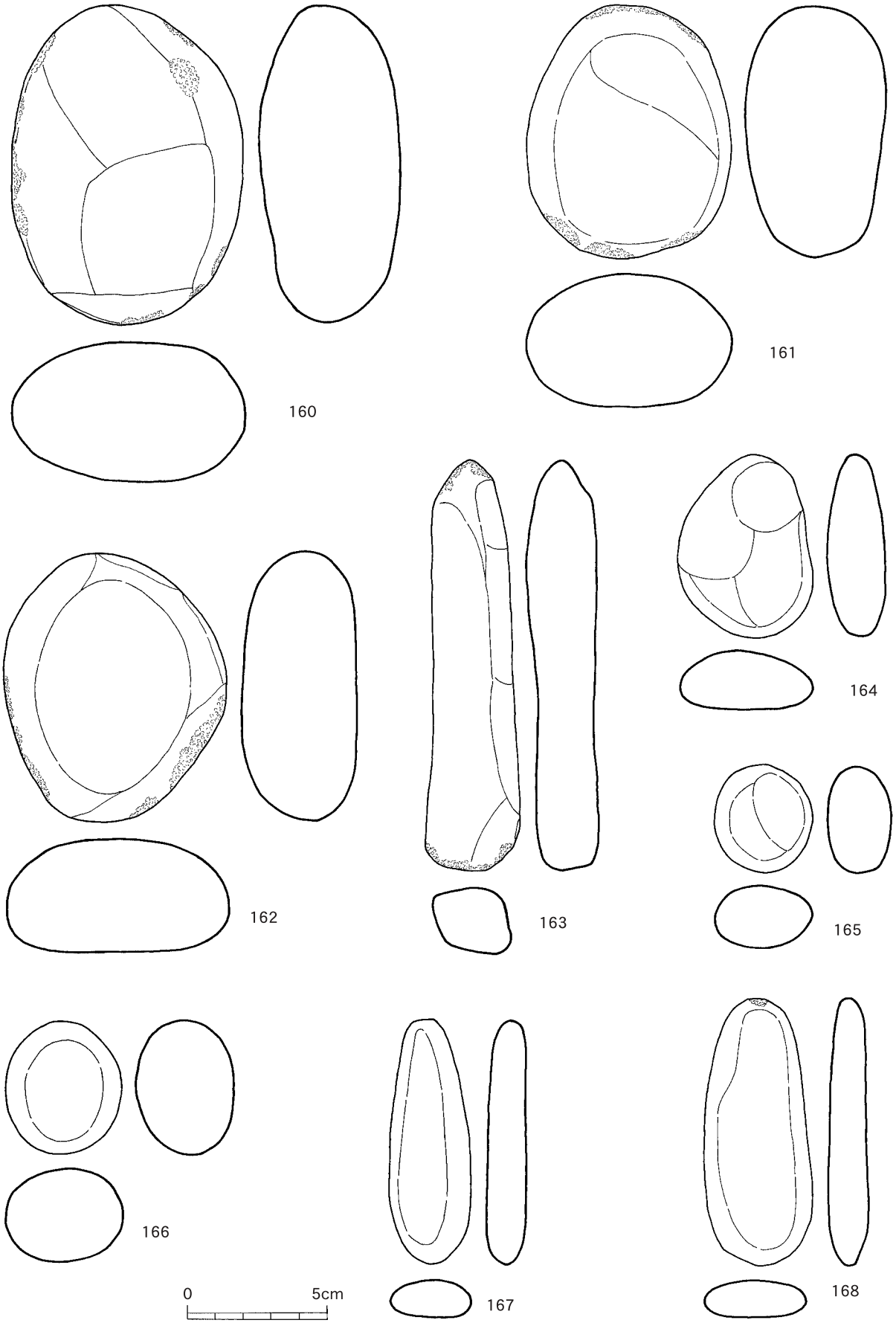
173は軽石製の石製品であろうと思われる。鋭利な道具により右下の部分が大きく削られているほか，正面に２か所と裏面に１か所，同様の道具による切り込みが確認できることから本来は異なる形状をしていた可能性もあるが，用途等がわからないので詳細を検討できない。出土層位はⅢ層である。



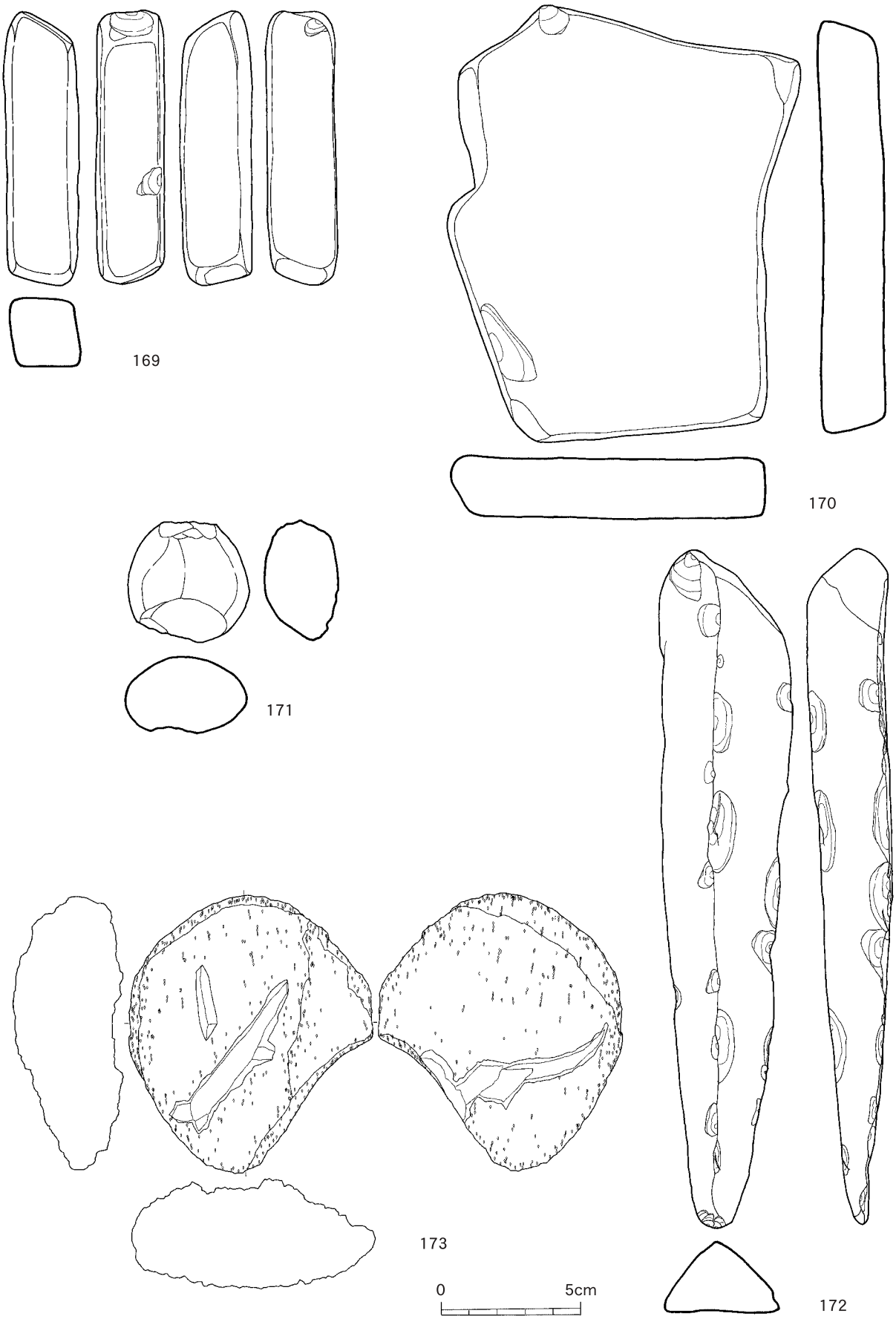
第38図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代⑳



第39図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代(21)



第40図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代以降(1)



第41図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　縄文時代以降(2)

第５節　弥生～古墳時代の調査

⑴　遺　構

この時期に比定できる遺構は土坑で，総計64基が発見された。それ以外の遺構は調査区内からは発見されていない。これらの土坑は，瀬戸口地区のみで発見され，堂園堀地区からは発見されていない。また，瀬戸口地区でも東側の範囲に偏って分布しており，調査区の東方向にはまだ土坑群が発見される可能性をうかがわせている。地形的には瀬戸口地区東側に隣接する尾根の裾が終わるあたりの若干傾斜が残る面に分布するが，その傾斜が終わった平坦面にも数基が点在している状況である。個々の遺構に際だったレベル差はなかったようで，土坑周辺の地形の著しい改変なども発掘調査時では確認されていない。発見された土坑は，近接する土坑もあるもののほぼすべてが切り合っていない。また範囲内に一様に分布するのでなく，ゆるやかな粗密が認められるようである。

土坑内から遺物が出土している例は少ないが，完形土器や鉄鏃などが出土している。また，土坑周辺に遺物の集中分布が認められるという状況が看取された。そのほか，いくつかの土坑の埋土中や床面付近から赤色顔料が検出されている。残念ながら，顔料についてはいずれも写真記録が残されていないが，その範囲を現場で明確に識別できるほどまとまって検出されたようである。

ここでは，これらの土坑について，発掘調査時に試みられた分類を踏襲したうえで，それらに加えて，平面プランについては長方形もしくは楕円形に，断面形状については二段構造もしくは無段構造に分け，前者は段の位置で３種に細分し，後者は断面形状の整い具合で２種に細分した。

出土遺物については，周辺で集中出土したものも含めて傍らに併載している。赤色顔料については，記録された範囲を網掛けで表現している。

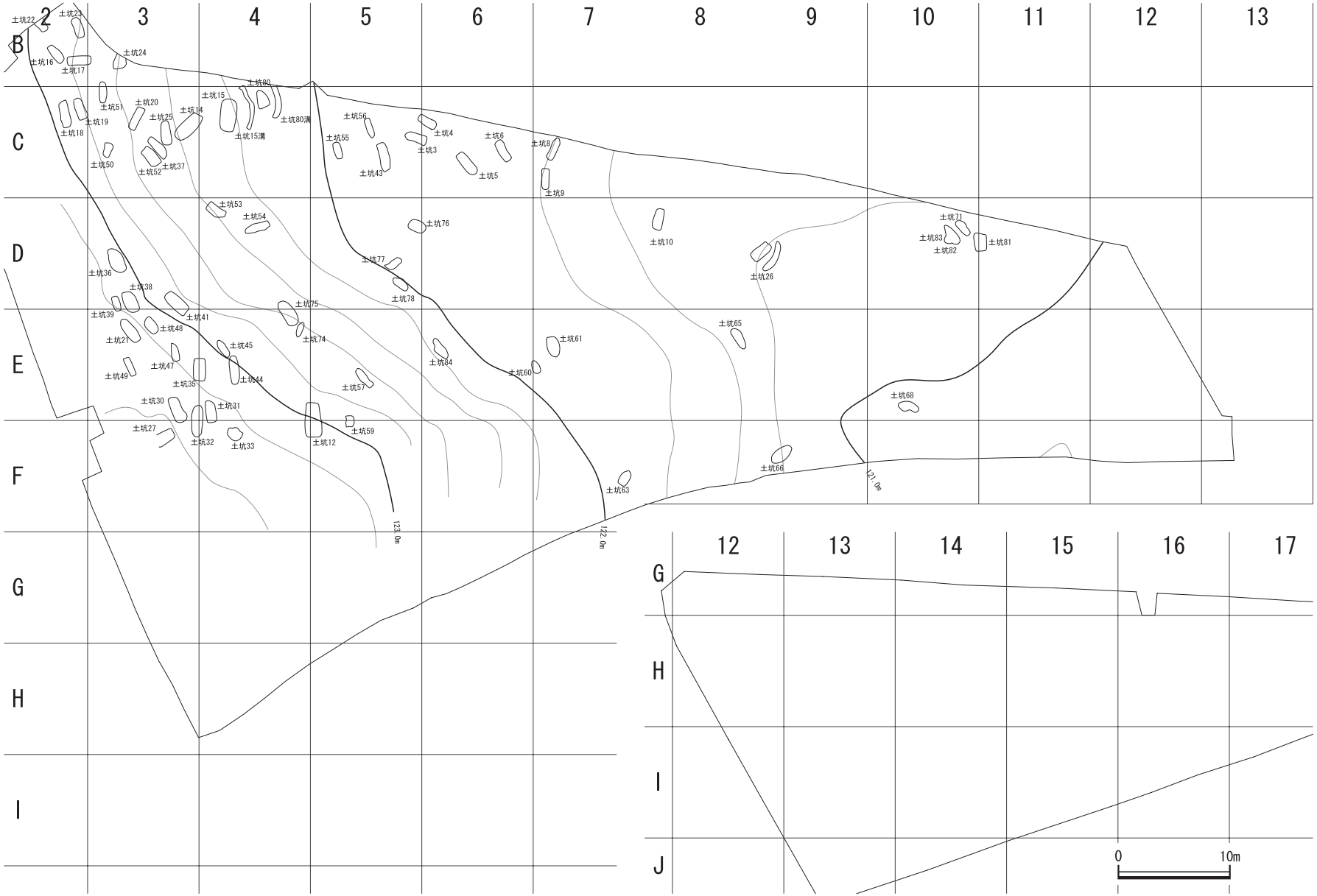
Ａタイプ

平面形，断面形ともに長方形を基本とするものをまとめた（第43図３～第60図80）。また，このタイプには溝状遺構が伴うと想定もできる土坑（第59図15，第60図26，80）も含めた。規模の平均値は，長径205.3㎝，短径88.9㎜，深さ69.6㎝である。

埋土については，レンズ状堆積，ブロック状堆積，ほぼ分層されていないものの３パターンに分類できるが，構造との相関関係は明確とは言い難い。

	二段構造		無段構造			堆積状況			顔料	遺物
	全	短	長	整	不整	レ	ブ	他		
3	○					○				
4		○					○			
5	○						○			高坏
6		○				○				
8		○				○				壺
9				○		○				
10					○	○				
14	○							○		壺
12	○							○	○	鉢
18					○	○			○	鉄鏃
16			○					○		
17				○		○				
19					○			○		
21					○			○		
20	○					○				
22		○				○				
23			○			○			○	
24			○					○		

	二段構造		無段構造			堆積状況			顔料	遺物
	全	短	長	整	不整	レ	ブ	他		
25					○			○		
27				○				○		
30		○						○		
75					○			○		小壺
35	○					○				鉢
36	○					○				鉢高坏
37					○			○		壺
38			○					○		
41	○							○		小壺
43				○				○		高坏
47					○			○		
48					○			○		
51				○		○				彩文
52		○						○		甕
15	○					○				壺鉢
26		○						○		
80					○			○		壺小壺



第42図　堂園遺跡Ａ地点検出土坑配置図

Ｂタイプ

平面形，断面形ともに楕円形ないし長方形となるものをまとめた（第61図31～第64図84）。規模の平均値は長径182.6㎝，短径84.2㎝，深さ46.1㎝である。

構造については，ほとんどが単純なものであるが，一部に段をつくるものが認められる。堆積状況については，分層できたものが少ない。

	二段構造		無段構造			堆積状況			顔料	遺物
	全	短	長	整	不整	レ	ブ	他		
31		○						○		
32		○				○			○	
55				○		○			○	鉢
56				○		○				
60				○				○		
61				○		○				

	二段構造		無段構造			堆積状況			顔料	遺物
	全	短	長	整	不整	レ	ブ	他		
63		○						○		
66	○							○		
81				○		○				
82	○							○		
83	―	―	―	―	―			○		
84					○			○		

Ｃタイプ

平面形，断面形ともに楕円形を基本とし，深さが浅いものをまとめた（第65図33～第69図78）。長方形プランのものもあるが，Ａタイプとは深さにおいて著しい差があるため，こちらに分類している。規模の平均値は，長径170.9㎝，短径79.8㎝，深さ25.4㎝である。

構造については，すべて無段構造であるが，断面形状については，整っているものは水平を意識したものが多く，不整なものとの差が大きい様子が見受けられる。

埋土の堆積状況については，ほとんどが１～２層にしか分層されていない。

相対評価ではあるが，遺物が入っていた土坑はこのタイプが最も多い。また，土坑77と78については，次節でも述べているが周辺における遺物の集中が著しかった。これは，土坑との位置関係が不明であるが，第70図土器集中出土状況図にあるように図化されている。

	二段構造		無段構造			堆積状況			顔料	遺物
	全	短	長	整	不整	レ	ブ	他		
33					○			○		
39				○				○		
44				○				○		小壺
45					○			○		小壺鉢
49				○				○		
50				○				○		
53					○			○		壺甕
54					○			○		

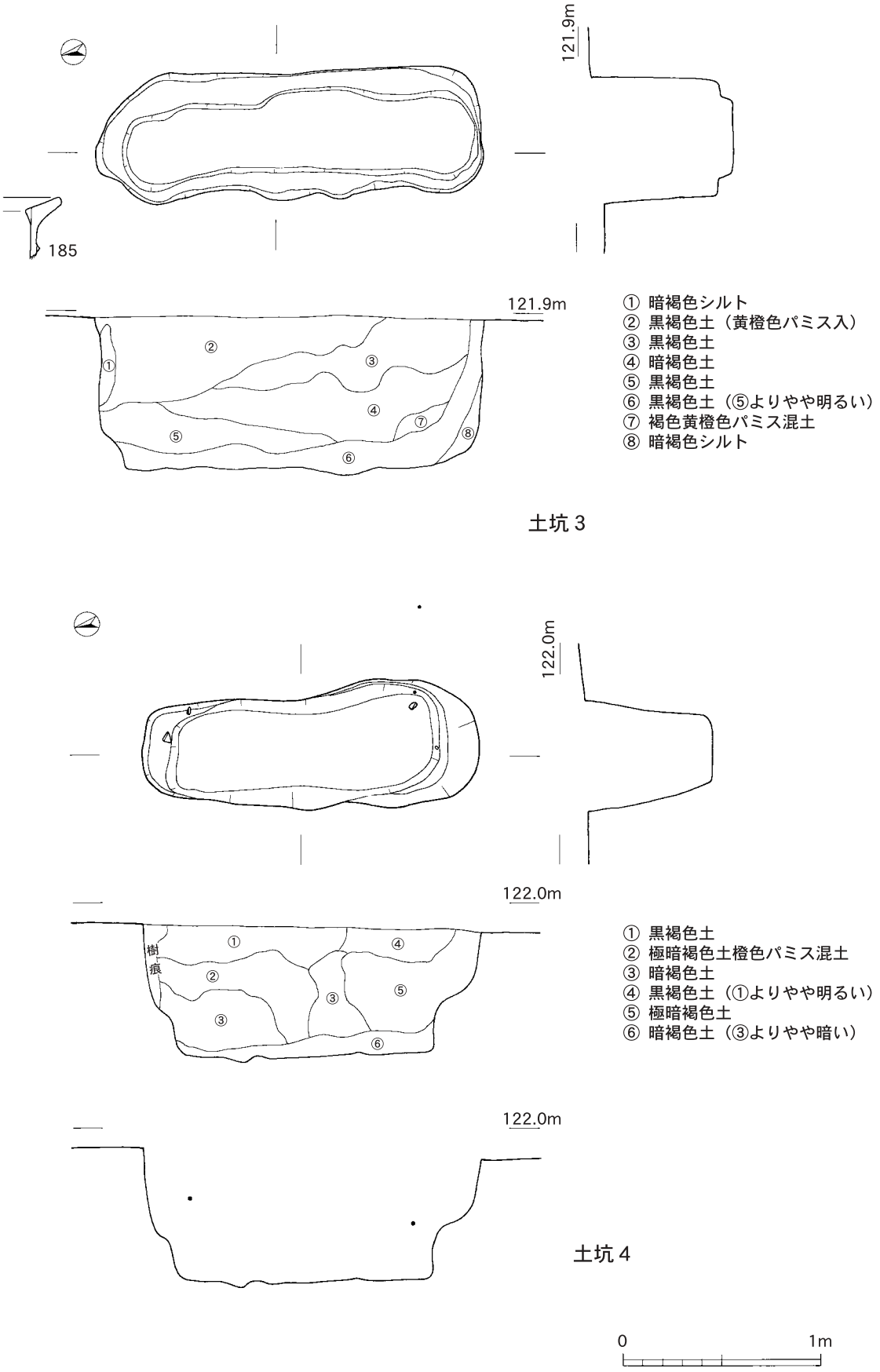
	二段構造		無段構造			堆積状況			顔料	遺物
	全	短	長	整	不整	レ	ブ	他		
57				○				○		
59					○			○		
68					○			○		
65				○				○		小壺壺
71					○			○		
74					○			○		
76				○			○			
77					○			○		遺物多
78					○			○		遺物多

表３　堂園遺跡Ａ地点土坑観察表(1)

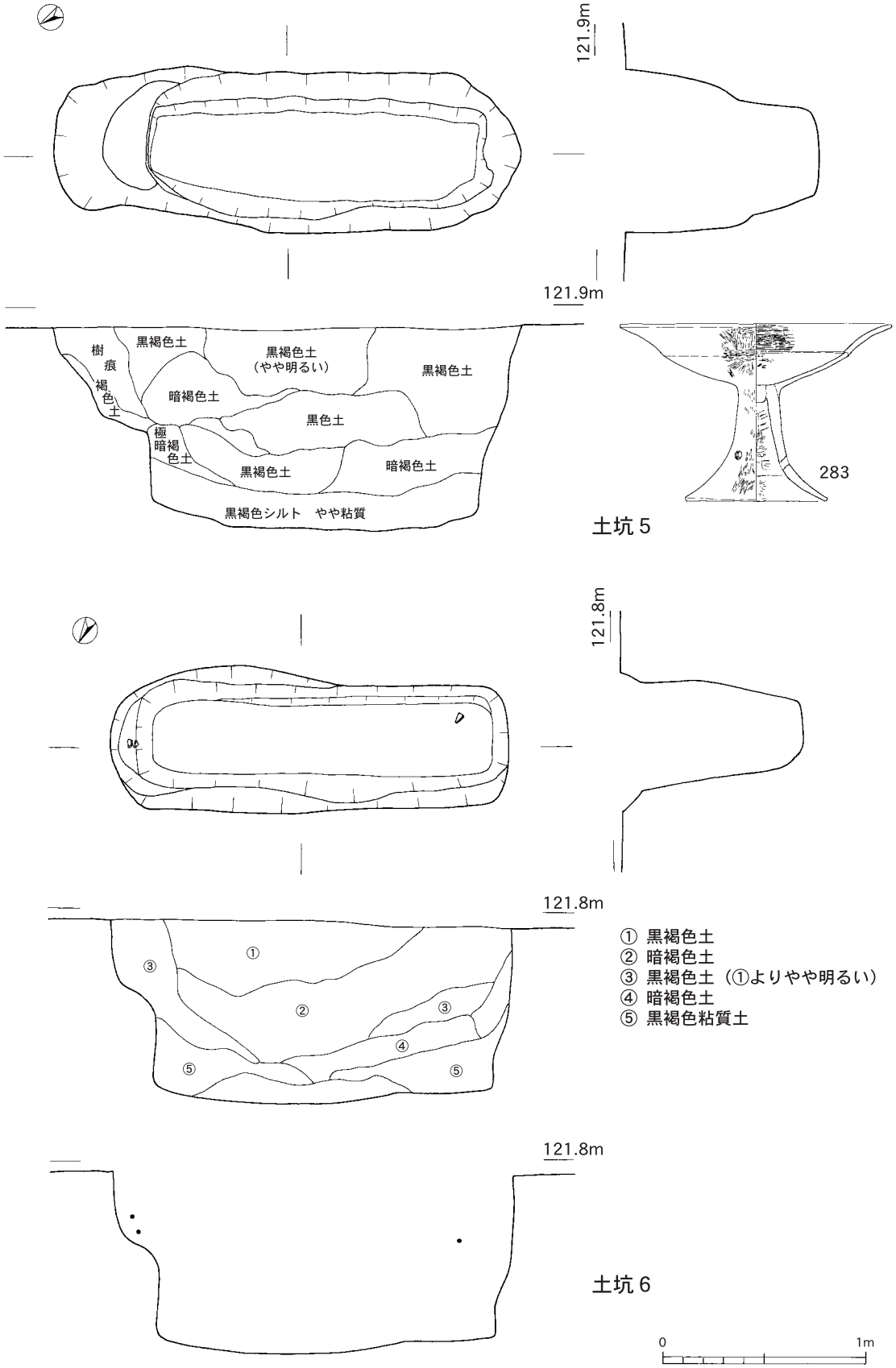
番号	検出区	タイプ	平面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	出土遺物番号			備　　考
							土坑埋土中	土坑上	土坑周辺	
1	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
2	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
3	C－5，6	A	隅丸長方形	196	86	85		185		
4	C－5，6	A	隅丸長方形	173	72	85				赤色顔料あり
5	C－6	A	隅丸長方形	230	78	98			283	赤色顔料あり
6	C－6	A	隅丸長方形	253	68	81				
7	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
8	C－7	A	隅丸長方形	210	56	81			281	
9	C－7	A	隅丸長方形	190	58	89				
10	D－8	A	隅丸長方形	188	76	63			182	
11	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
12	E，F－4，5	A	隅丸長方形	305	144	87			301	赤色顔料あり（床面）
13	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
14	C－3，4	A	隅丸長方形	296	130	97			244，267	
15	C－4	A	隅丸長方形	286	133	92		251	300	
16	B－2	A	隅丸長方形	185	69	60				
17	B－2，3	A	隅丸長方形	204	82	87				
18	C－2	A	隅丸長方形	224	73	96	321，322			赤色顔料あり
19	C－2	A	隅丸長方形	200	92	102				
20	C－3	A	隅丸長方形	219	70	111				
21	E－3	A	隅丸長方形	245	99	67				赤色顔料あり
22	B－2	A	隅丸長方形	113	74	62				
23	B－2	A	隅丸長方形	184	73	68				赤色顔料あり（床面）
24	B－3	A	隅丸長方形	128	93	55				
25	C－2	A	隅丸長方形	221	82	70				
26	D－8，9	A	隅丸長方形	191	110	54				
27	F－3	A	隅丸長方形	188	74	61				
28	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
29	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
30	E－3	A	隅丸長方形	237	100	47				
31	E－3	B	隅丸長方形	195	81	41				
32	E，F－3，4	B	隅丸長方形	261	90	50				赤色顔料あり（床面）
33	F－4	C	隅丸長方形	130	90	27				
34	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
35	E－3，4	A	隅丸長方形	161	98	68		318	305	
36	D－3	A	隅丸長方形	243	130	63			286, 302, 306	
37	C－3	A	隅丸長方形	225	79	51	231，237		245	
38	D，E－4	A	隅丸長方形	211	101	43				
39	D－3	C	隅丸長方形	118	66	31			261	
40	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
41	D，E－3	A	隅丸長方形	241	106	43		289		
42	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
43	C－5	A	隅丸長方形	143	86	63			284	
44	E－4	C	隅丸長方形	262	132	42		296	300	
45	E－4	C	隅丸長方形	190	86	15				

表４　堂園遺跡Ａ地点土坑観察表(2)

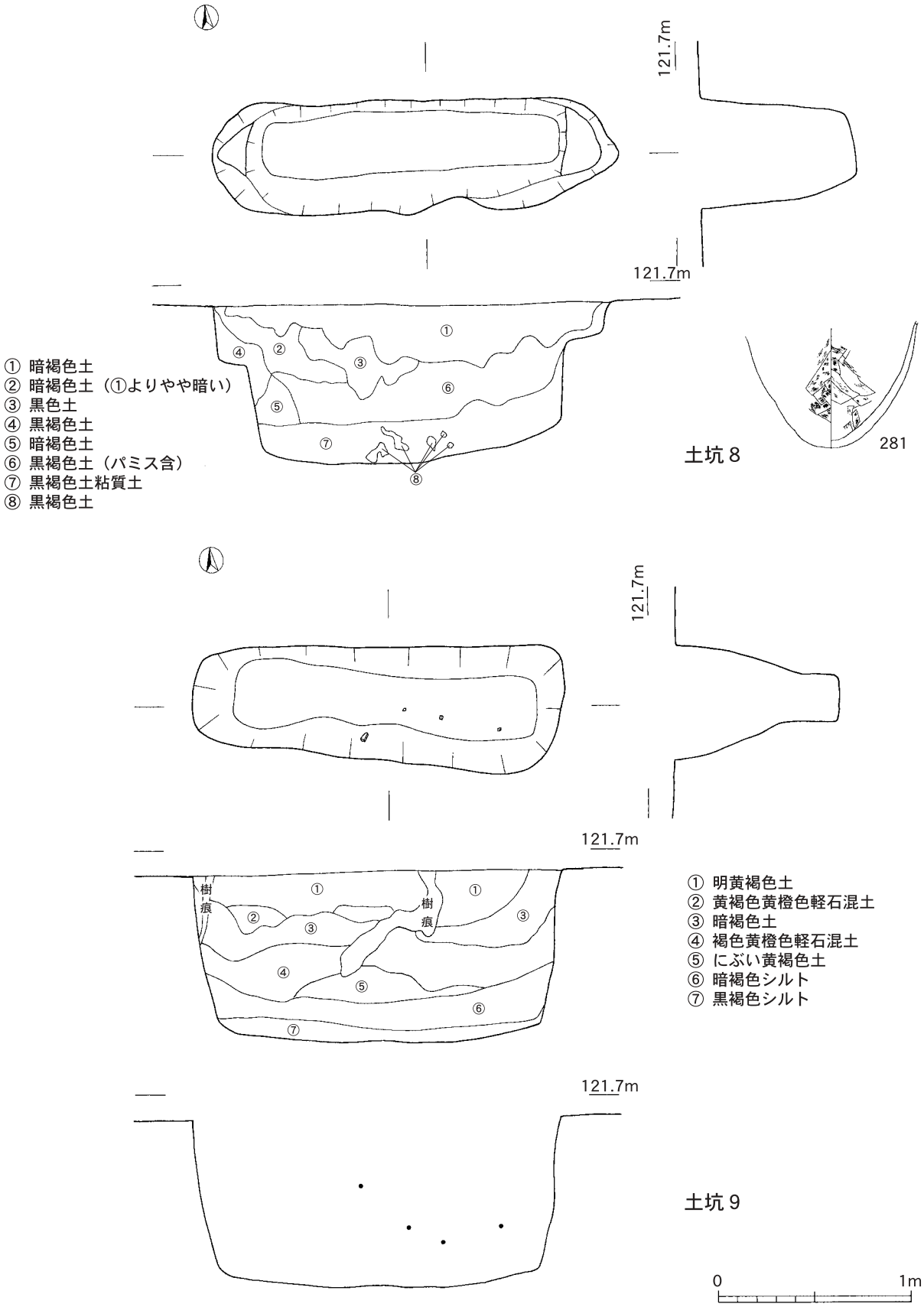
番号	検出区	タイプ	平面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	出土遺物番号			備　　考
							土坑埋土中	土坑上	土坑周辺	
46	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
47	Ｅ－３	A	隅丸長方形	173	102	43				
48	Ｅ－３	A	隅丸長方形	145	85	50				
49	Ｅ－３	C	隅丸長方形	175	57	26				
50	Ｃ－３	C	隅丸長方形	138	67	21				
51	Ｂ，Ｃ－３	A	隅丸長方形	181	66	53	203			
52	Ｃ－３	A	隅丸長方形	193	82	57		177		
53	Ｄ－４	C	隅丸長方形	149	87	22	233，239			
54	Ｄ－４	C	隅丸長方形	206	71	25				
55	Ｃ－５	B	隅丸長方形	164	80	76			297，311	赤色顔料あり（床面）
56	Ｃ－５	B	隅丸長方形	176	57	40				
57	Ｅ－５	C	隅丸長方形	200	73	27				
58	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
59	Ｅ，Ｆ－５	C	隅丸長方形	113	83	33				
60	Ｅ－７	B	隅丸長方形	126	65	44				
61	Ｅ－７	B	隅丸長方形	184	109	39				
62	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
63	Ｆ－７	B	隅丸長方形	125	76	34				
64	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
65	Ｅ－８	C	隅丸長方形	196	71	21	193		200	
66	Ｆ－９	B	隅丸長方形	211	108	54				
67	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
68	Ｅ－10	C	隅丸長方形	182	84	20				
69	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
70	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
71	Ｄ－10	C	隅丸長方形	167	65	20				
72	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
73	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
74	Ｅ－４	C	隅丸長方形	143	51	23				
75	Ｄ，Ｅ－４	A	隅丸長方形	248	110	42		264		
76	Ｄ－5，6	C	隅丸長方形	148	94	27				
77	Ｄ－５	C	隅丸長方形	188	87	21			192	
78	Ｄ－５	C	隅丸長方形	165	87	27			236, 252, 258, 291, 315	
79	－	D	－	－	－	－				遺構として認識できず
80	Ｃ－４	A	隅丸長方形	157	73	61			265，292	
81	Ｃ－10，11	B	隅丸長方形	156	103	43				
82	Ｃ－10	B	隅丸長方形	201	72	47				
83	Ｃ－10	B	隅丸長方形	206	86	29				
84	Ｅ－６	B	隅丸長方形	210	85	39				



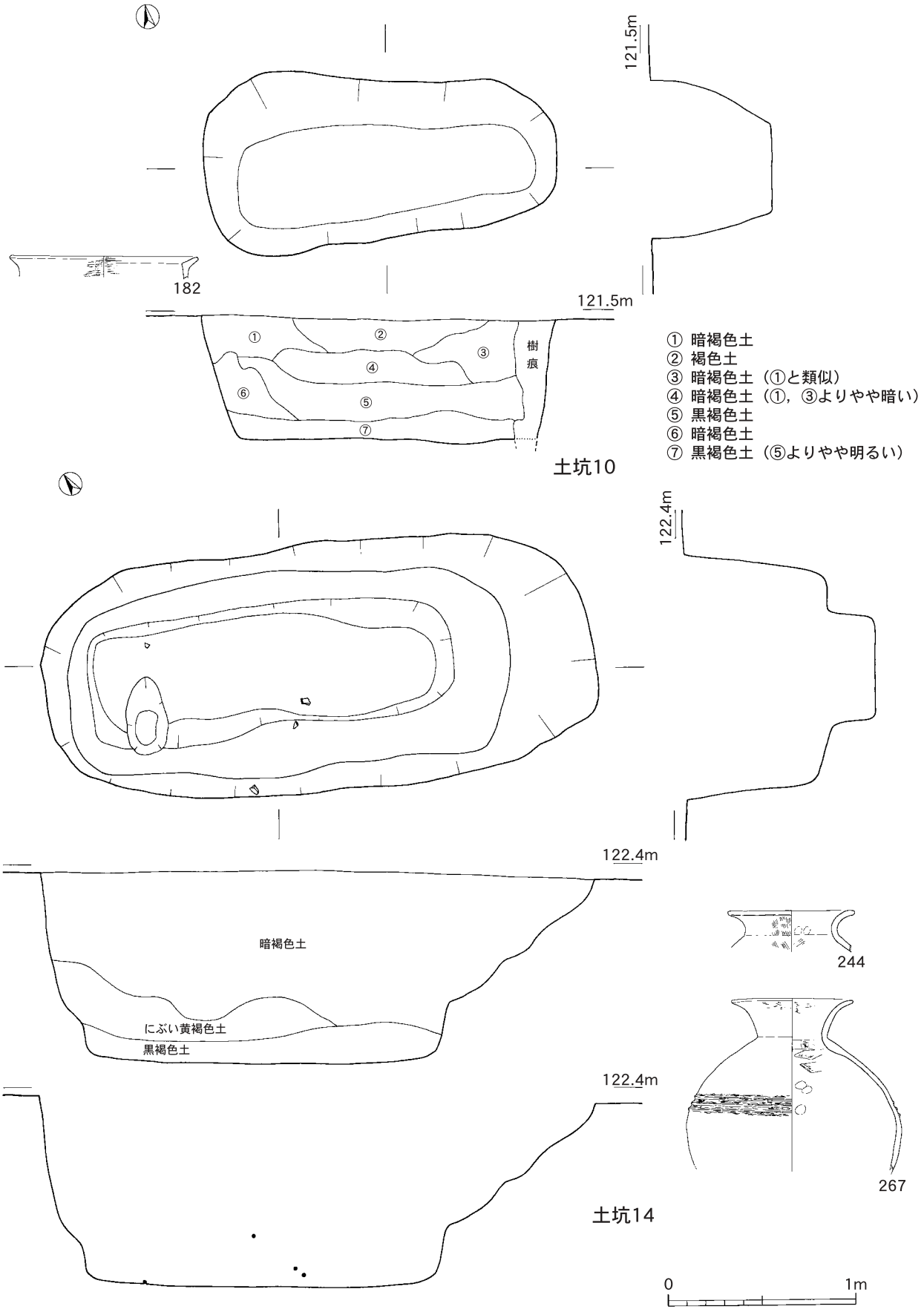
第43図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(1)



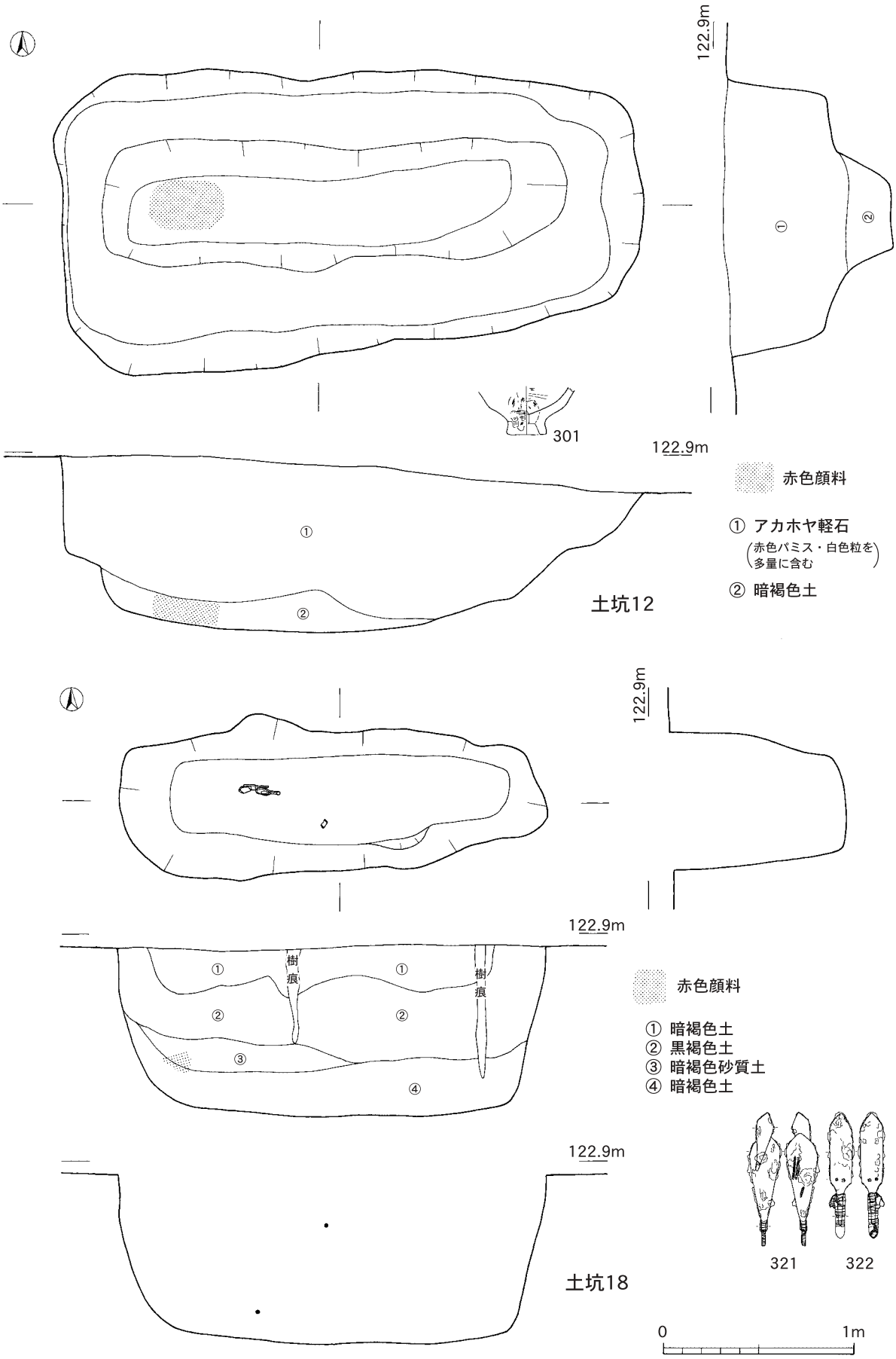
第44図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(2)



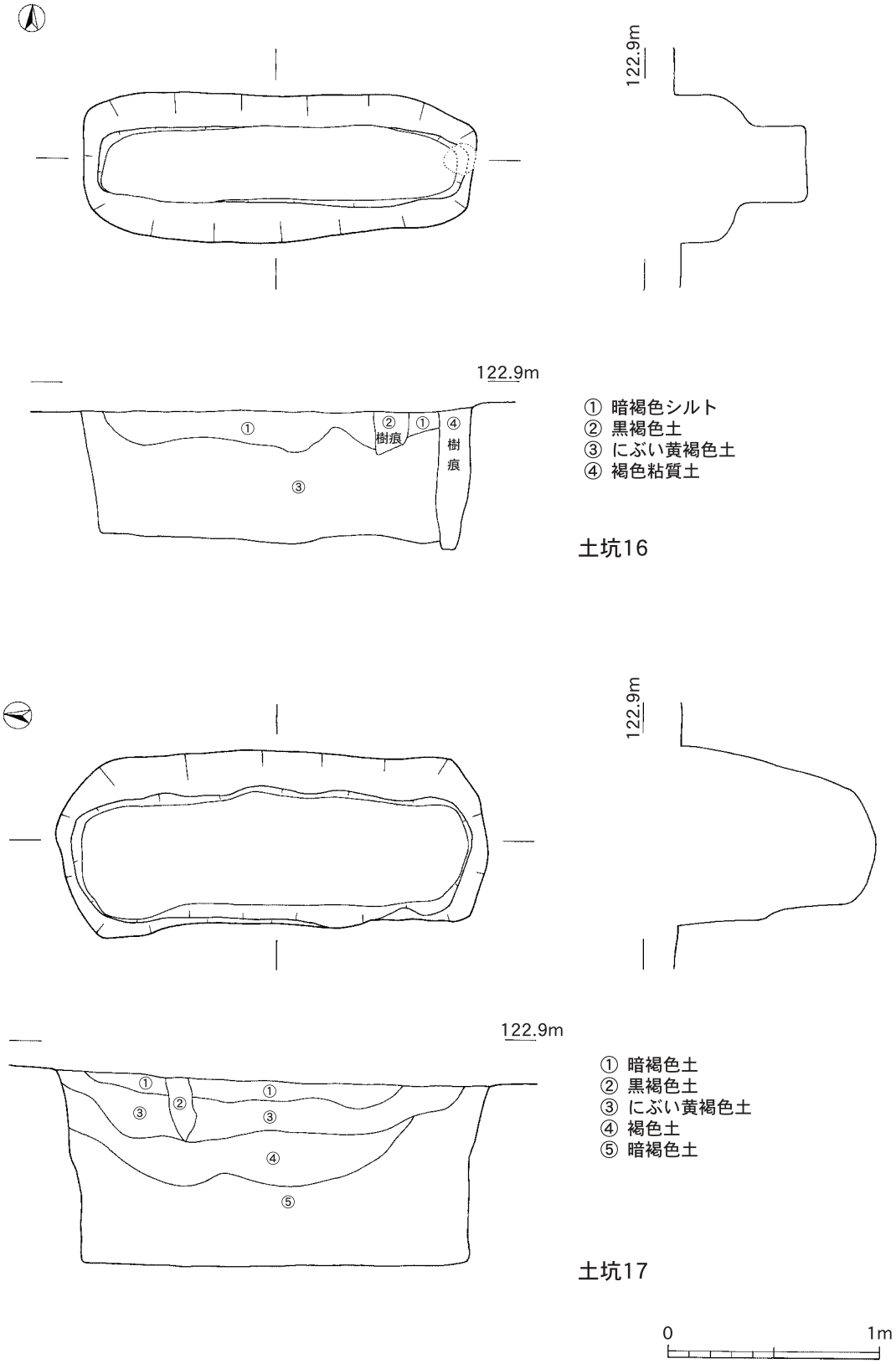
第45図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(3)



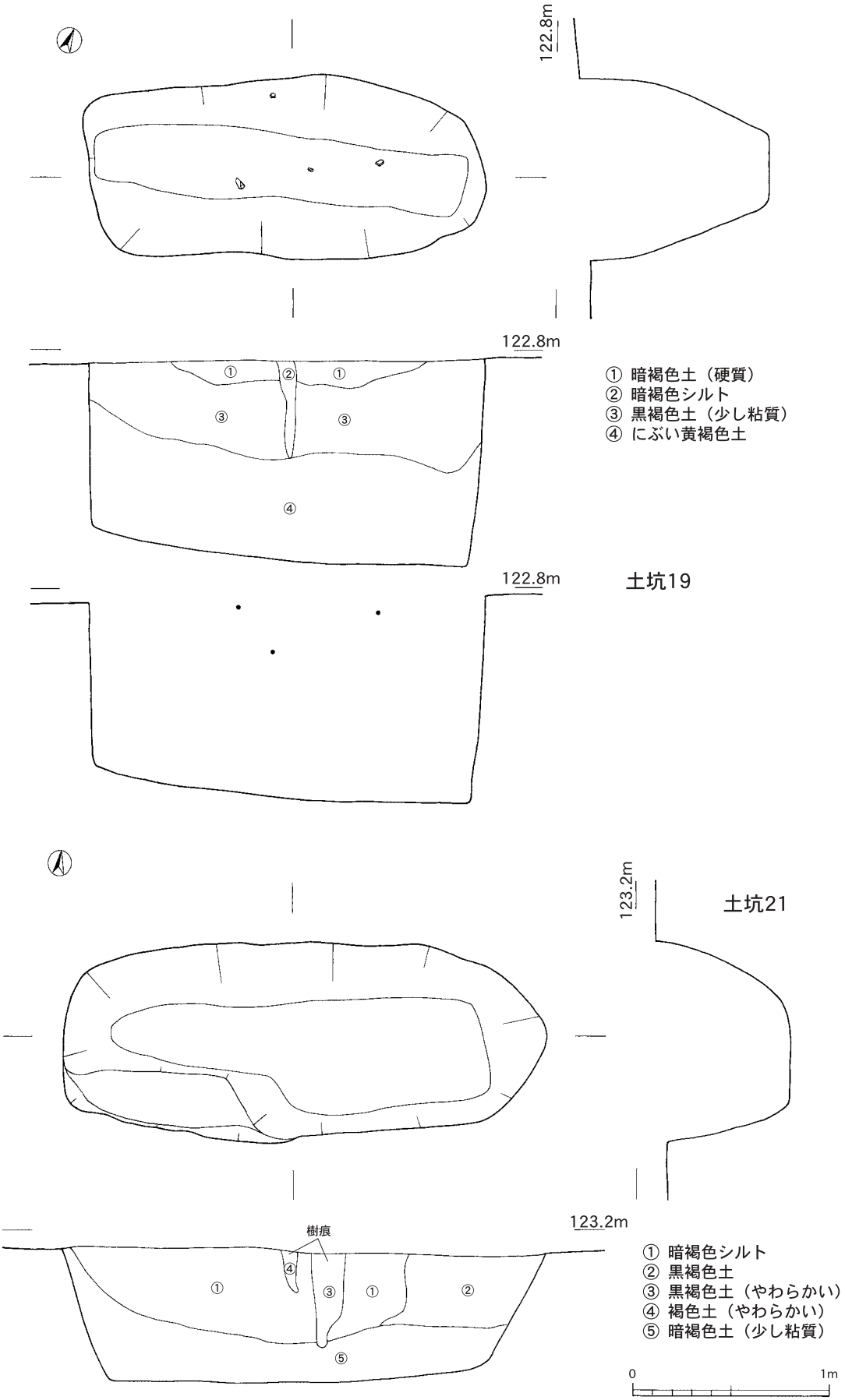
第46図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(4)



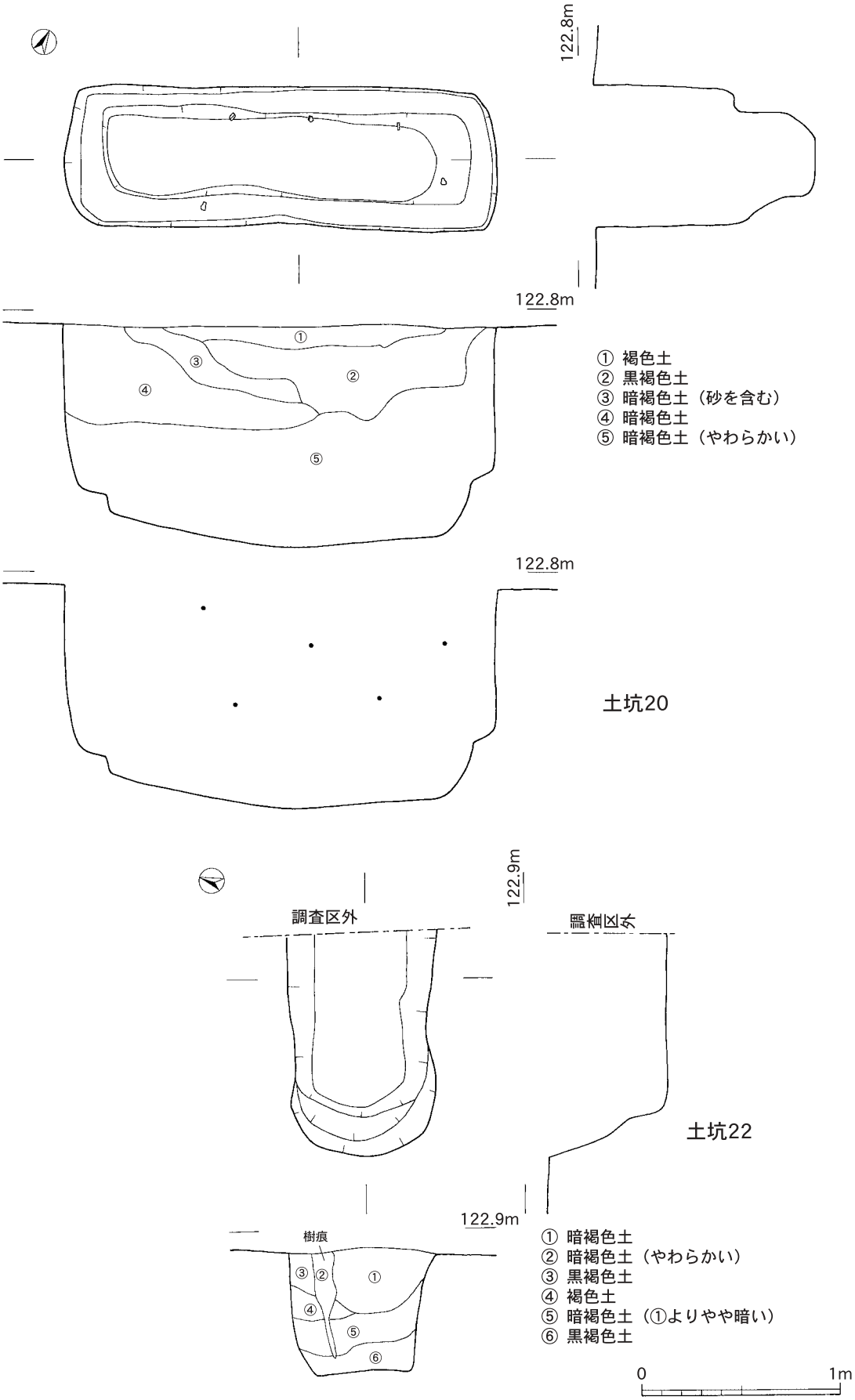
第47図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(5)



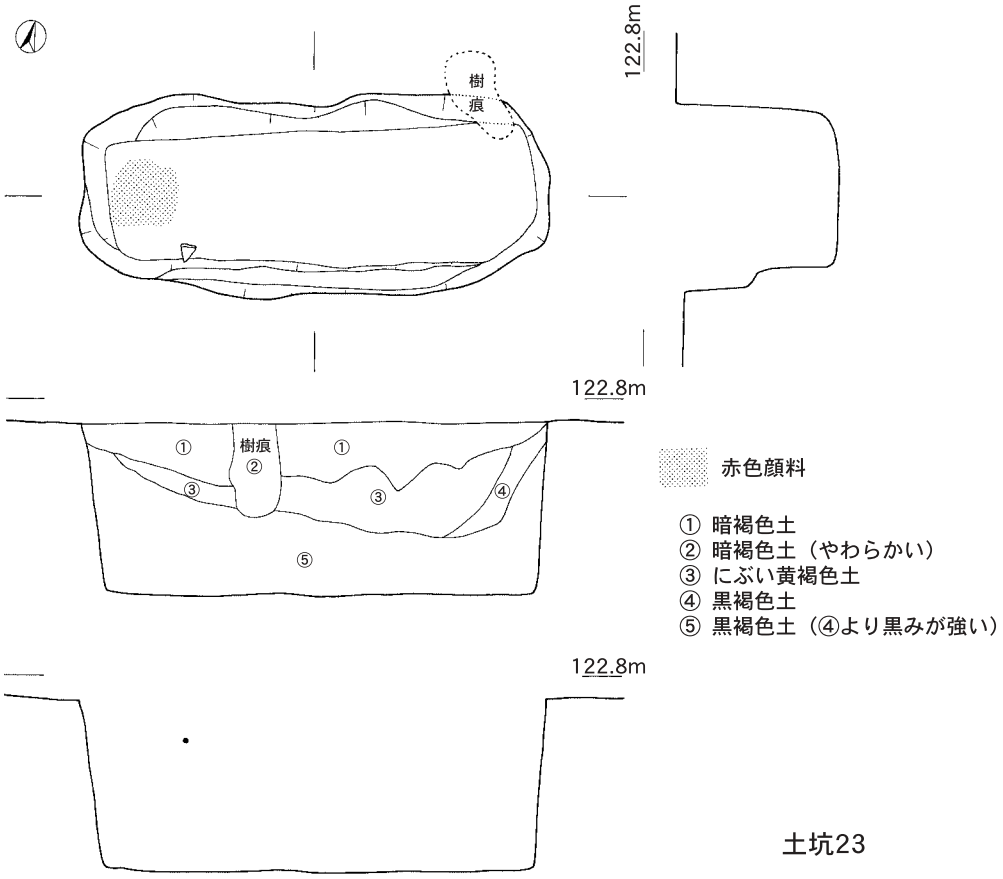
第48図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(6)

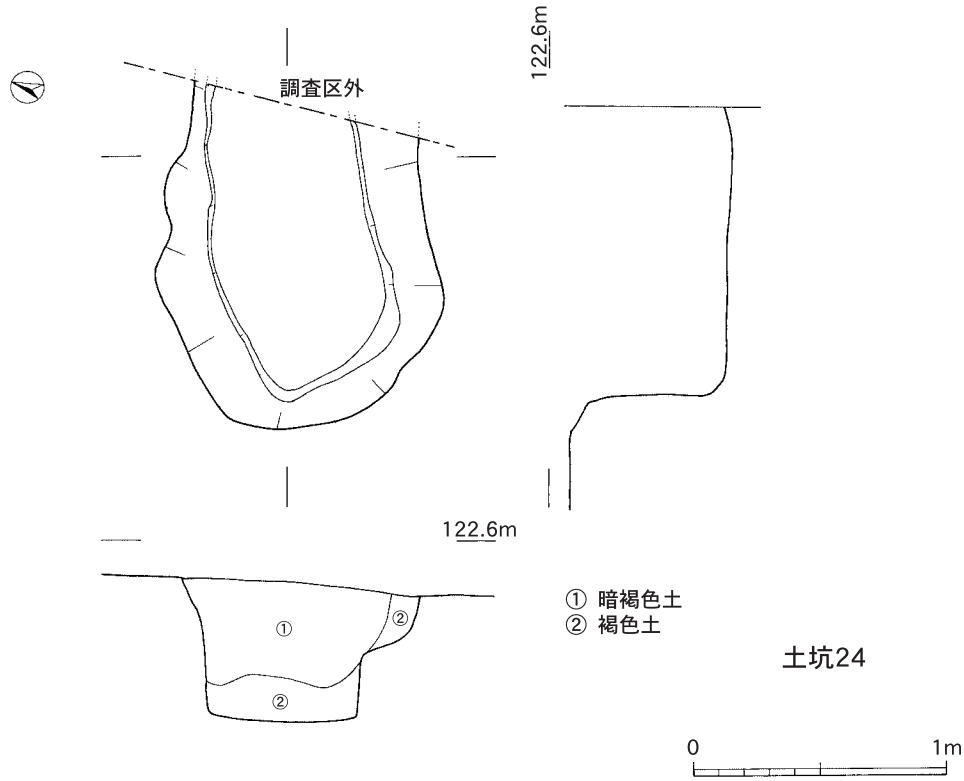


第49図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(7)

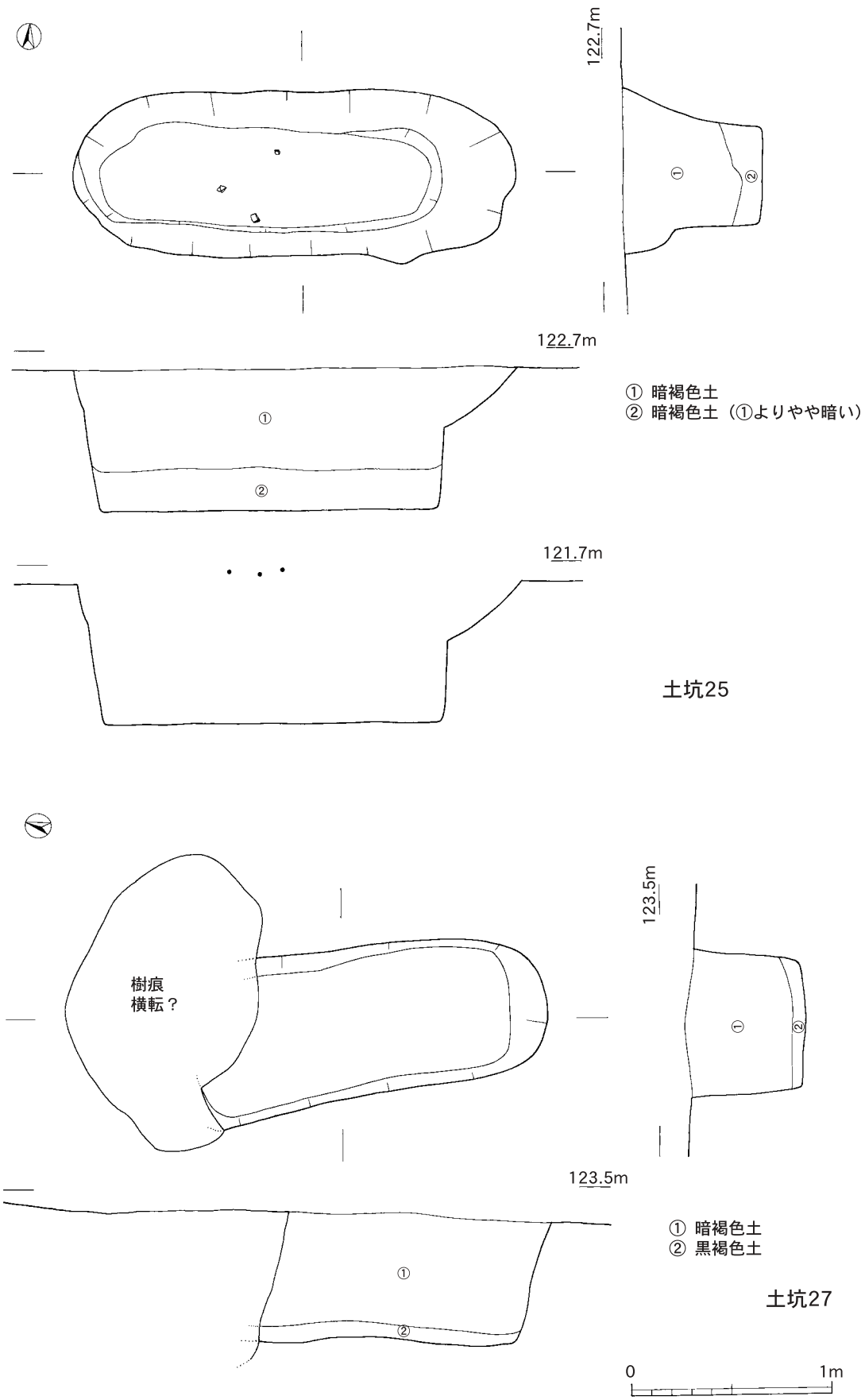


第50図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(8)

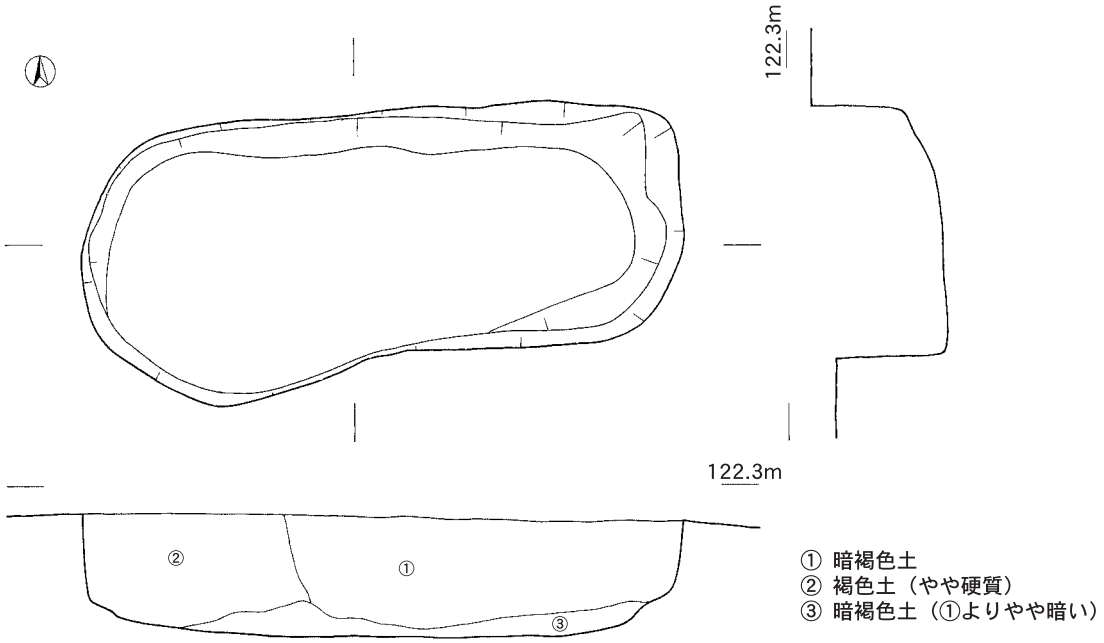




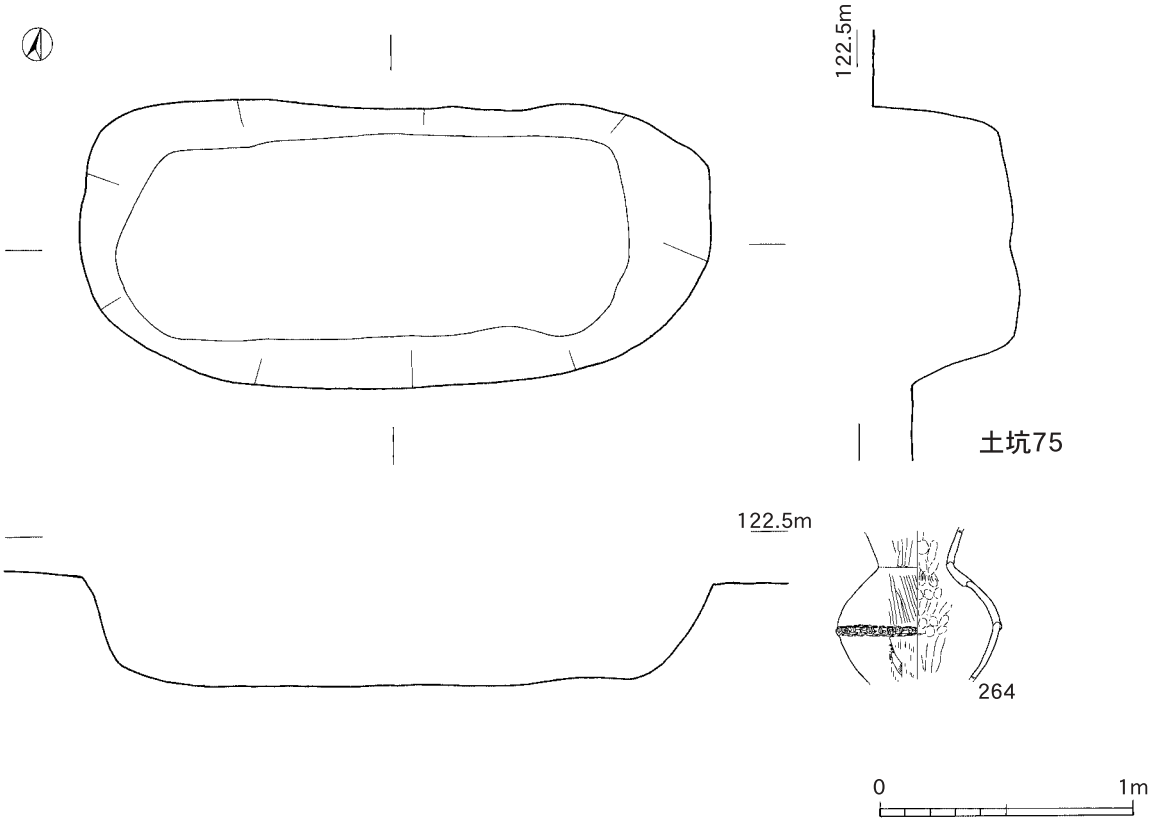
第51図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(9)



第52図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図⑽

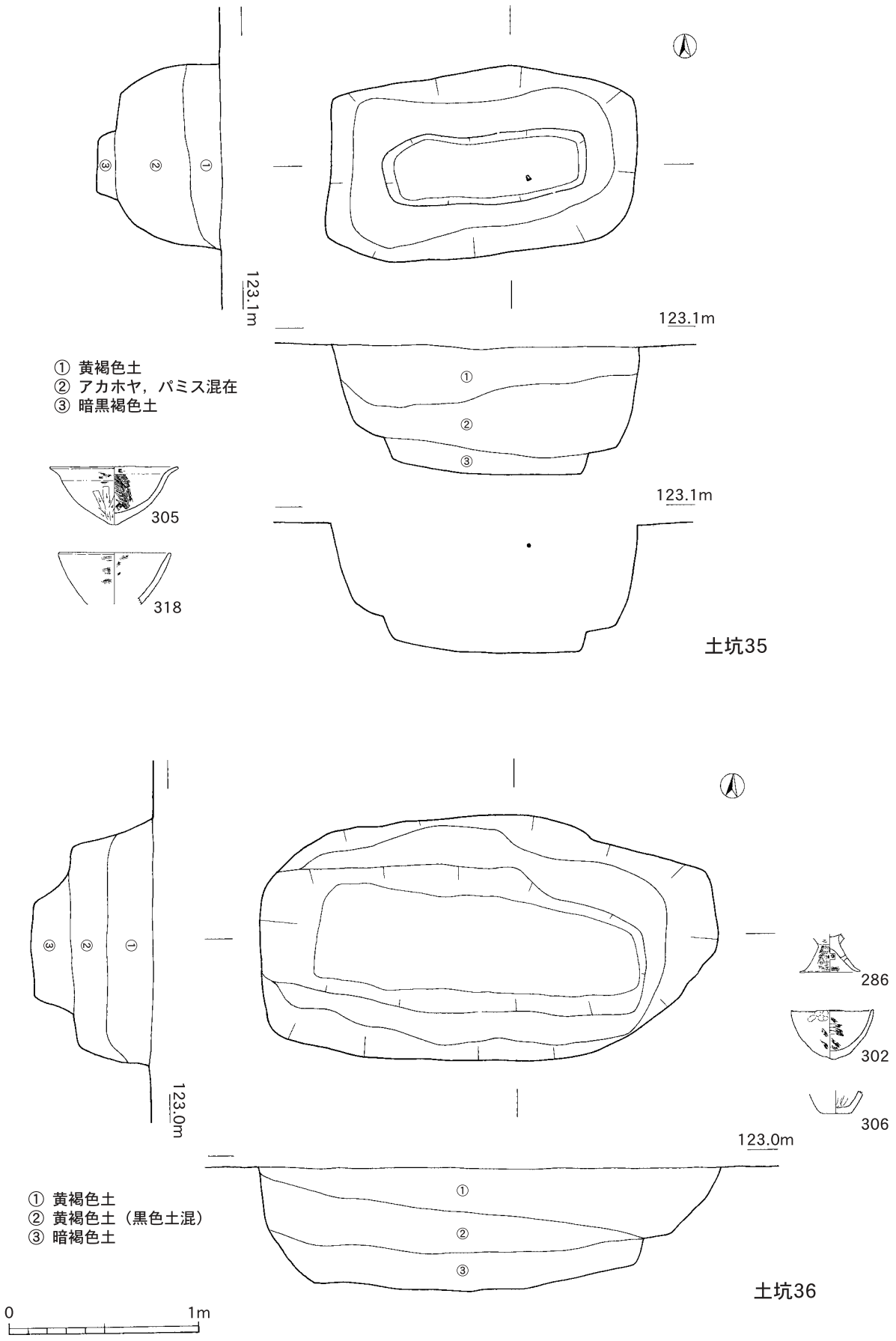


土坑30

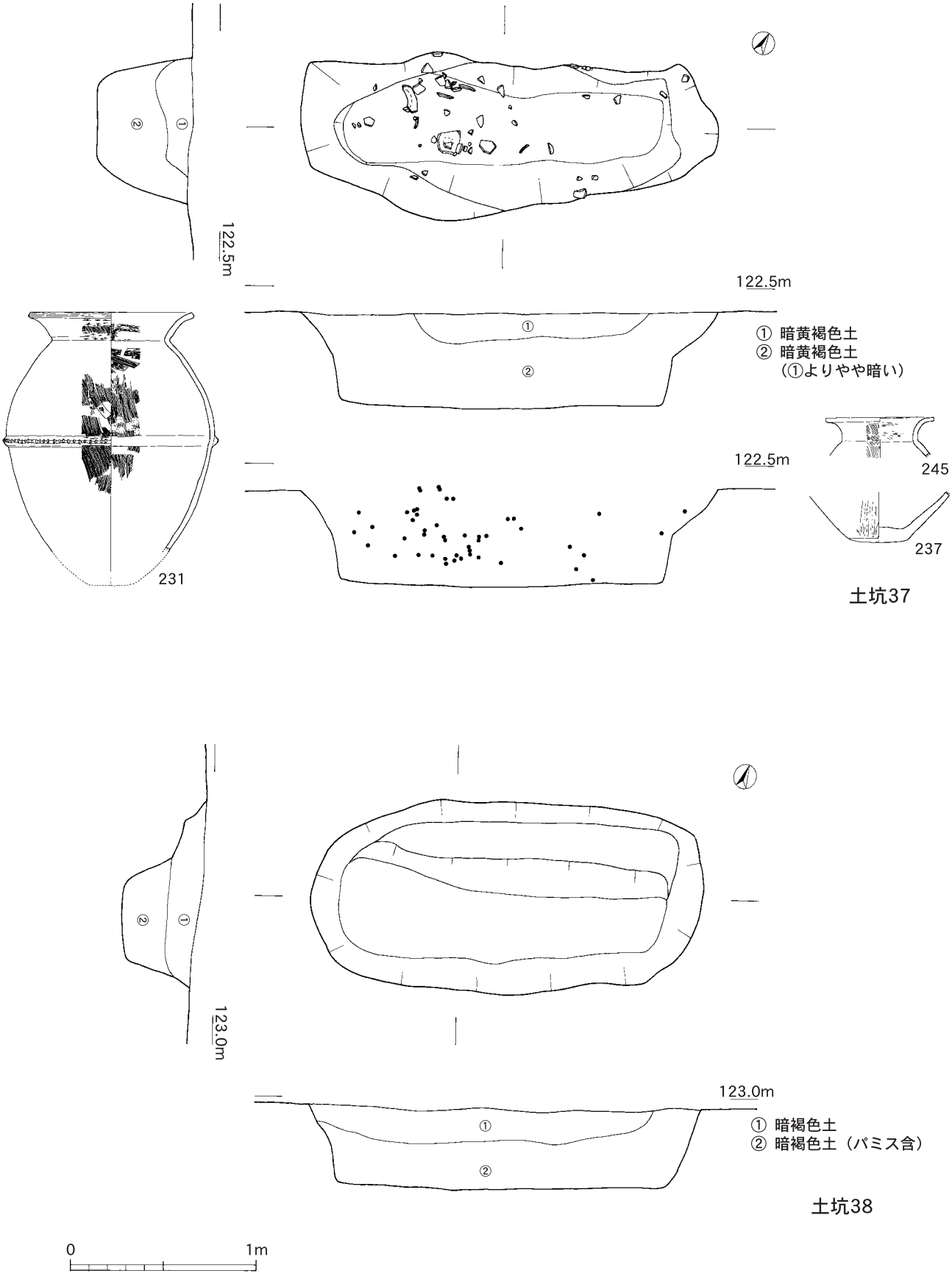


土坑75

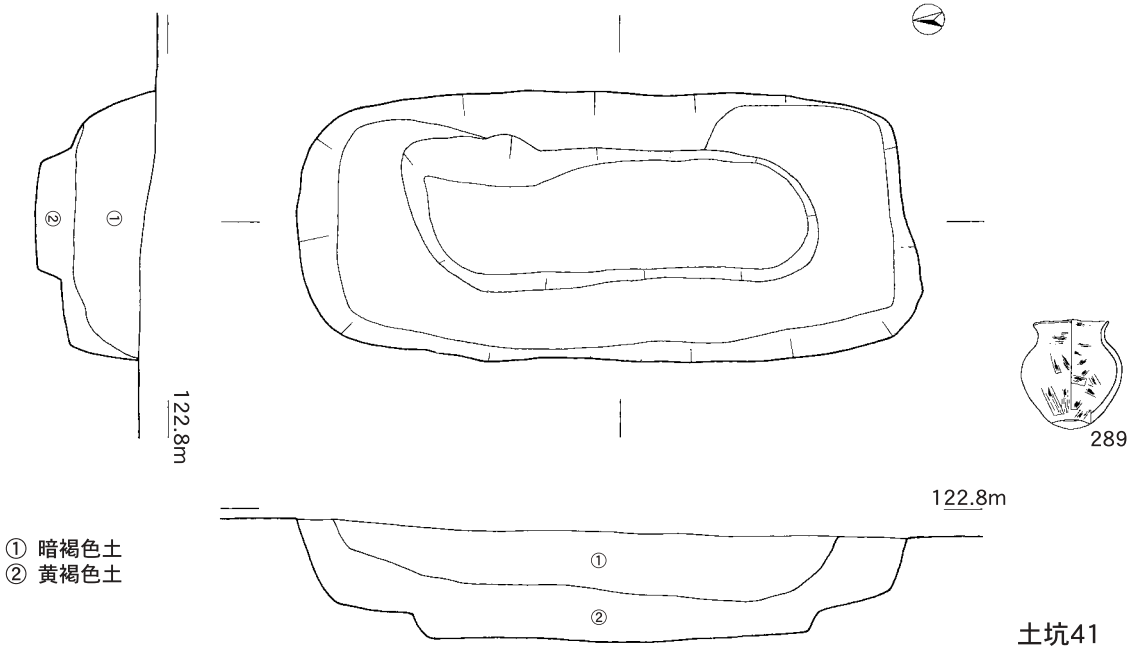
第53図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(11)

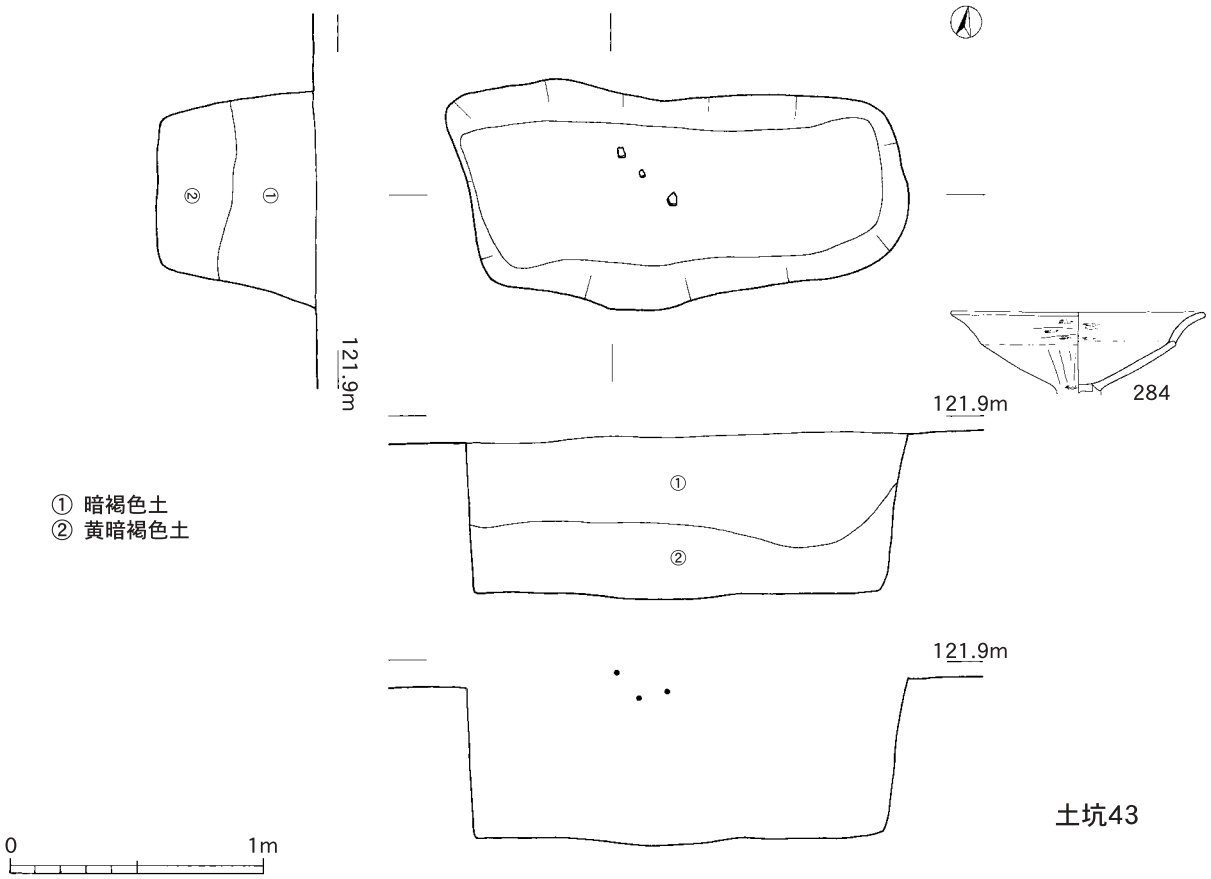


第54図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図⑫

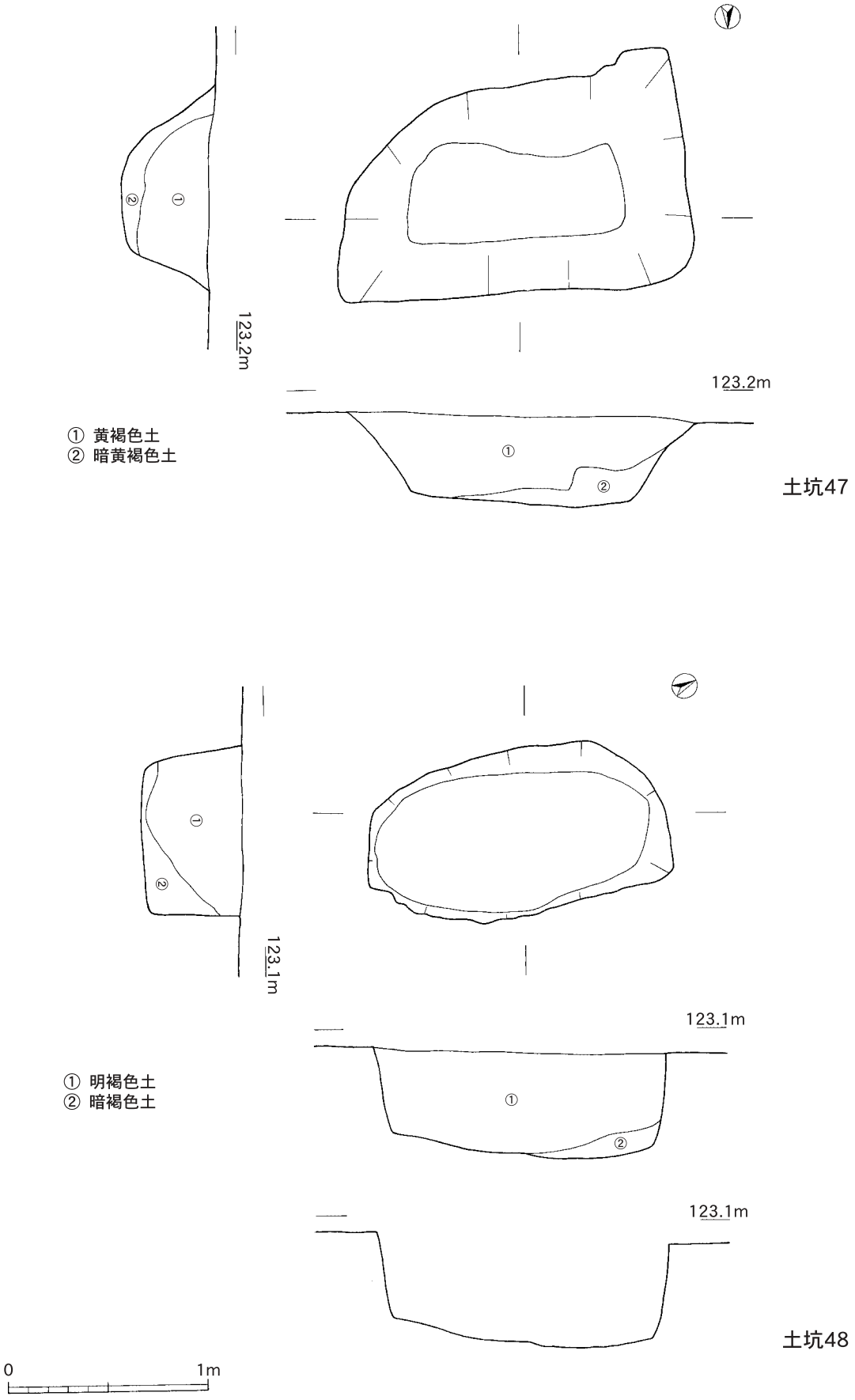


第55図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図⒀

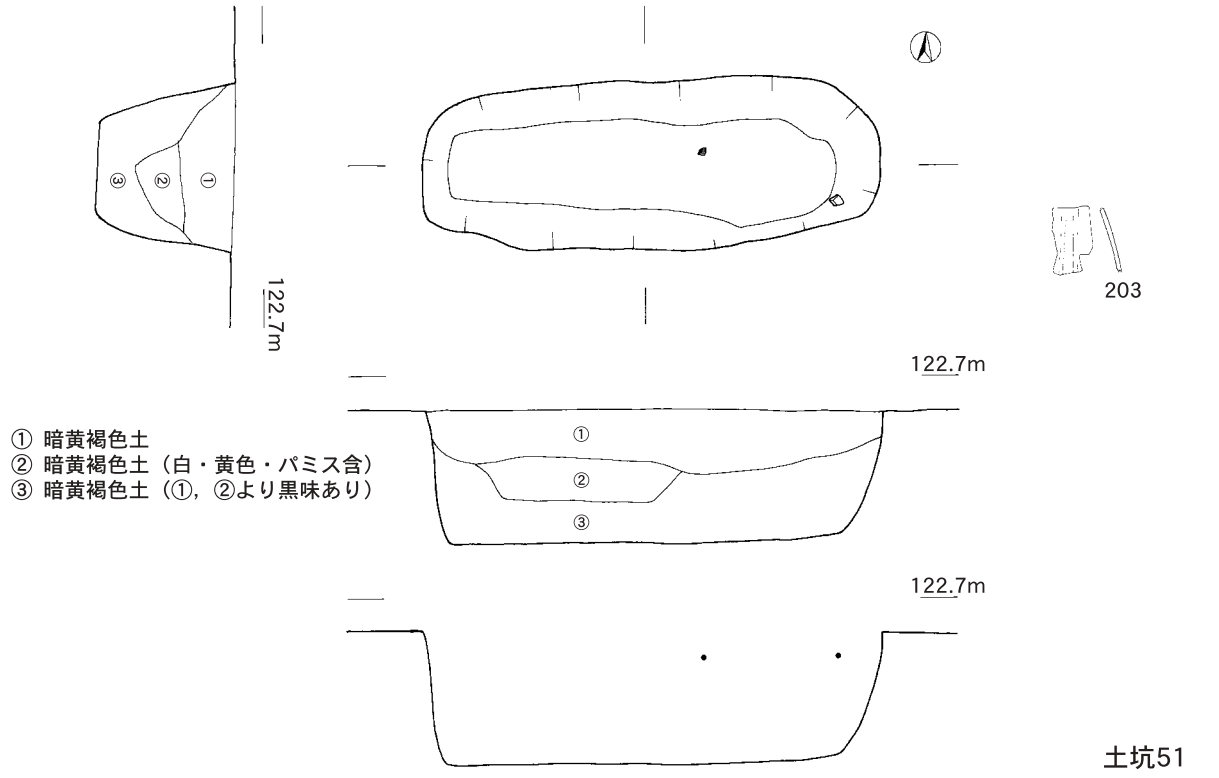


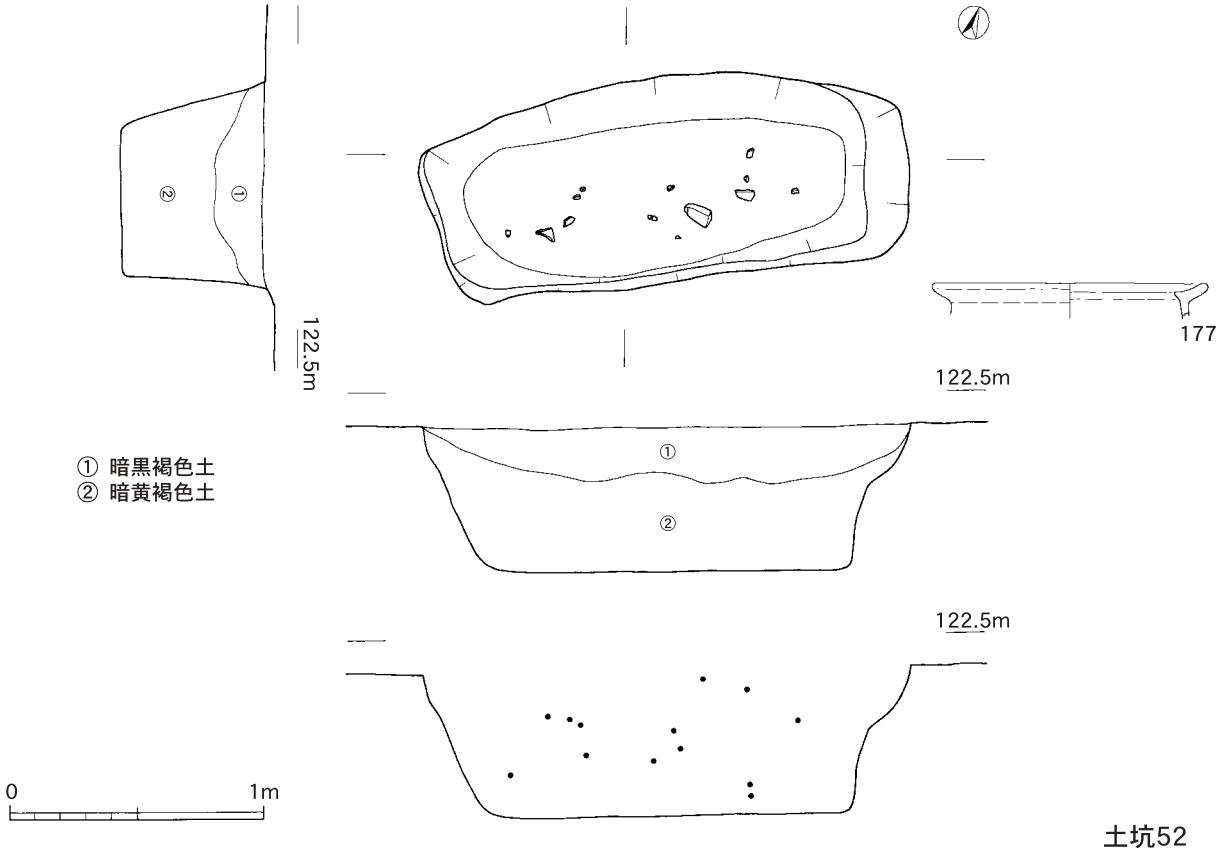


第56図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図⑭

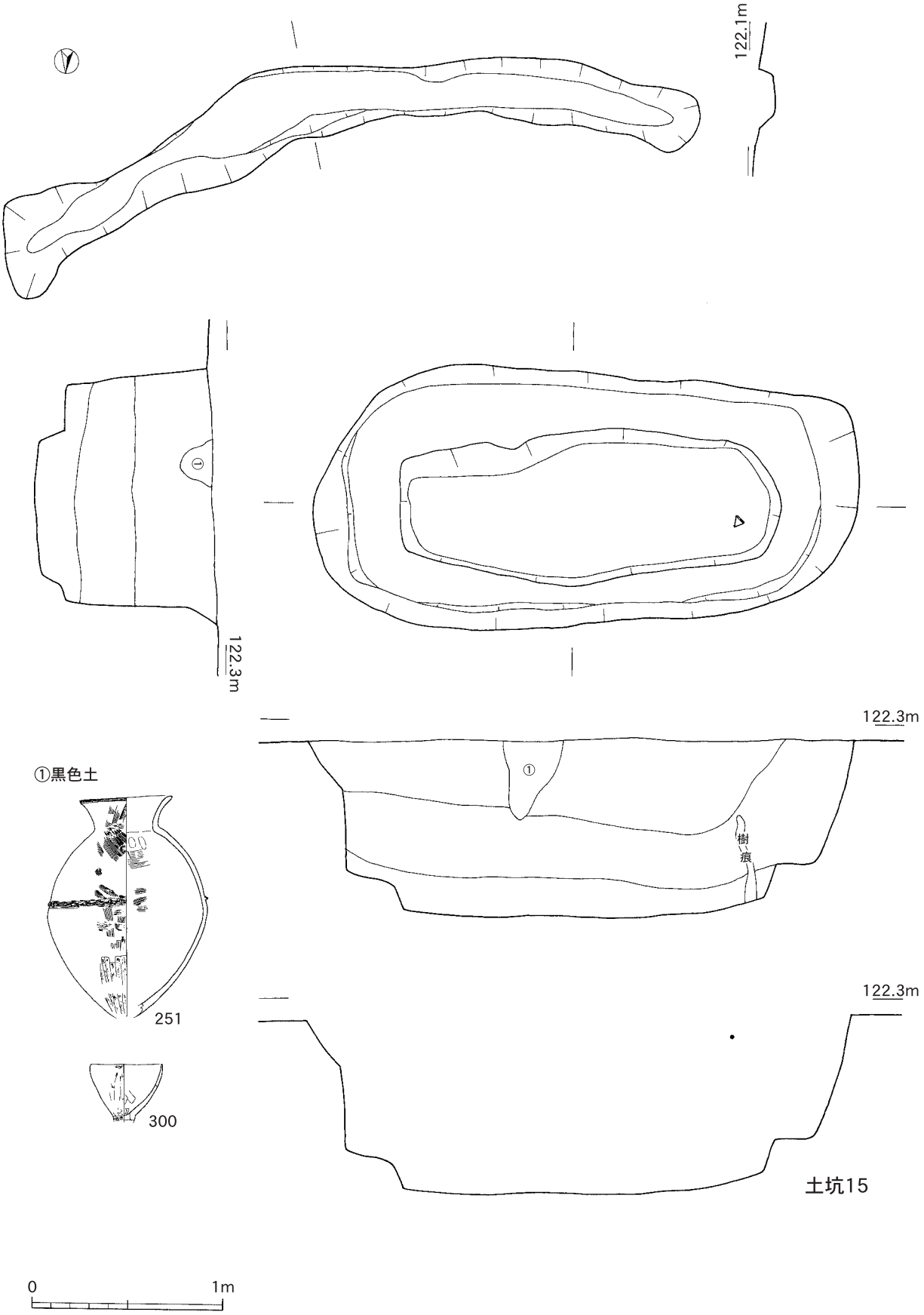


第57図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図⑮

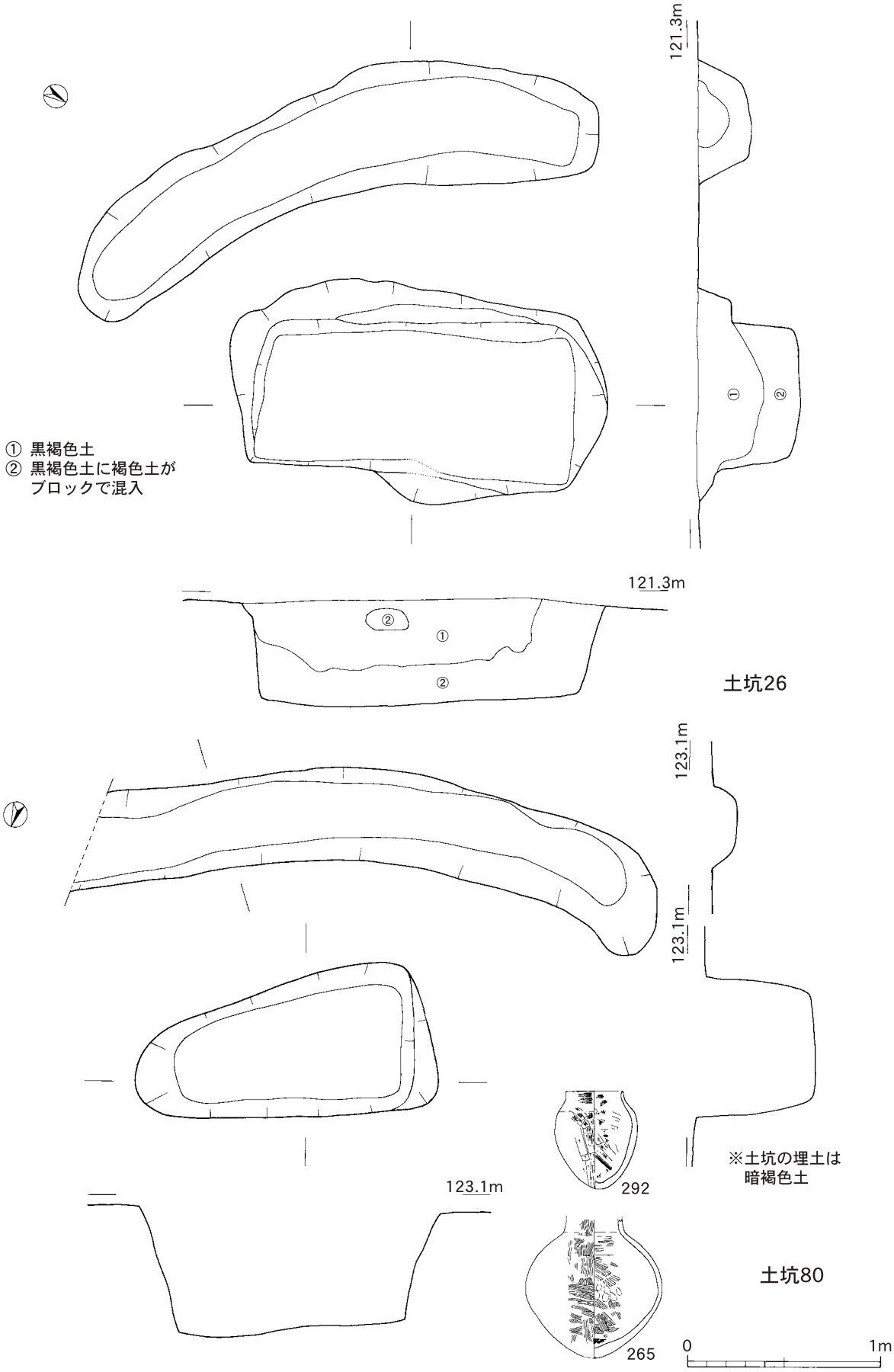




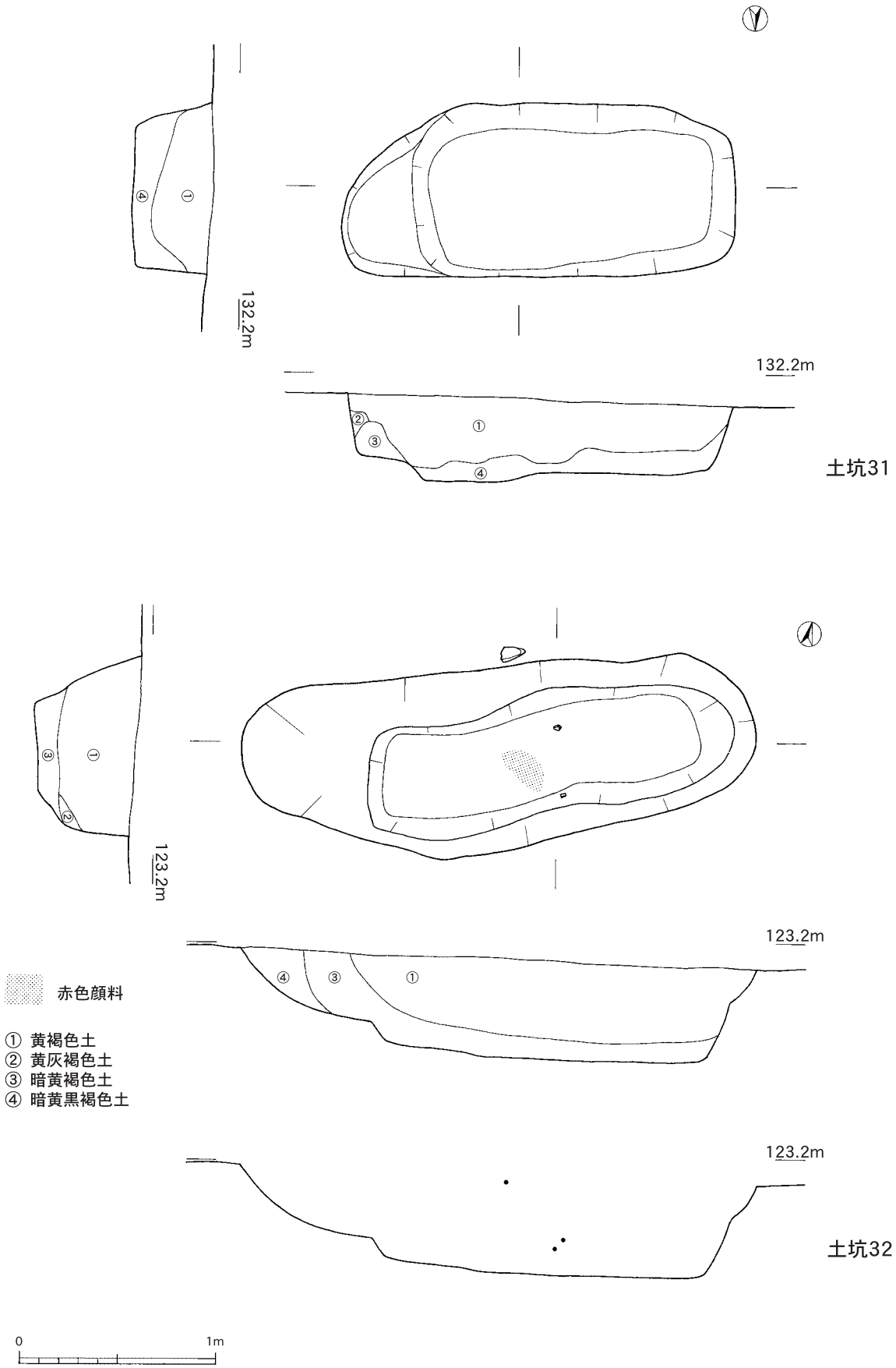
第58図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図⑯



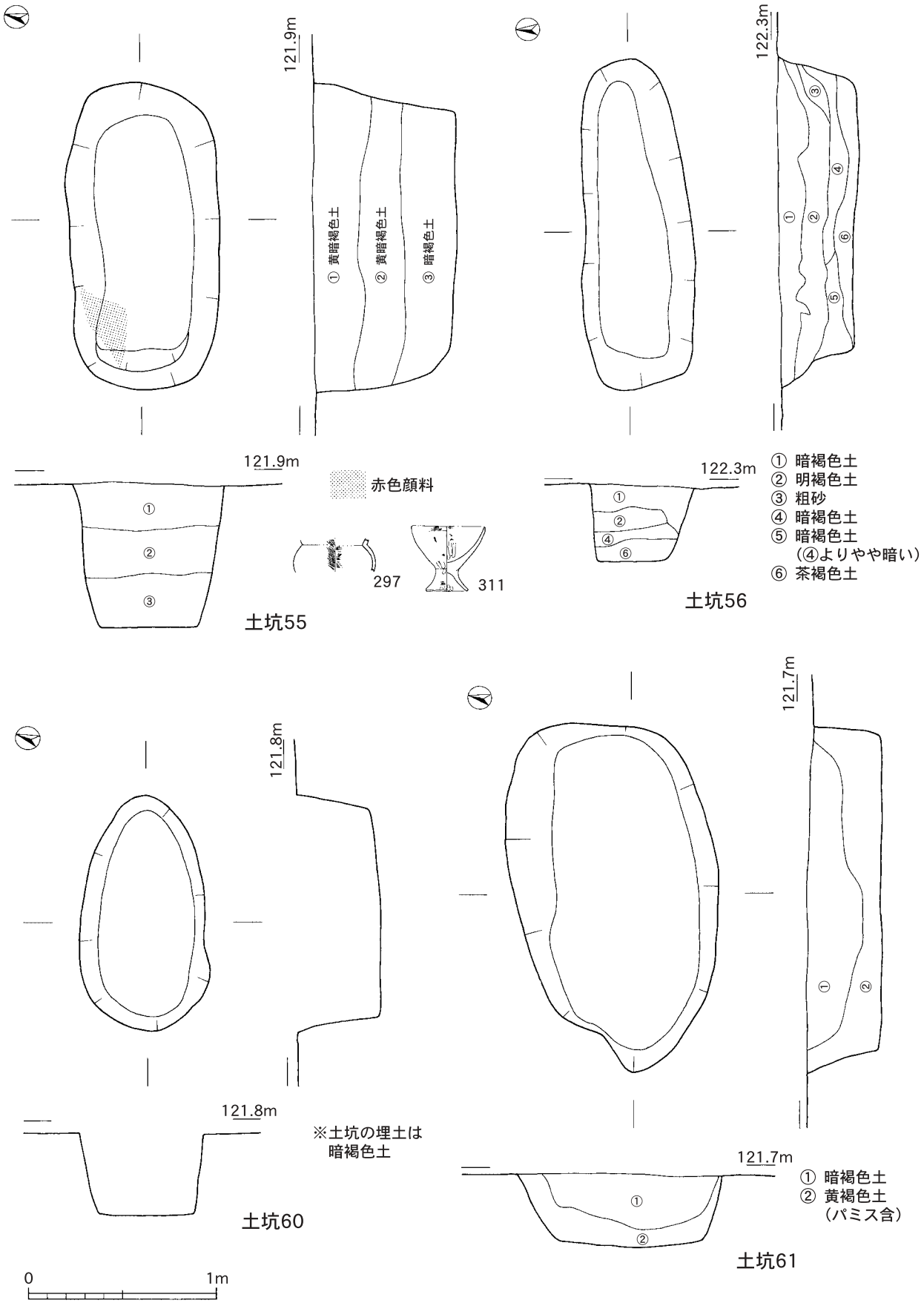
第59図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図⑰



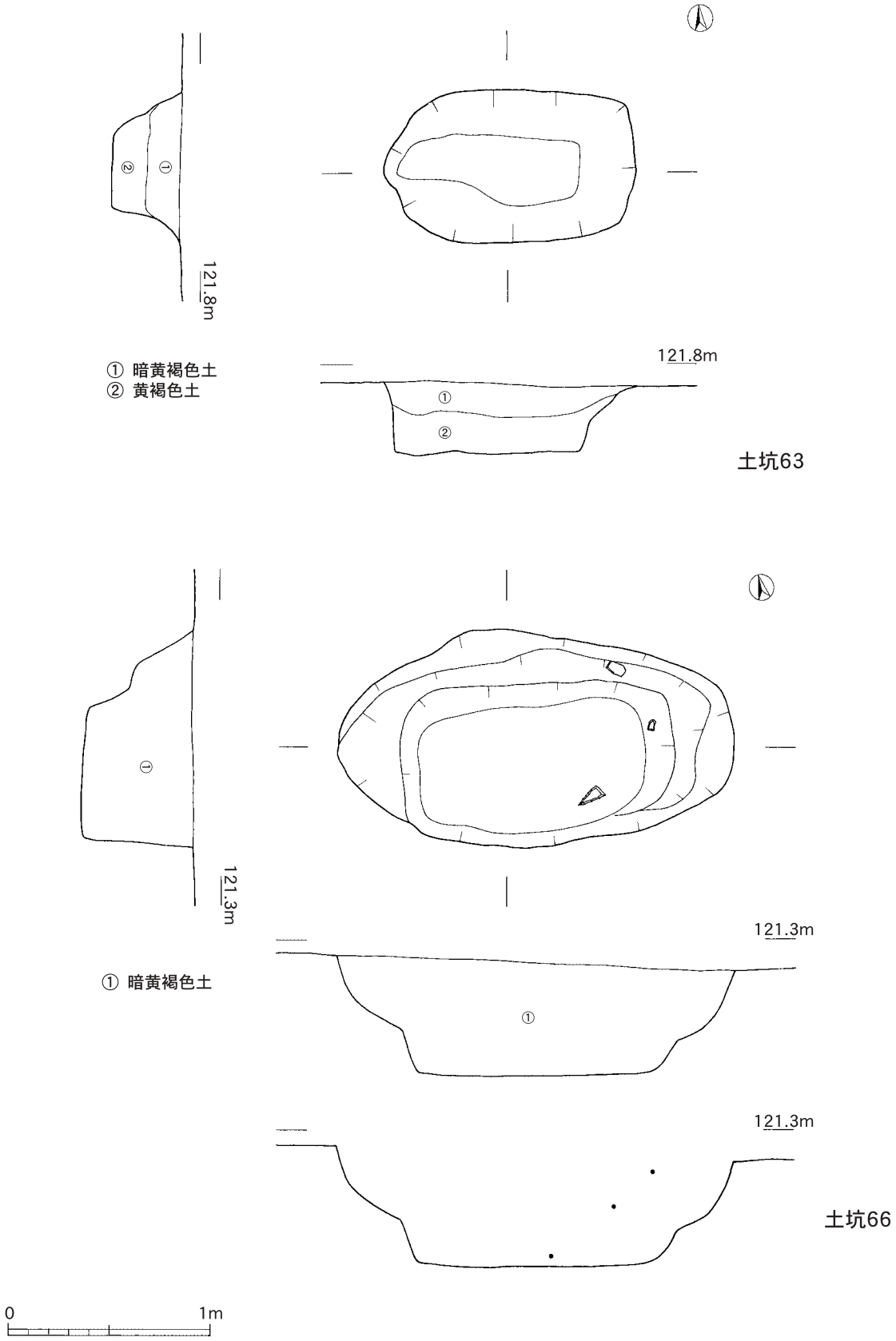
第60図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図⑱



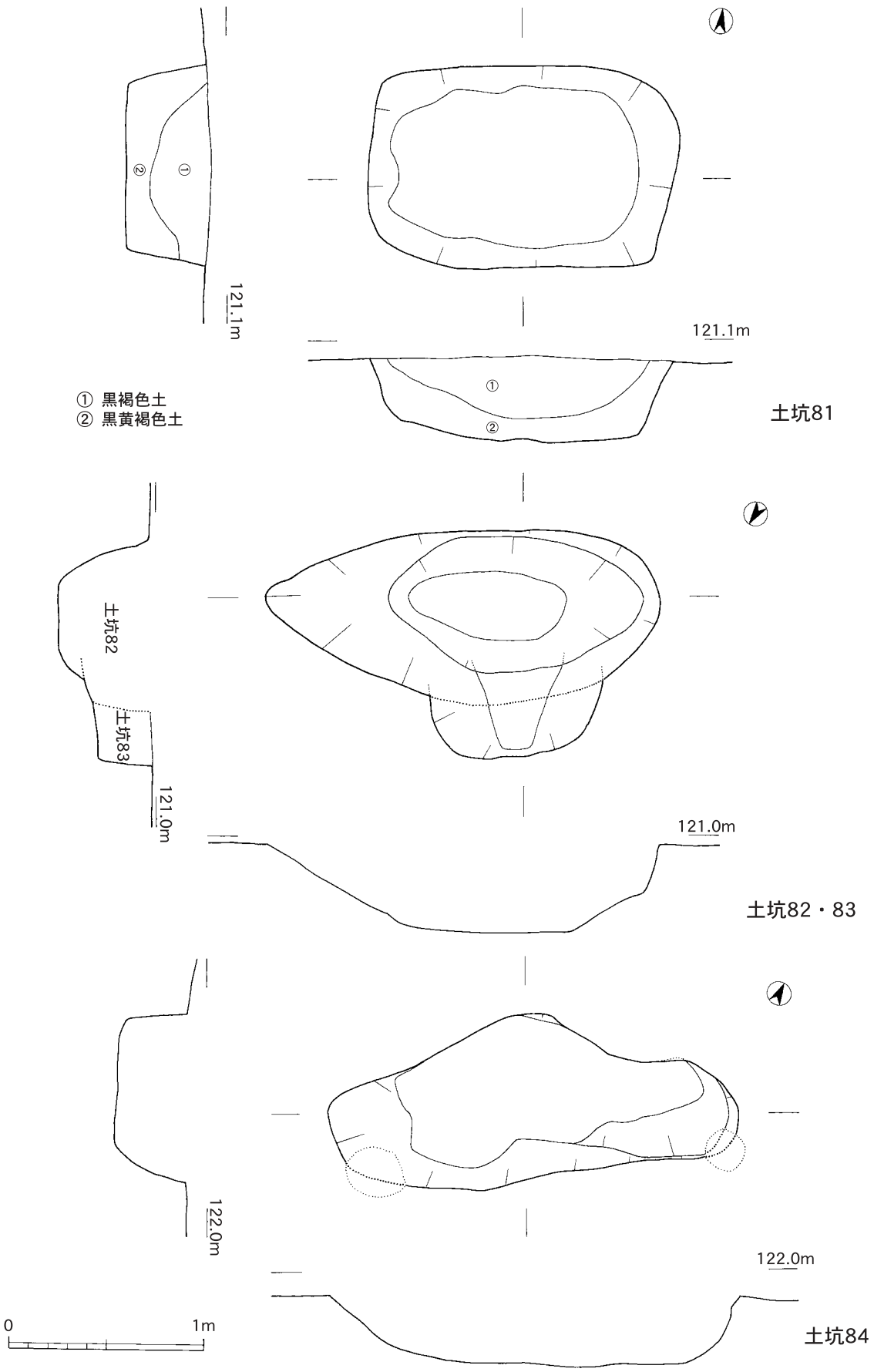
第61図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図⑲



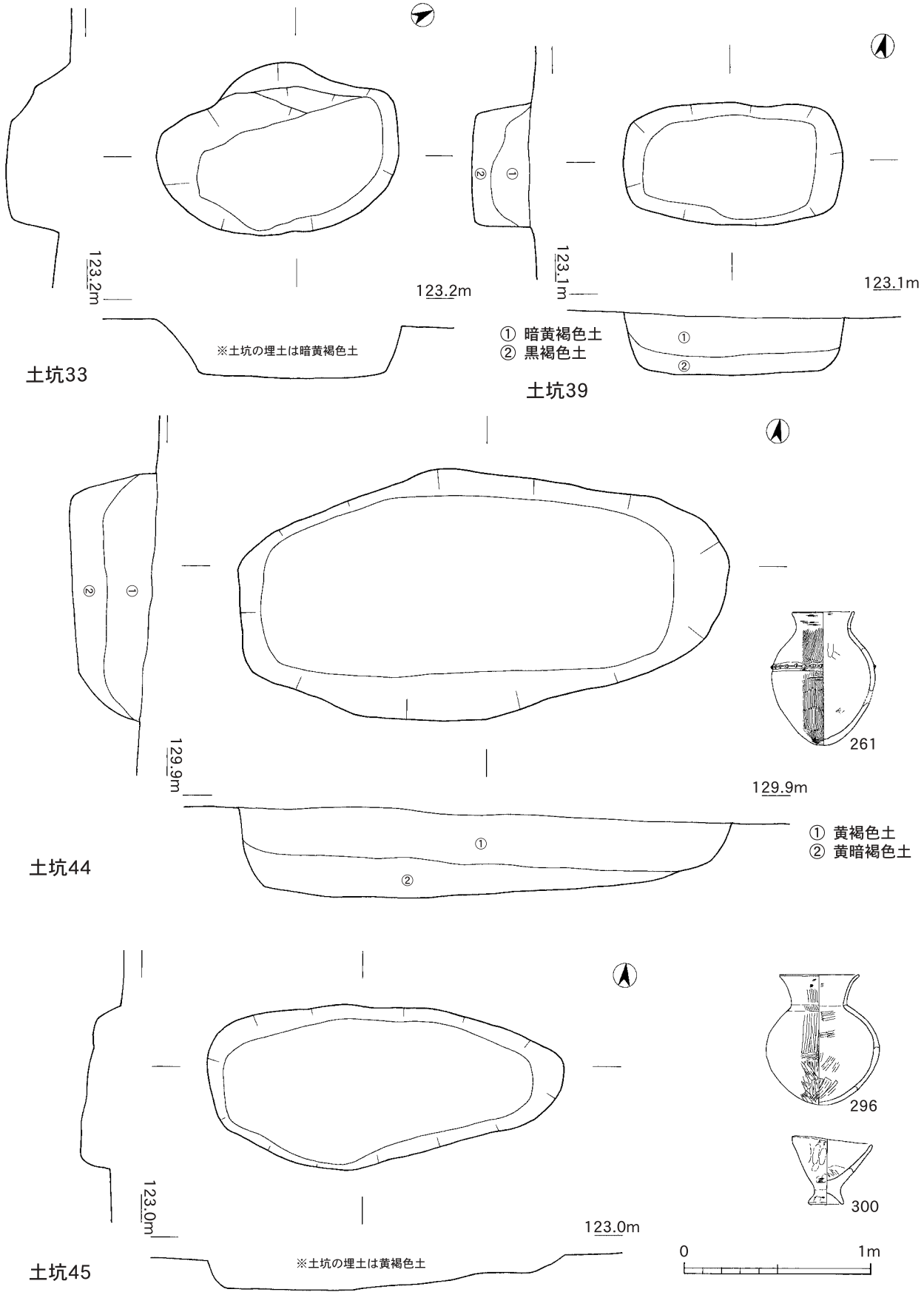
第62図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図⑳



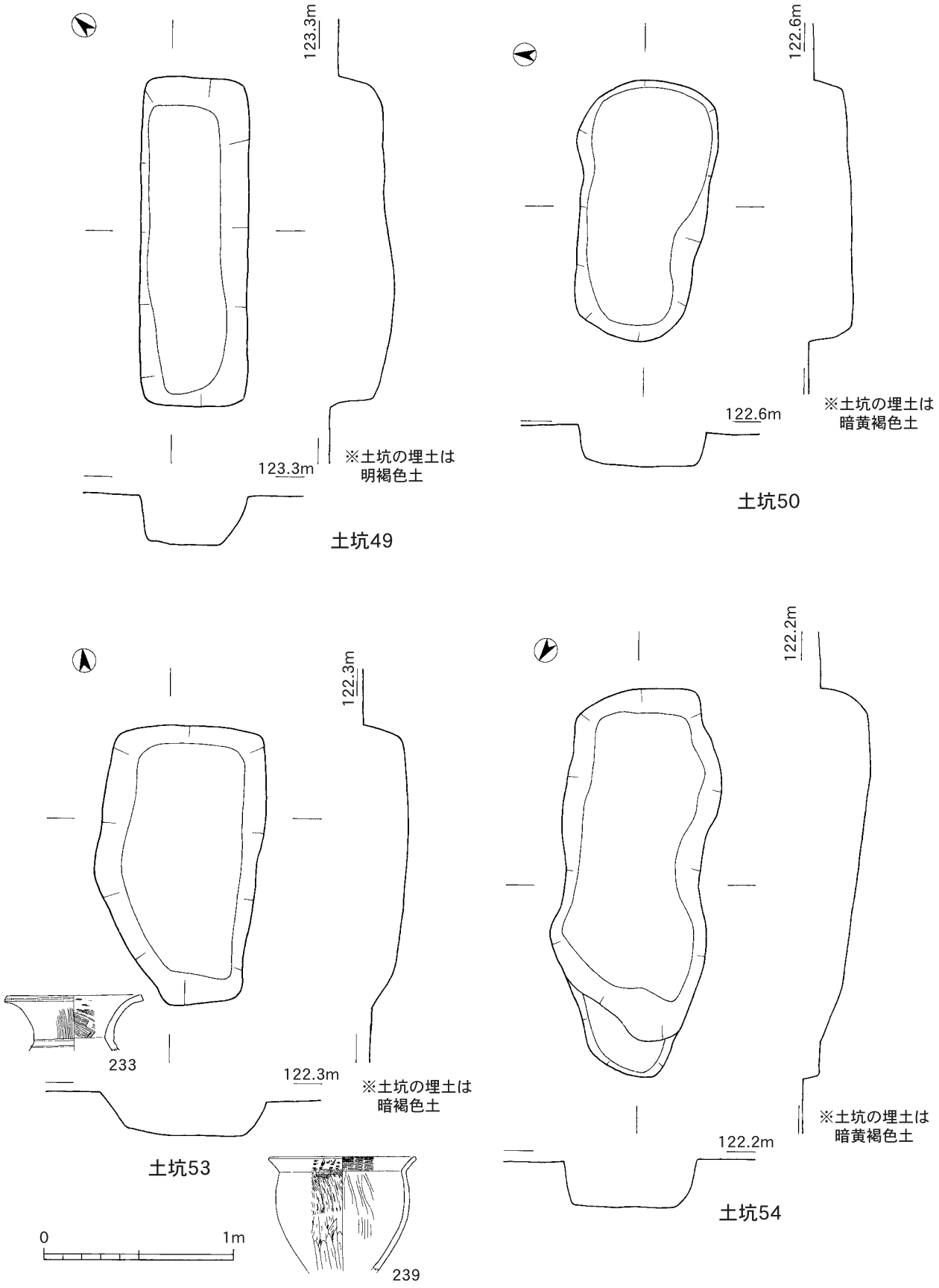
第63図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(21)



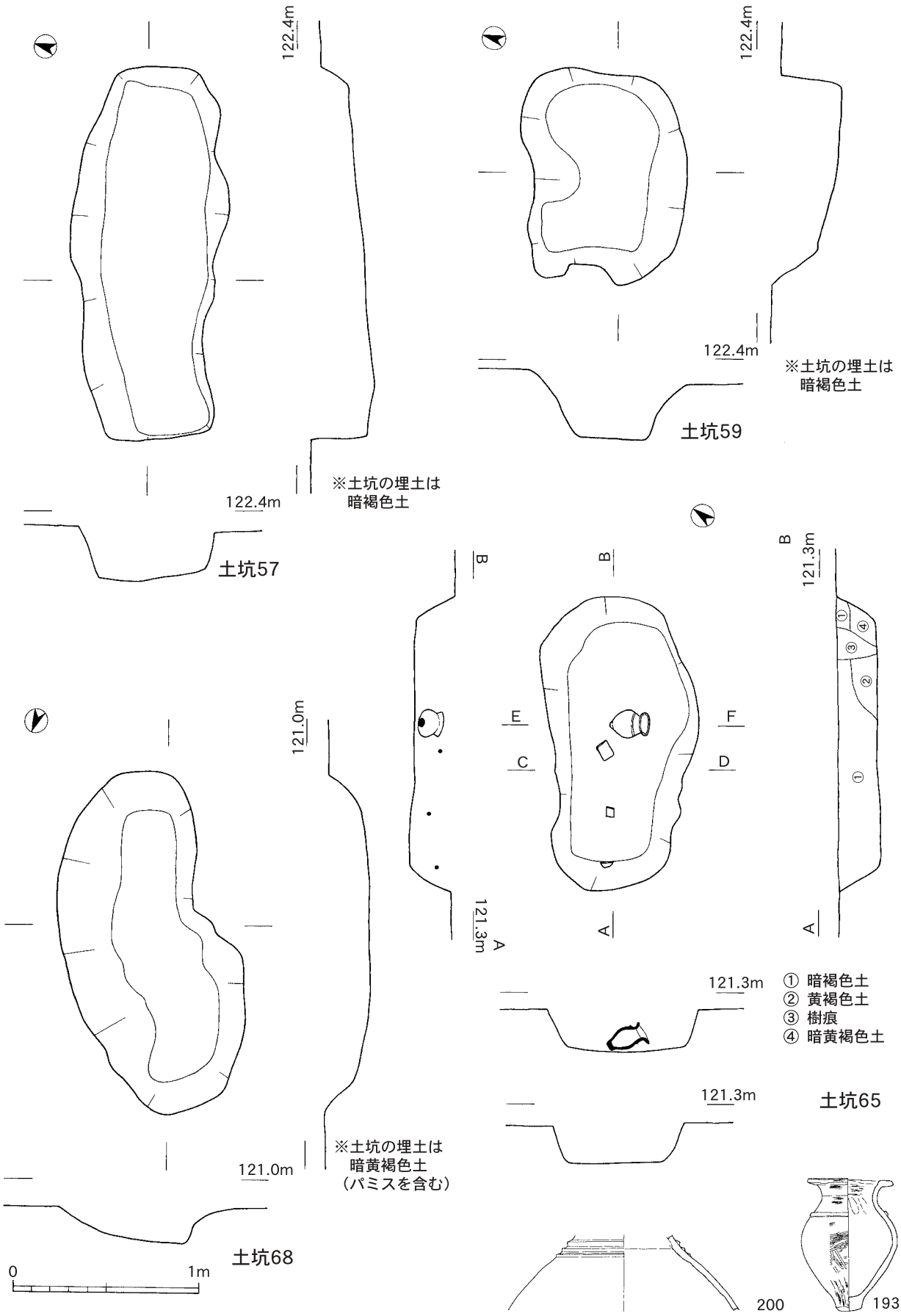
第64図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(22)



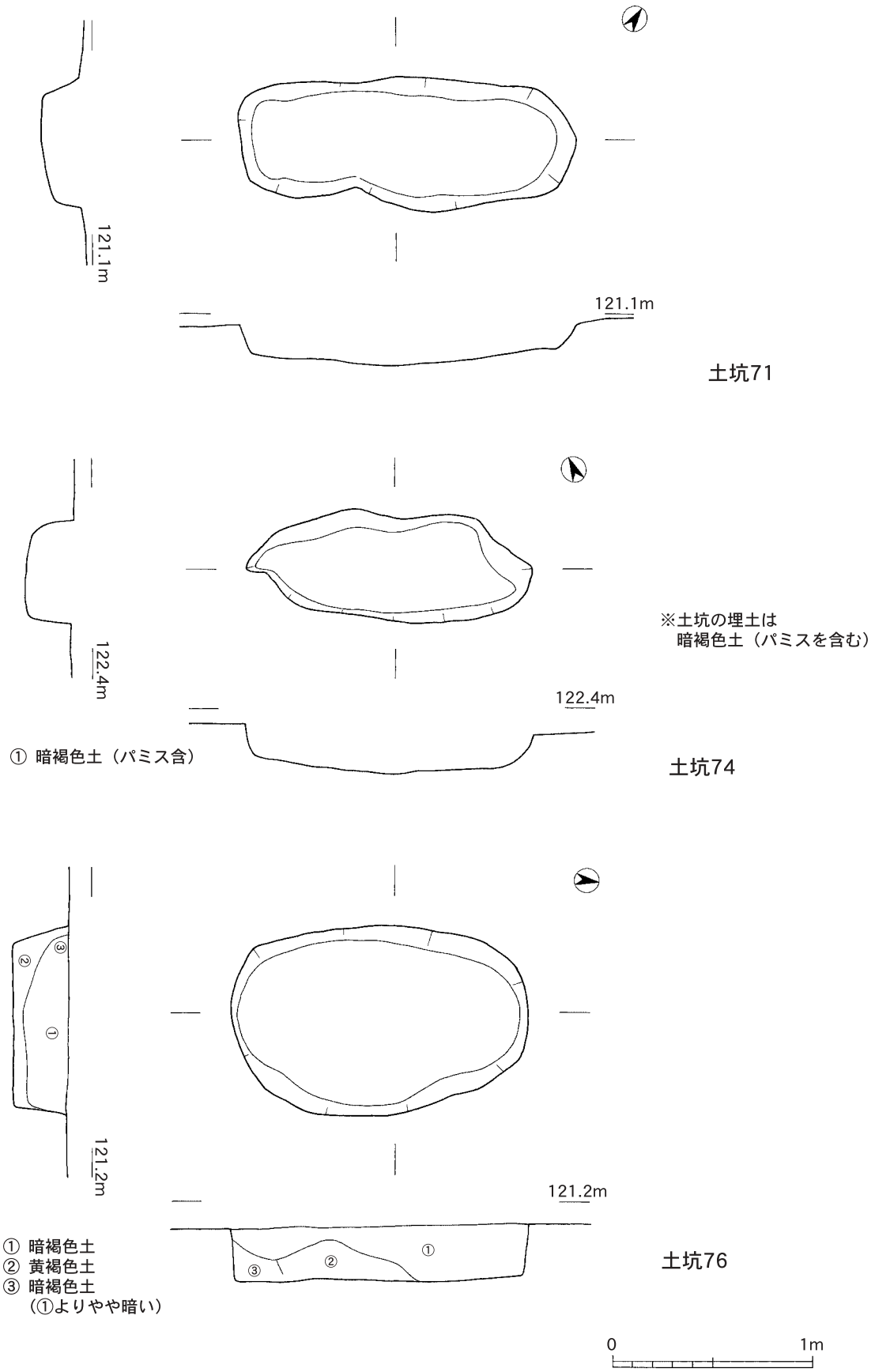
第65図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図㉓



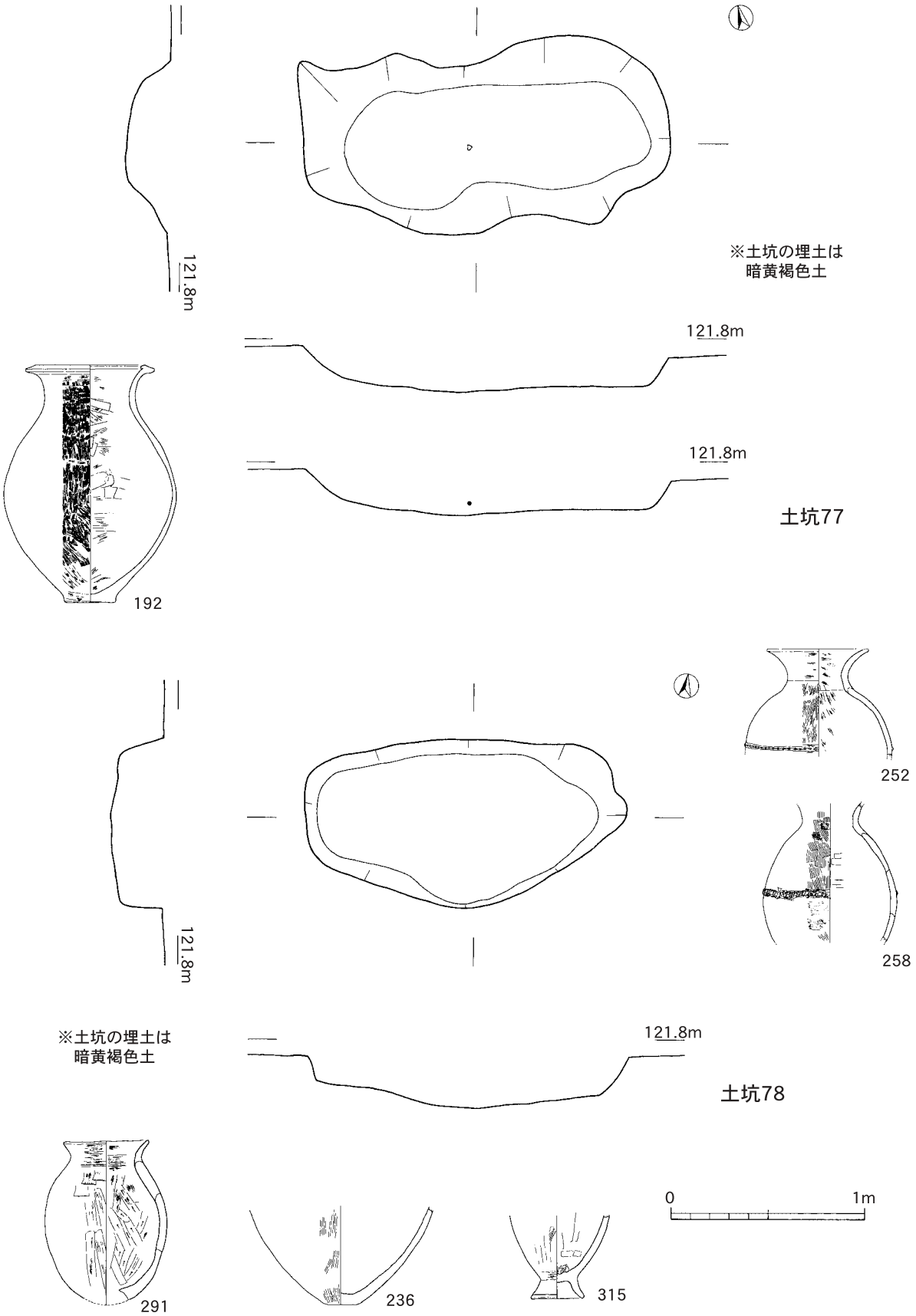
第66図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図㉔



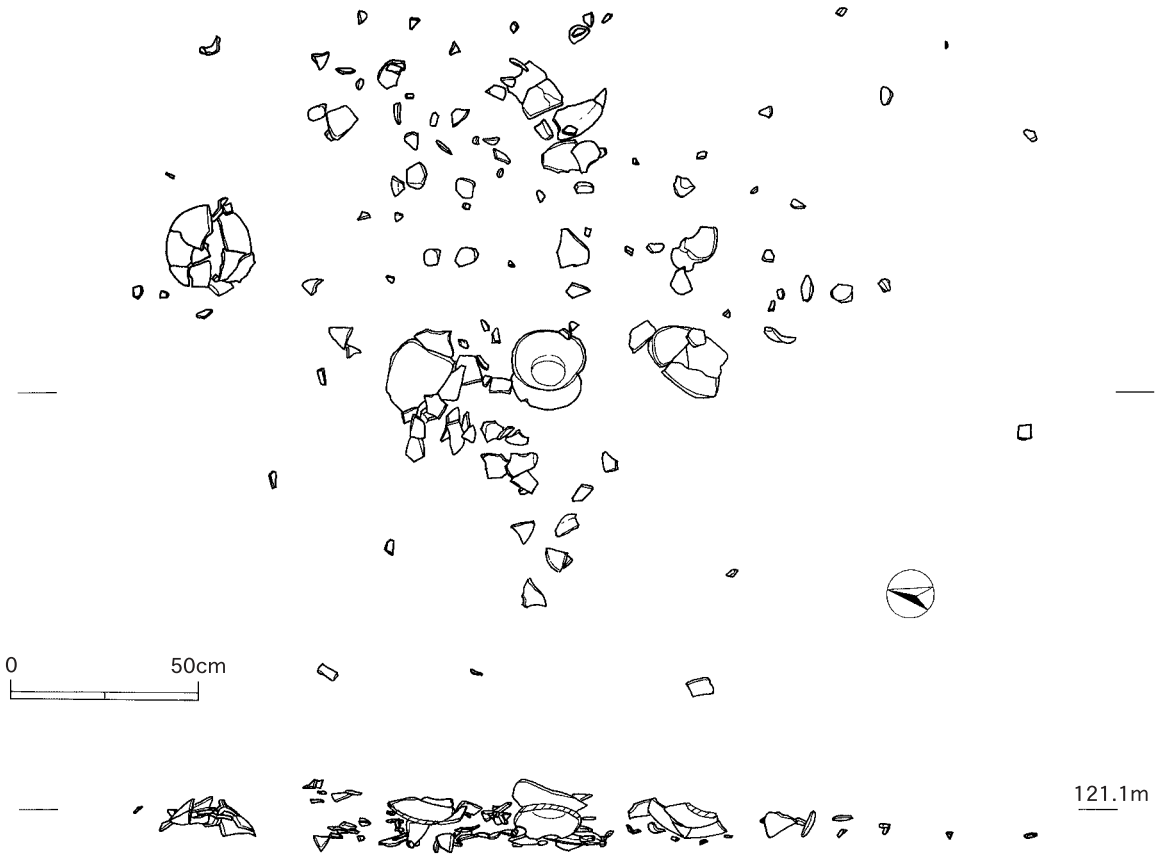
第67図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図㉕



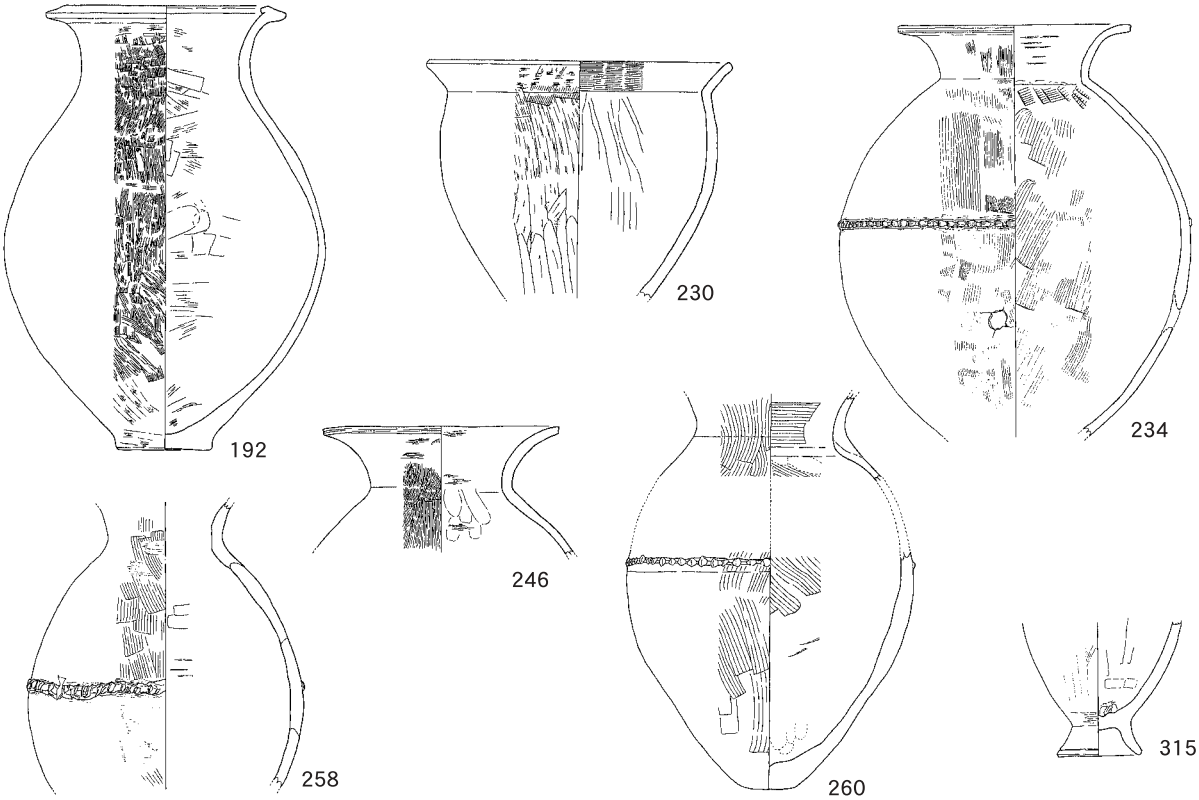
第68図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図㉖



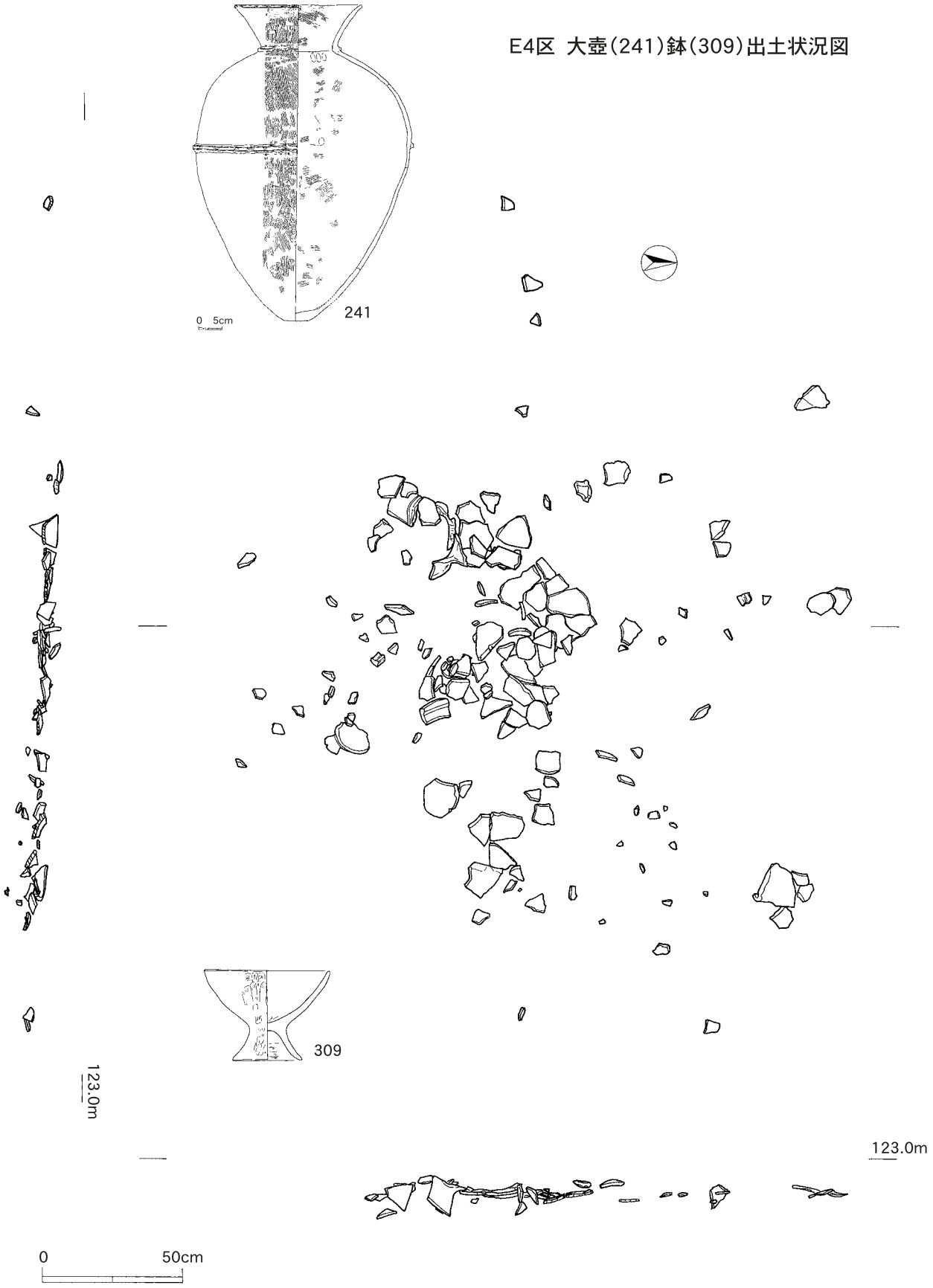
第69図　堂園遺跡Ａ地点　土坑実測図(27)



D5・D6区　土器集中出土状況

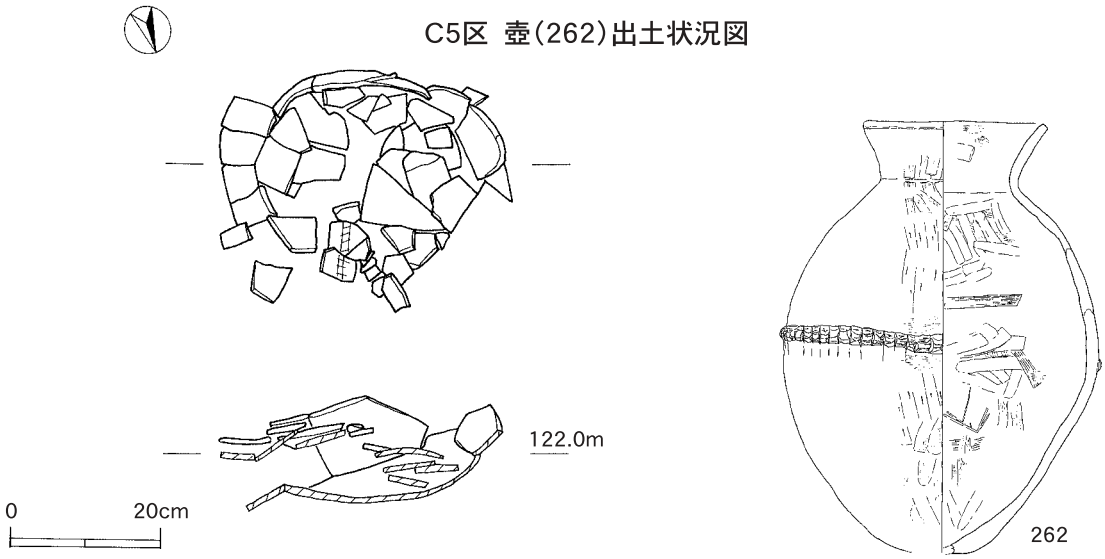


第70図　堂園遺跡Ａ地点土器出土状況図(1)

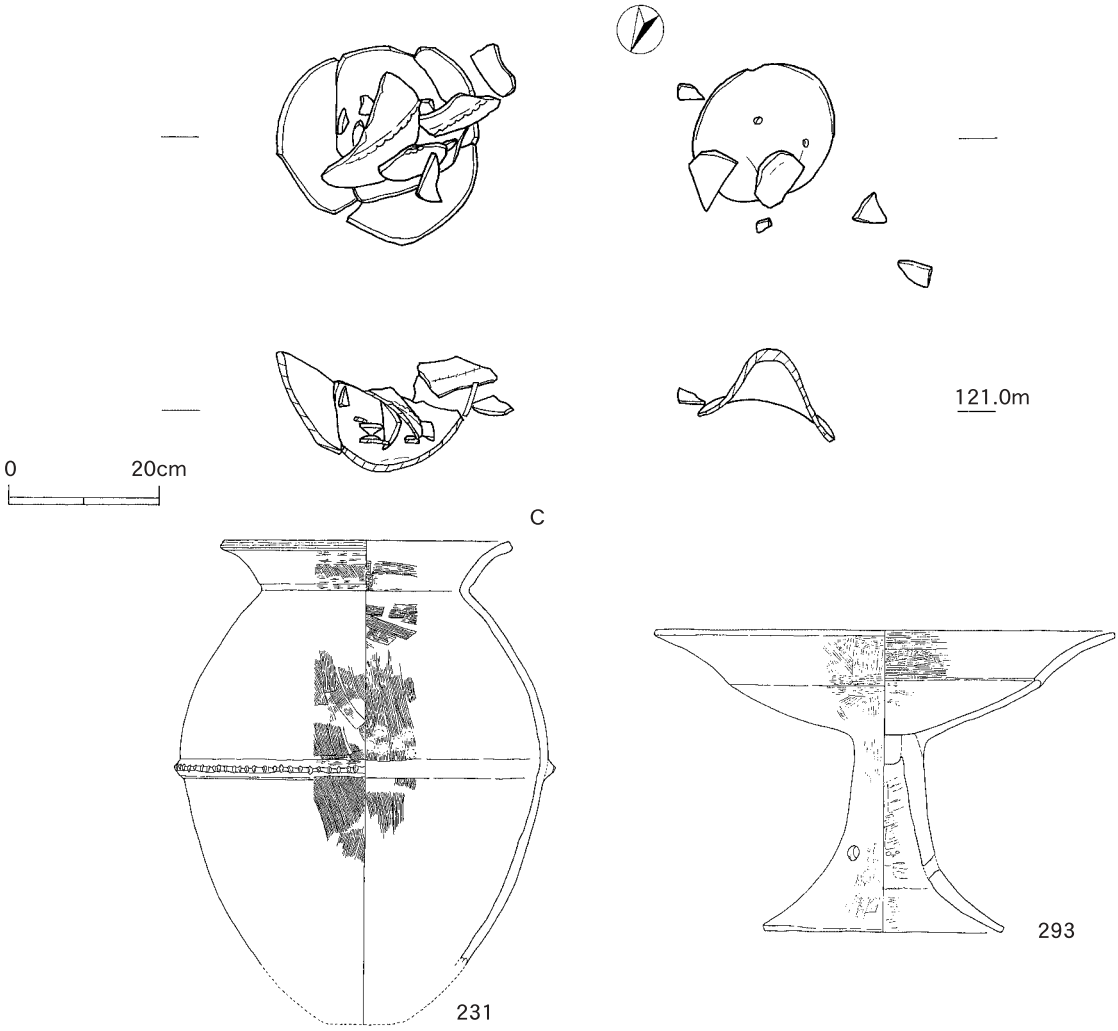


第71図　堂園遺跡Ａ地点土器出土状況図(2)

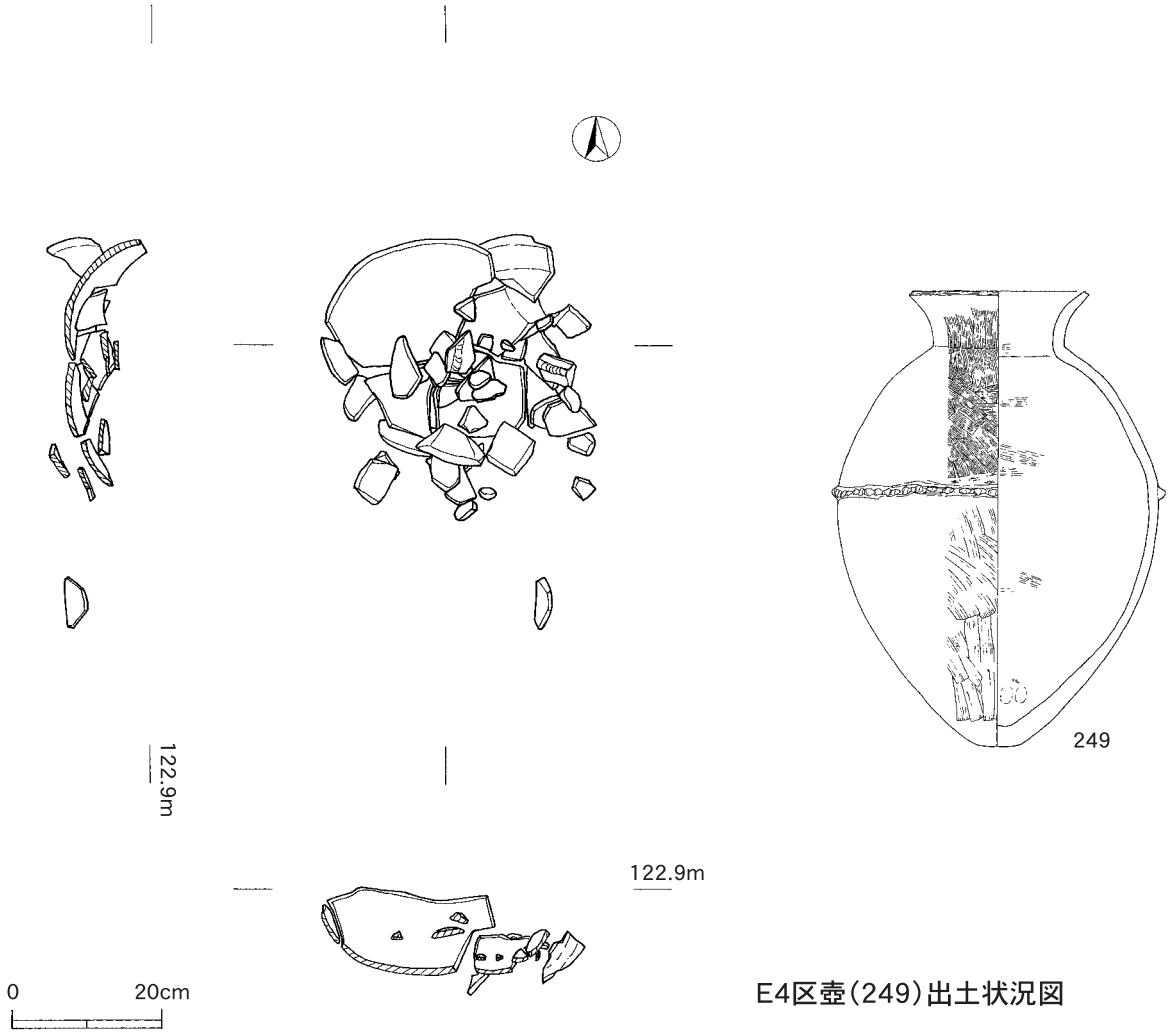
C5区 壺(262)出土状況図



C5区 壺(231)高坏(293)出土状況図

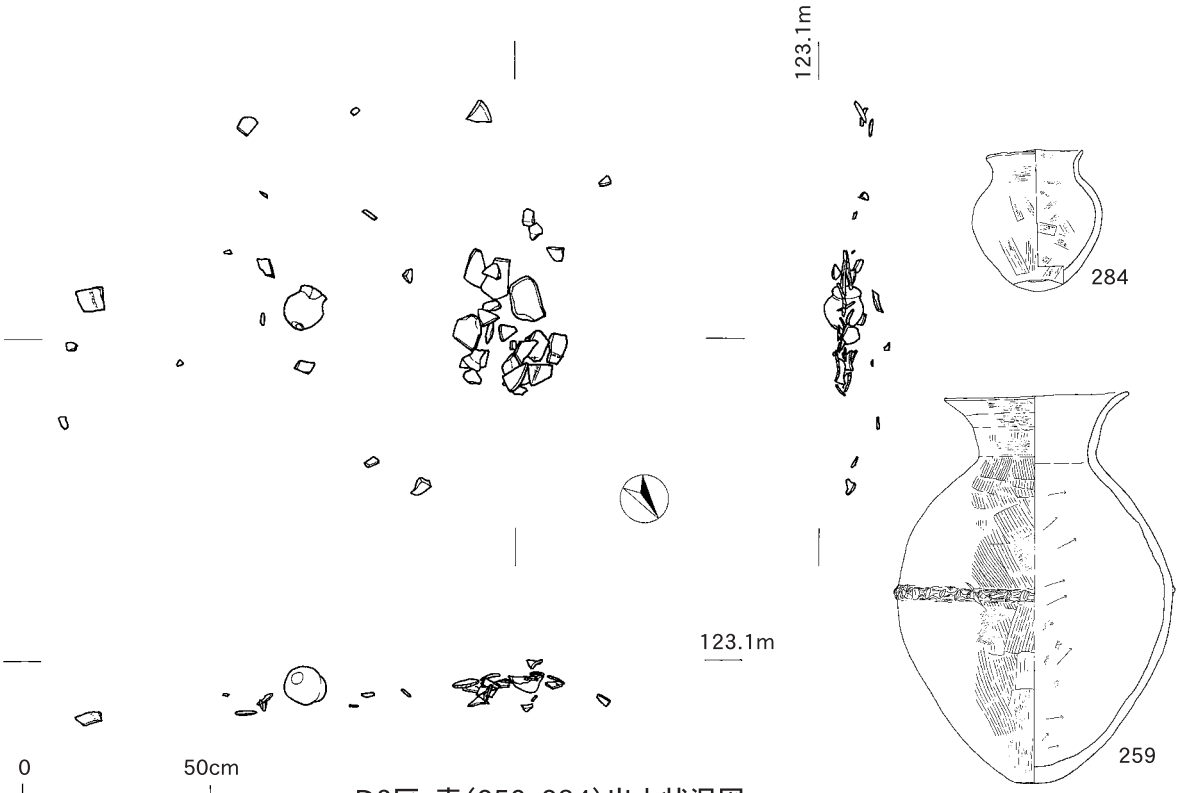


第72図　堂園遺跡Ａ地点土器出土状況図(3)

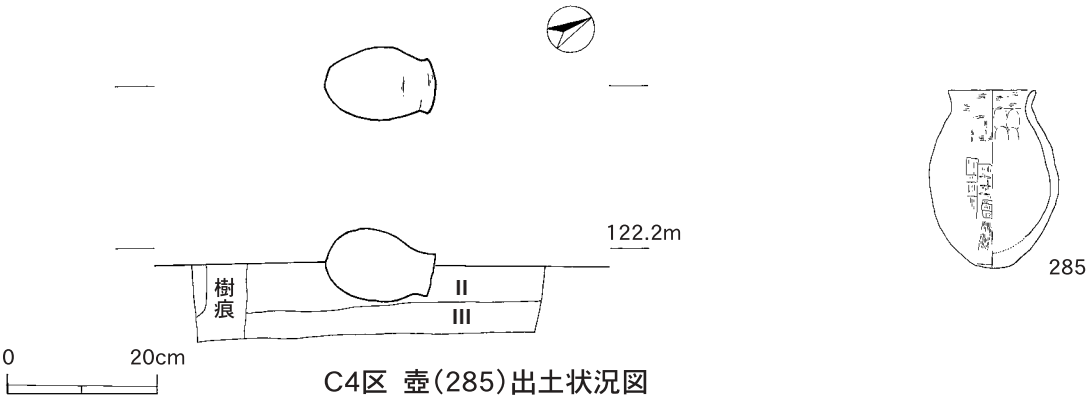


E4区壺(249)出土状況図

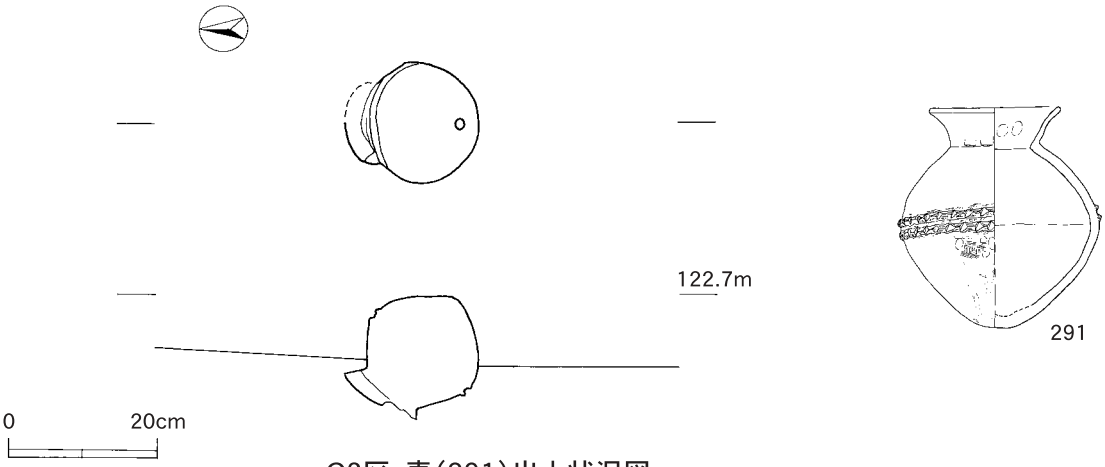
第73図　堂園遺跡Ａ地点土器出土状況図(4)



D3区 壺(259・284)出土状況図



C4区 壺(285)出土状況図



C3区 壺(291)出土状況図

第74図　堂園遺跡Ａ地点土器出土状況図(5)

⑵ 遺　物

壺を中心に，甕や小形壺などが主に包含層から出土している。包含層が漸移的な堆積であることも含めて，厳密に同時期性を保証する材料には乏しかったため，分類にあたっては，従来の土器研究や整理指導者のコメントをもとに型式学的な分類を行い，時期別にまとめた。

なお，小形壺，鉢については，個体差が大きく時期比定が困難であったため，節のおわりに器種ごとにまとめて紹介することとした。

土坑18から出土した鉄鏃は，本節の一番最後に紹介している。

弥生時代中期後半（第75～78図）

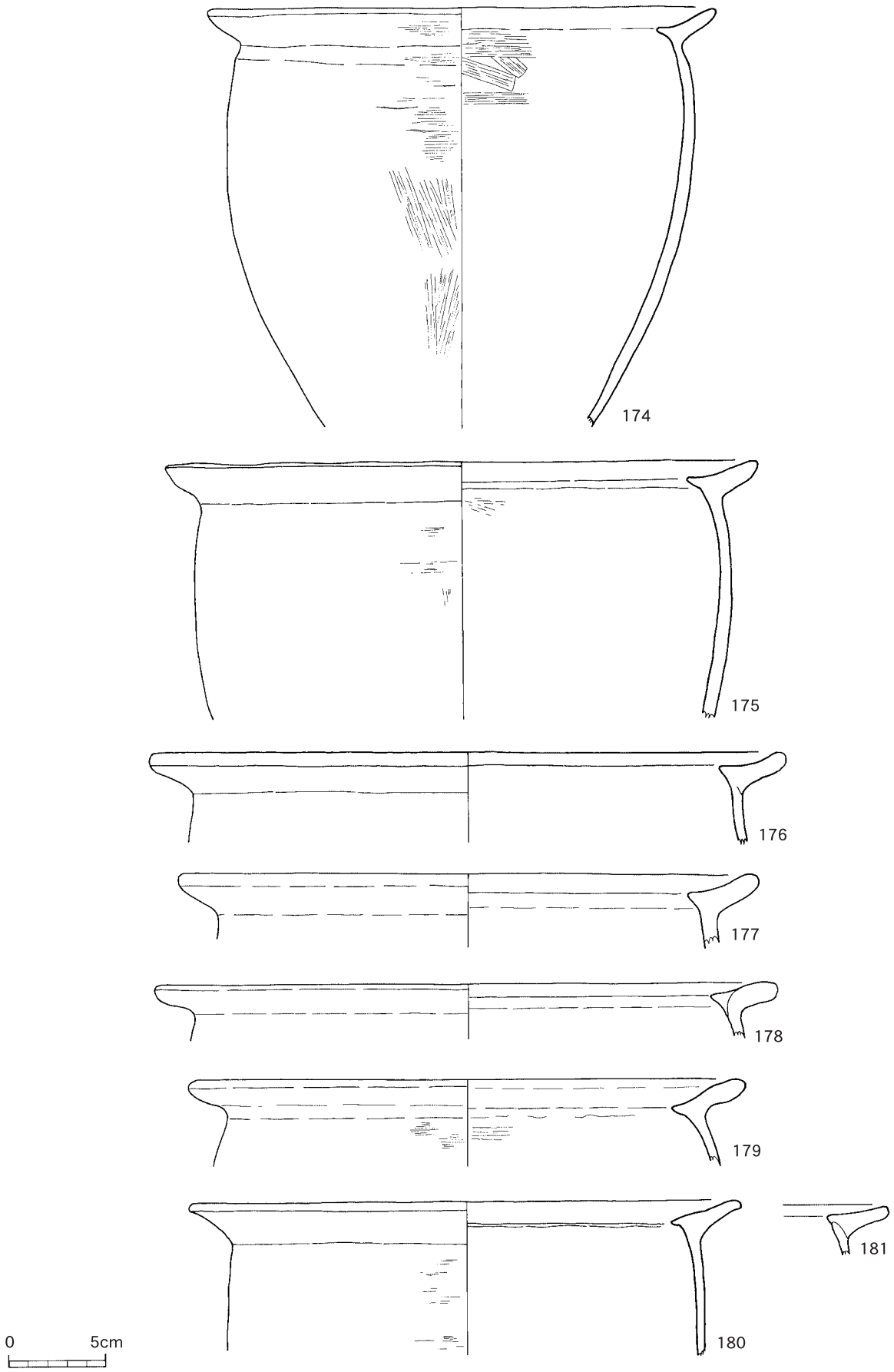
甕は，断面舌状の口縁部が上方へ傾き内面の突出が顕著で，胴部が張る器形を持つもの（174～181）と断面方形の口縁部が上方へ傾き内面の突出も明瞭で口唇部が浅く凹み，胴部には断面略三角形の突帯が複数めぐるもの（182～188），方形で厚みのある突帯がめぐるもの（189～191）をまとめた。黒髪三・四式土器や山ノ口Ⅱ式土器に類似する資料と思われる。

壺は，厚みのある口縁部が下方ないし水平に屈曲するもの（192～199）などをまとめた。山ノ口Ⅱ式土器の壺に類似する資料と思われる。

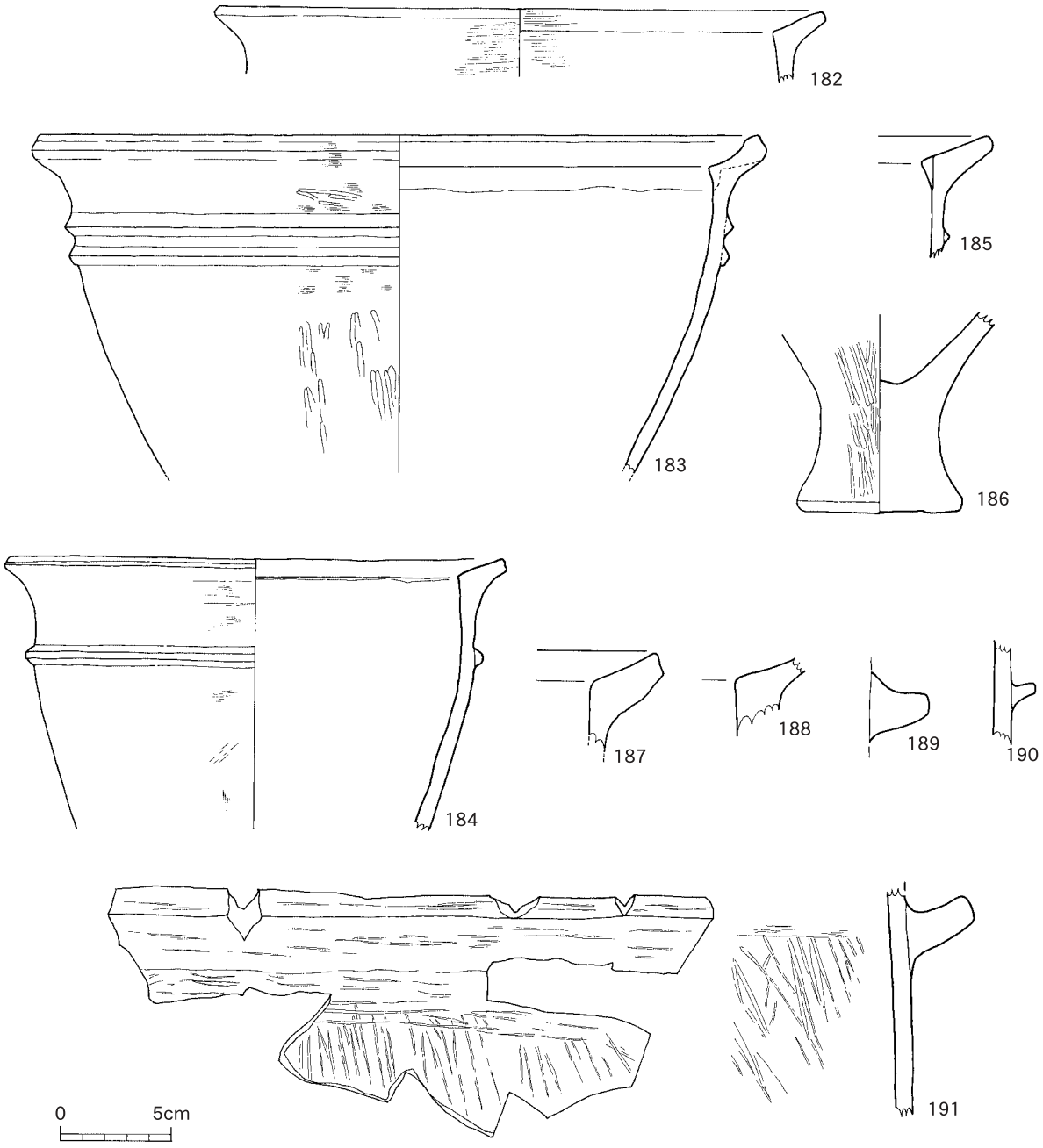
このほか，丹塗された土器片（201～215）や蓋（216），小形壺（217）や鉢（218）もこの時期の資料にまとめた。須玖式土器系統の資料と思われる。

174は，頸部外面もわずかに凹むほか，本遺跡から出土した甕のなかでは胴が長い特徴がある。胎土には微細な金雲母が混ざる。復元口径は約26.2㎝である。175は，口縁部内面の突出の接合面が確認できるなど整形がやや粗い。外面全体から口唇部まで煤がよく付着している。復元口径は約30.5㎝である。176は口縁部上面がわずかに盛り上がるほか，胴部の張りも強いようである。復元口径は約28.6㎝である。177・178は，口縁部内面の突出は顕著だが，口縁部上面がしゃくれず直線的に整形されている。復元口径は177が約28.4㎝である。181は，口縁部上面が一部分接合面でやや沈線様に凹む。復元口径は約32.2㎝である。182は，口縁部内面の屈曲が明瞭で，わずかに上方へ盛り上がっている。この資料は，断面に煤が付着している部分が観察される。この部分にヒビもしくは欠損があった状態で使用されたものと想定される。復元口径は約27.5㎝である。184は口縁部上面が強くしゃくれ，端部がやや厚みを増している。胴部の突帯は断面三角形を意識して整形されているがやや稚拙である。外面は軽く研磨される。胎土に金雲母はみられない。復元口径は約32.4㎝である。185も，全体的な整形は丁寧であるが，胴部の突帯のつくりは稚拙である。185は甕の脚台である。端部がやや広がる形状で，外面は丁寧に研磨される。内面にコゲなどはついていない。186は，口縁部内面の突出がかろうじて観察でき，胴部は張らない器形である。胴部の突帯は断面が台形となっている。外面には全体に煤が強く付着している。187～191は鍔状突帯といわれる資料である。厚みがあり，191などは内外面ともによく研磨されている。

192は土器集中３から出土した資料である（第77図）。やや広口の壺で底部は安定した平底である。厚みのある口縁部はやや下方へ下がり内面は突出している。外面は幅の細い広葉樹の板で丁寧なハケメ調整を行い，その後軽い研磨で仕上げているようである。工具の形状によるためなのか，たいへん特徴的な調整痕が観察される。金雲母はみられない。復元口径は約19㎝，胴径は約25.2㎝，器



第75図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(1)



第76図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(2)

高は約35㎝である。193は土坑65の埋土中より完形で出土した資料である（第77図）。厚みのある口縁部が水平にのびるなど大まかには山ノ口式土器の壺にみられるプロポーションであるが，頸部が短い点や底部を極端に突出させている点などが特異である。器面調整は丁寧だが，成形はやや雑なつくりで胎土に金雲母はみられない。肩部にみられる凸帯は断面方形で，山ノ口式土器よりもむしろ入来式土器を彷彿とさせる。また，口縁部から胴部下半にかけて全体の１／３程度が著しく劣化している。発見時はこの範囲が下になっていたようである。口径は13,8㎝，胴径は15.4㎝，器高は21.4㎝である。194～199は口縁部の資料である。全体的に成形がやや雑なつくりであり，金雲母はみられない。また，どの資料にも外面から頸部内面まで器面の劣化や剥落が観察される。これは，ほかの甕や壺にはなく，これらの資料にのみ認められる特徴であり，土坑域内での使用状況を示すものか，胎土や焼成の特徴をしめすものなのか，興味深い点である。200は頸部に３条の凸帯文がみられる資料で，甕と同様，凸帯の整形はやや稚拙である。胎土には微細な金雲母が認められる。この資料は，先に紹介した口縁部と同じく器面の剥落が認められるが，部位は内面である。

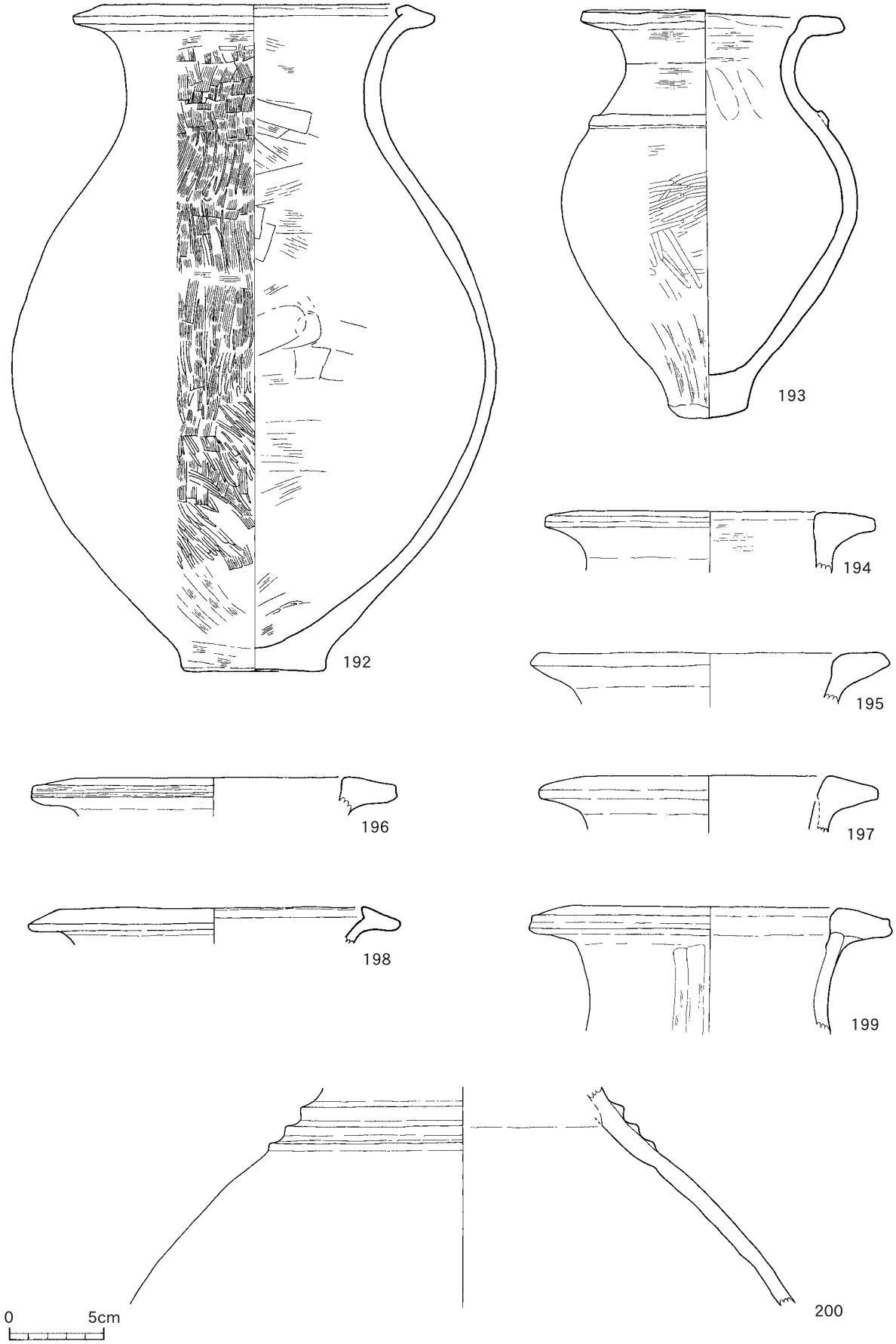
201～215は彩文土器と思われる資料である。胴部に比して幾分厚みのある口縁部は断面方形で内面は鋭角に仕上げられている。器壁は薄く焼成は堅緻で，胴部片には丁寧なハケ目調整が施されている。201の口縁部には，焼成前穿孔が１か所確認される。216は蓋である。断面を編み笠状にして頂部は丸く仕上げている。内面は，頂部にあたる範囲のみ押し上げられており，そのため器壁もやや薄くなっている。穿孔は，２つ一組で対になる位置に配され，焼成前に上部からあけられている。丹は，上面は全面に塗布される。下面は，縁まで全面に塗布されているほか，さらに内面にも作業中についたと思われる丹が付着したままになっている。先に紹介した彩文土器と対になる可能性がある。217は小形壺である。口縁部をほぼ平坦につくり口唇部も断面方形につくり，口縁部内面は突出させず略方形に仕上げている。上胴部はナデ肩で，最大径よりやや上に断面台形の凸帯が１条めぐる。凸帯はシャープではないが丁寧なつくりで，上側はややしゃくれ，端部中央がわずかに凹む。調整は丁寧なナデである。218は鉢である。鋤先口縁の資料で，口縁部上面はナデによりやや凹む。胎土には砂粒など混和剤が多いが，器壁は薄くハケ目調整も丁寧になされている。煤は付着していない。

弥生時代後期（第79～81図）

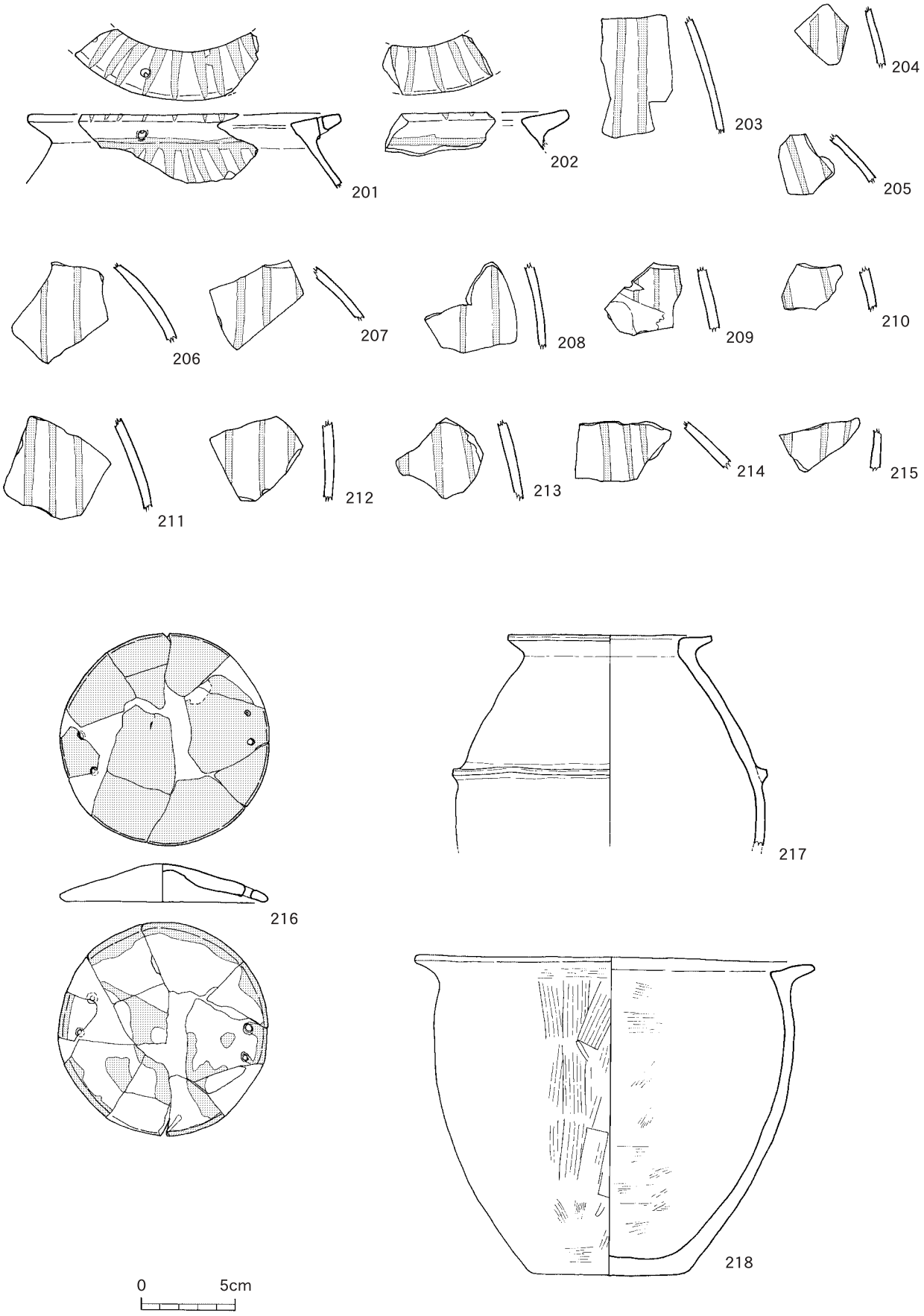
甕は，立ち上がりの弱い「く」字形口縁で口縁部内面の突出がわずかに残るもの（219～223）と，口縁部が「く」字状で，内面に弱い稜を形成し，付け根から先端に向かって太くなり，口唇部断面が丸みを帯びるもの（224～226）をまとめた。後者に分類した資料は，胴部もやや膨らむようである。松木薗式土器に類似する資料と思われる。

壺は，口唇部断面が略方形を呈し，口縁部がラッパ状に開き内面に稜を形成し，肩部がやや膨らみ，胴部最大径あたりに刻目凸帯がめぐるもの（230～238）をまとめた。松木薗式土器に類似する資料と思われる。

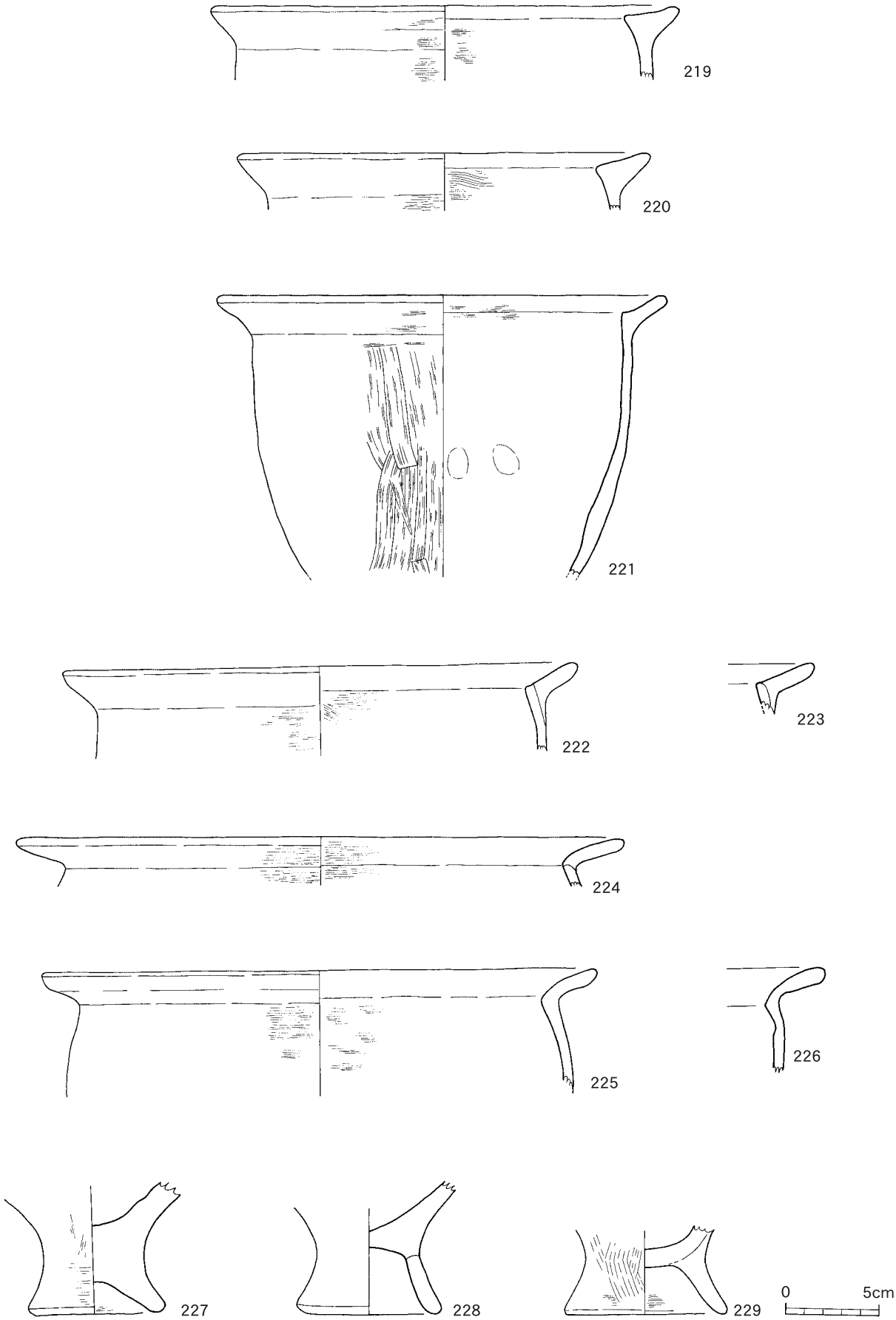
219・220は，口縁部は短く太いものの，内面の突出がわずかに残る。219には胎土中に金雲母の粒子が混じり，外面には全体に煤が付着している。復元口径は，219が約20.1㎝，220が約22㎝である。221は，口縁部内面に明瞭な稜を形成し，口縁部上面がわずかに凹ませているのが特徴的な資



第77図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(3)



第78図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(4)



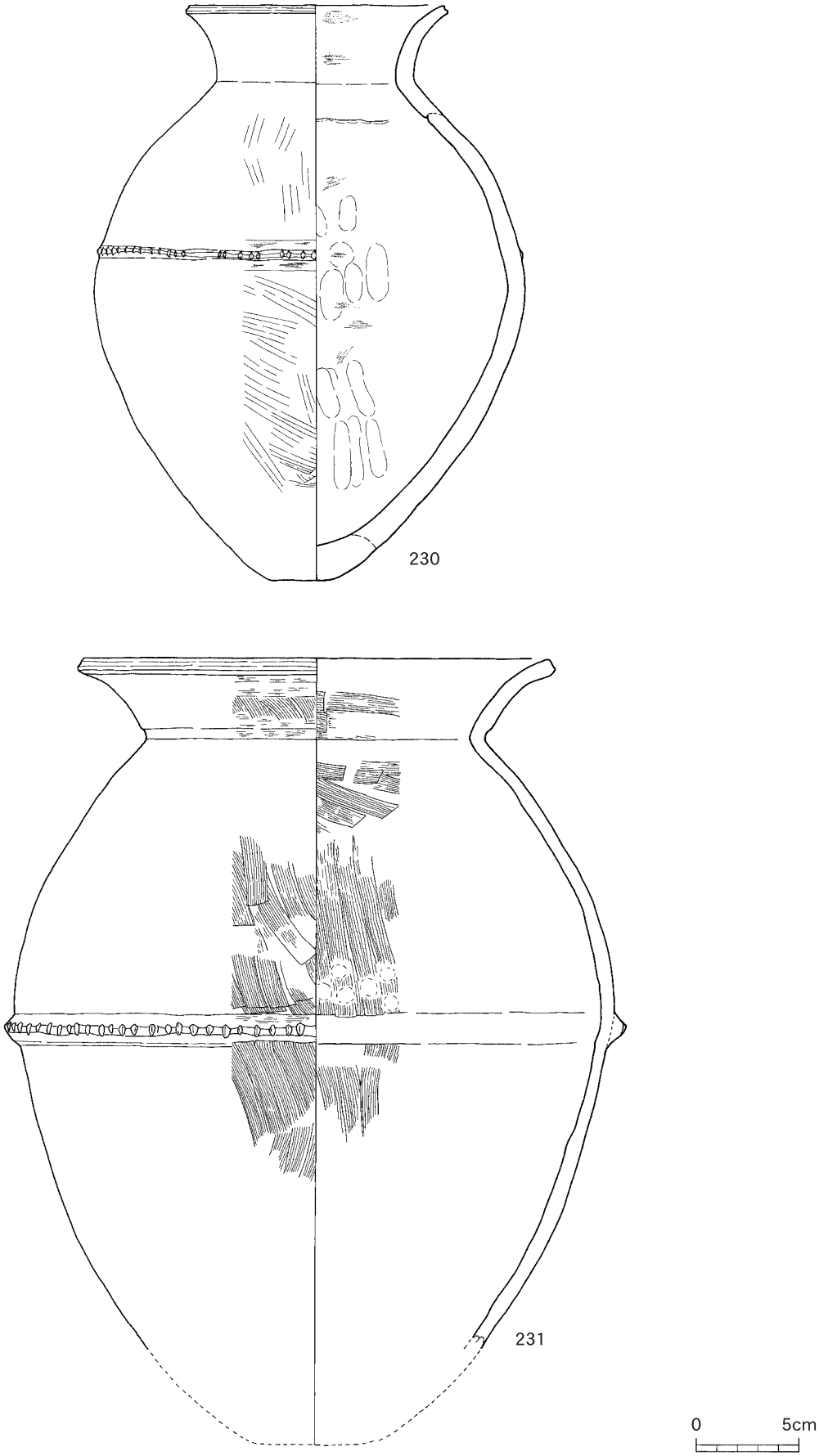
第79図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(5)

料である。胴部は張らずに底部へいたるようである。外面調整は細かいハケ目が入る。口縁部外面と胴部最大径あたりから下位に煤が付着している。復元口径は約24㎝である。222・223は口縁部の接合状況がわかる資料である。222の復元口径は約27.5㎝である。225は口唇部断面が丸みを帯びつつもわずかに尖り気味になっている。外面全体から口唇部まで煤が付着している。復元口径は約29㎝である。226は屈曲部のつくりが特徴的な資料である。器面が摩耗しており，調整を観察できない。227～229は脚部の資料である。227は，後期初頭に短期的にみられる形態で，中実脚台に短い脚を付け足したようなつくりをしている。228は底部に比して薄く長めの脚がついている。表面の劣化がみられる。229は，短めのやや「ハ」字状に広がる脚がつく。この資料には，見込み部分全体に小穴が観察される。焼成前にできたものと想定されるが，不規則な配置で工具も不明である。機能・用途を持たされていたようには感じられない。

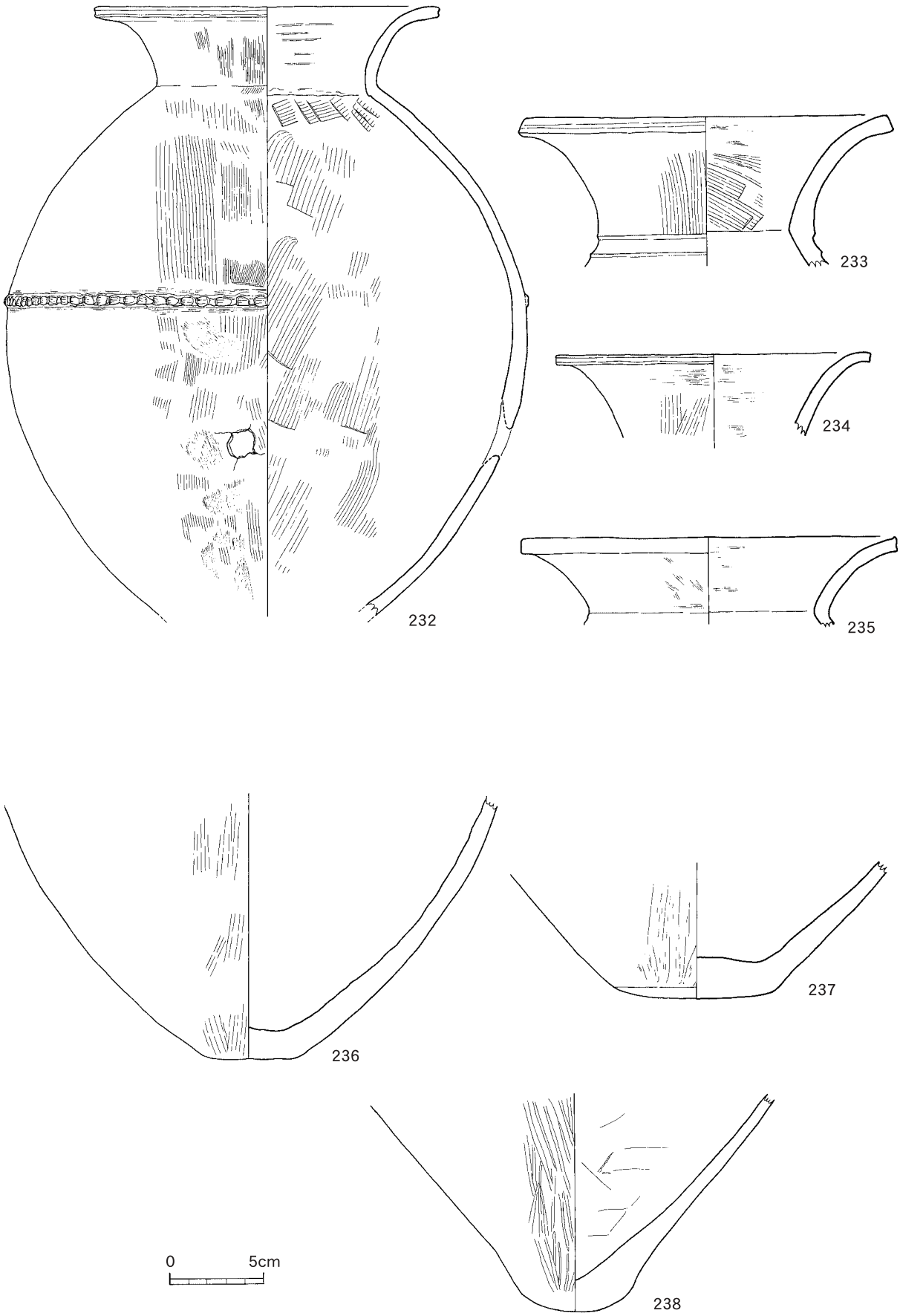
230は，口縁部がわずかに外湾しやや肩が張り，胴部全体がアーモンド形の器形となる。底部平坦面はわずかに観察される。内面には指頭圧痕が明瞭に残っているのが特徴である。比較的細く丁寧につくられた刻目凸帯が胴部最大径よりやや上部に１条めぐる。復元口径は約12.7㎝，胴径は20.7㎝，器高は約27.8㎝である。231はやや広口の壺で，口唇部は方形につくり，頸部はつくられず肩部は直線的に広がり胴部へいたる。胴部下半もさほど丸みを持たない。底部は平底になると想定される。凸帯は断面三角形だが頂部が上方へ偏る形状で，刻目は頂部から下側のなだらかな部分にかけて施されている。復元口径は約23㎝，胴径は約29㎝である。231は松木薗式土器の壺と思われる。土坑37の埋土中および周辺から出土している。さらに近接して高杯（283）も出土している。232は，口唇部断面が略方形で端部がやや凹み，口縁部が外反し胴部全体が丸みをおびた器形をしている。調整は内外面とも丁寧で，外面には２種類の工具が使用されているが，規則性はないようである。刻目凸帯は胴部最大径よりやや上方にめぐらされ，刻目は丁寧だが凸帯の粘土をえぐるように施されている。この資料には，胴部下半中央部に外側から穿たれた孔が１か所ある。この孔からひびが四方にのびており，またある程度まとまった範囲に出土している状況も考えあわせると，穿孔した際に全体が破損してしまった可能性もうかがえる。復元口径は約18.4㎝，胴径は約27.9㎝である。233～235は口縁部の資料で，いずれも口唇部断面が方形で端部がわずがに凹み，口縁部は外反する器形である。233には，頸部にヘラ状工具を用いてつくりだされた凸帯が１条めぐっている。復元口径は，それぞれ約19㎝，約16.6㎝，約19.4㎝である。236～238は底部の資料である。底部平坦面の整形にはバラツキがあるが，それでも平坦面を意識した仕上げであることと，外面の調整がハケメ調整のみでケズリが観察されなかったために後期の壺の底部として分類した。

弥生時代後期終末～古墳時代（第82～95図）

甕は，口縁部が「く」字形に立ち上がり，口縁部断面は丸みの強い略方形で厚みが変化しないもの（239・240）である。壺は，口唇部断面が略方形か丸みを帯び，口縁部がラッパ状に外反し内面の稜は不明確で，アーモンド形の器形をもつものをまとめた（241～282）。刻目凸帯が胴部最大径より上方に１条めぐる。底部はごく小さな平底か丸底である。なお，甕・壺ともに胴部下半の外面調整はケズリで仕上げられているのが特徴である。おおむね中津野式土器と称される資料に類似する。高坏は，坏部が明確に稜を持ち強く外反しラッパ状の脚を持つことから，おおむね同時期の資



第80図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(6)



第81図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(7)

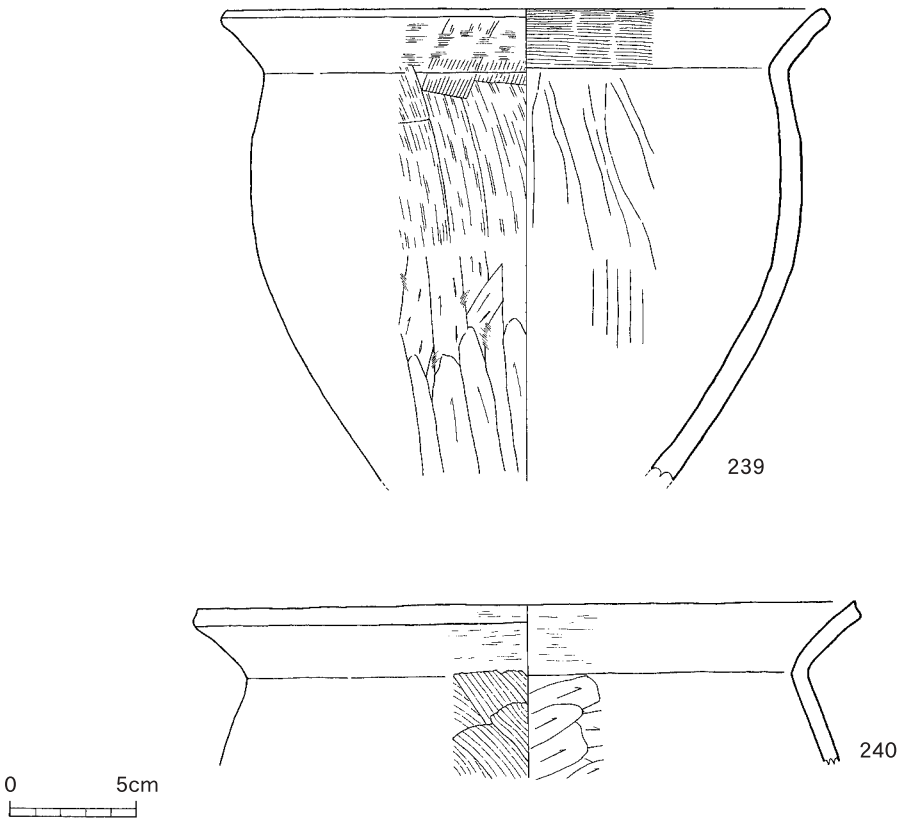
料と考えられる。免田式土器も１点出土しており，注目される。

本遺跡ではこの時期が最も遺物量が多いが，そのなかでも壺が著しく多いという特異な出土傾向を示している。

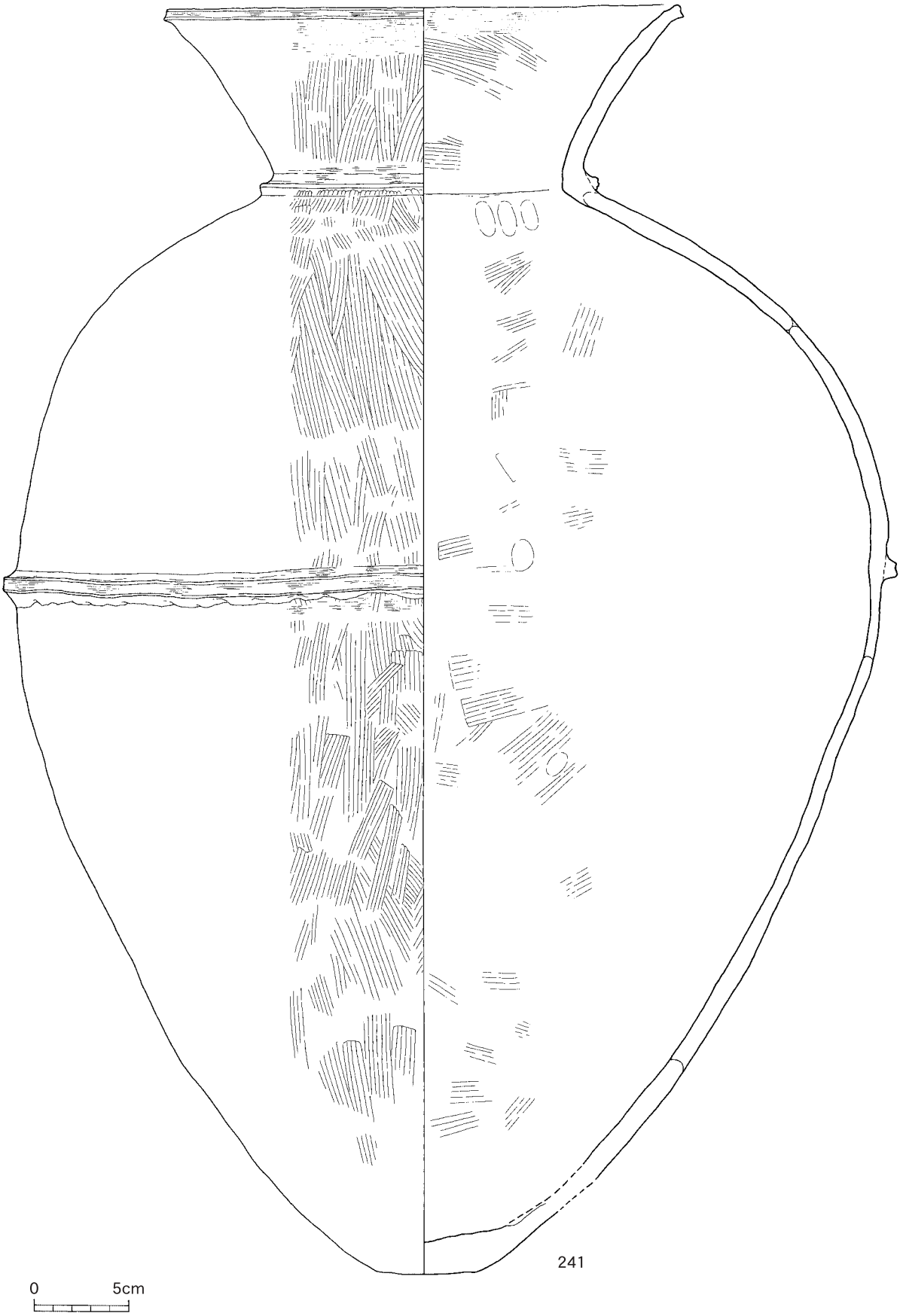
239は，口唇部断面は丸みを帯びた略方形で，口縁部は「く」字に立ち上がり，胴部はあまり張らない。口縁部内面の稜は明瞭である。外面の胴部下半にはケズリ調整がなされているために，その範囲は直線的な器形となっている。この範囲には煤も付着している。復元口径は約24㎝である。240は，口唇部断面が方形で，口縁部は「く」字に立ち上がる。器壁は胴部までほぼ均一な仕上がりである。この甕は，内面の調整がケズリで，胎土の色調も赤褐色を呈し焼成も硬く，本遺跡では他にない特徴を持っている。あるいは在地の甕でないことも想定される珍しい資料である。煤の付着も，口唇部下端にのみ確認される。復元口径は26㎝。

241は土器集中から出土した壺である。口縁部は外傾しあまり湾曲しない。口唇部断面は略方形につくる。肩部は，一部ひずんているものの張りながら胴部に向かい，胴部最大径は中心より上方に成形され，ごく小さい平底の底部へむかってやや直線的に至る卵形の器形である。いくぶん雑な整形の断面M字形の凸帯が１条胴部最大径の部分に巡る。胴部下半にケズリ調整はみられないが，器形など全体的な特徴からこの時期に含めた。復元口径は約27.2㎝，胴径は約47.5㎝，器高約66.9㎝である。242～248は，比較的広口傾向にある器形の壺をまとめた。242・243は短く外反する口縁部から直線的に胴部へいたる器形で，かなり「なで肩」の器形である。外面には丁寧なハケメ調整が施される。器壁は比較的厚い。242は土坑77・78の直近で一括して，243は土坑58と84の間の区域で出土している。244～246は口縁部である。244は，土坑14の直近を中心に出土している。調整等を観察できないほど表面が劣化している。245は，土坑37の直近で出土している。外面，内面ともに部分的に煤の付着を観察できる。どの段階でかはわからないが，火にかけられたことを示すと考えられる。246は，土坑78の直近で出土している。外面全体の１／３程度だけが著しく劣化している。また，肩部は接合面あたりで割れていて，若干摩耗している。247は，Ｃ－４区の土坑のない空間にやや散在する。頸部から胴部にかけての資料で，頸部と肩部に稜はきちんと形成されていない。細かい刻目の入った凸帯が胴部最大径やや上に１条巡る。胴部は接合部で外れており，面は摩耗している。表面全体も摩耗しており調整を観察できない。ところが，各破片のカドは摩耗していない。こうしたことから，胴部上半のみが表面の摩耗が進行する環境に置かれていた可能性が想定される。248は，Ｄ－４・５区の土坑のない空間にまとまって出土している。ラッパ状に開く口縁部から曲線的に胴部に続き，底部はやや長めの器形をしている。胴部最大径部分には，あまり丁寧な整形でない２条の刻目凸帯が巡る。さらに口縁部内面には，この時期には珍しい円形浮文が２か所に施文されている。本来は対向する４か所に施文されていたと考えられる。底部は欠損している。人為的結果の可能性もあるが確証をえられなかった。249は，Ｄ・Ｅ－４区の土坑のない空間に一括して出土した。やや肩がはり長胴で，底部にはわずかに平坦面が形成される器形である。胴部外面下半にはケズリ調整が観察される。底部内面には，成形時の押圧によると思われる凹みが認められる。この資料は，縦割りされた可能性がある。復元口径は約13.6㎝，胴径は約25.4㎝，器高約35.8㎝である。250は，土坑３と４と56の間の空間に一括して出土した。口縁端部に凹線状の仕上げが観察される資料で，底部は丸底である。刻目凸帯は胴部最大径よりやや上方に１条巡るが，刻

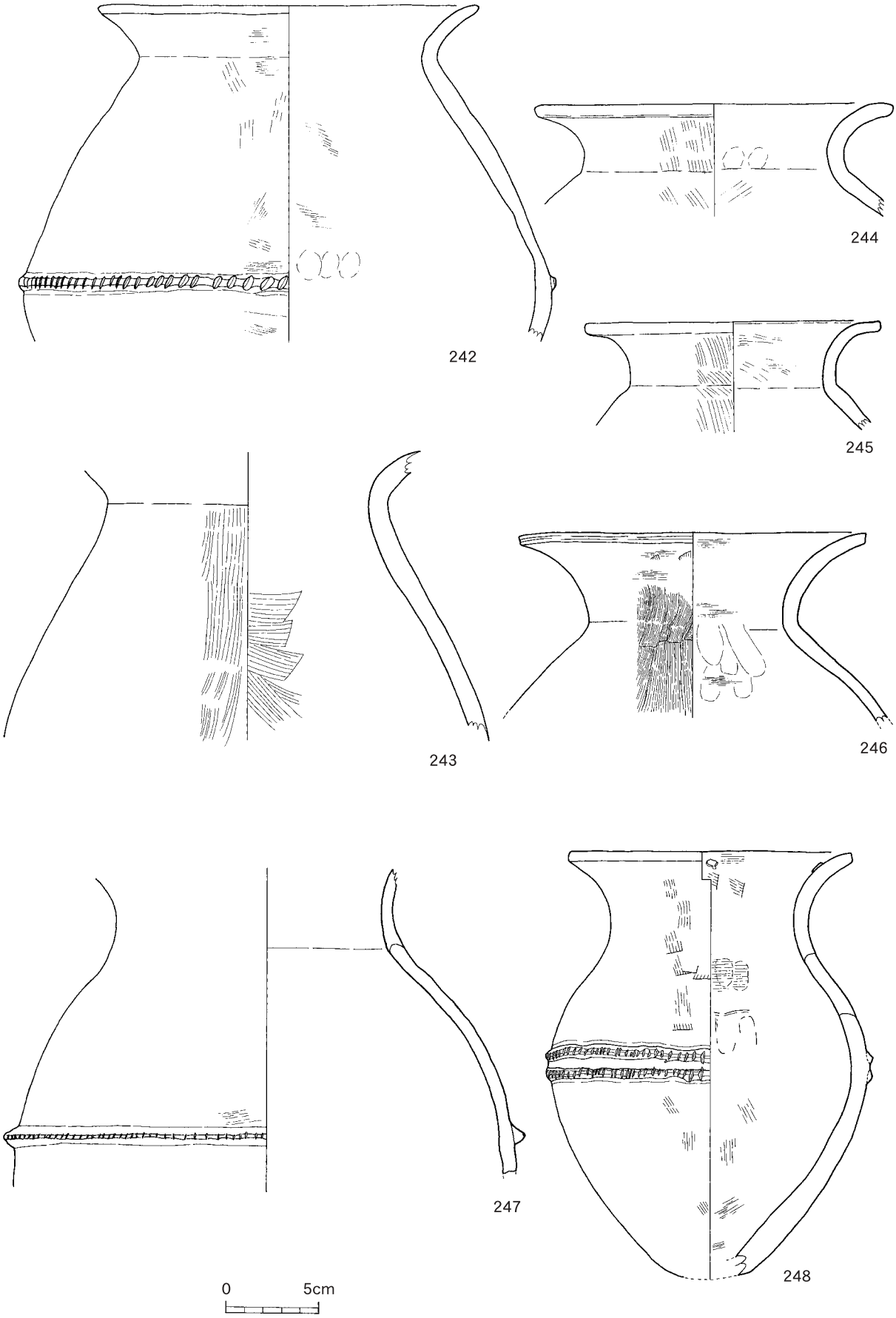
みは粗雑である。復元口径は約12.8㎝，胴径は20.8㎝，器高は約30.3㎝である。251は，土坑15上から一括して出土しているが，離れたＣ－６，Ｆ－11区からも破片が出土している。胴部に屈曲点が観察される特徴的な器形である。刻目凸帯の整形に伴い，このような器形になった可能性がある。底部は欠損しているが，穿孔されたのかは判然としない。凸帯の刻目は，工具を刺突するのでなく掻き取るように用いて施文されており，これも特徴的である。復元口径は約12.1㎝，胴径は約21㎝である。252は，土坑77と78の直近で一括して出土している。口縁部断面は略方形になると思われ，247と類似した器形である。ただ，接合面での分離は観察されず，表面の摩耗も特筆するほどではない。刻目凸帯も細く丁寧な仕上げである。253は，Ｅ－８・９区の土坑のない空間にまとまって出土していて，他の壺と出土地点が離れる。口唇部が上下のヨコナデ調整により凹線状に仕上げられ，口縁部の立ち上がりが強く，広口でなで肩の器形という特徴的な器形である。内面は指頭押圧ののちナデて仕上げられる。色調も，表面は明褐色で内部が淡黒褐色という，本遺跡ではめずらしい資料である。254は，土坑12と58と59の間の空間から出土した。完形品である。ケズリ調整により胴部下半がやや尖底状を呈する器形である。底部も丁寧な成形ではない。凸帯は最大径部分に１条巡るが，蛇行し刻目も一定しない。胴部上半はナデ調整と思われるが，工具の痕跡は残っていない。口径は約14.4㎝，胴径は約21.8㎝，器高は約31.4㎝である。255は，土坑５と43の間の空間を中心にＣ－３～６区にかけて出土した。胴部外面下半にケズリ調整が観察されるものの，全体が丸



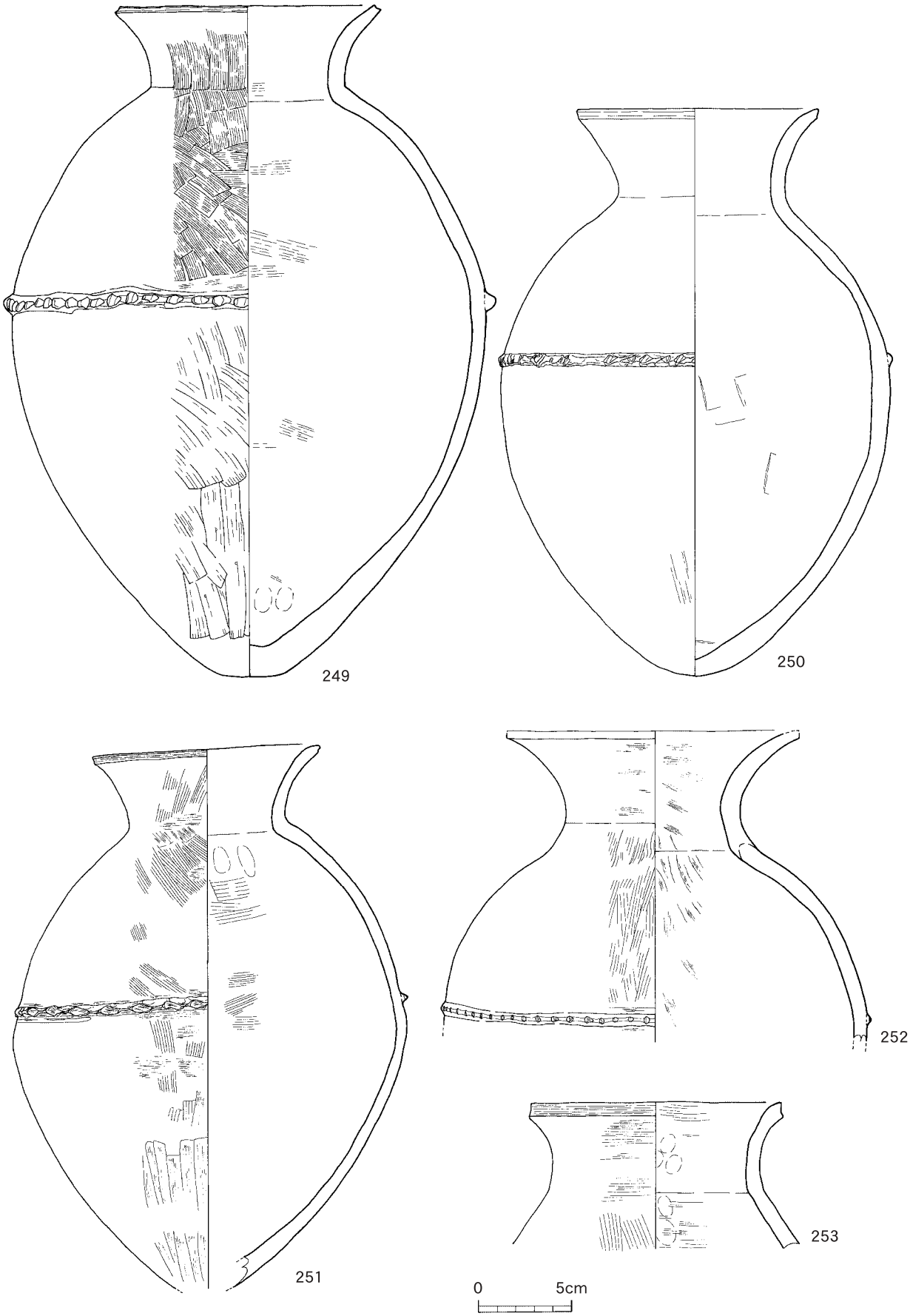
第82図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(8)



第83図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(9)

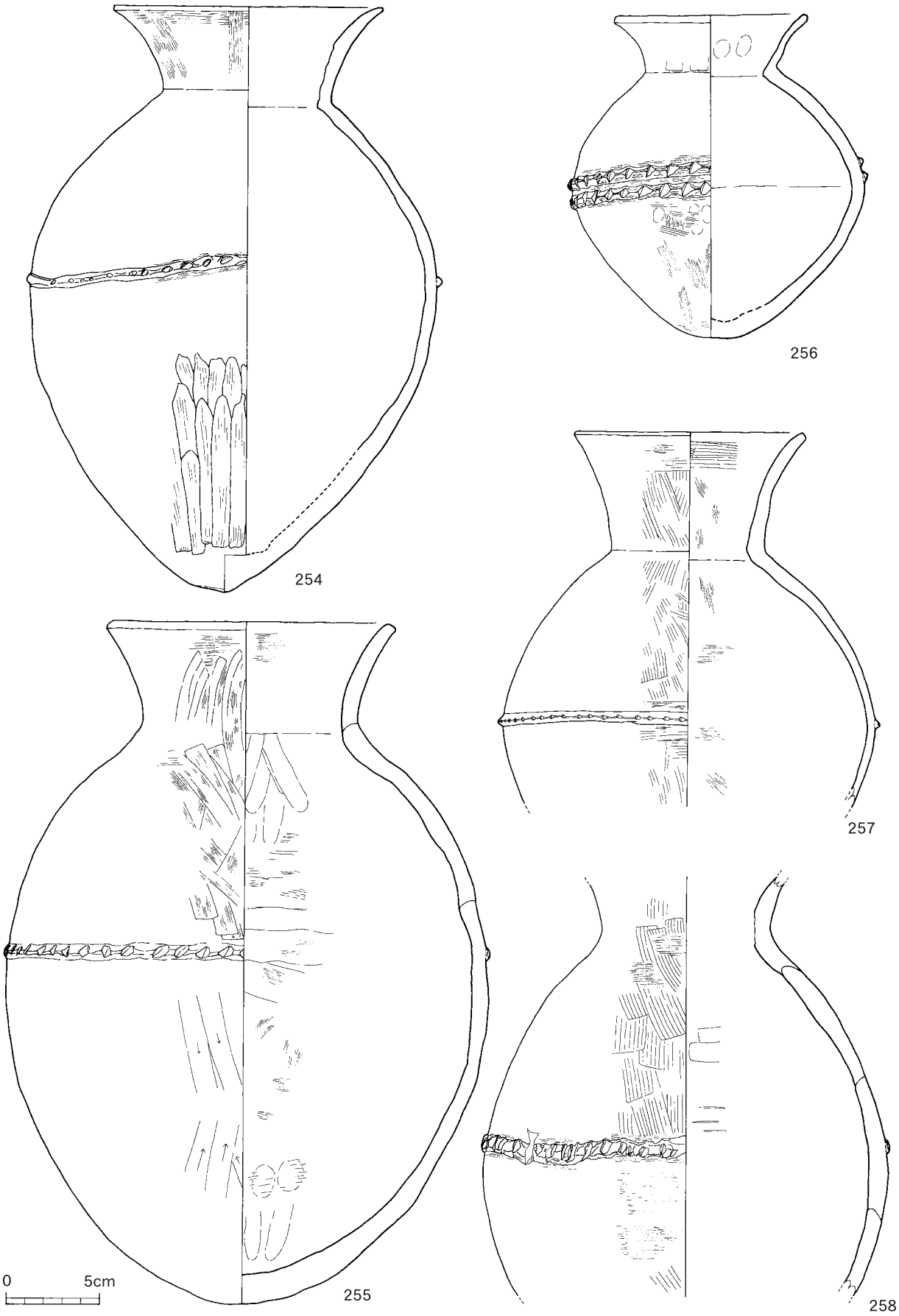


第84図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代⑽

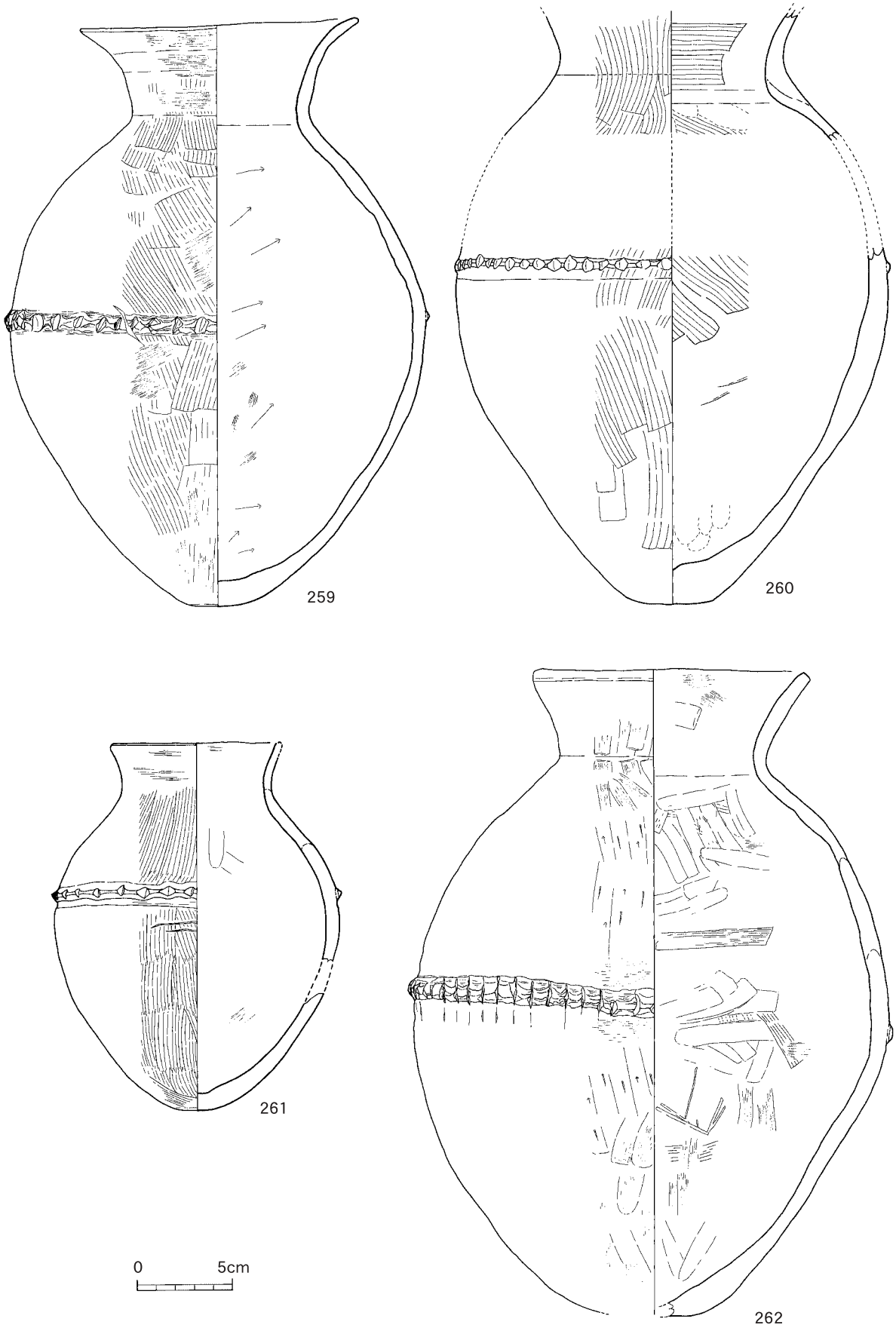


第85図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(11)

みを帯びた器形である。器面調整については，内外面ともに全体的に不規則方向に工具を動かしているが，口縁部下から頸部にかけてのみ，縦位に暗文状の強い調整痕を規則的に残している。復元口径約15.5㎝，胴径約26㎝，器高約36.7㎝，大きさの割に持ち重りのする資料である。256は，Ｃ・３区土器集中から出土した。完形品で，そろばん玉状の器形に外反する口縁部がつく。刻目凸帯は胴部最大径の部分に２条巡る。胴部外面下半はケズリ調整がなされているが，全体に丁寧な仕上げである。底部はほぼ丸底だが，外面には中心部のみ指で押した様な感じの平坦面が観察される。２条の凸帯に施された刻目は，一つの工具で同時に施文されている。257は，Ｃ－４・５区の土坑のない空間に一括して出土した。想定されるプロポーションに対し，口縁部がやや大振りなつくりである。器面はハケメ調整がよく残り器壁も比較的薄い。刻目凸帯は繊細な仕上げである。復元口径は約12.4㎝，胴径は約20㎝である。258は，土坑77と78の直近で出土している。胴部に比して頸部径がやや細く，強いなで肩の成形がなされているため，やや下ぶくれの器形となっている。刻目凸帯は，凸帯の厚みの割に大雑把な刻目が規則的に施されている。内面にもケズリ調整が観察される。さらに，この資料にも内外面が劣化しているのが認められる。復元胴径は約28㎝である。259は，土坑41の東隣にまとまって出土した。口縁部がヨコナデ調整のため折れ曲がるように外反している。全体的にはアーモンド形の成形で丸底である。胴部外面下半のケズリ調整は軽めに施され，むしろ内面が全体的にケズリ調整で仕上げられている。復元口径は約14.5㎝，胴径は約21.8㎝，器高は約30.5㎝である。260は，土坑78と84の間の空間にまとまって出土した。器壁の厚さが不揃いなのが特徴である。また，器面調整具に少なくとも２種類の工具を用いているのも観察できる。場所による使い分けなどは確認できない。底部には平坦面が形成される。復元胴径は約22.6㎝。261は，土坑44の南隣に一括して出土した。小形壺に分類してもよい大きさで，短い口縁部が若干外開きし，肩部は張らず胴部からわずかに平坦面が残る底部へ至る器形である。外面全体に縦位基調のハケメ調整がなされる。小さめの凸帯に間隔をあけて規則的に刻目が施されているが，凸帯の下位に，不規則に細沈線が付随しているのが観察される。詳細がわからないが，調整ではない。また，断面にしか図化しなかったが，胴部最大径部分よりやや下に外から穿たれた穿孔がある。さらにこの資料は，底部から凸帯下までの全体の１／４程度の範囲で表面が劣化しており，また底部はちょうど中央から「十文字」に割れているという現象が観察される，興味深い資料である。復元口径は約９㎝，胴径は約15㎝，器高約19.2㎝である。262は，Ｃ－５・６区の土坑のない空間に一括して出土した。成形，整形ともに粗い資料である。刻目凸帯のつくり，仕上げも粗い。底部は平坦面を形成すると想像されるが，欠損しており確証はない。欠損が穿孔による可能性はあるが，これも確証はない。復元口径は約14.6㎝，胴径約25.5㎝，器高約39㎝である。263～266は，頸部の長い資料をまとめた。263は，Ｃ－５区を中心にＣ－３～Ｄ－５区にかけて土坑群と重なるように散在して出土している。口縁部が強く外反し，頸部が長く，肩部との境は屈曲し，肩部は強く張る器形である。凸帯は，肩部から胴部への変換点付近に３条巡る。頸部にも，器面調整具を用いて沈線状の作り込みが認められる。器面調整は，古墳時代の成川式土器の壺にみられる技法と類似する。復元口径は約18㎝である。264は，土坑75の上を中心に出土している。小形壺に分類してもよい大きさである。口縁部が長くなると想像してこちらに分類した。胴部は刻目凸帯の部分で最大径となる丸みのあるそろばん玉のような器形である。調整痕が明瞭に残り，頸部のしぼり，胴部下半のケズリ調



第86図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代⑫

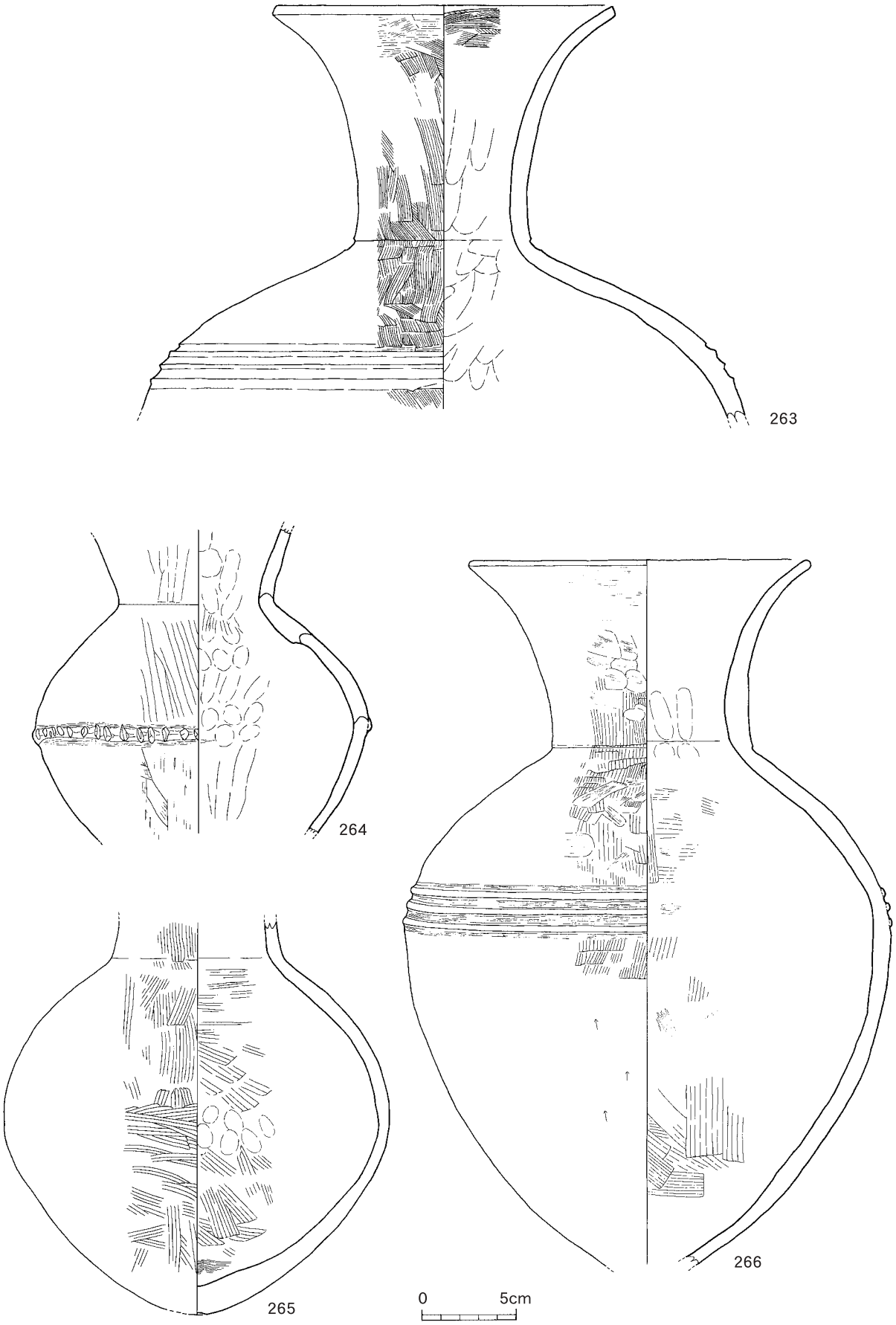


第87図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代⑬

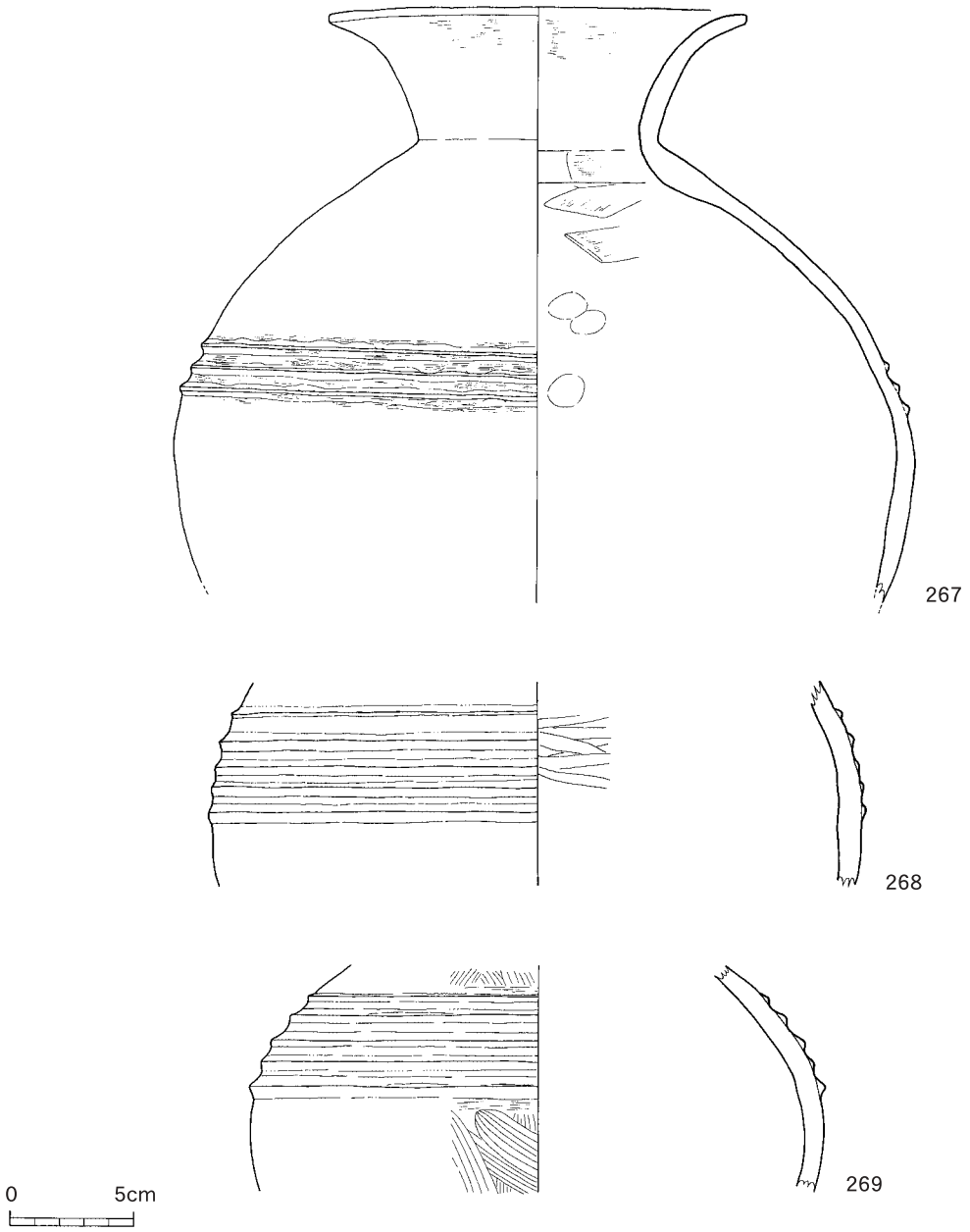
整，内面の指頭押圧が観察される。この資料も外面全体が劣化しており，特に頸部が著しい。破断面及び内面にはそのような劣化は認められない。復元胴径は約18㎝ である。265は，土坑80の南隣に一括して出土した。264と同じく丸みのあるそろばん玉のような器形である。外面は上半と下半で器面調整の方向を変えており，さらに最大径付近は横位にミガキのような仕上げを施している。頸部は胴部上半の調整を延長させて一気に仕上げている。内底面には成形時の押圧のような凹みがわずかに認められる。復元胴径は約20.4㎝である。266は，土坑17と19と51の間の空間にまとまって出土した。強く外反する口縁部と長い頸部から，胴部最大径がやや上方に偏る独楽のような胴部へいたる器形である。底部は欠損しており，穿孔された可能性がある。凸帯は最大径の直上に３条巡る。やや雑な仕上げだが断面台形を呈している。器面調整は成川式土器の技法に似る。復元口径約18.2㎝，胴径約25.9㎝である。267～269は球形の胴部に多条凸帯がめぐる資料をまとめた。267は，土坑14と37の南隣で一括して出土しているが，１点Ｅ－12区から出土した破片がある。胎土が精製されており，容量のわりに薄い器壁であるがもろい。やや雑な仕上げの凸帯は，断面三角形で刻目はないが表面が摩耗しているため詳細はわからない。復元口径は約16.8㎝，胴径は約29.7㎝である。268，269は，土坑77と78の間から出土している。５条の凸帯が巡る資料で，どちらの凸帯も整形は粗く，断面三角形であるが頂部は丸みを帯びる。吹上町（現日置市）の諏訪牟田遺跡（農業開発総合センター遺跡群）では，これらと類似した器形に「竜」のような線刻画を描いた資料が出土している。270～282は，部分的にしか図上復元できなかった資料をまとめた。270はＣ－５区土坑43西隣で，271～276は土坑77と78の間で，いずれも器面下位にケズリ調整が認められ，凸帯は細く，そこに施される刻目は規則的ながら粗い。273の刻目凸帯が，起点と終点をずらして巡らせているのは特徴的で，成川式土器の甕や壺に散見される技法である。277・278は，幅広凸帯の一部とも想定される資料であるが，確証は得られなかった。277は土坑66付近で，278はＣ－５区の土坑のない空間で出土している。279は土坑78と84の間の空間にまとまって出土し，260と出土地点が近い。280はＤ－４区の土坑のない空間を中心に出土するが，２点の破片が土坑36上から出土している。281は土坑８と９の南隣にまとまって出土する。

高杯は，可能性があるものを含め，４点出土している。

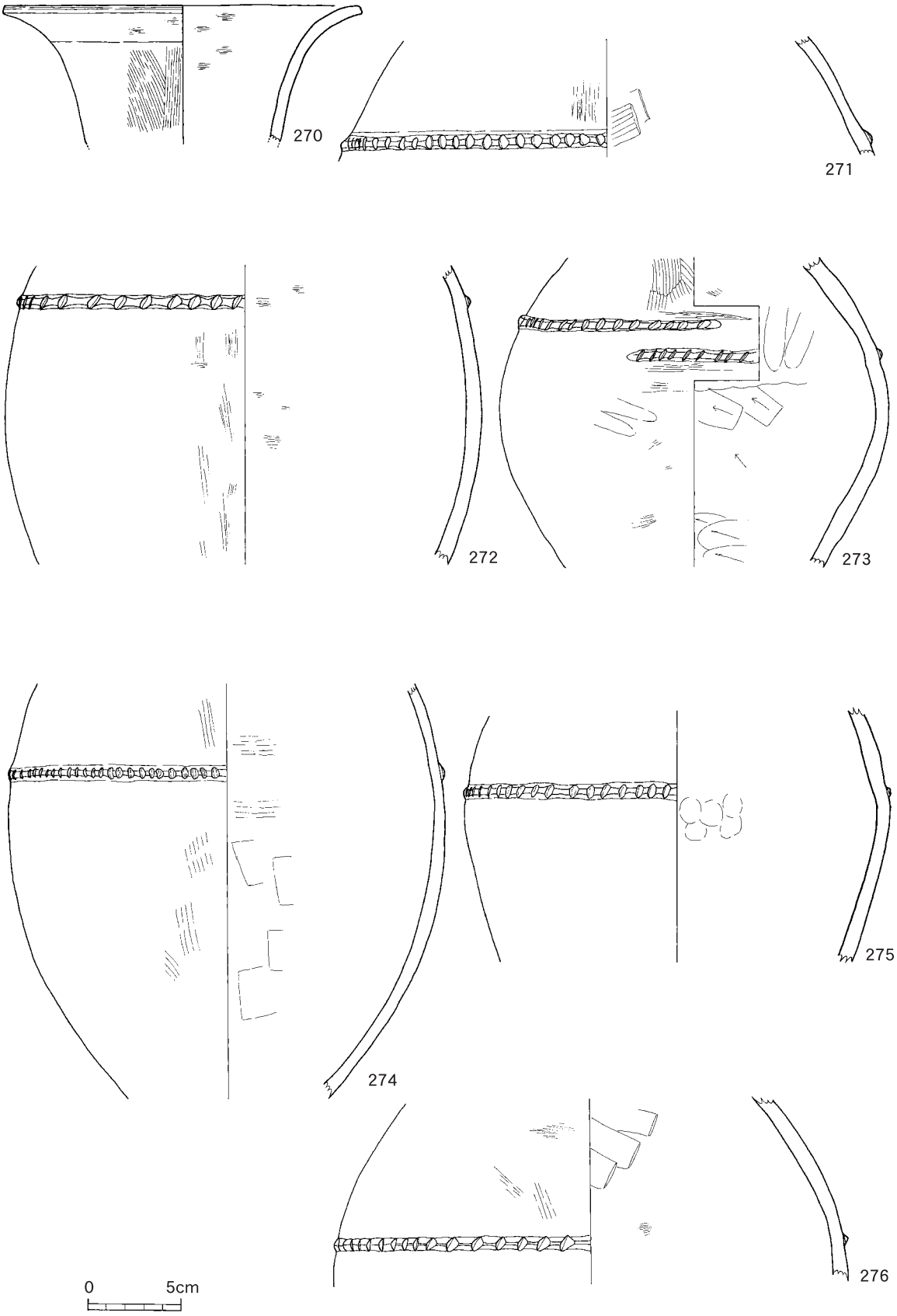
283は，土坑５と43の間の空間にまとまって出土した。ラッパ状に緩やかに大きく開く脚部に３か所，円形すかし文が施されている。坏部は胴部中央で屈曲し上半は外反し大きく開く。口唇部は断面方形に仕上げる。坏部の器壁は薄くやや脆弱である。丹塗の痕跡は確認できない。復元口径は36.4㎝，脚部径は19㎝，復元器高は24.2㎝である。284は，土坑３と４と43と56の間の空間にまとまって出土した。坏部のみ発見された。外面下半にはケズリ調整を確認できる。丹塗りの痕跡は確認できない。また，この資料はピンク系と灰系に発色する２種の胎土が使用されているのが確認できる。場所による明確な使い分けはされていないようなので，視覚効果を目的としていたのではなさそうである。そもそも，当時このように発色したかも不明ではある。復元口径は26㎝である。285，286は小形の高坏の脚部と思われる資料である。基部から「八」字形に開く。286には３か所に円形すかし文が施される。脚部の復元径は，それぞれ10.8㎝と9.6㎝である。



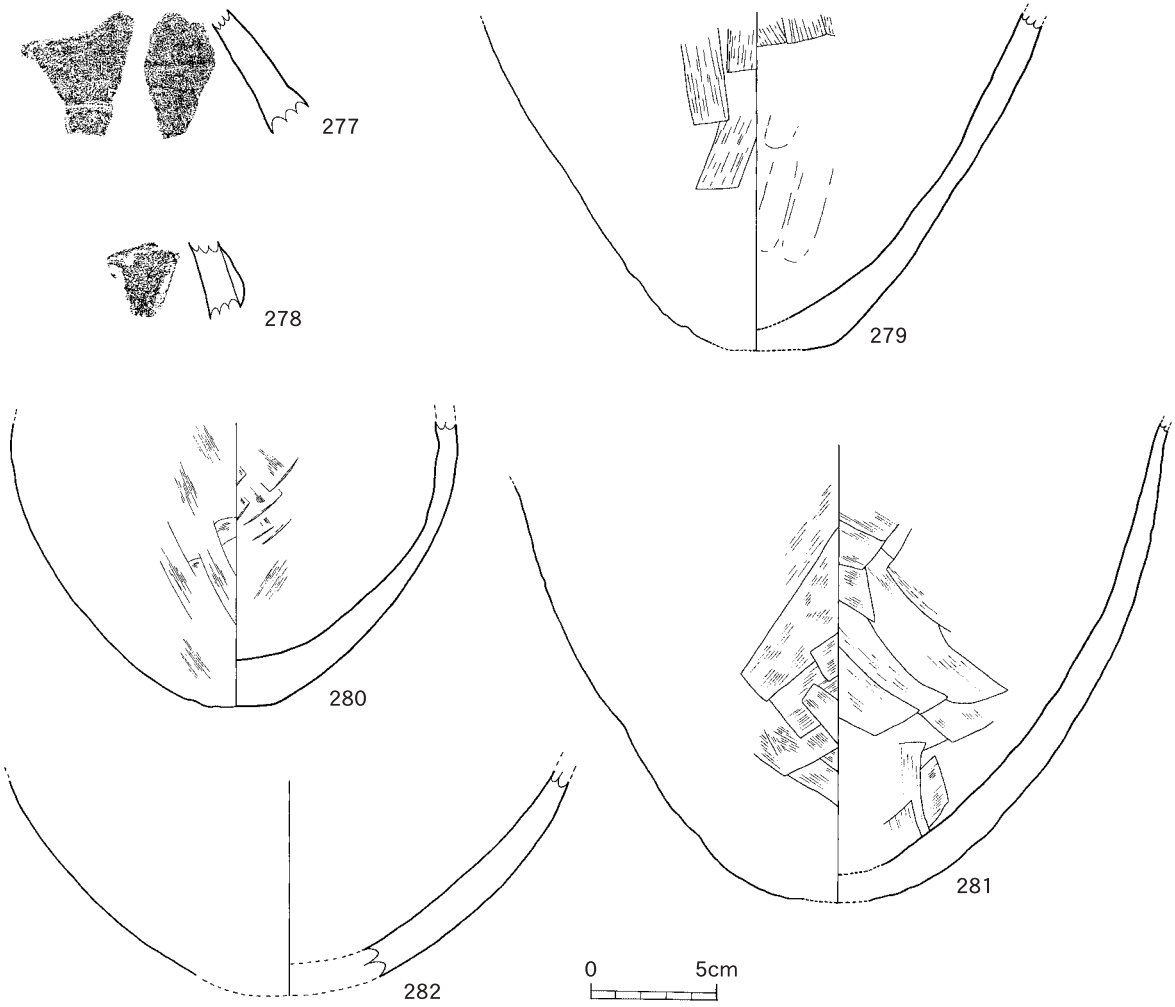
第88図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代⑭



第89図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代⑮



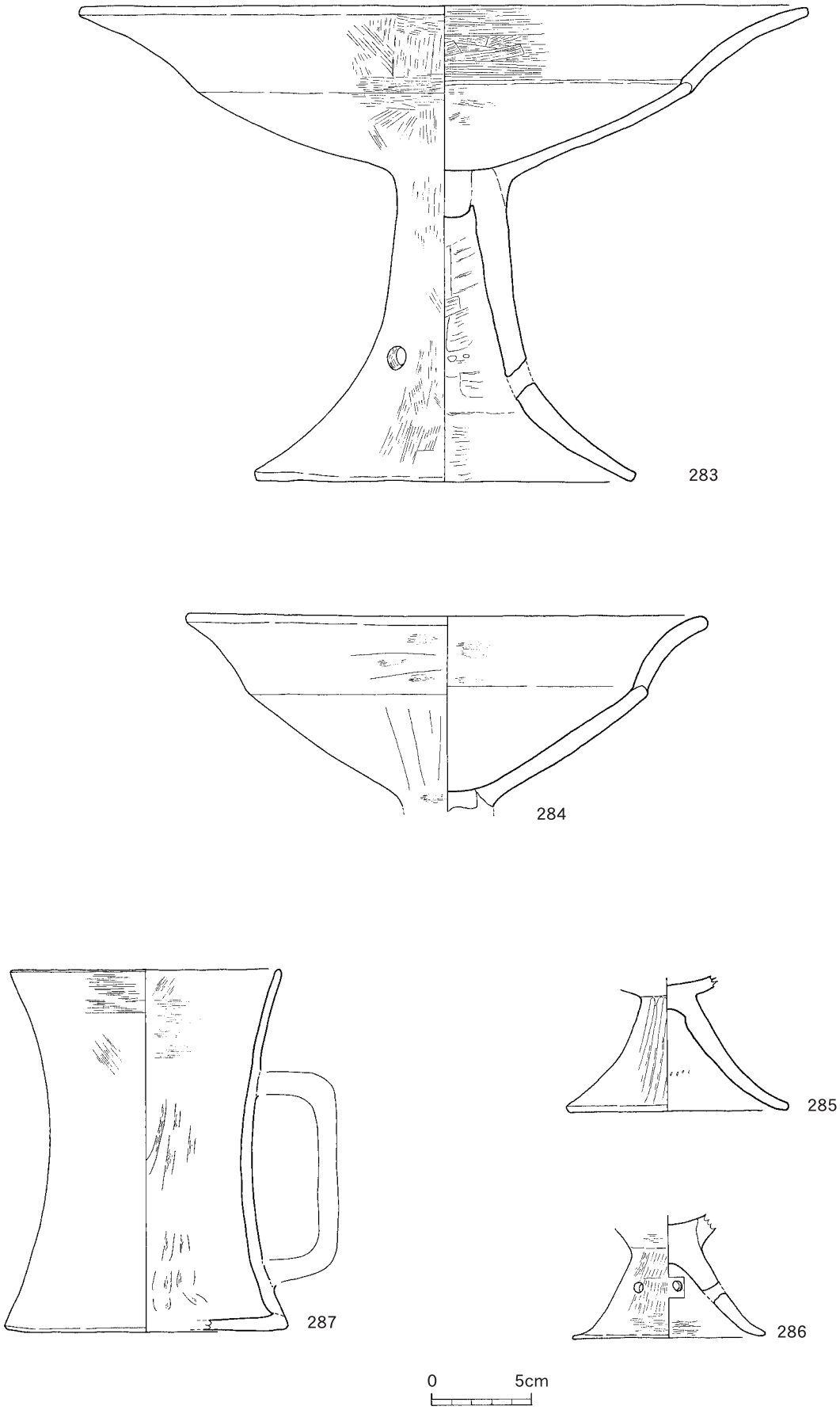
第90図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代⑯



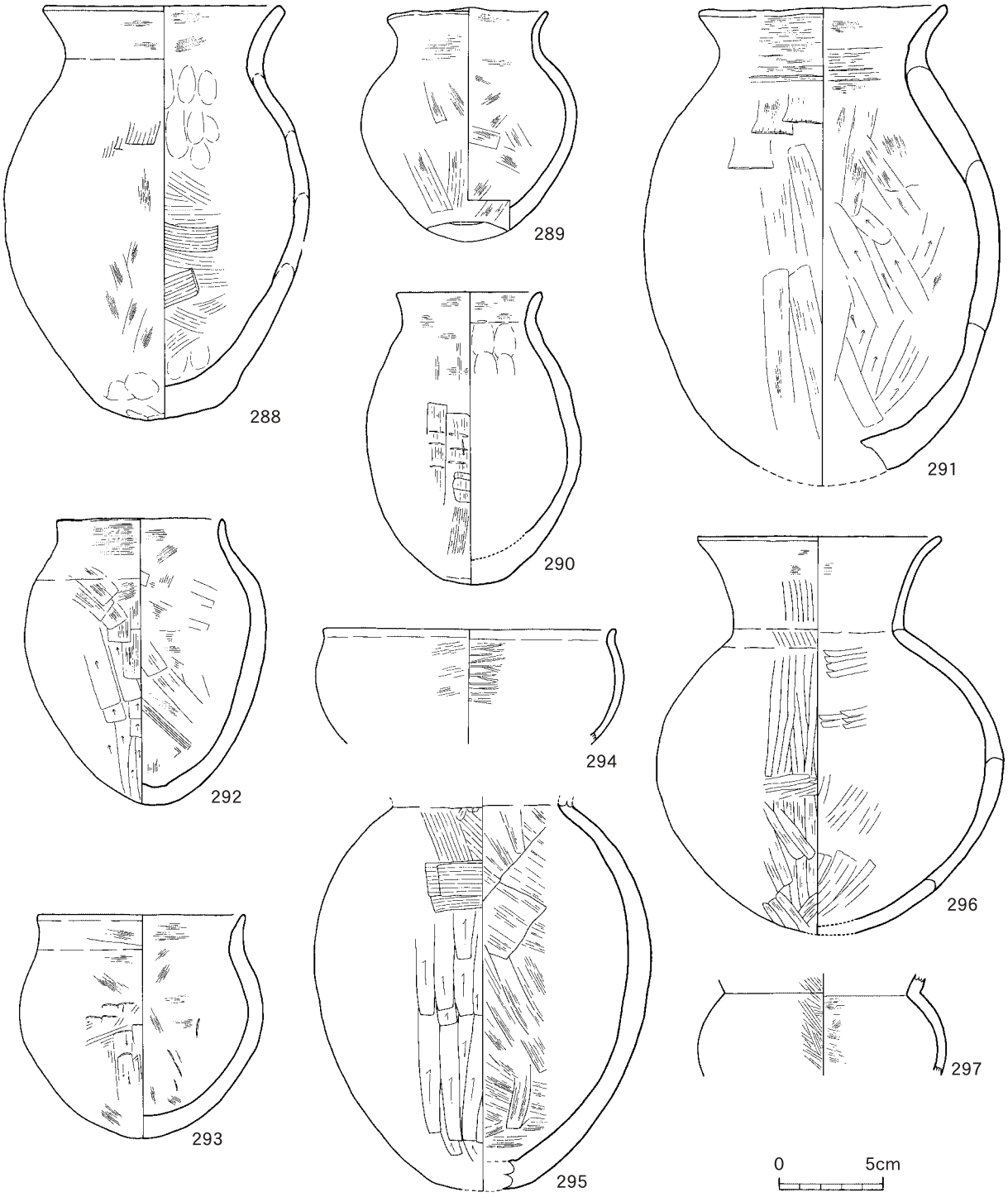
第91図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(17)

ジョッキ形土器（第92図）

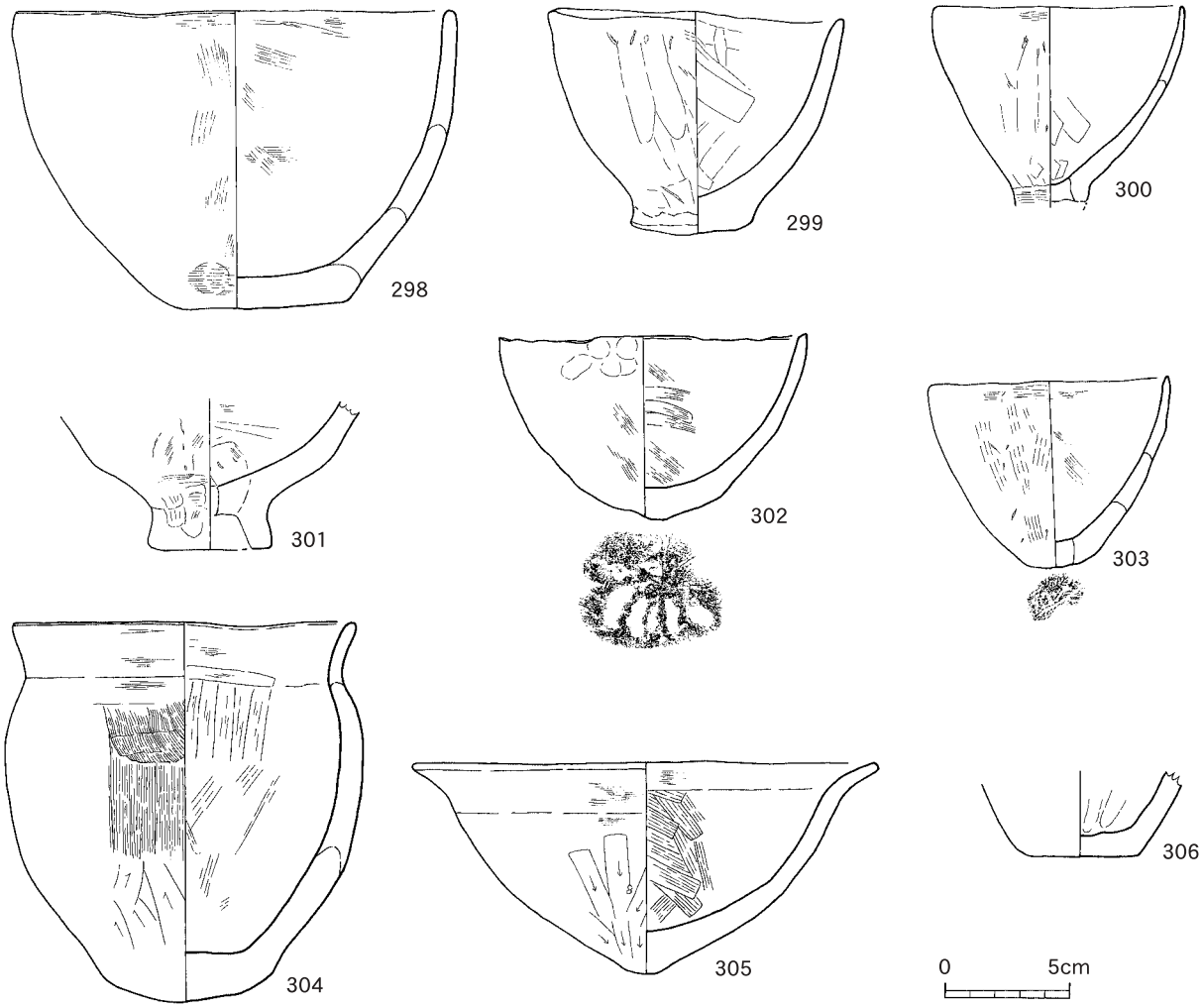
287のみ１点，土坑35と44の間の空間にまとまって出土した。弥生時代後期に，熊本県を中心としつつ広く西日本一帯に分布する免田式土器のなかの「ジョッキ形土器」と俗称される形態の資料である。淡黄白色の胎土で器壁は非常に薄い。内面にしぼりの痕跡をわずかに観察するが，器面全体が丁寧なナデで仕上げられている。把手部分は，接合部から剥離しており発見されなかった。復元口径は13.5㎝，底径は14.1㎝，器高は18.1㎝である。



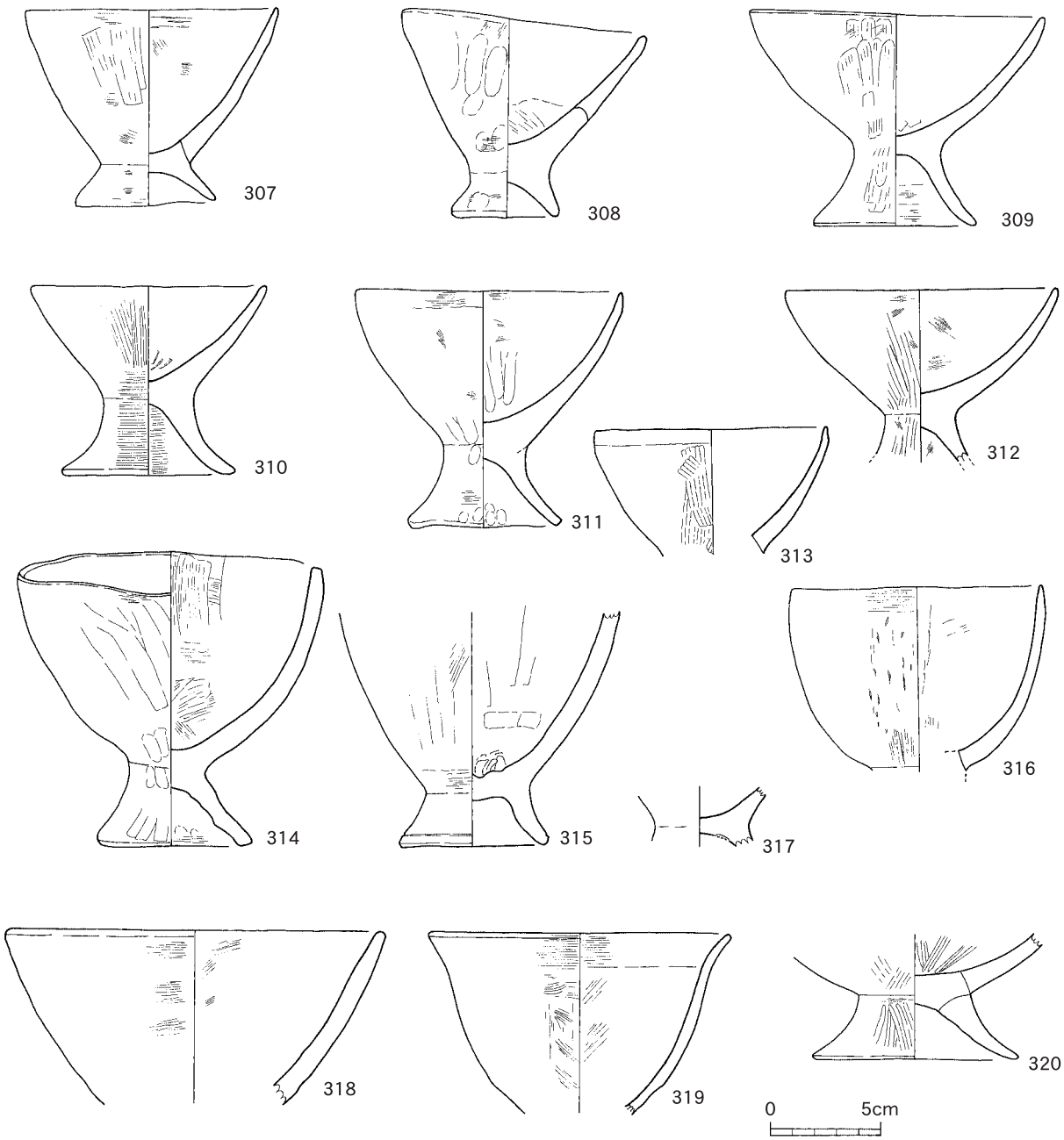
第92図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代⒅



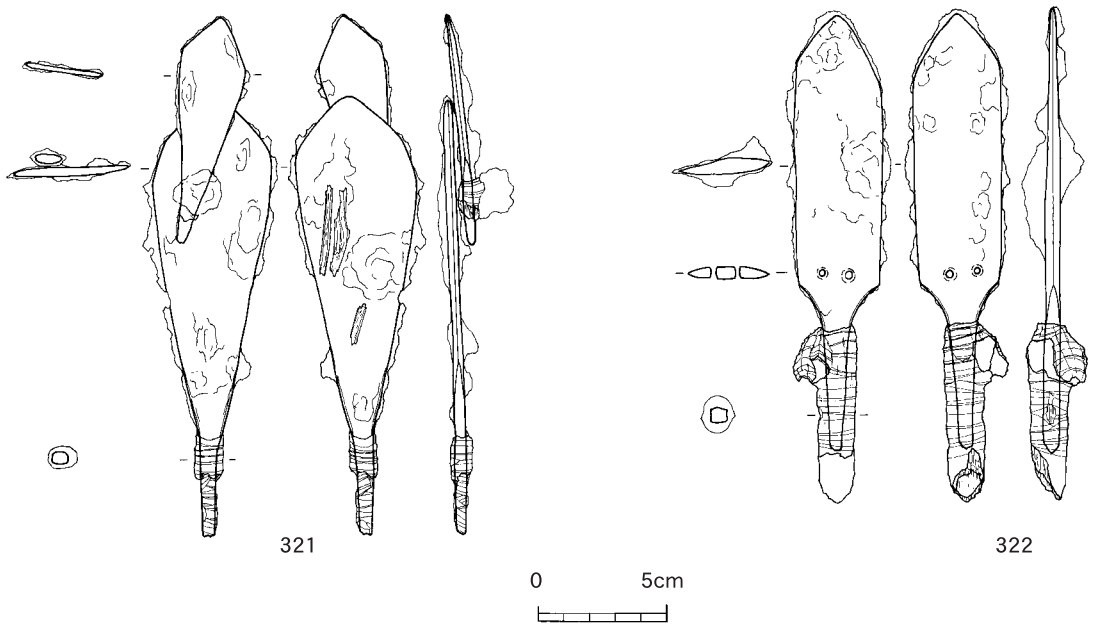
第93図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代⑲



第94図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代⑳



第95図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(21)



第96図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　弥生～古墳時代(22)

第６節　古代～中世以降の調査

⑴　遺　構

Ｃ－５区からＦ－９区にかけて，道跡と考えられる硬化面及び溝状遺構が２条検出された。時期については不明瞭な部分が多いが，古代から中世にかけての時期に該当する遺構であると考えられる。このうち，南北に約60m（幅約１m）に渡って検出された遺構からは，幾筋もの硬化面が検出された。第97図では，その状況を９段階で示した。幅約１mの中を，硬化面が幾筋も移動しているという状況がうかがえ，長期間にわたって使用された結果と考えられる資料である。

Ｅ，Ｆ－９区では，上記の道筋と交差する（上記の道筋より下位）長さ約20m（幅約１m）の道跡と考えられる溝状遺構が検出された。硬化面は確認されていない。

⑵　遺　物

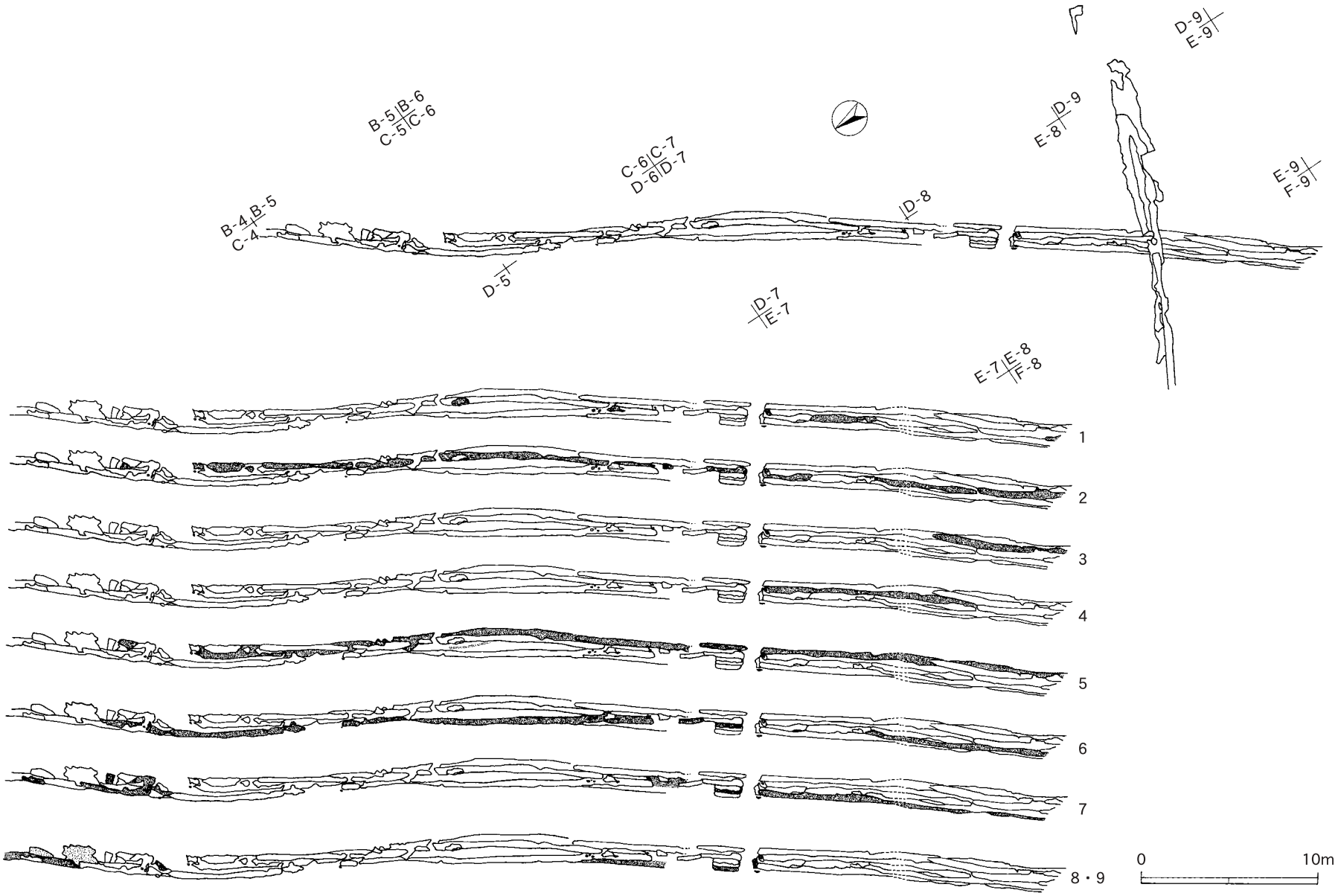
古代～中世以降の時期に該当すると思われる資料は，323～351である。型式学的特徴をもとに，古代に比定できると思われるもの（323～332）と中世以降に比定できると思われるもの（333～351）に分類した。

323・324は土師器の坏と思われる。どちらもＥ－８区から出土した。底部はヘラ切である。323は底面がやや楕円に成形されている。また見込み部分に粘土を指などでひとすくいかきとったような痕が認められる。325～328は土師器の碗と思われる。いずれも高台が高い傾向にある。326には体部に刻書のようにもみえる沈線が観察される。329は須恵器の壺の頸部と考えられる。想定される頸部径は約39㎝である。器面調整は，端部がわずかに観察できる。330～332は須恵器の壺の胴部と考えられる。331のみＣ－５区から出土しているが，器面調整や色調が類似するため同一個体と思われる。332には，外面全体に黄褐色の自然釉がかかっている。

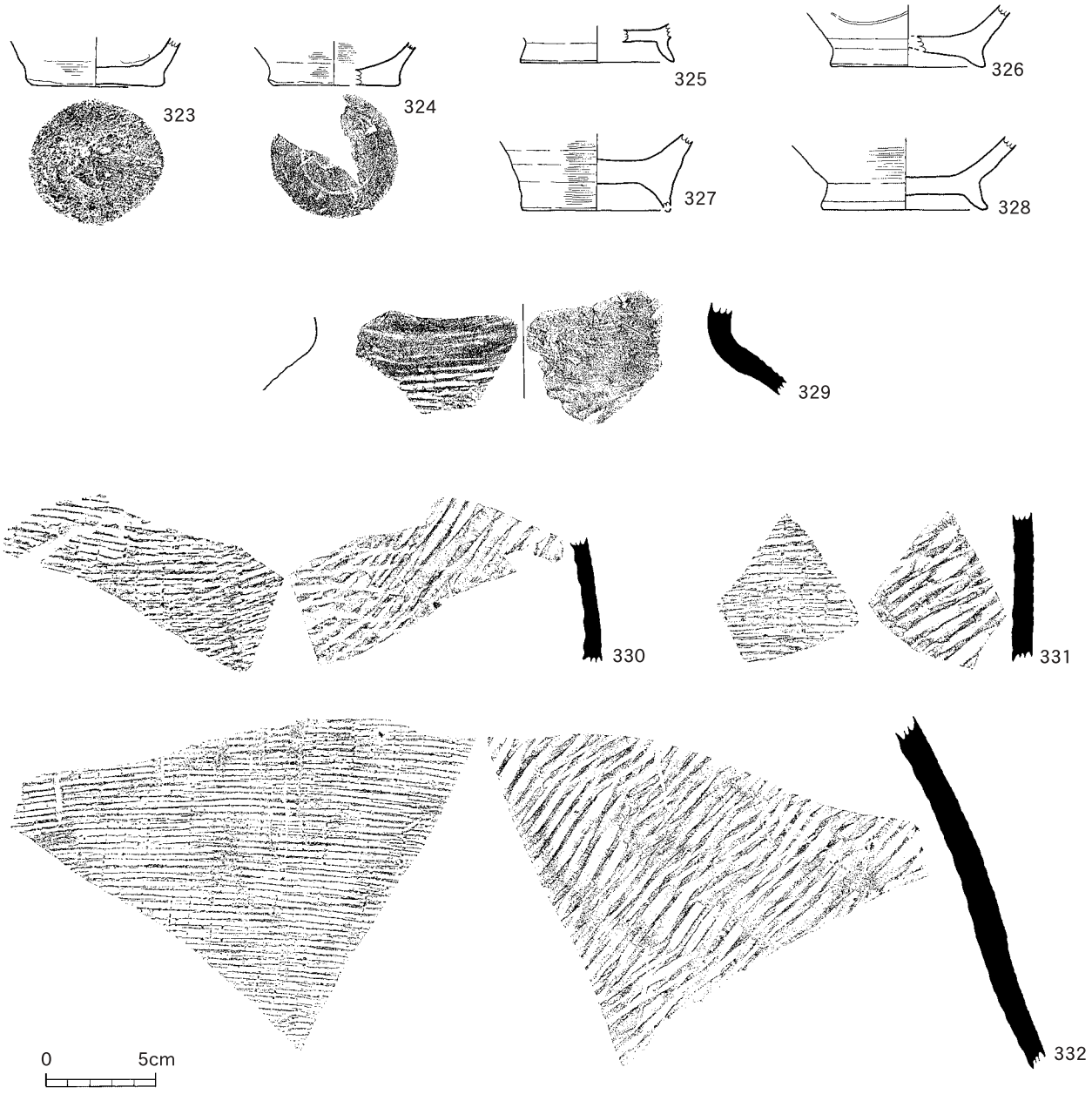
333～340・342は土師器の皿と思われる。いずれも口径は10㎝未満の大きさになると想定される。底部は糸切りである。341は坏の可能性もある。335は胎土色が淡紅色をしており，本遺跡のなかでは特徴的である。343は擂鉢の注口部の資料である。注口はあまり強く引き出されていないが，小片のため詳細はわからない。344も擂鉢である。さほど摩耗していない。

345～350は中世磁器をまとめた。346の白磁皿が若干古いと思われるが，他はおおよそ13～14世紀に比定できるかと思われる。346の白磁皿は，内面に灰釉が付着しているほか，目跡も観察される。345は端反碗，347は劃花文碗，348は竜泉窯系碗で半肉彫の鎬連弁文の一部を観察できる。貫入も認められる。349は稜花皿と思われる。これも貫入を観察できる。350は竜泉窯系の草花文碗と思われる。高台見込みは釉を掻き取っている。

351は近世の白磁と思われる。碗か皿か判断できなかった。



第97図　堂園遺跡Ａ地点出土道跡平面図



第98図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　古代～中世以降(1)

第99図　堂園遺跡Ａ地点出土遺物実測図　古代～中世以降(2)

第７節　分析・同定

１　鳴野原遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

川辺町に所在する堂園遺跡Ａ地点は，薩摩半島南部を流れる万之瀬川中流域右岸に分布するシラス台地上に位置する。今回の発掘調査では，弥生時代のものとされる甕などの遺物や土坑などの遺構が検出されている。本報告では，これら確認された遺物や遺構を対象として自然科学分析を行うことにより，これらの性格や年代に関わる資料の作成を目的とする。

具体的には，１）出土状況から，何らかの遺構を形成していた可能性があるとされた弥生土器の甕内土壌およびその周辺土壌を対象としてリン・カルシウム分析を行い，動植物の痕跡の有無を検討することにより墓壙等の可能性を探る，２）土器内の土壌について植物珪酸体分析を行うことにより，栽培植物等の存在など内容物の検討をする，３）土坑埋積土より出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行うことにより，土坑の年代資料を得る，の以上３課題の調査分析を行う。

⑴　試　料

リン・カルシウム分析の対象とされた試料は，Ｓ－１～Ｓ－６までの６点である。これらのうち，Ｓ－１は，弥生土器の甕の底内部にあった土壌であり，それ以外の試料は，その土器の周辺の土壌から採取されている。その中で，Ｓ－２はＳ－１の採取された土器片の脇から採取されており，Ｓ－３は同土器片の直下から採取されている。また，Ｓ－４は，土器の破片の散乱する範囲の最外部から採取され，Ｓ－５およびＳ－６は，土器片の散乱する範囲よりも外側の土壌から採取されている。

植物珪酸体分析の対象とされた試料は，Ｃ－４区Ⅱ層より出土した土器№4709内の土壌とＣ－３区Ⅱ層より出土した土器ＫＤ－２内土壌の２点である。

放射性炭素年代測定の試料は，Ｃ－９区で検出された土坑７の埋土から抽出された炭化材１点である。なお，炭化材の樹種はクリである。

⑵　分析方法

①リン・カルシウム分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法，カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法でそれぞれ行った（土壌養分測定法委員会，1981）。以下に操作工程を示す。

試料を風乾後，軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃，５時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し，はじめに硝酸（HNO_3）約５㎖を加えて加熱分解する。放冷後，過塩素酸（$HClO_4$）約10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後，水で100㎖に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し，リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し，干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5㎎/ｇ）とカルシウム含量（CaO㎎/ｇ）を求める。

②植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理，沈定法，重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し，カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下，短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ），およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定し，計数する。

結果は，検出された種類とその個数の一覧表で示す。

③放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て，ＡＭＳ法により行った。なお，放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお，暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986－2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い，いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

⑶　結　果

①リン・カルシウム分析

結果を表１に示す。リン酸含量は，４～５㎎/ｇの範囲に収まり，試料間で顕著な差異は認められない。ただし詳細にみれば，Ｓ－１，Ｓ－２で高く，Ｓ－３～Ｓ－５でやや低い傾向が窺える。一方，カルシウム含量は，１～４㎎/ｇの範囲を示すが，採取位置との関連は認められない。

②植物珪酸体分析

結果を表２に示す。各試料からは，保存状態の悪い植物珪酸体がわずかに検出されるに過ぎない。その種類は，タケ亜科，ススキ属を含むウシクサ族などである。またイネ科起源の他に，樹木起源珪酸体の第Ⅳグループ（近藤・ピアスン，1981）も認められる。なお，イネ属などの栽培植物に由来する植物珪酸体は全く認められない。

③放射性炭素年代測定

結果を表３に示す。試料の測定年代（補正年代）は，約2300年前である。また，較正暦年を表４に示す。およそ紀元前４世紀～３世紀の年代を示す。

⑷　考　察

①遺構の性格について

土壌中に普通に含まれるリン酸量，いわゆる天然賦存量については，いくつかの報告事例があるが（Bowen，1983；Bolt・Bruggenwert，1980；川崎ほか，1991；天野ほか，1991），これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5㎎/ｇ程度である。また，人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5P_2O_5㎎/ｇ（川崎ほか，1991）という報告例があり，当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0P_2O_5

㎎/ｇを越える場合が多い。一方，カルシウムの天然賦存量は普通１～50CaOmg/g（藤貫，1979）といわれ，含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。

今回の試料のうち，土器内土壌のＳ－１は，上述したリン酸含量の天然賦存量をやや上回っているが，同時に土器外土壌である他の試料も同量程度のリン酸含量を有している。したがって，今回の結果は，土器内にリン酸の富化があったことを積極的に支持するものではない。ただし，リン酸含量では採取位置と含量との間に弱いながらも相関が窺えることから，現時点では，土器内におけるリン酸の富化を全く否定することもできない。なお，カルシウムの富化については，今回の結果からは読み取ることはできない。今後，類例が検出されることがあれば，その分析により，今回の結果の再評価も可能と考えられる。

②土器内土壌について

№4709およびＫＤ－２の土器内埋土からは，栽培植物に由来する植物珪酸体が全く認められなかった。今回の結果を見る限り，土器内での栽培植物の有無は明確にならない。なお，土器の埋積する以前に内容物が外部へ持ち出された場合には痕跡が残りにくいと考えられる。

当時の栽培植物については，今後さらに当該期の堆積物を対象とした種実遺体や花粉化石，植物珪酸体の有無を調査して検討する必要があろう。また植物が燃焼した後の灰に栽培植物であるイネ属などの珪化組織片が残されている場合もあり（例えば，パリノ・サーヴェイ株式会社，1993），当該期の炉跡の灰を対象とした分析調査も有効であろう。

③土坑の年代について

今回得られた年代については，その暦年を単純に森岡（2001）などが示している弥生時代の時期区分に当てはめれば，弥生時代前期に相当する。しかし，放射性炭素年代の精度およびその暦年への較正の精度も考慮すれば，放射性炭素年代測定の結果のみにより，100年単位で評価の変わる弥生時代の遺構の年代を確定することはできない。今後も測定事例を蓄積するとともに，土器型式その他の考古学資料から総合的に評価する必要があると考えられる。

【引用文献】

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信，1991，中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，28－36.

Bowen，H.J.M.，1983，環境無機化学－元素の循環と生化学－．浅見輝男・茅野充男訳，博友社，297p.

Bolt，G.H.・Bruggenwert，M.G.M,1980，土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，学会出版センター，309p.

土壌養分測定法委員会編，1981，土壌養分分析法．養賢堂，440p.

藤貫　正，1979，カルシウム．地質調査所化学分析法，52，57－61.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久，1991，九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省　農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，23－27.

近藤　錬三・ピアスン　友子，1981，樹木葉のケイ酸体に関する研究（第２報）双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について．帯広畜産大学研究報告，12，217－229.

近藤　錬三・佐瀬　隆，1986，植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，31－64.

京都大学農学部農芸化学教室編，1957，農芸化学実験書　第１巻．産業図書，411p.

森岡秀人，2001，弥生時代遺跡の年代．季刊　考古学，77，22－26.

農林省農林水産技術会議事務局監修，1967，新版標準土色帖.

パリノ・サーヴェイ株式会社，1993，自然科学分析からみた人々の生活⑴．慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡　第１巻　総論」，慶應義塾，347－370.

ペドロジスト懇談会，1984，野外土性の判定．ペドロジスト懇談会編　土壌調査ハンドブック，博友社，39－40.

表1. リン・カルシウム分析結果

試料名	地点	備考	土性	土色	P2O5(mg/g)	CaO(mg/g)
S-1	土器内	弥生甕内底部	LiC	10YR1.7/1 黒	4.78	1.41
S-2	土器周辺		LiC	10YR2/1 黒	4.97	2.74
S-3	土器周辺	弥生甕底直下	LiC	10YR2/1 黒	4.18	1.40
S-4	土器周辺		LiC	10YR2/1 黒	4.12	4.13
S-5	土器周辺		LiC	10YR2/1 黒	3.98	1.21
S-6	土器周辺		LiC	10YR1.7/1 黒	4.80	3.06

注. (1)土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖
(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。
(2)土性:土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編, 1984)の野外土性による。
LiC・・・軽埴土(粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%)

表2. 植物珪酸体分析結果

種　類	土器内 試料名 No.4709	土器内 KD-2
イネ科葉部短細胞珪酸体		
タケ亜科	-	1
ウシクサ族ススキ属	2	-
不明キビ型	6	-
不明ヒゲシバ型	-	-
不明ダンチク型	-	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
タケ亜科	4	-
ウシクサ族	7	2
不明	10	4
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	8	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体	21	6
総　計	29	7
樹木起源珪酸体		
第Ⅳグループ	15	11

表3. 放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	樹種	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
C-9区　土坑7埋土内	炭化材	クリ	2280± 40	-31.05	2380± 40	IAAA-41882

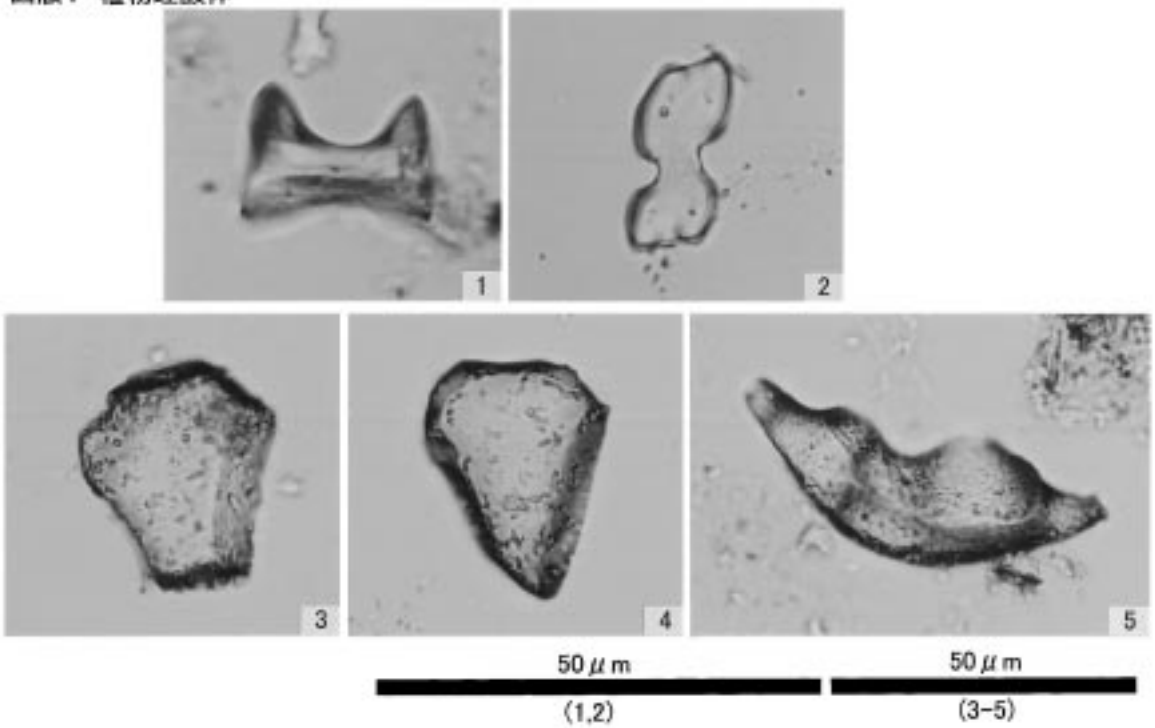
1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表4. 暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)			相対比	Code No.
C-9区　土坑7埋土内	2278± 41	cal BC 397 - cal BC 357	cal BP 2,347 - 2,307		0.569	IAAA-41882
		cal BC 285 cal BC 254	cal BP 2,235 - 2,204		0.306	
		cal BC 249 cal BC 234	cal BP 2,199 - 2,184		0.126	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0
(Copyright 1986-2005M Stuiver and PJ Reimer)を使用
計算には表に示した丸める前の値を使用している。
付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

図版1　植物珪酸体



1．タケ亜科短細胞珪酸体(No.4709;土器内)
2．ススキ属短細胞珪酸体(No.4709;土器内)
3．タケ亜科機動細胞珪酸体(No.4709;土器内)
4．ウシクサ族機動細胞珪酸体(No.4709;土器内)
5．樹木起源第Ⅳグループ(No.4709;土器内)

2　堂園遺跡土坑墓出土顔料の科学分析

永濱　功治（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

堂園遺跡Ａ地点第Ⅱｂ層上面より検出された土坑群において，その数基の埋土中より赤色顔料が出土し，遺構の性格を決定する上での重要な資料となった。顔料が出土した土坑は第Ⅱｂ層上面検出土坑65基のうちの７基で，埋土下位～中位にかけて散在するように微量，検出された。これまで鹿児島県内で出土した赤色顔料の種類は，Fe(鉄）を主成分としたベンガラとHg(水銀）を主成分とした水銀朱の２種類に大きく分かれ，更にベンガラは中空円筒を呈したパイプ状ベンガラとそれ以外に区分して検出されている。パイプ状ベンガラは崖端の湧水部や水田などに沈殿した鉄細菌を燃焼した結果得られたものと考えられており，※1この鉄細菌をレプトスリックス（Leptothrix ochracea)という。レプトスリックスは径約１μmの円筒形で長管状の鞘中に縦に１列に並んで糸状体を形成する。鞘は鉄及びマンガンの酸化物を沈着し，赤褐色を呈する。※2パイプ状ベンガラはこの鉄細菌を元に赤色顔料として使用したと考えられ，中にケイ藻が観察されることもある。※3

本分析ではこの土坑群より出土した赤色顔料を鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の走査型電子顕微鏡（日本電子製　5300LV）で観察し，さらにエネルギー分散型Ｘ線分析装置（日本電子製JED2001）により含有する成分の特定を試みた。

測定条件は加速電圧20.00kV，取り出し角度26.57°，作動距離20.00㎜，有効時間100秒で測定し，その結果を表１に示す。試料№536は，Hg(水銀）が検出されており，土坑№12より出土した赤色顔料は水銀朱と同定される（図４）。試料№536以外はFe(鉄）が検出されており，土坑№５と55より出土したものは走査型電子顕微鏡によると中空円筒のパイプ状を呈したパイプ状ベンガラと同定される（図１，５，７）。土坑№４，18，21，23より出土したものは電子顕微鏡で特徴的な形状を確認できなかったが，Fe(鉄）が検出されたため広義のベンガラと推定される。

堂園遺跡Ａ地点は山ノ口土器や中津野式土器等を主体とする弥生時代中期から後期，および古墳時代初頭の遺跡であり，約500m程離れた南側ではほぼ同時期の竪穴住居跡が25軒検出され，集落と墓域としてのまとまりが注目されている。土坑からは人骨や木棺，副葬品などの遺物が無かった？ため，赤色顔料の検出が遺構の性格を決定する手がかりになった。この時期の土坑群から赤色顔料が出土し，土坑墓としてその性格を捉えることができたのは一つの成果といえる。

※１　岡田文男　1997「パイプ状ベンガラ粒子の復元」日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨
※２　小島貞男他編　1995「環境微生物図鑑」講談社
※３　鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005『城ケ尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（60）

表１　堂園遺跡土坑群出土赤色顔料分析結果一覧表

分析No.		土坑No.	ＳＥＭ	ＥＤＸ	種　類
553		4	－	Fe	ベンガラ
547	1	5	パイプ状粒子	Fe	パイプ状ベンガラ
547	2	5	パイプ状粒子	Fe	パイプ状ベンガラ
556		5	パイプ状粒子	Fe	パイプ状ベンガラ
536		12	－	Hg	水銀朱
552		18	－	Fe	ベンガラ
554		21	－	Fe	ベンガラ
550	1	23	－	Fe	ベンガラ
550	2	23	－	Fe	ベンガラ
550	3	23	－	Fe	ベンガラ
550	4	23	－	Fe	ベンガラ
578		55	パイプ状粒子	Fe	パイプ状ベンガラ

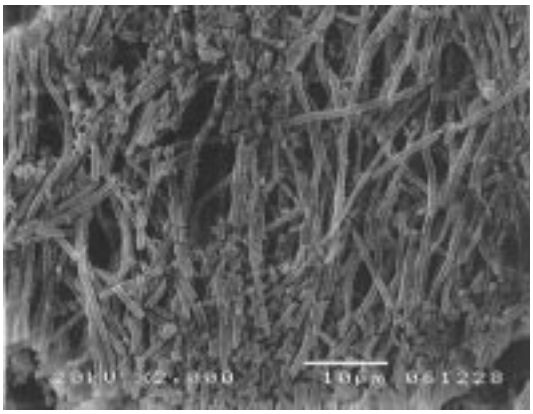


図１　土坑５（試料No.547-1）

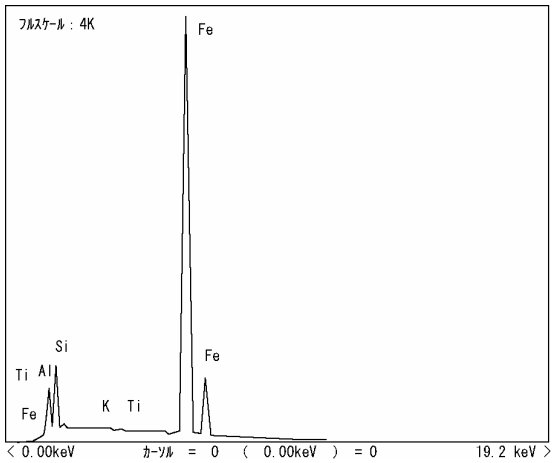


図２　土坑５（試料No.547-1）

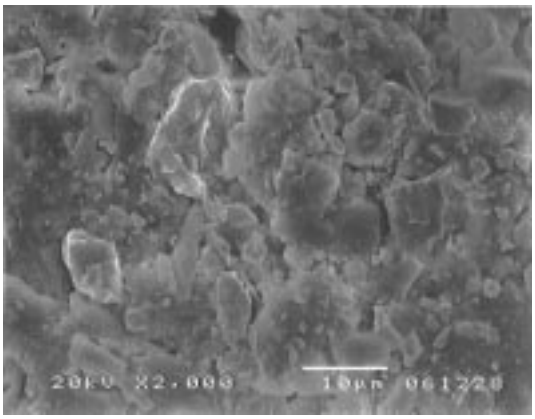


図３　土坑12（試料No.536）

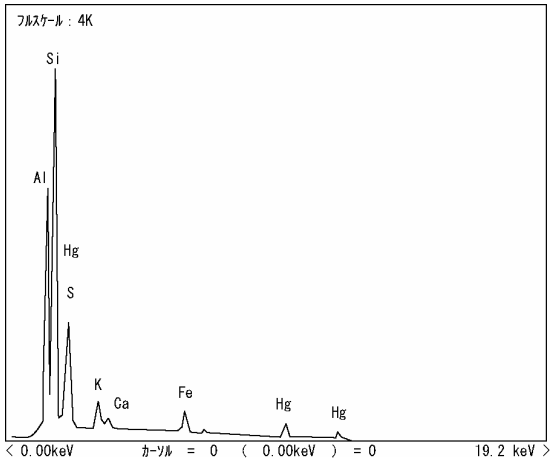


図４　土坑12（試料No.536）

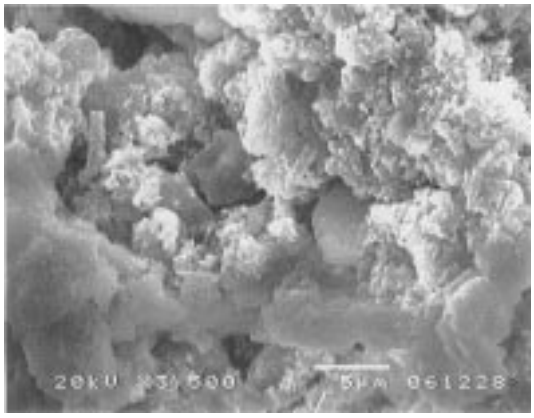


図５　土坑23（試料No.550-2）

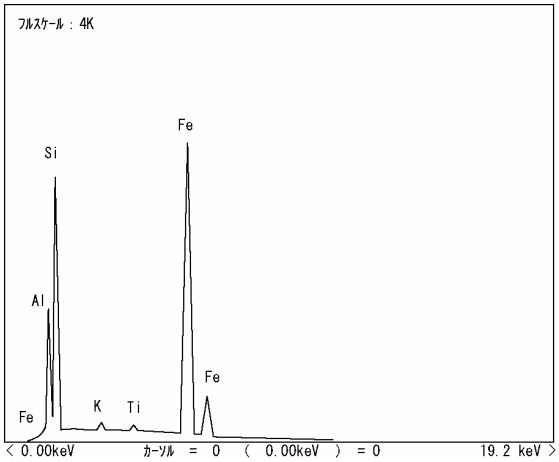


図６　土坑23（試料No.550-2）

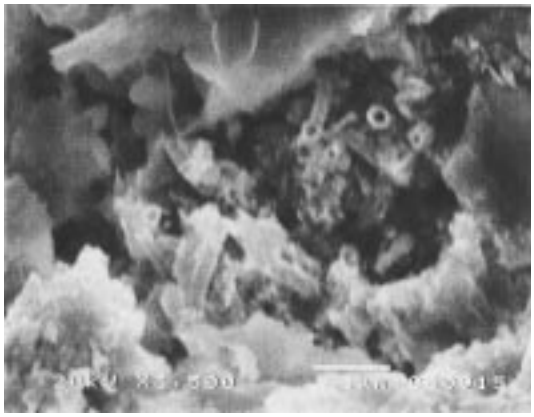


図７　土坑55（試料No.578）

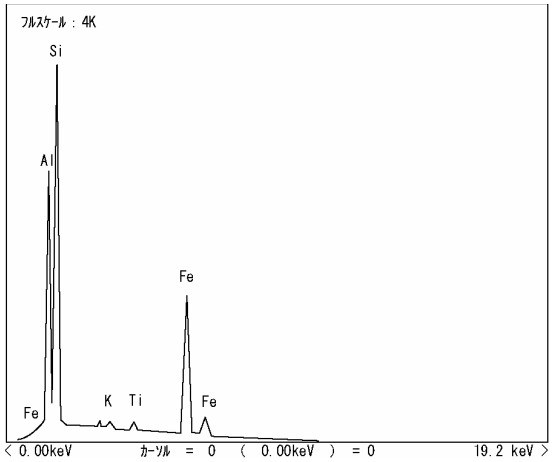


図８　土坑18（試料No.552）

3　堂園遺跡Ａ地点出土土器に付着した赤色顔料分析

森　　雄二（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

堂園遺跡Ａ地点出土の土器２点に付着した赤色顔料について走査型電子顕微鏡（SEM）による粒子観察と蛍光Ｘ線分析装置（EDX）による成分分析を行った。分析は鹿児島県立埋蔵文化財センター所有の装置を使用し，観察・測定は森雄二（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行った。

顔料とは着色剤の一種で，水には溶けない微粒子である。赤色顔料はその主成分から大きく「ベンガラ」,「朱」,「鉛丹」の３種類に分けられ，ベンガラは酸化第二鉄（Fe_2O_3），水銀朱は硫化水銀（HgS），鉛丹は四酸化三鉛（Pb_3O_4）を主成分とする。ベンガラはさらに原料，製法に多様性が認められ，細分化される。赤色顔料の歴史は，古いもので1.5～２万年前に北海道，東北地方においてベンガラが付着した石器や顔料原石が出土した例があり，朱は縄文時代後期から，鉛丹は古墳時代から使われてきた。

今回の資料は第Ⅱ層（弥生時代後期～古墳時代前期相当）から出土した土器で，赤色顔料で彩文が施された壺形土器の胴部片と外面全体が赤色顔料で塗られた蓋形土器それぞれ１点について観察・測定を行った。

走査型電子顕微鏡（日本電子製低真空SEM・JSM－5300LV）でサンプリングした赤色顔料の粒子観察を行った結果，いずれも特徴的な粒子は確認されなかった（写真１，２）。蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所EDX・XGT－1000）を用い，非破壊で赤色顔料の元素測定（測定条件：Ｘ線管電圧50kV，電流460μA，パルス処理時間Ｐ３，プリセット時間100秒，Ｘ線照射径100μm）を試みた。その結果，2点どちらの顔料でもFe(鉄）のピークを得た（スペクトル図１，２）。また，同様に赤色が塗られていない部分で多元素測定を試み（スペクトル図３），検出元素の強度比較（表１）を行ったところ，赤色顔料の部分において著しくFe(鉄）の強度が大きいことが明らかになった。また，いずれの測定でも検出したAl(アルミニウム），Si(ケイ素）などの成分は土器の胎土成分や土などのコンタミネーションと考えられ，軽視して差し支えないものと判断した。以上の結果から，これらの土器に付着した物質はベンガラなどの鉄を主成分とした赤色顔料である可能性が高いと言える。

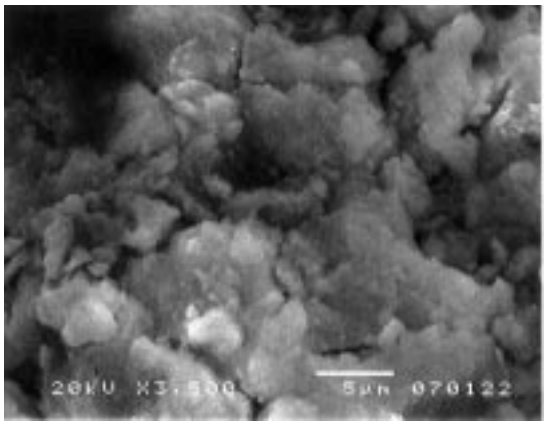


写真１　彩文が施された壺形土器片

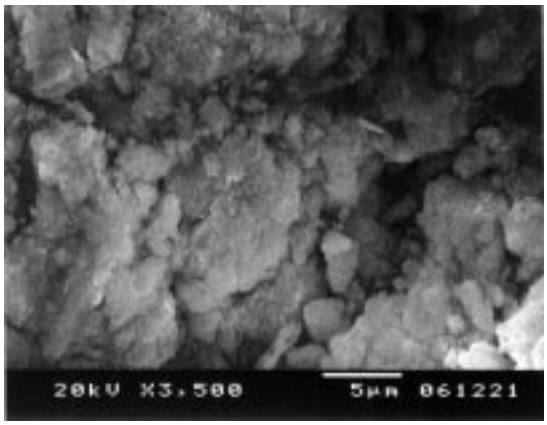
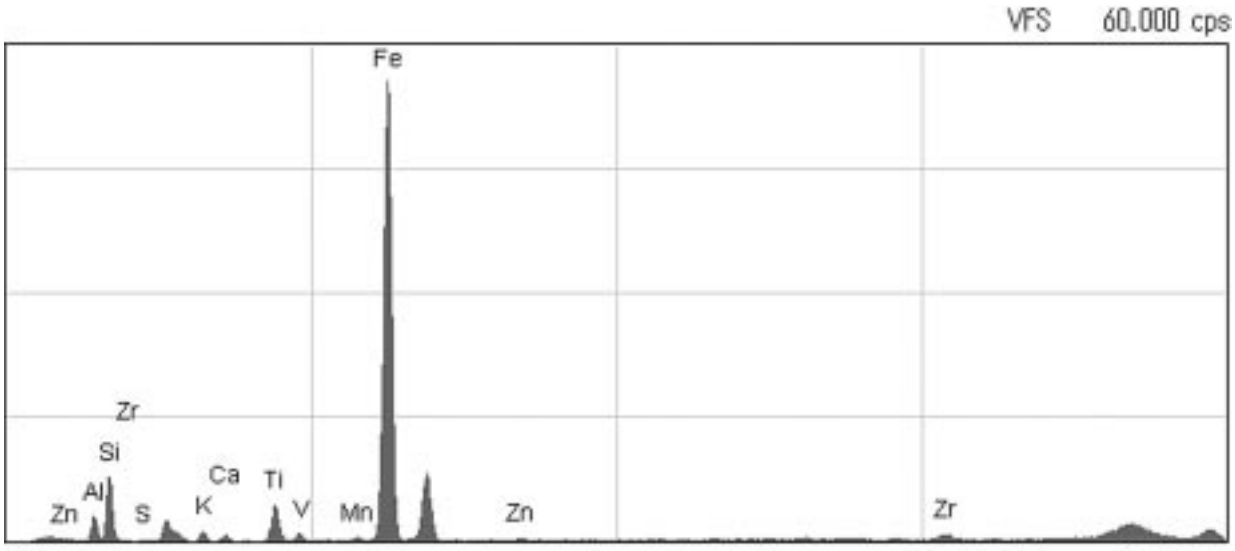
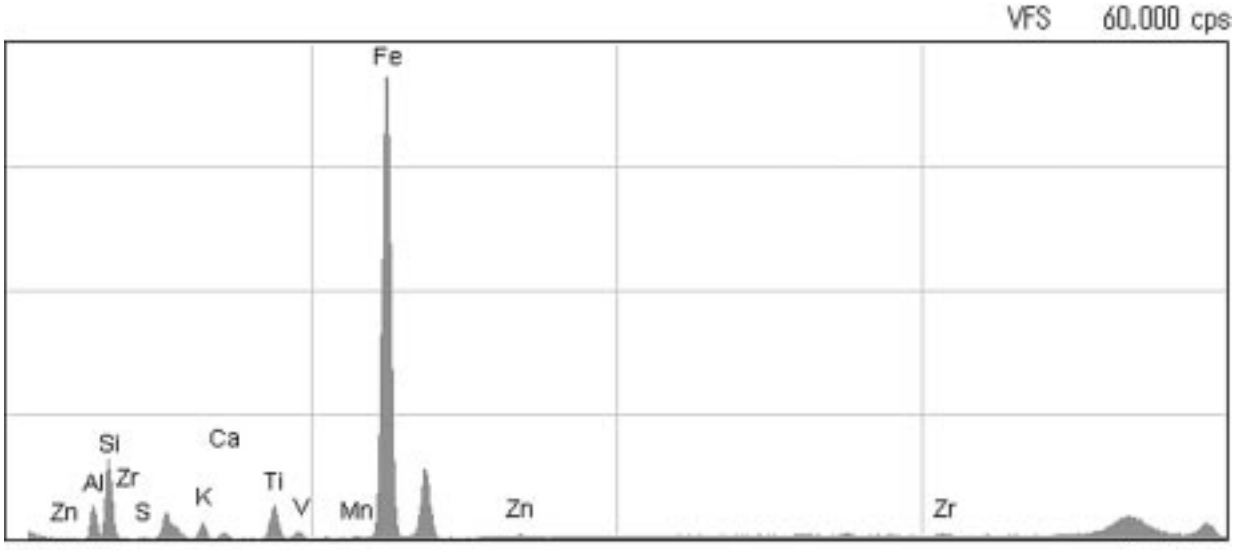


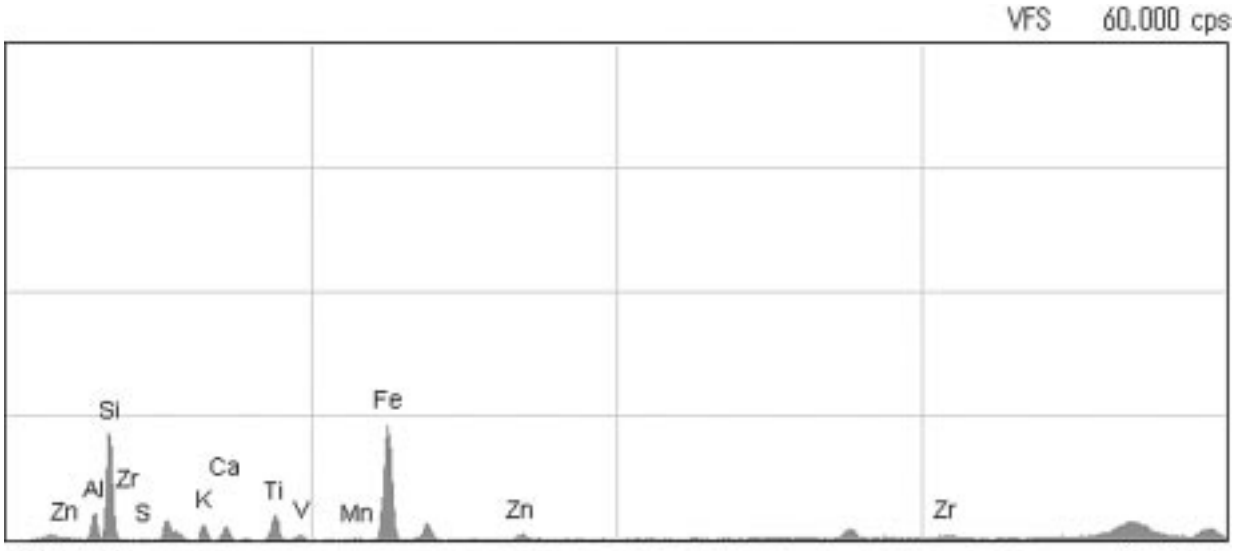
写真２　赤色顔料で塗られた蓋形土器



スペクトル図１



スペクトル図２



スペクトル図３

表１　検出元素の強度比較

彩文が施された胴部片

元　　素	ライン	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps／mA]
13Alアルミニウム	K	24.80	1.27	66.45
14Siけい素	K	43.84	1.12	183.78
16S硫黄	K	0.39	0.14	5.26
19Kカリウム	K	2.22	0.20	34.14
20Caカルシウム	K	1.02	0.12	22.51
22Tiチタン	K	3.34	0.16	127.20
25Mnマンガン	K	0.16	0.05	10.30
26Fe鉄	K	23.95	0.57	1899.15
30Zn亜鉛	K	0.11	0.04	8.98
40Zrジルコニウム	K	0.19	0.03	30.52

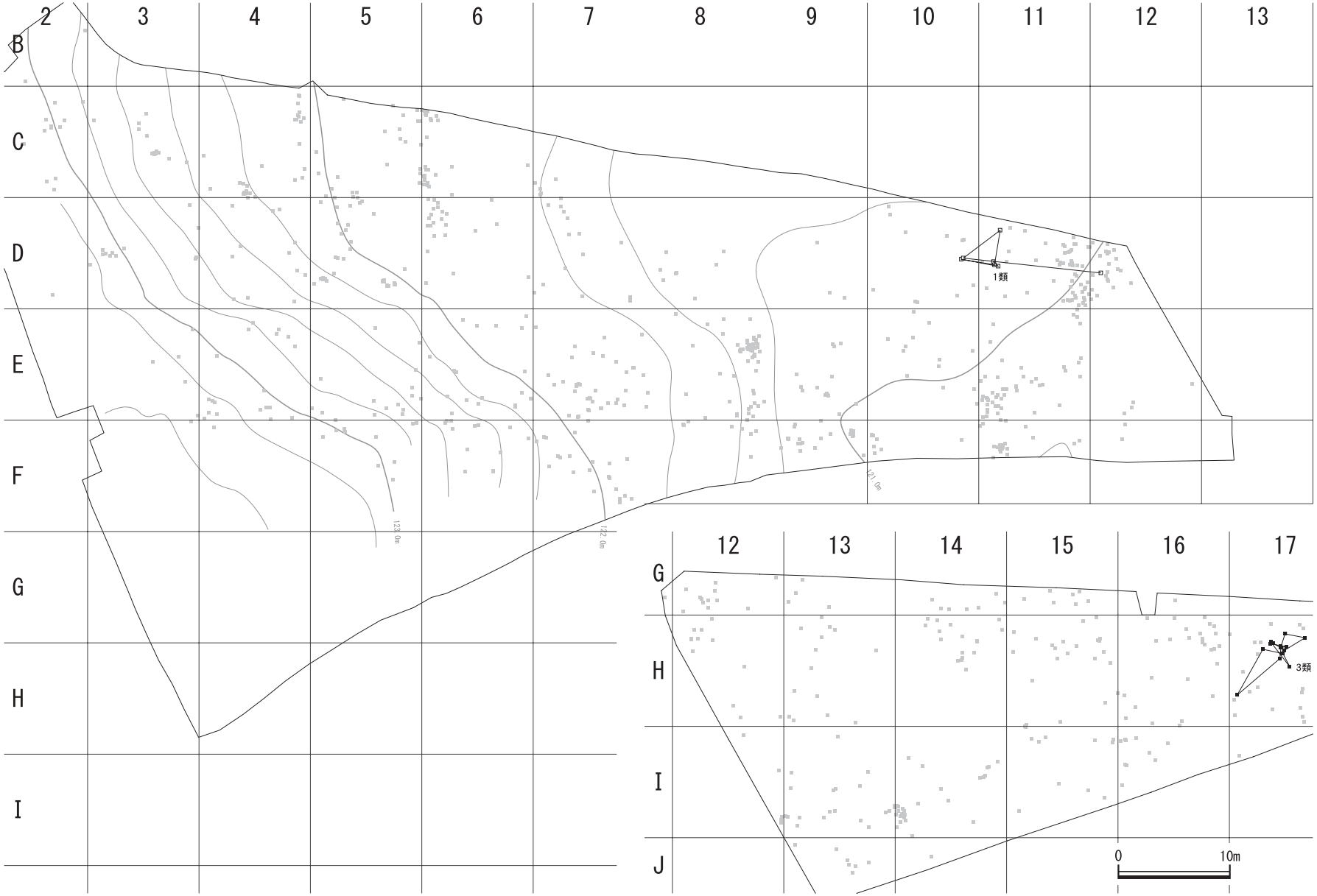
赤色顔料で塗られた蓋

元　　素	ライン	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps／mA]
13Alアルミニウム	K	26.15	1.02	93.28
14Siけい素	K	46.85	0.94	247.79
16S硫黄	K	0.34	0.10	5.67
19Kカリウム	K	3.28	0.19	61.39
22Tiチタン	K	2.64	0.13	123.60
26Fe鉄	K	20.65	0.42	2103.37
38Srストロンチウム	K	0.07	0.03	13.20

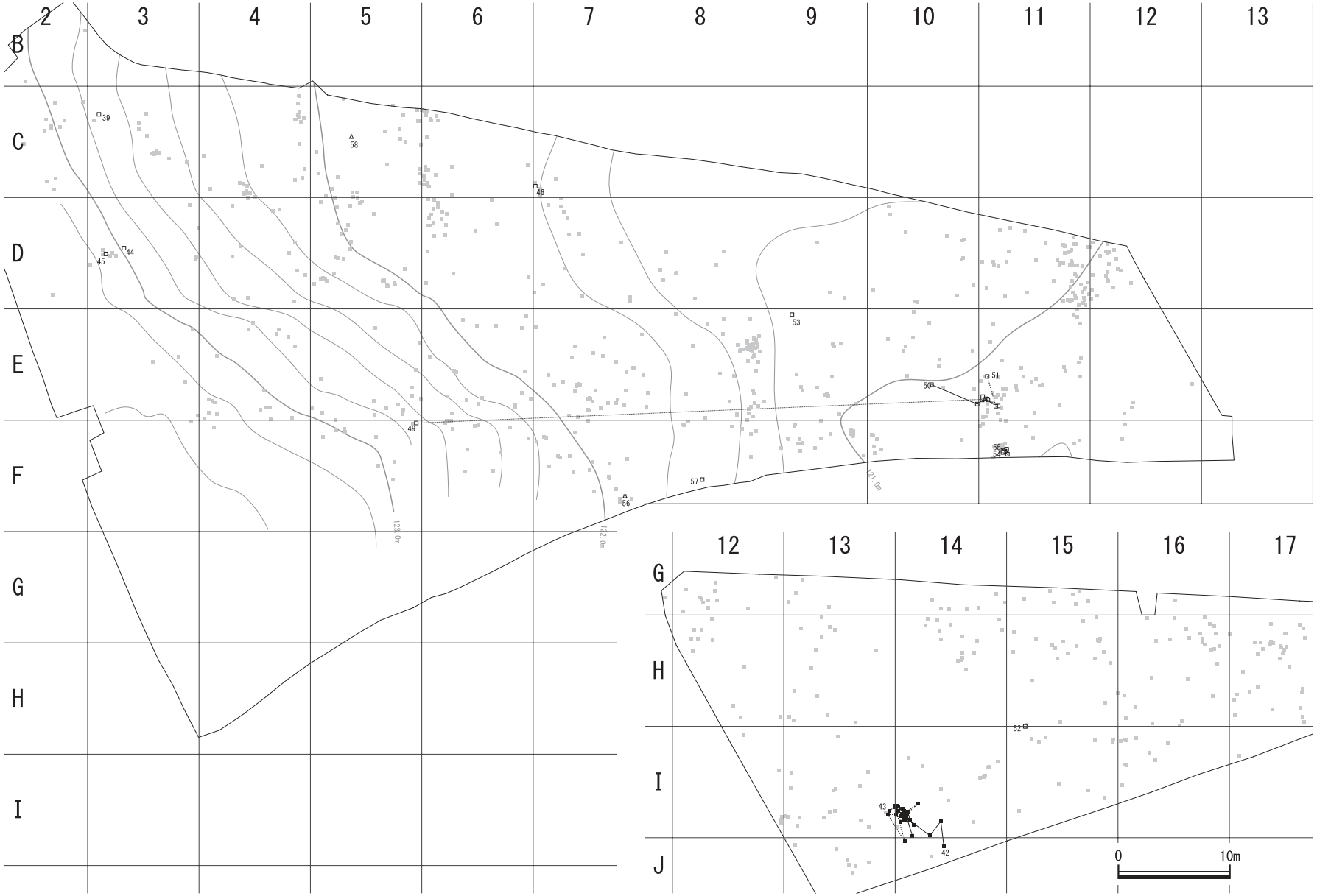
赤色が塗られていない部分

元　　素	ライン	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps／mA]
13Alアルミニウム	K	20.71	1.04	73.11
14Siけい素	K	62.98	1.02	310.44
19Kカリウム	K	4.11	0.27	54.59
20Caカルシウム	K	2.53	0.19	46.27
22Tiチタン	K	3.17	0.16	97.06
23Vバナジウム	K	0.19	0.07	7.72
26Fe鉄	K	6.03	0.17	464.64
38Srストロンチウム	K	0.25	0.03	50.71
40Zrジルコニウム	K	0.03	0.02	6.88

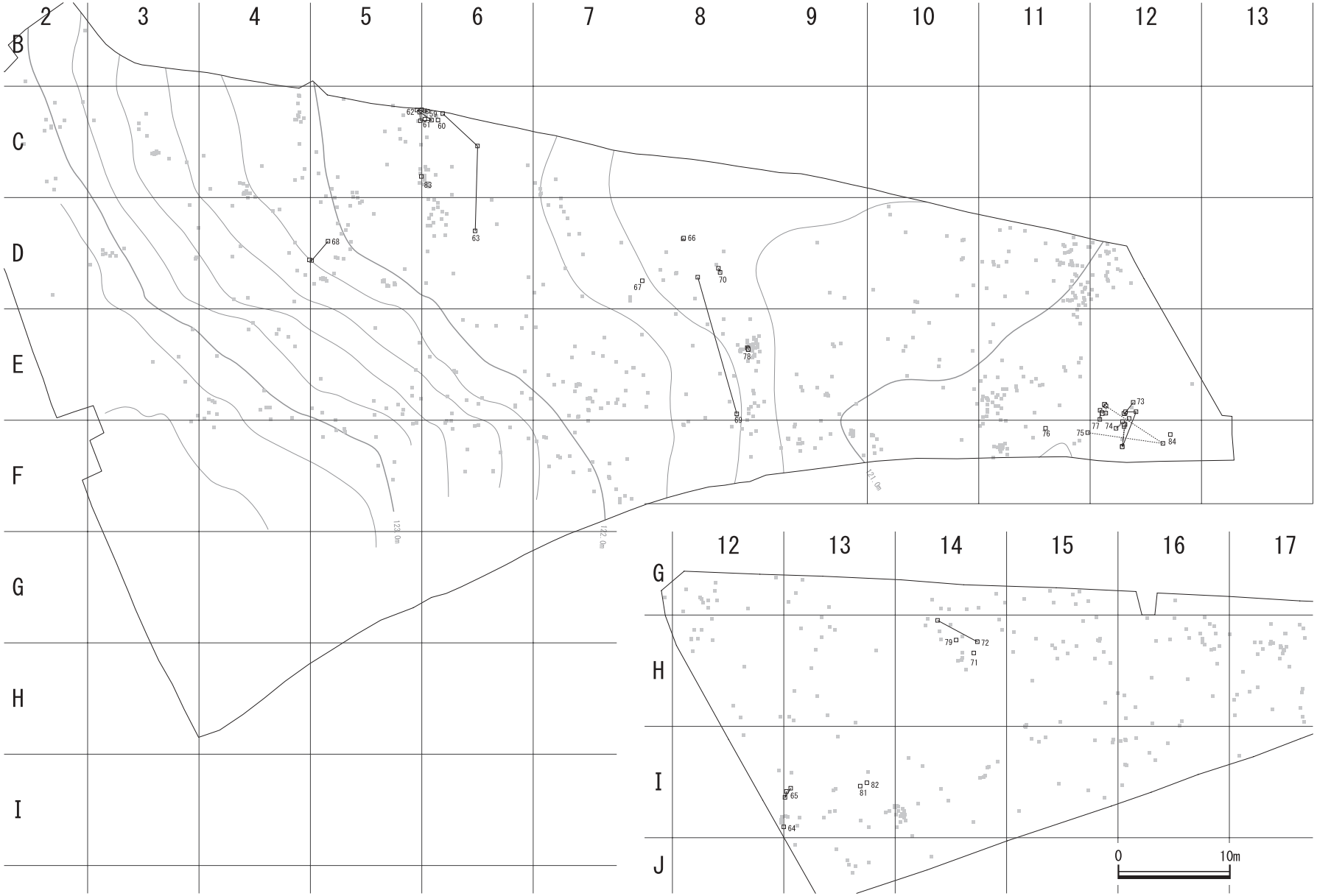
（注）定量については，標準試料を用いないFPM定量の結果である。



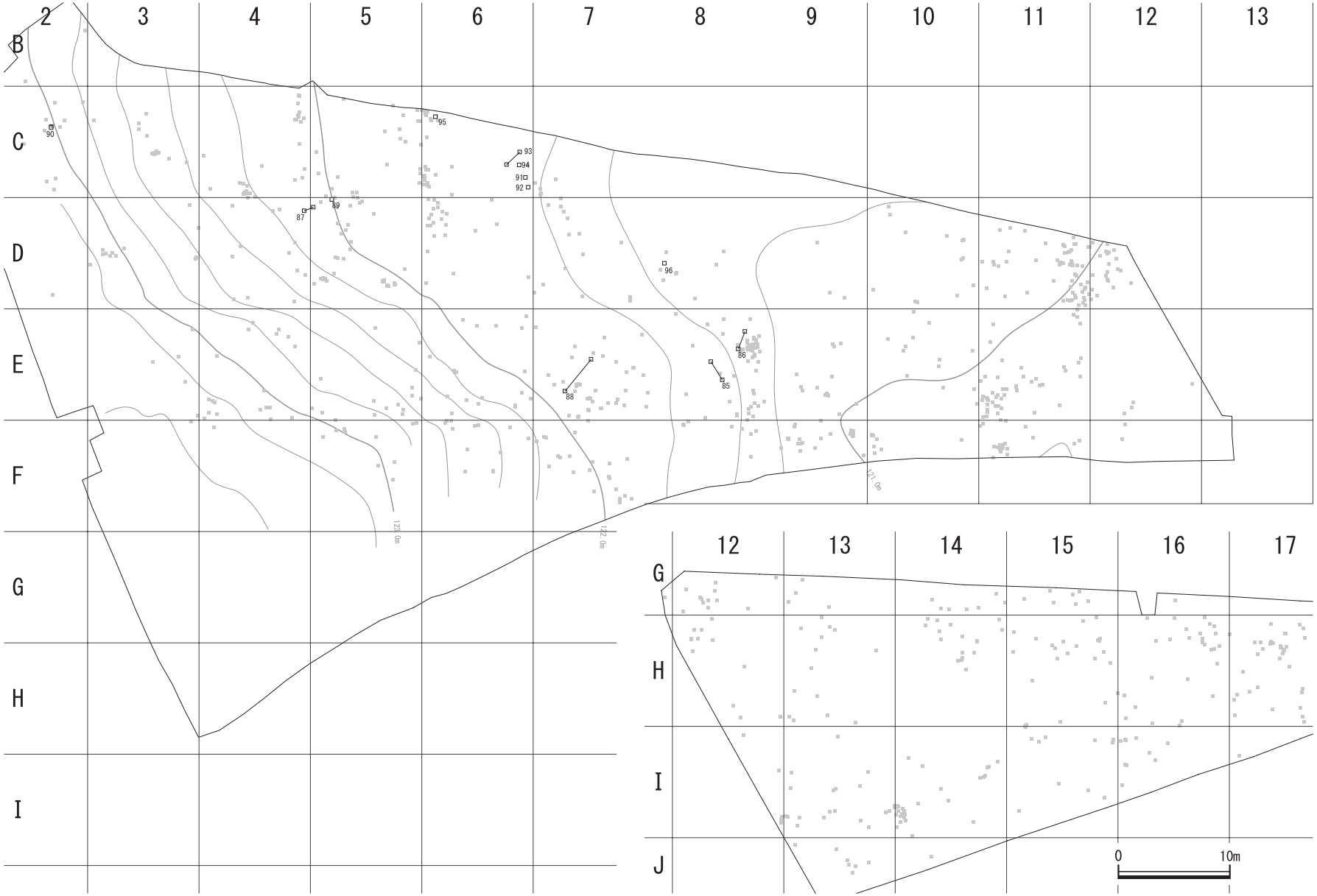
第100図　縄文時代前～中期　土器出土分布図　　1類，3類土器



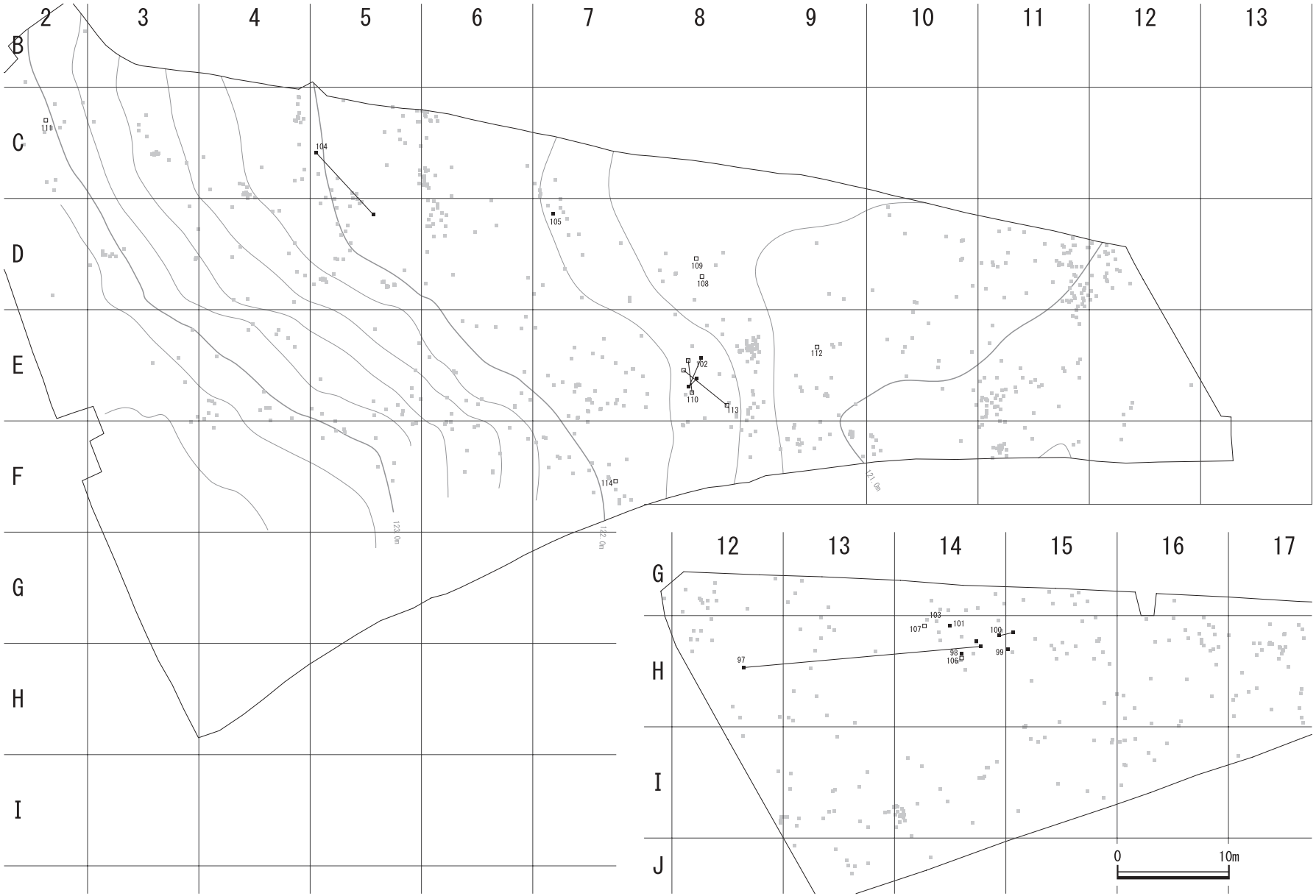
第101図　縄文時代後期　土器出土分布図　　4～6類土器



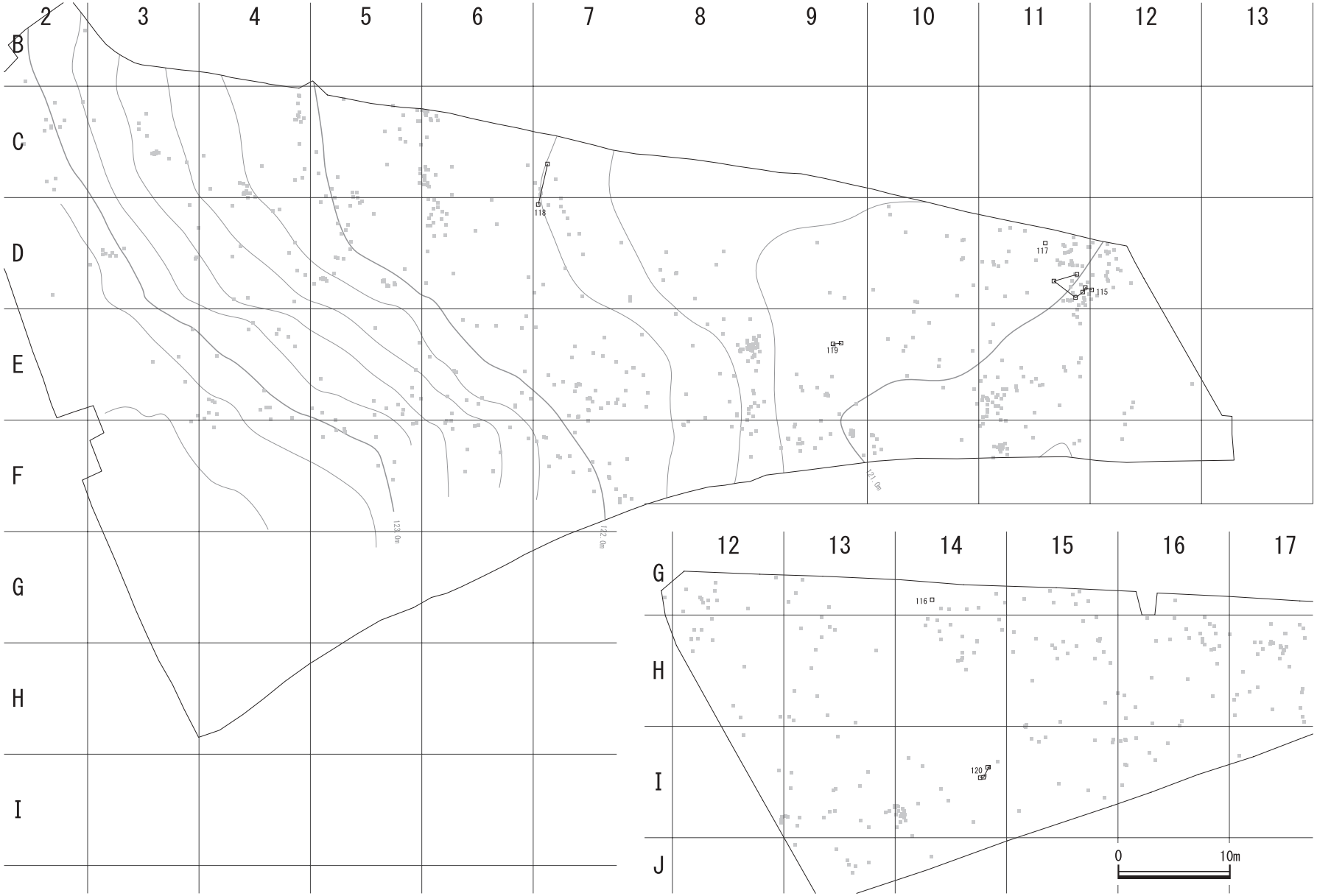
第102図　縄文時代晩期　土器出土分布図(1)　　７類土器



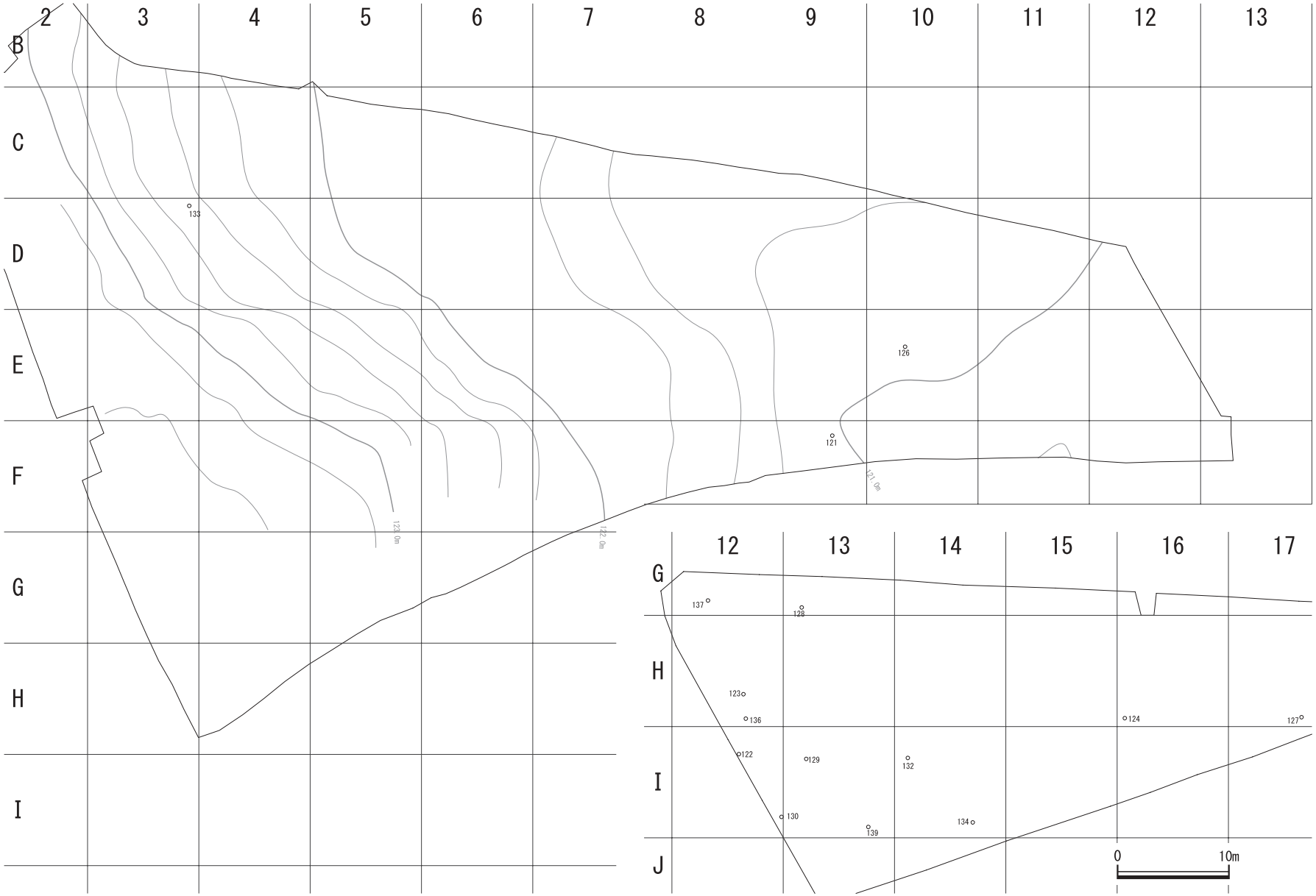
第103図　縄文時代晩期　土器出土分布図(2)　　８類土器



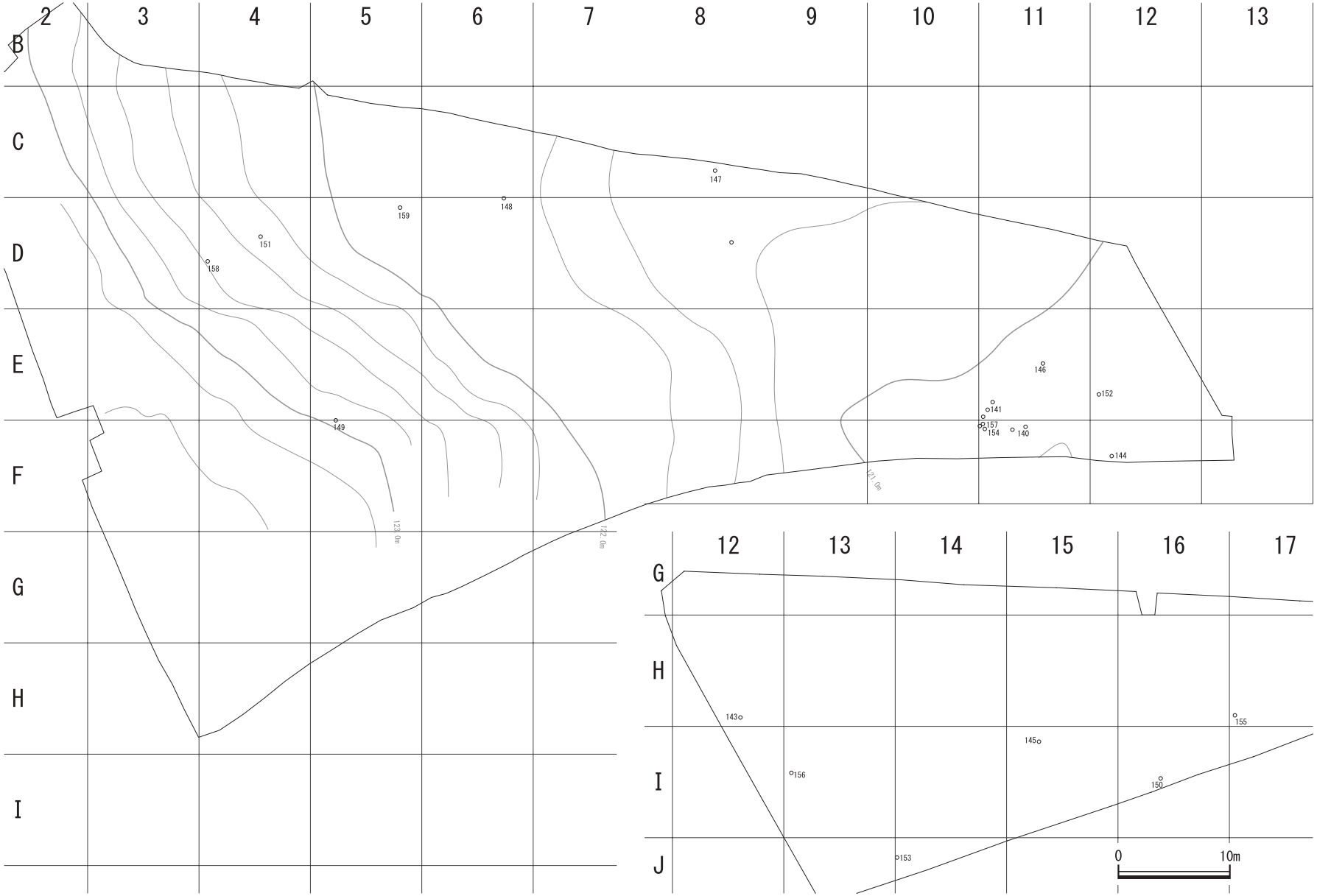
第104図　縄文時代晩期　土器出土分布図(3)　　９類土器



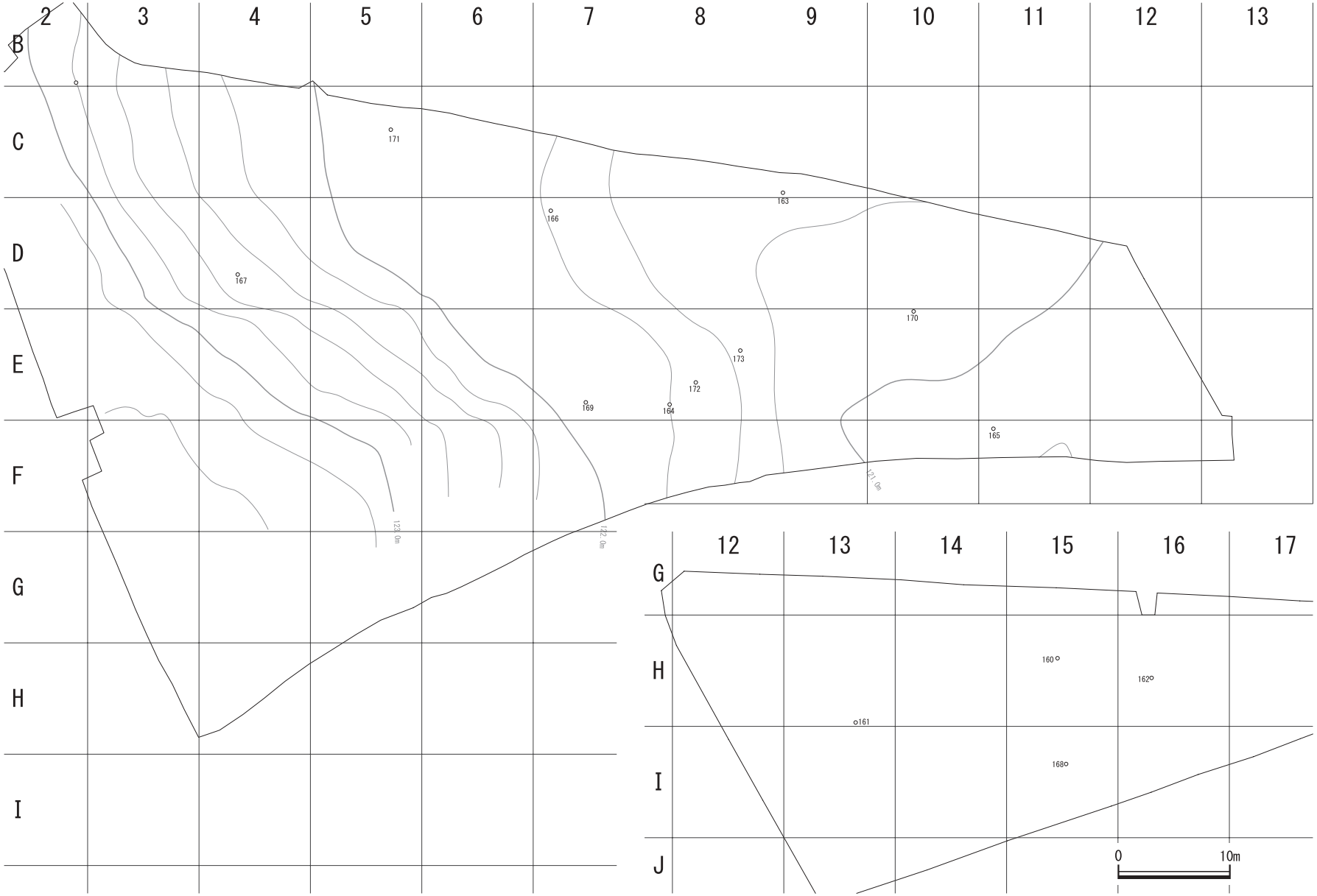
第105図　縄文時代晩期　土器出土分布図(4)　　10類土器



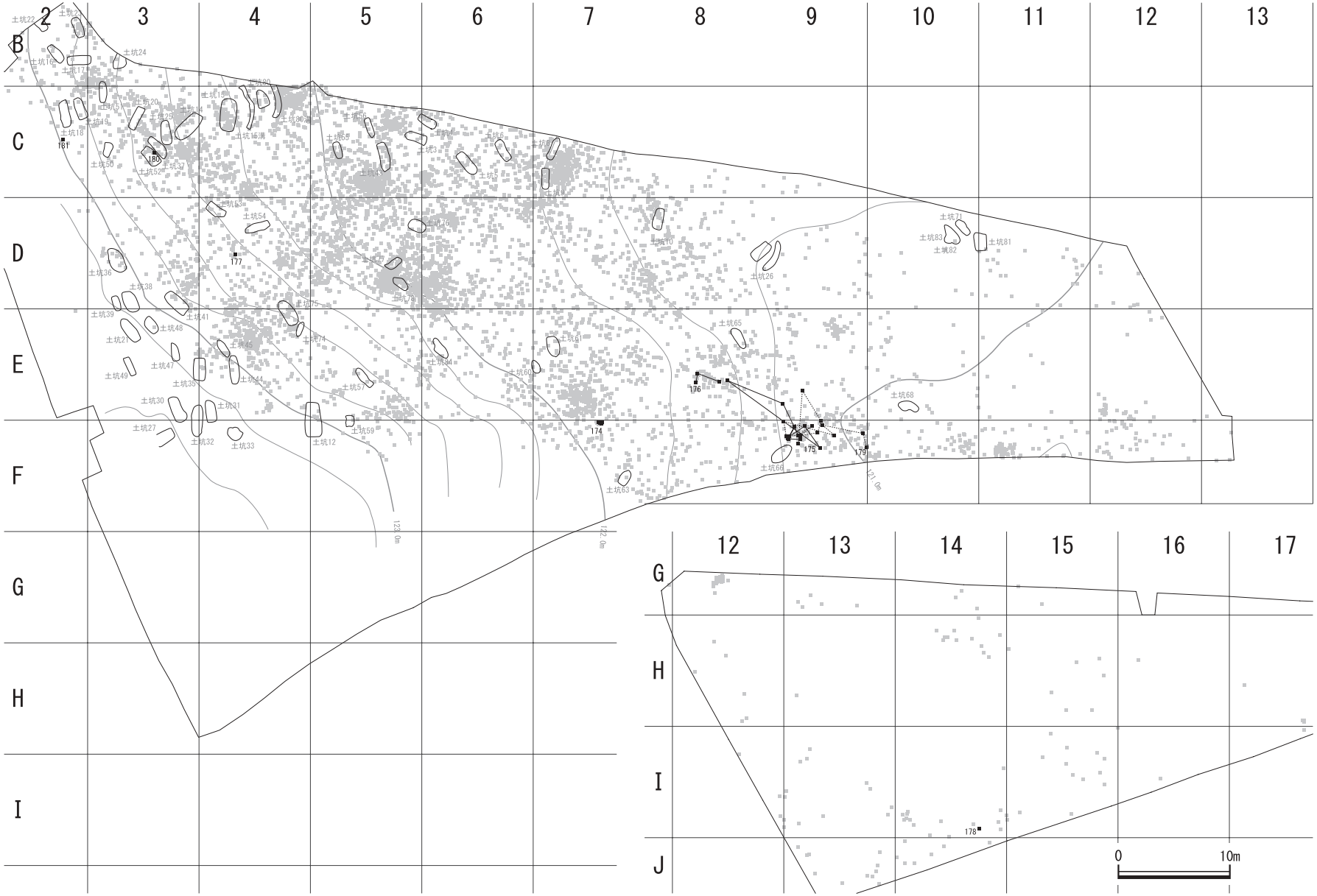
第106図　縄文時代晩期～弥生時代　出土石器分布図(1)　　No.121～139



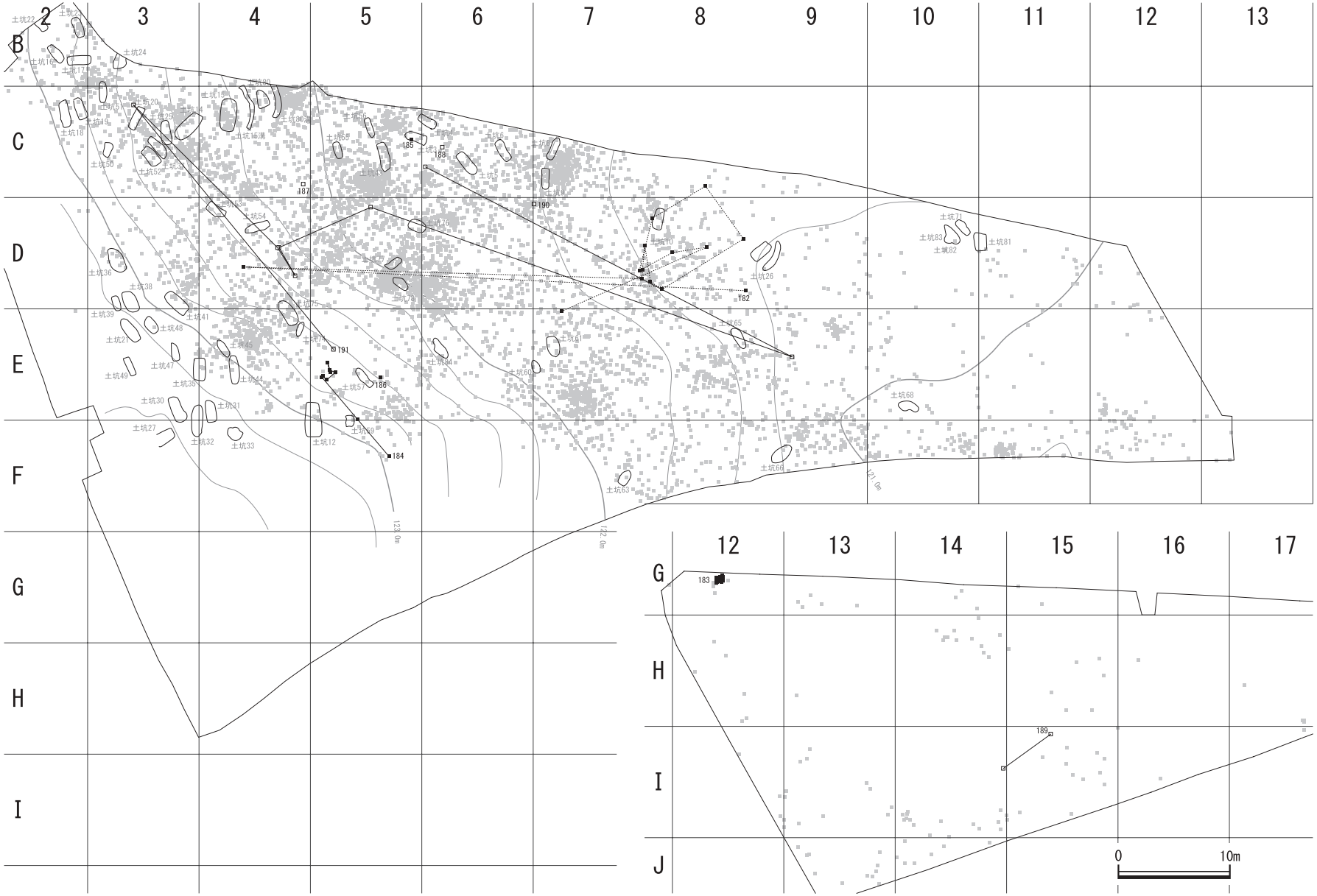
第107図　縄文時代晩期～弥生時代　出土石器分布図(2)　　No.140～159



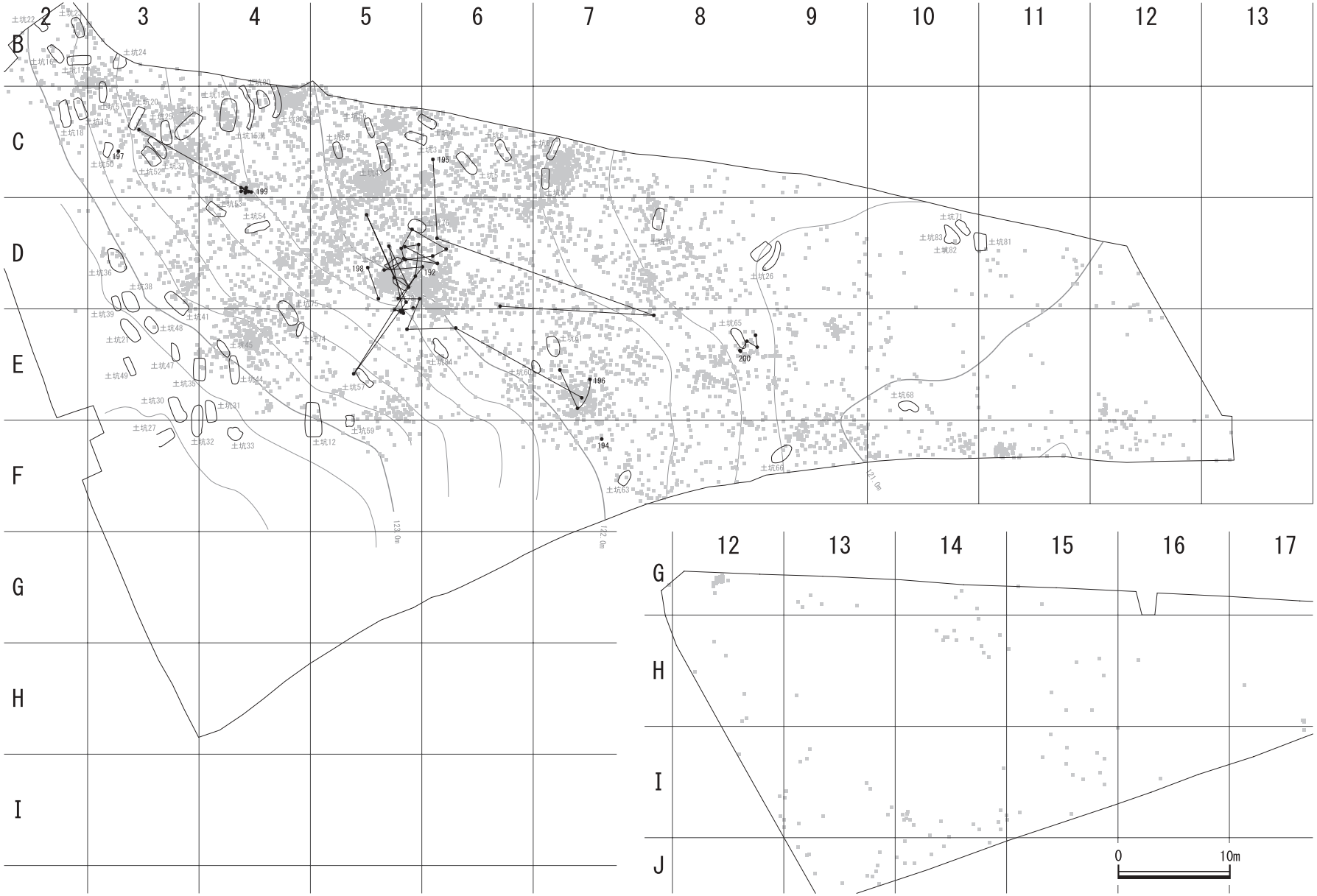
第108図　縄文時代晩期～弥生時代　出土石器分布図(3)　　No.160～173



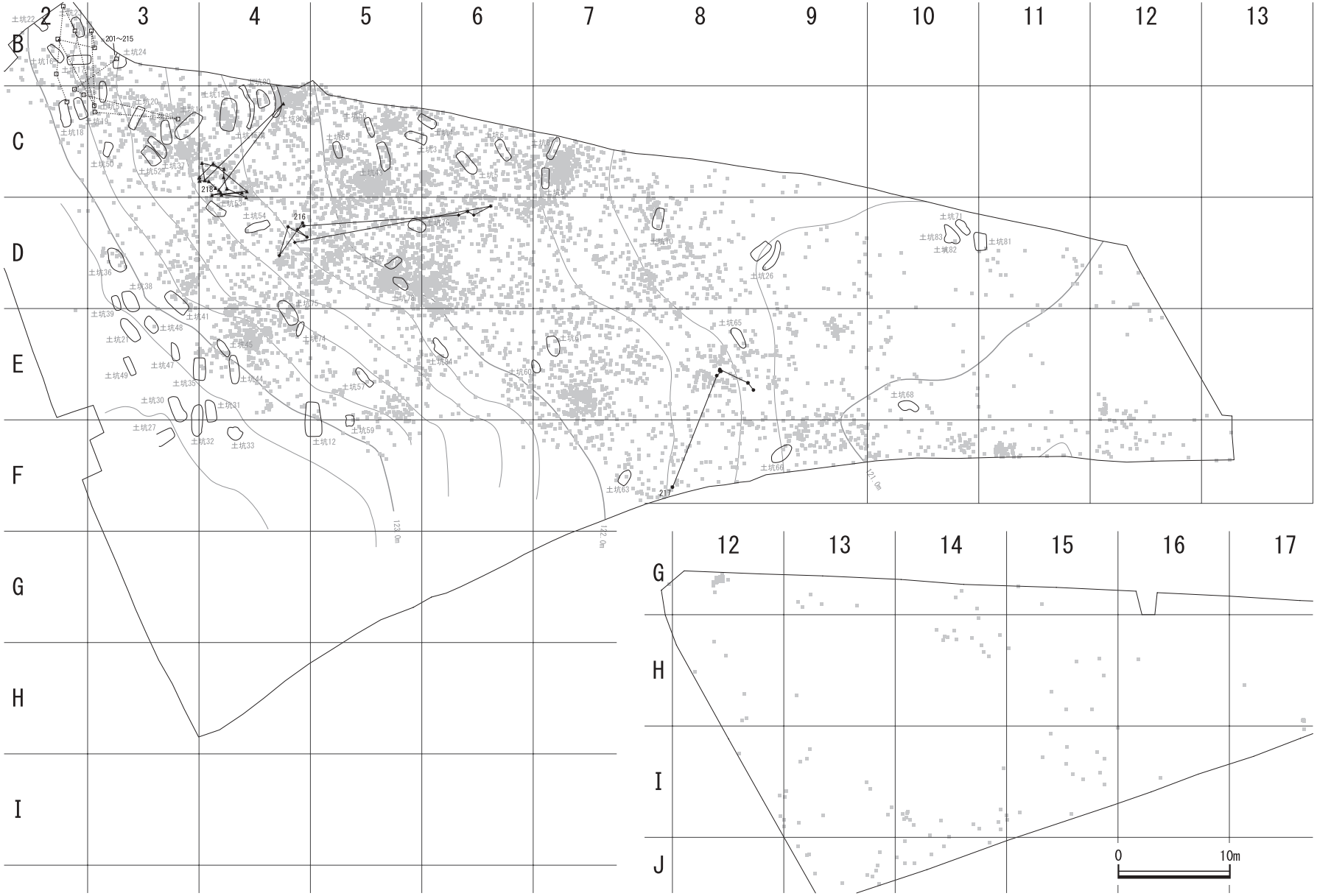
第109図　弥生時代中期　土器出土分布図(1)　　No.174～181



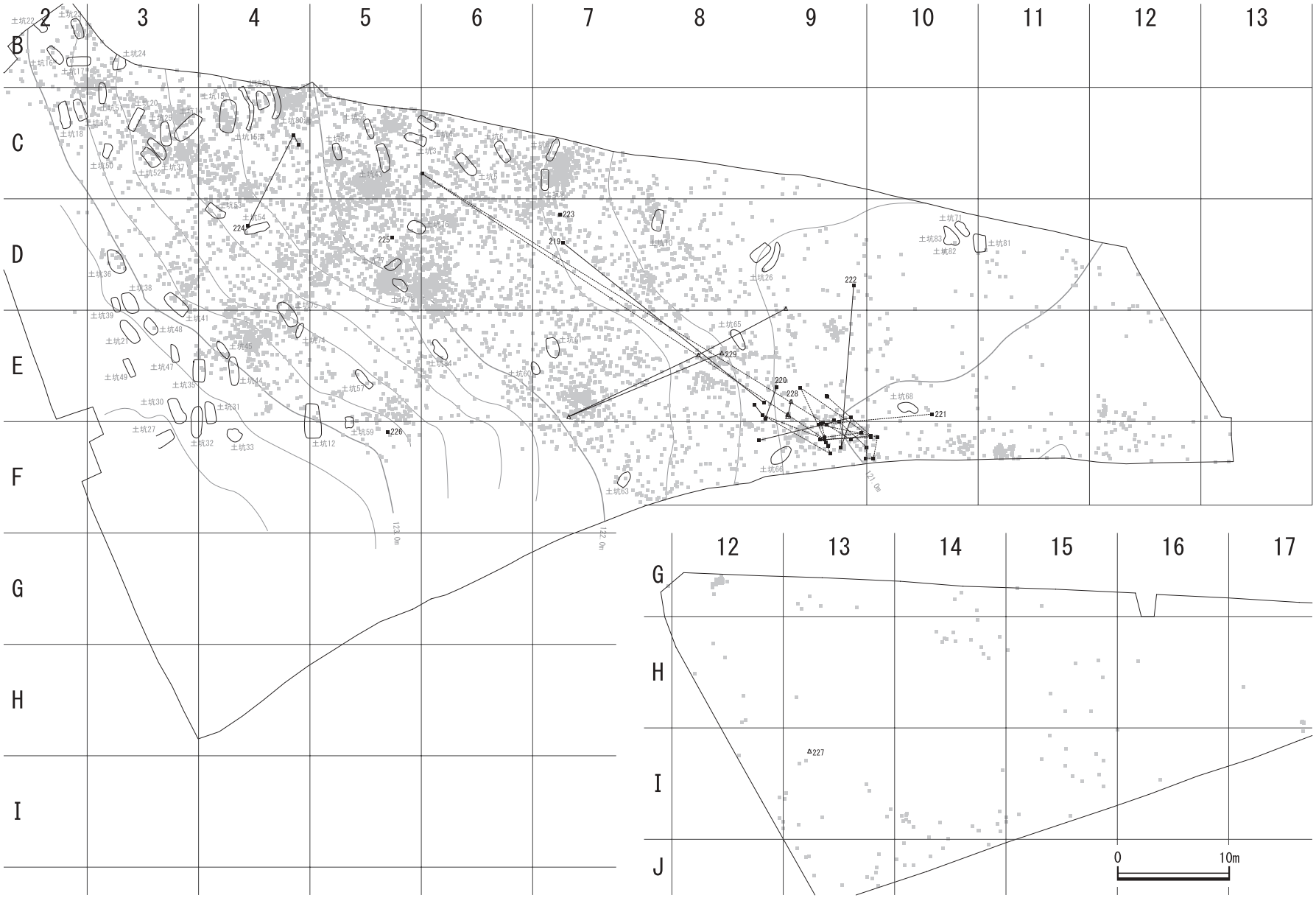
第110図　弥生時代中期　土器出土分布図(2)　　No.182～191



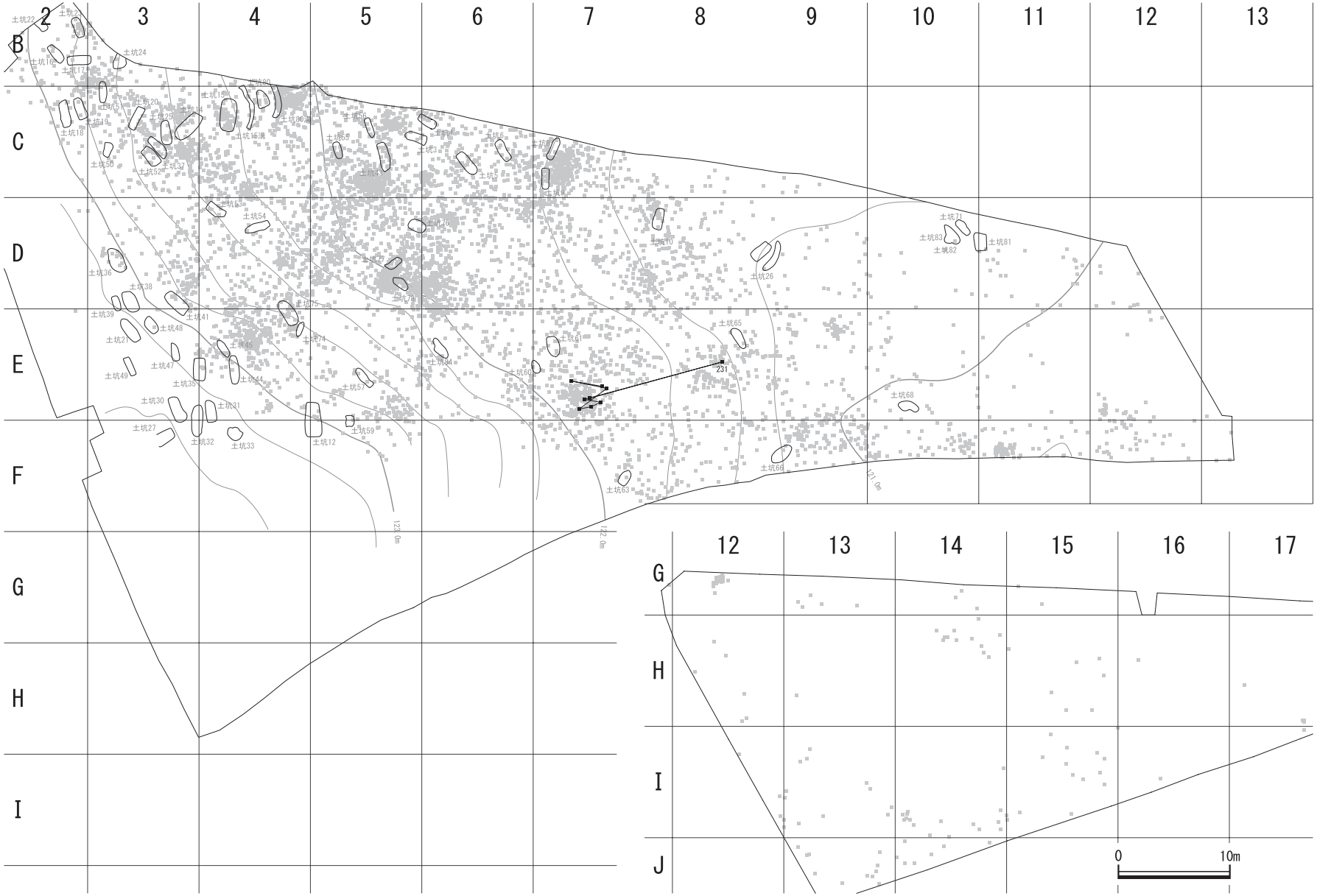
第111図　弥生時代中期　土器出土分布図(3)　　No.192～200



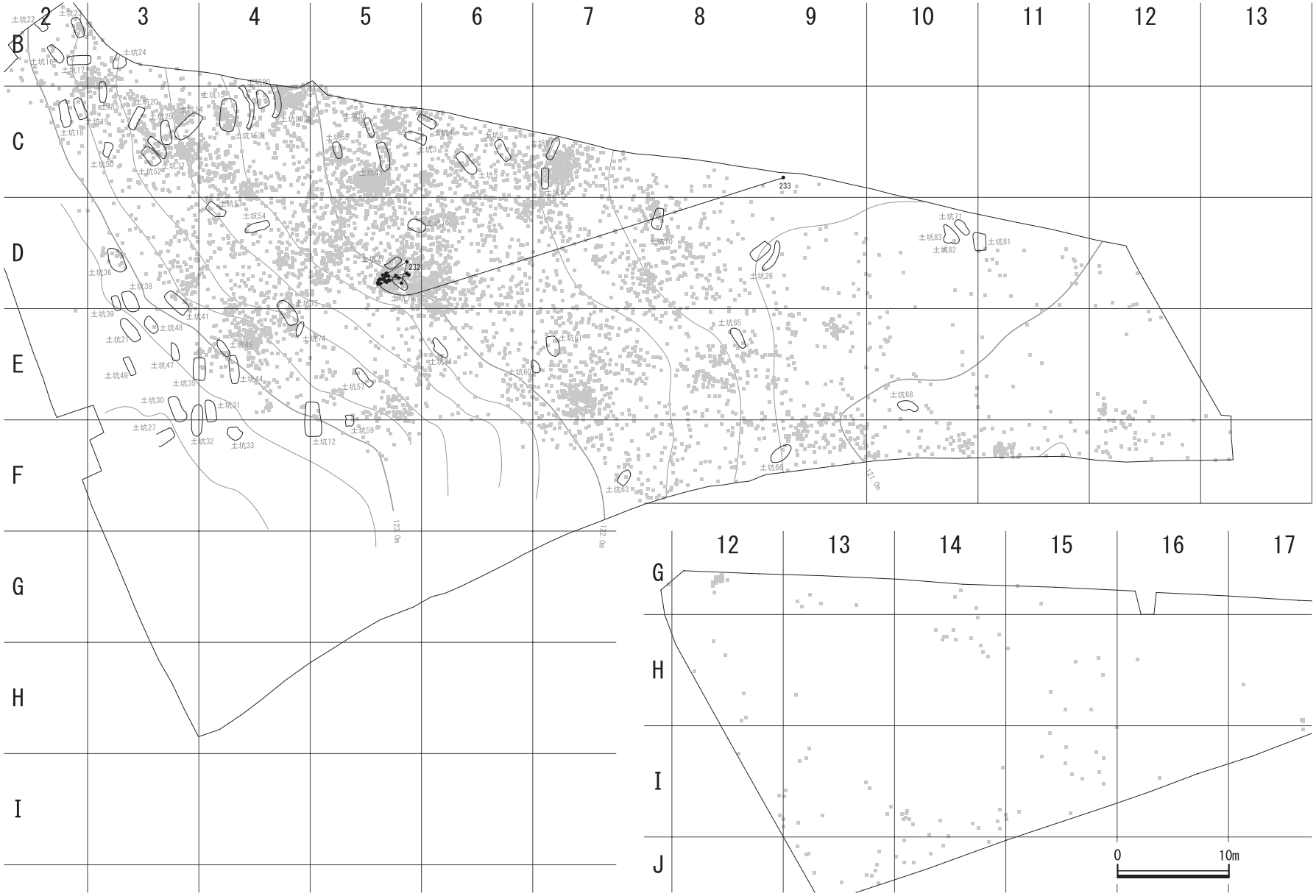
第112図　弥生時代中期　土器出土分布図(4)　　No.201～218



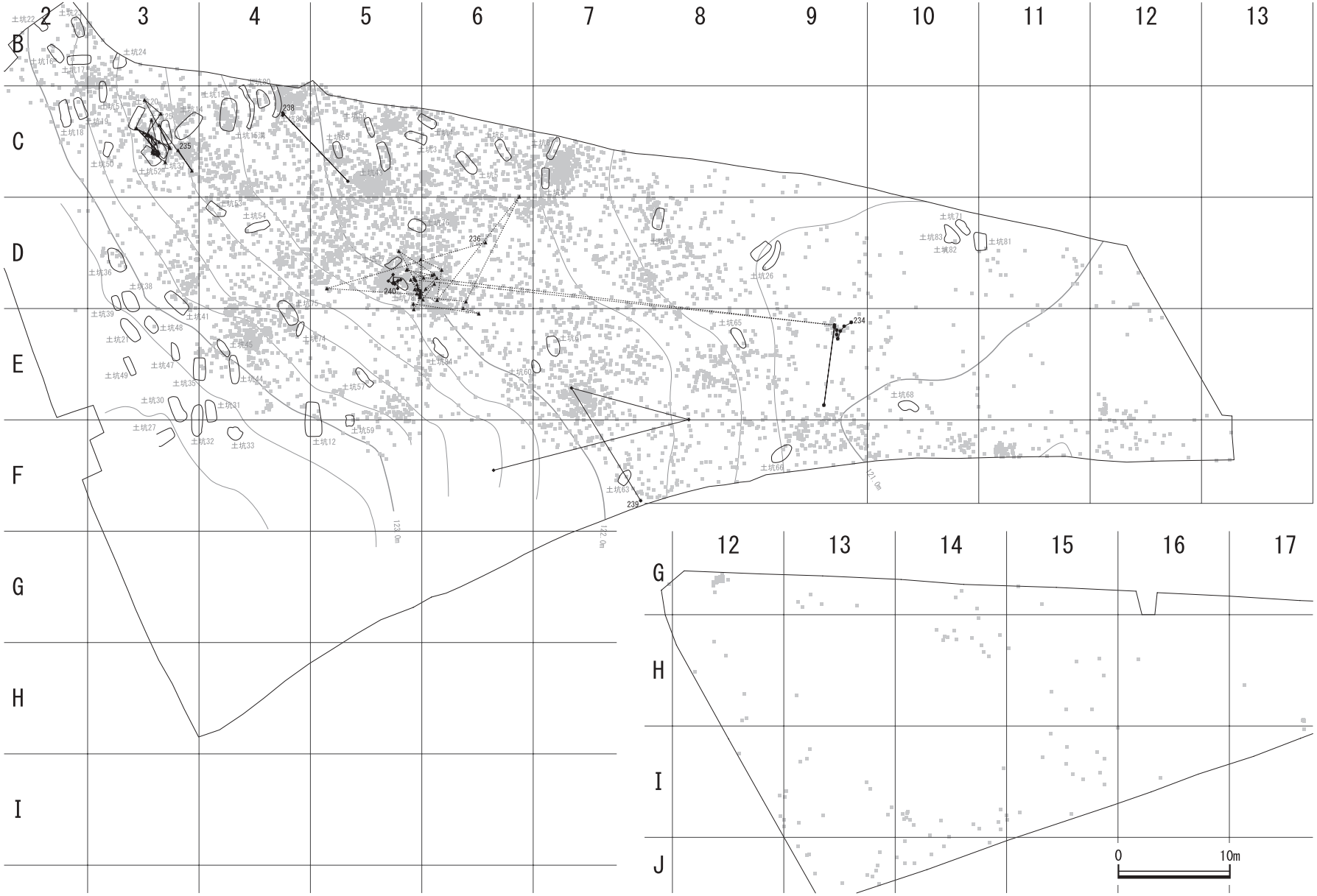
第113図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図(1)　　No.219～229



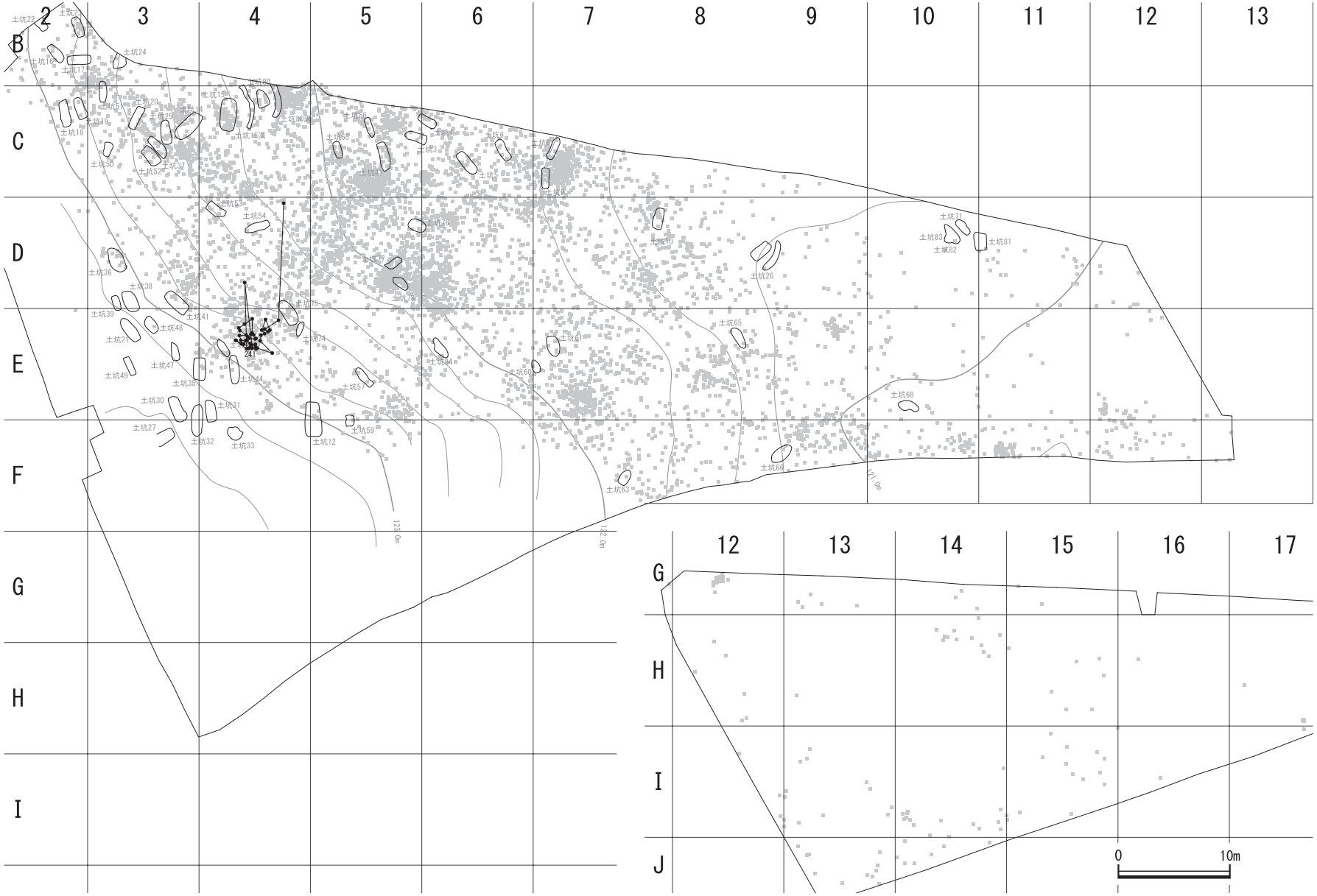
第114図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図(2)　　No.231



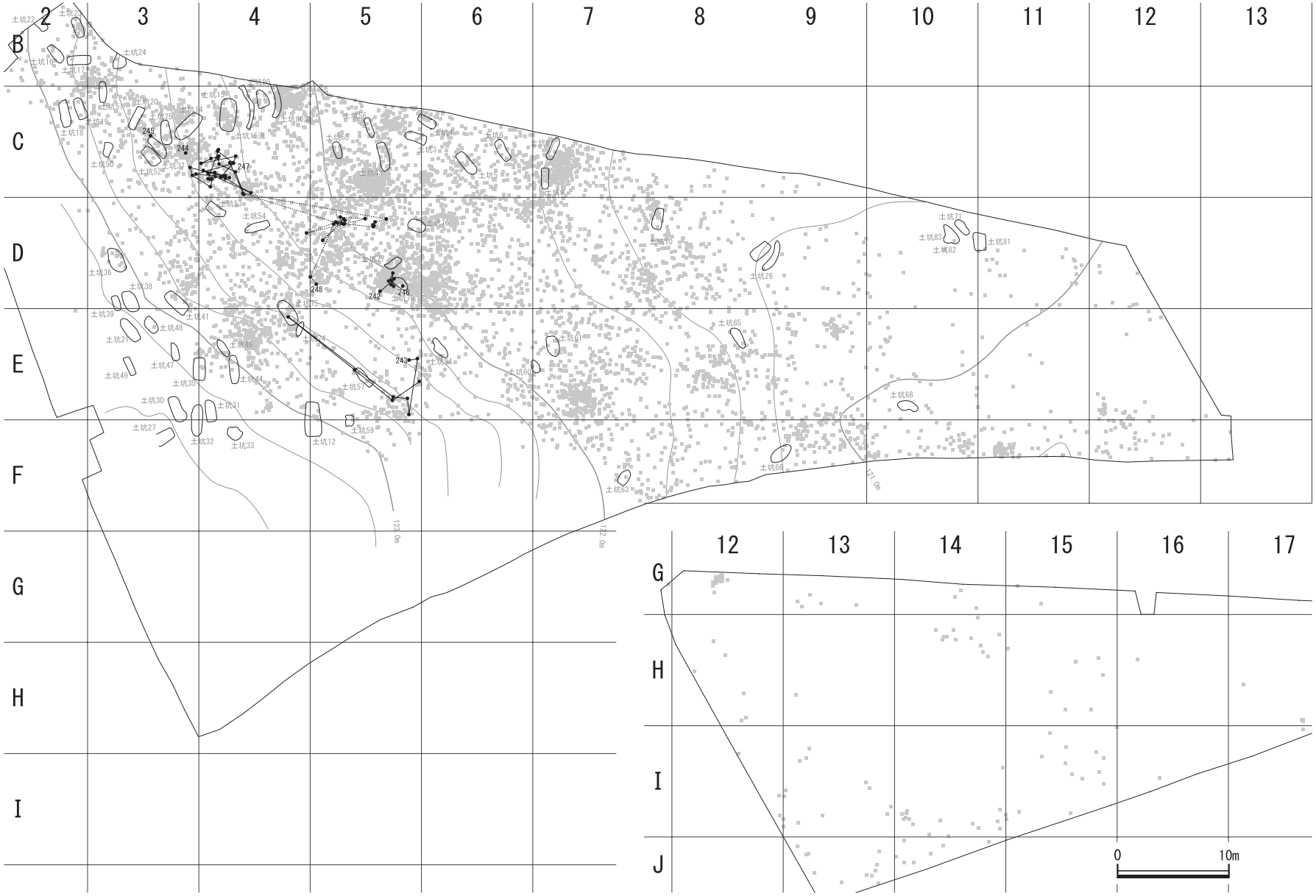
第115図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図(3)　　No.232～233



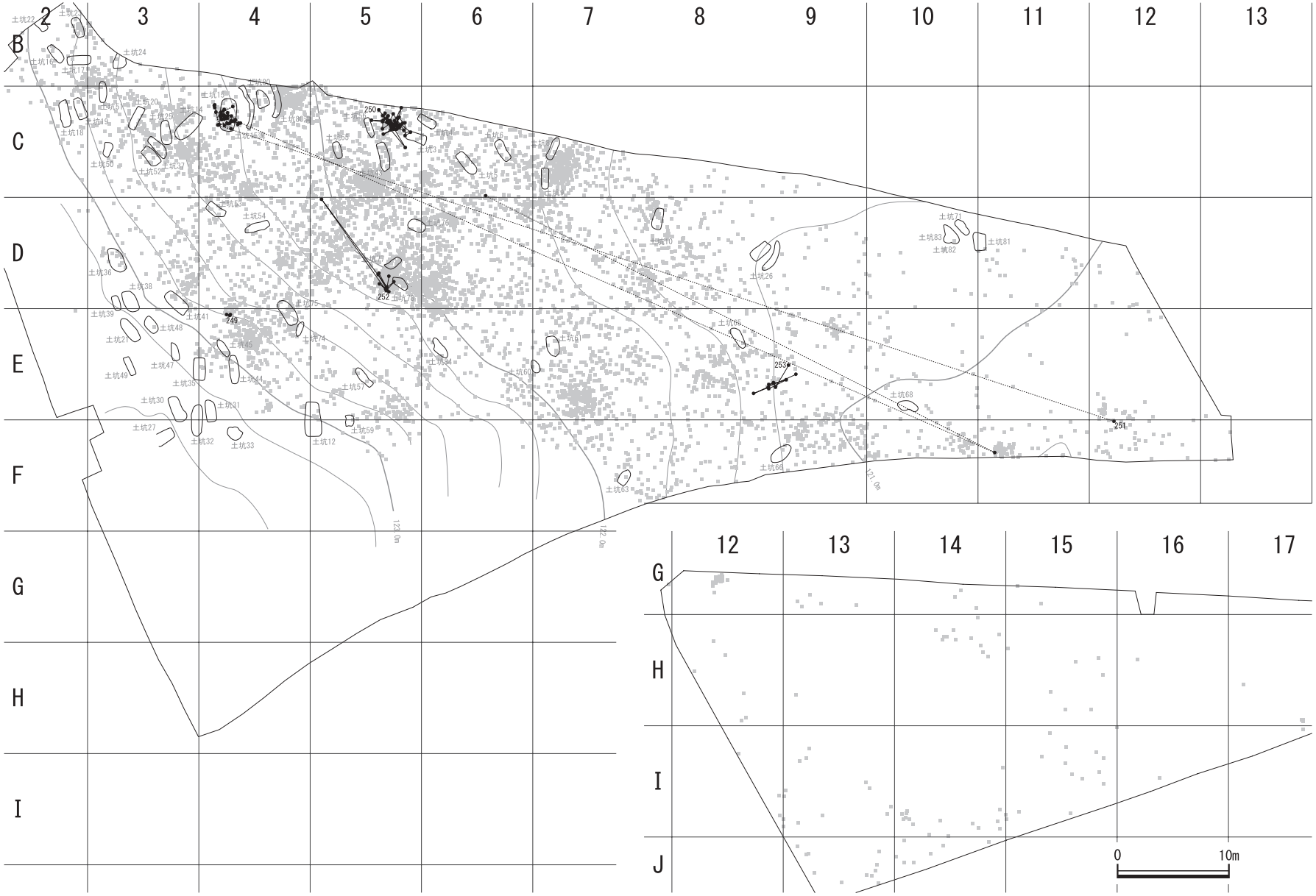
第116図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図(4)　　No.234～240



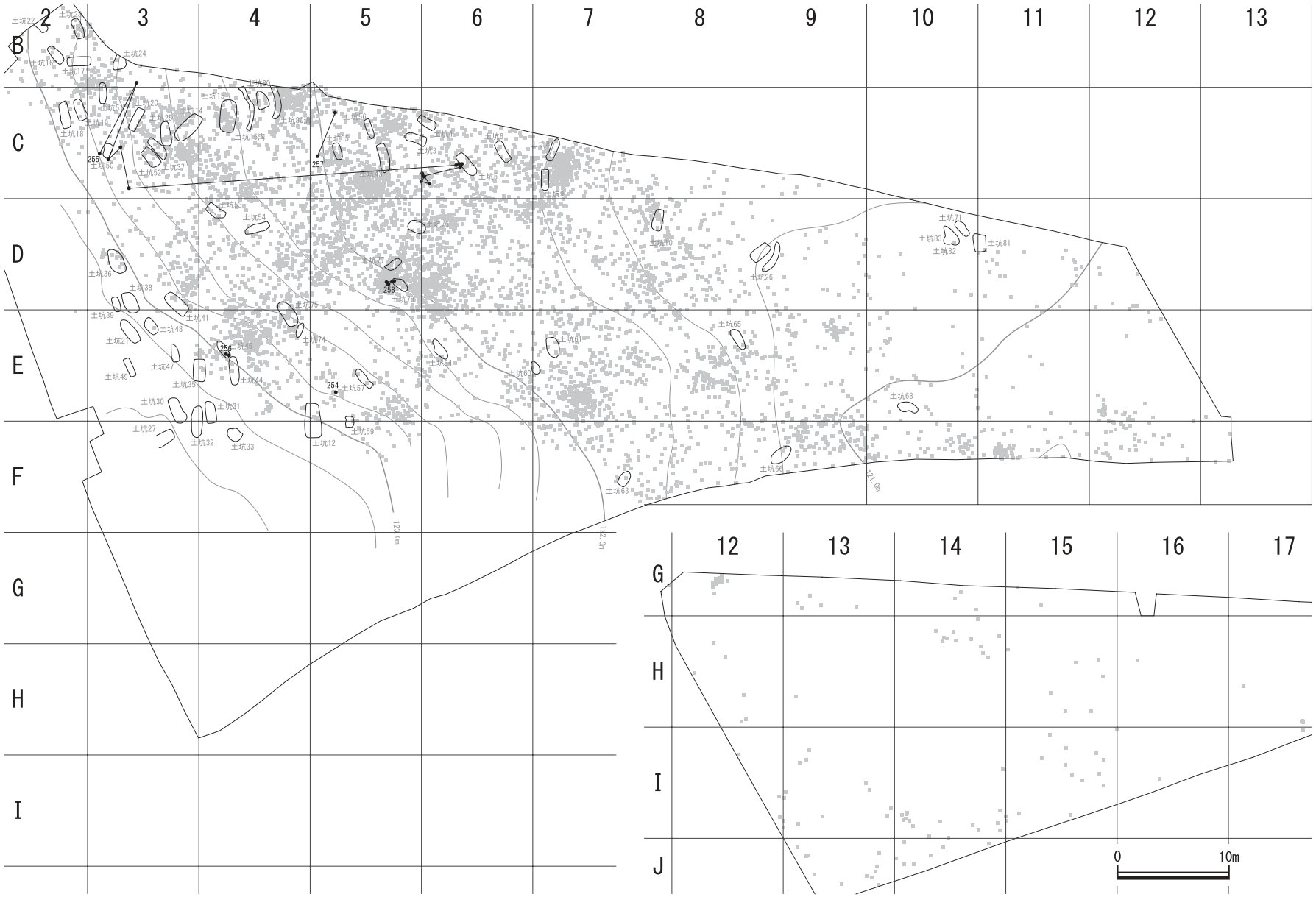
第117図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図(5)　　No.241



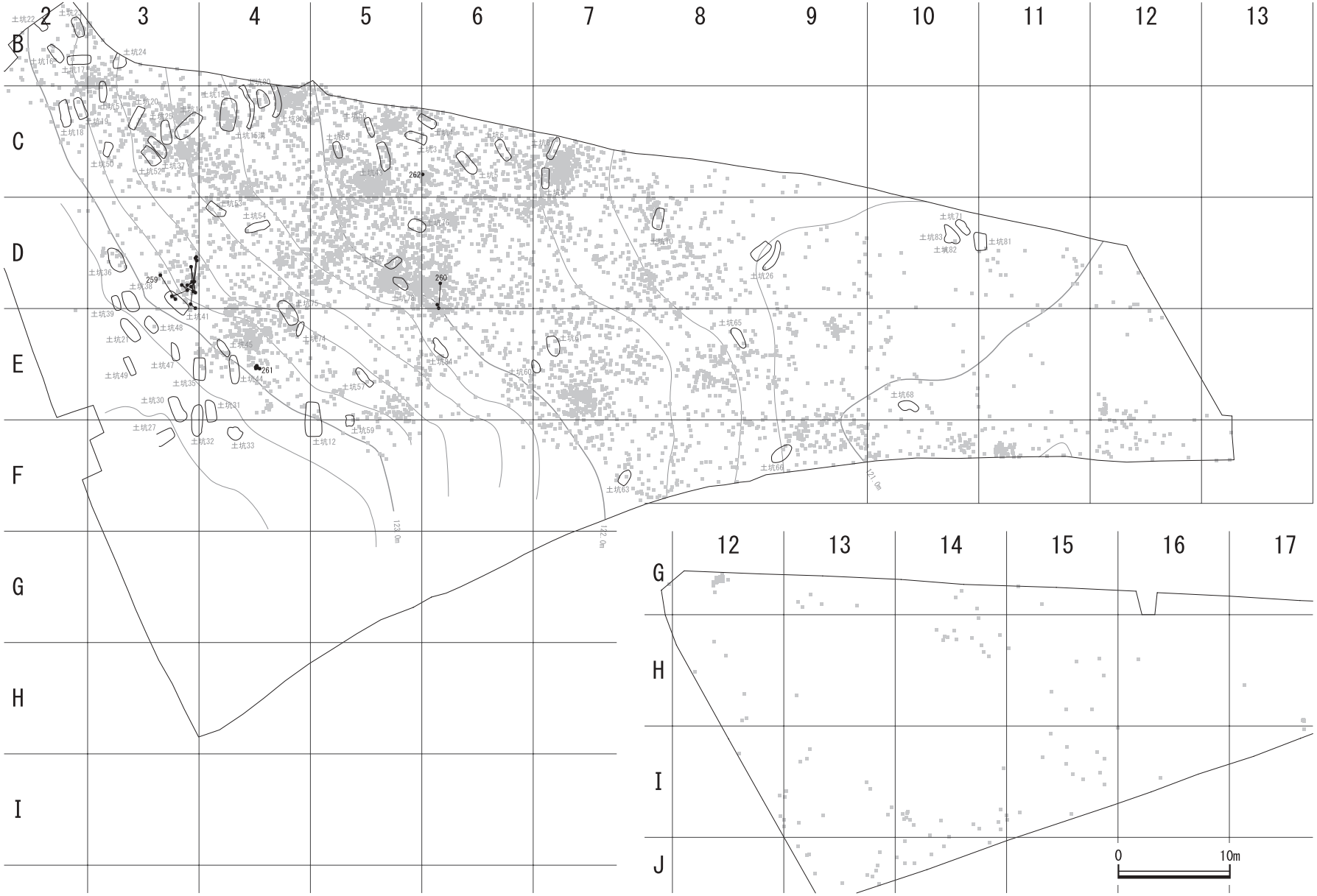
第118図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図(6)　　No.242～248



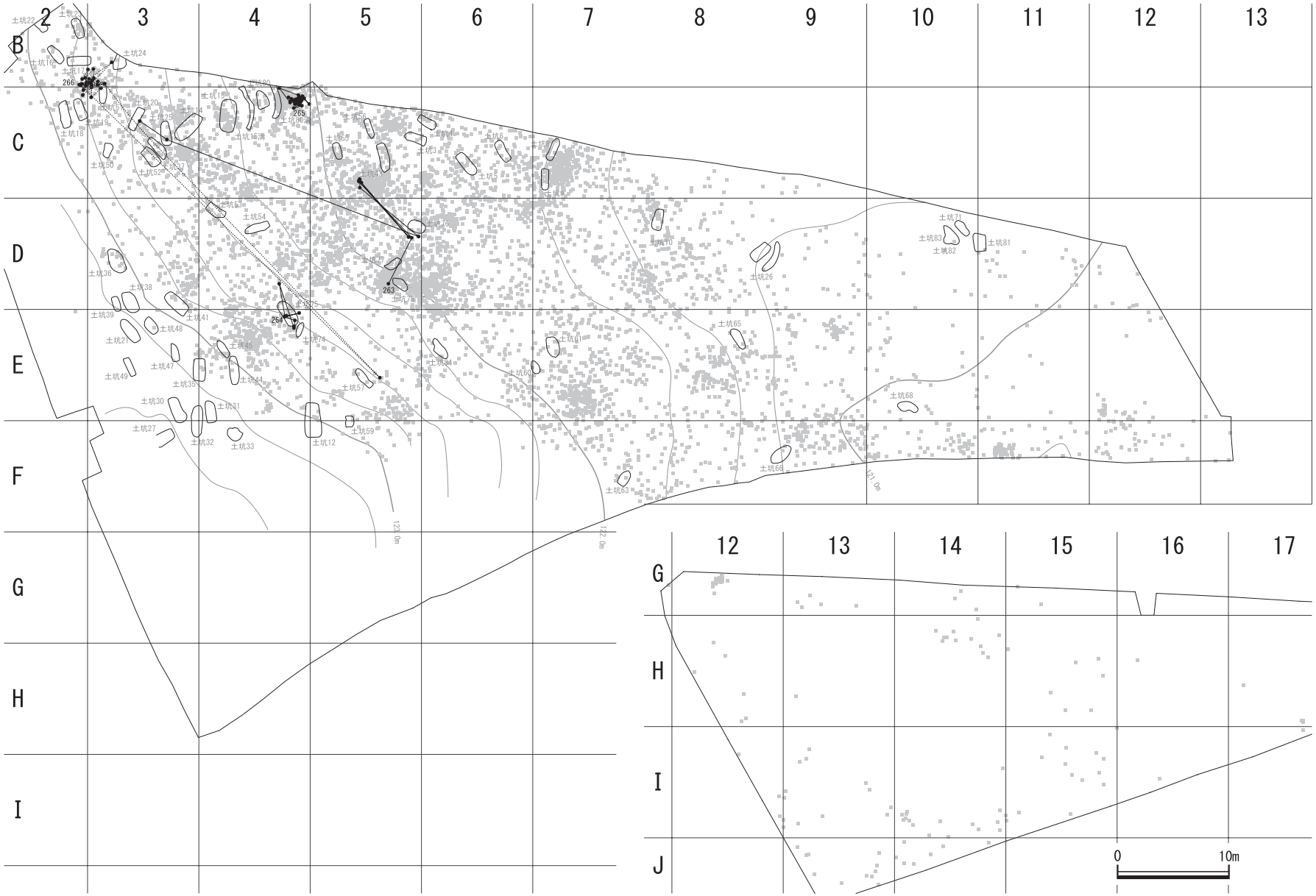
第119図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図(7)　　No.249～253



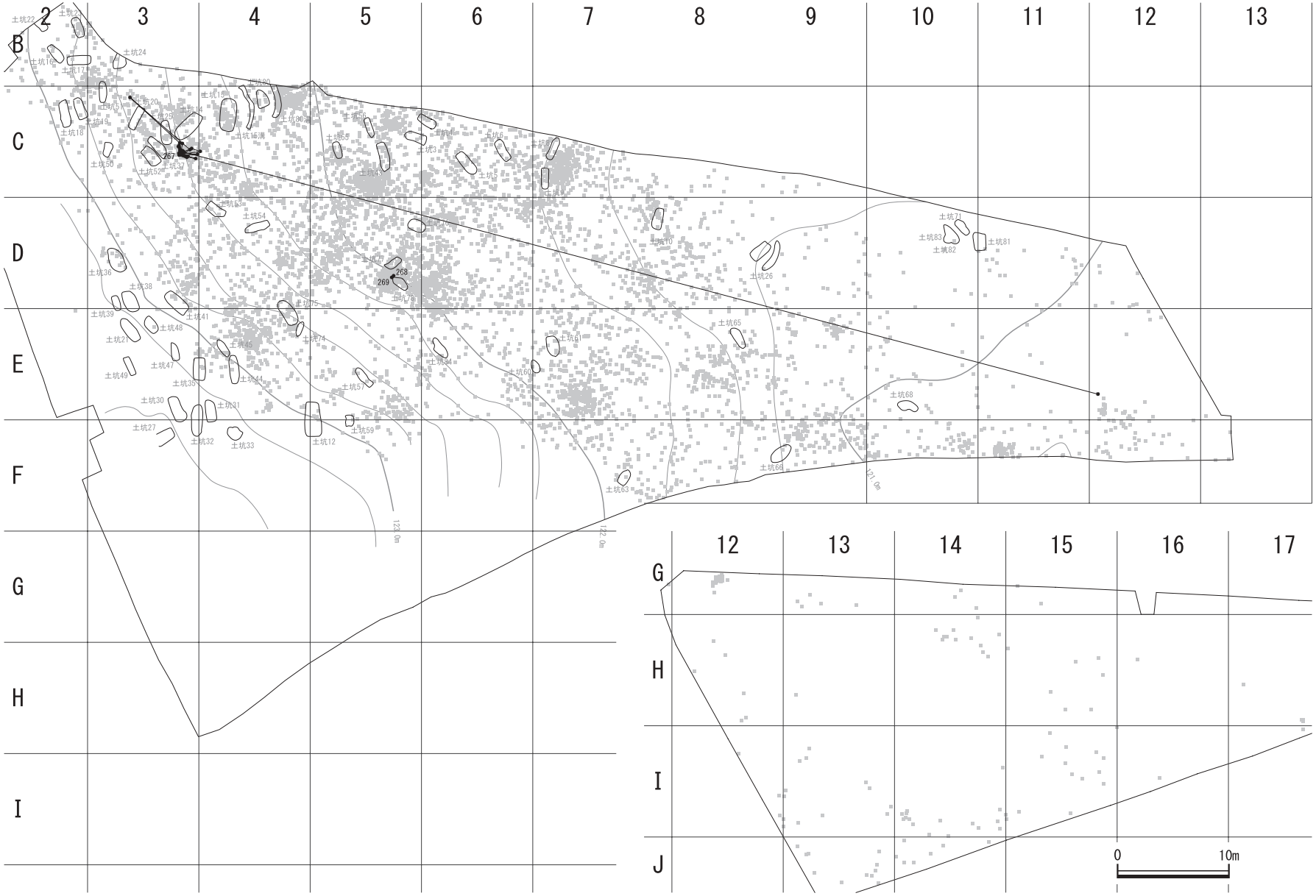
第120図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図(8)　　No.254～258



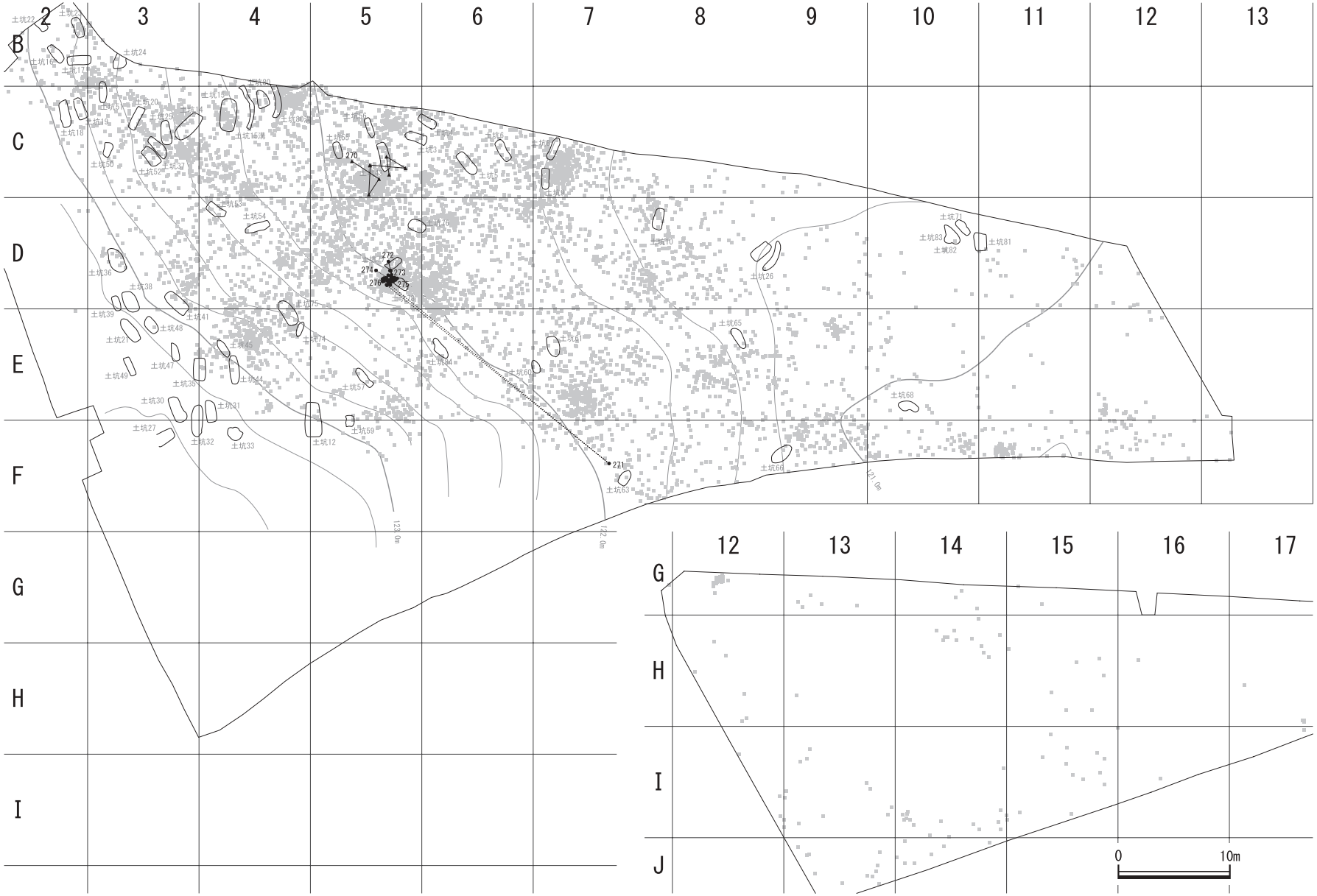
第121図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図(9)　　No.259～262



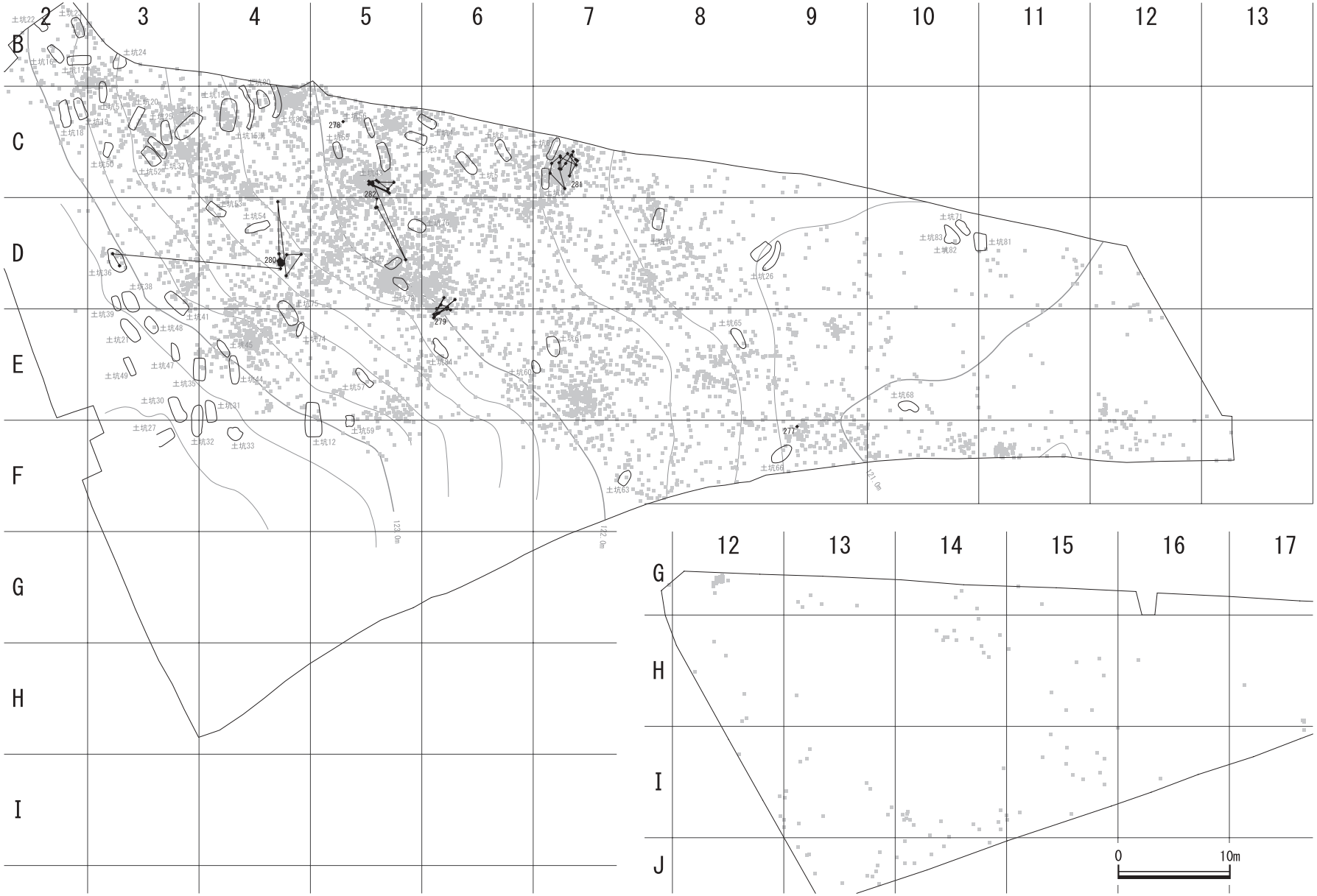
第122図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図⑽　　No.263～266



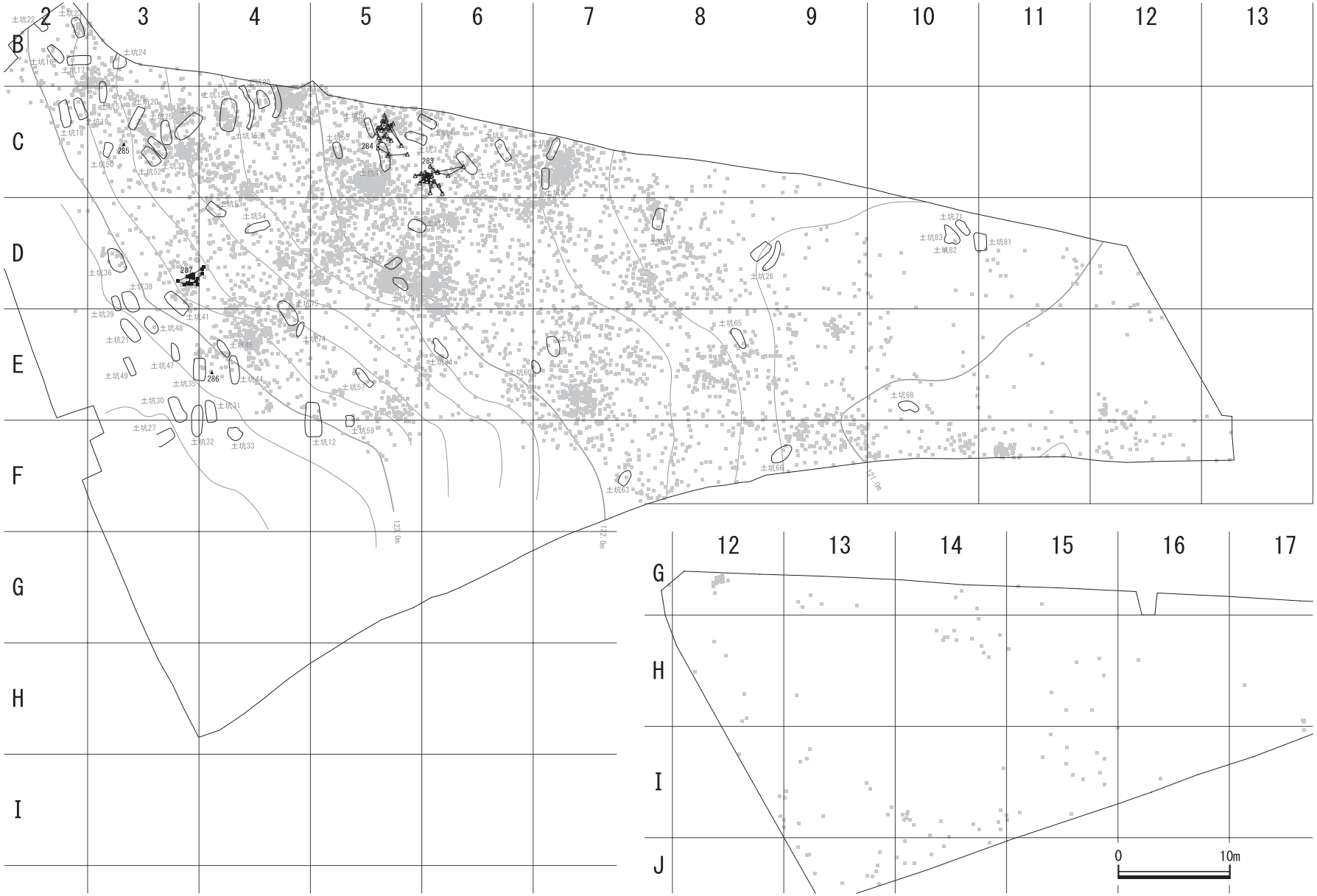
第123図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図⑾　　No.267～269



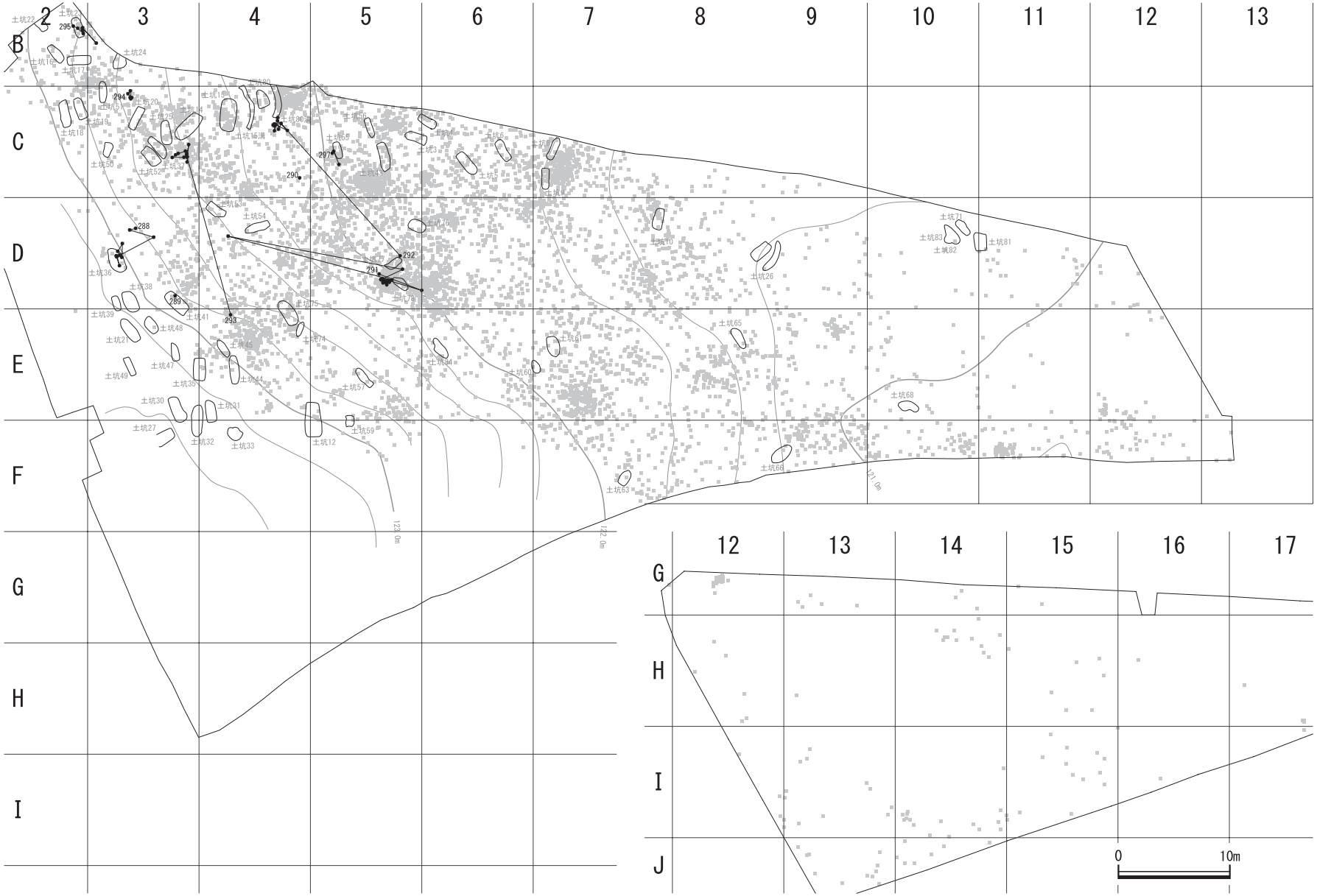
第124図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図⑫　　No.270～276



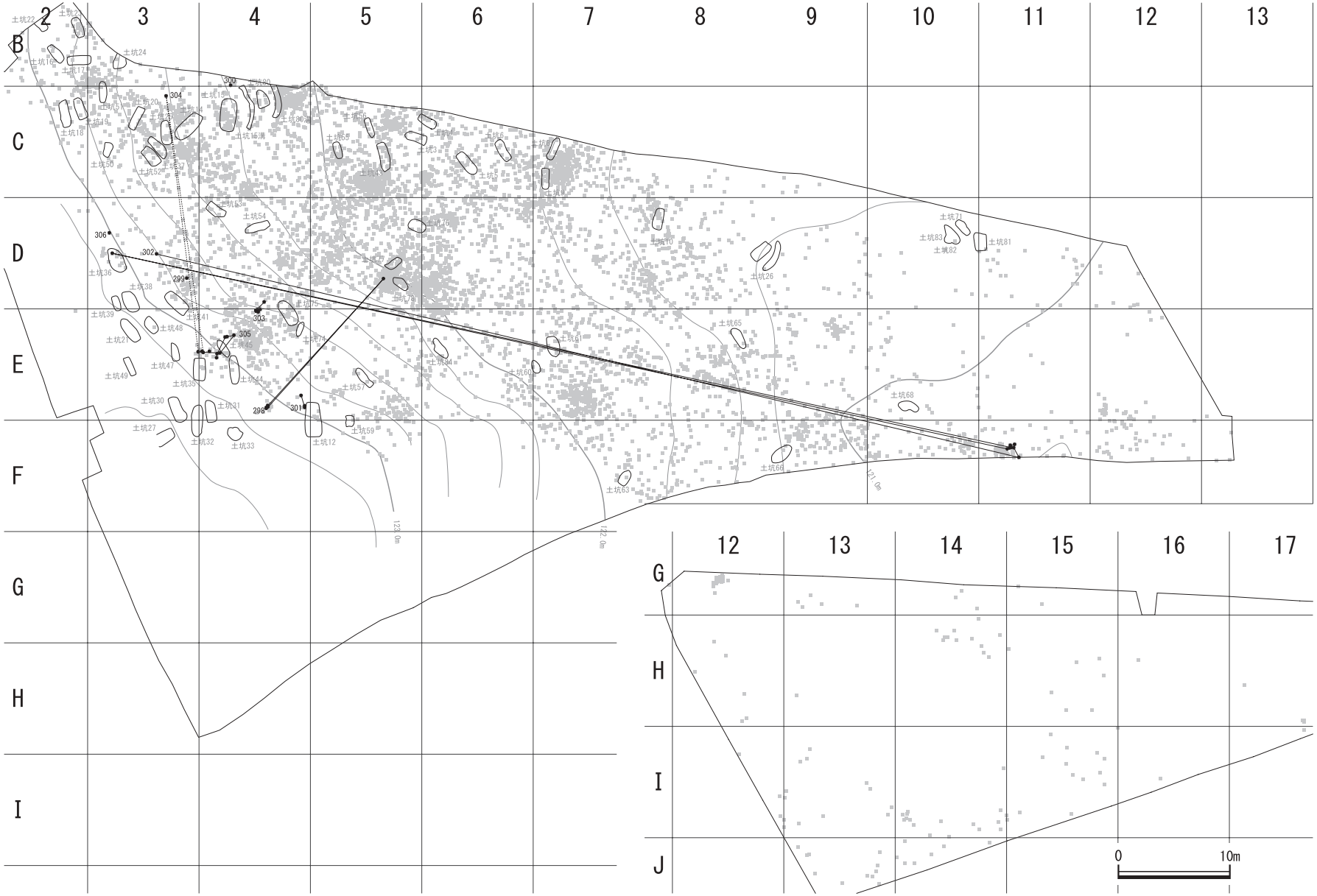
第125図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図⒀　　No.277～282



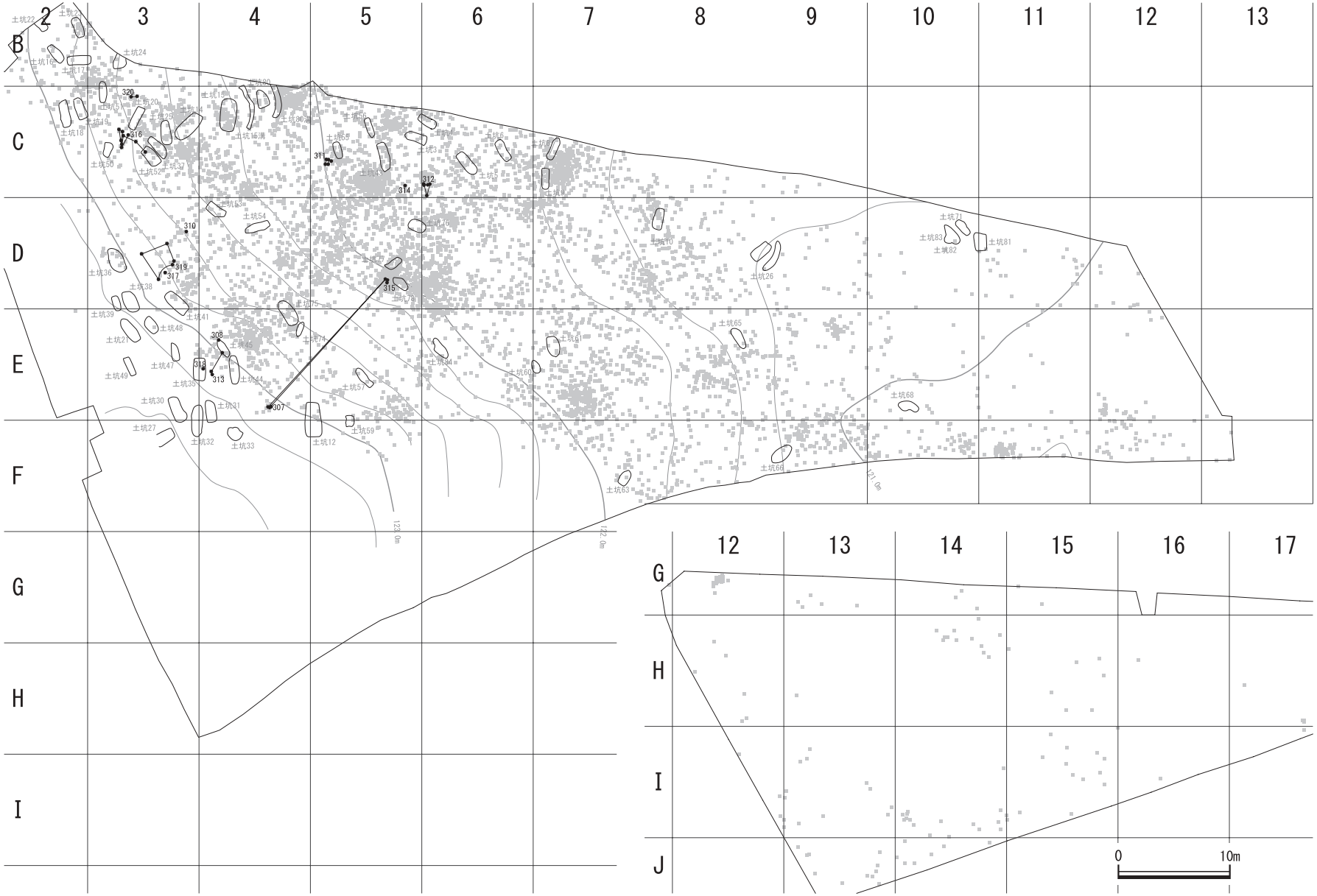
第126図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図⑭　　No.283～287



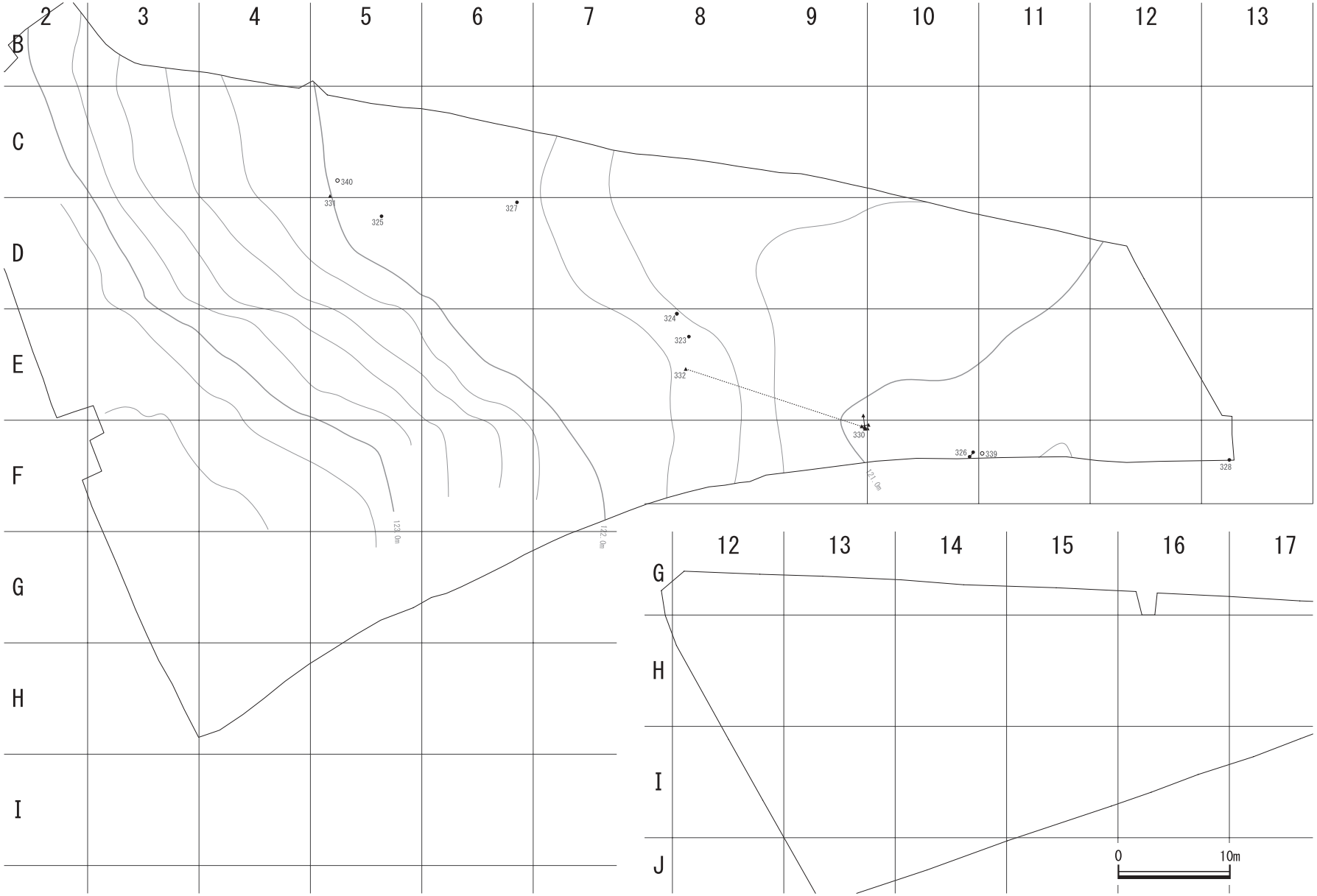
第127図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図⑮　　No.288～297



第128図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図⑯　　No.298～306



第129図　弥生時代後期～古墳時代初頭　土器出土分布図⑰　　No.307～320



第130図　古代～中世　出土遺物分布図

表５　古殿諏訪陣跡遺物観察表

挿図	№	出土区	層	器　種	部　位	胎　土	焼成	口径	底径	器高	器面調整		備考
											外　面	内　面	
11	1	CP89	Ⅰ	染付皿	底部		良好	－	－	－	ロクロ		
	2	CD５	Ⅱa	天目碗	底部		良好	－	2.0	－	ロクロ		
	3	C６	Ⅰ	青磁碗	口縁部		良好	7.8	－	－	ロクロ		鎬連弁
	4	CD５	Ⅱa	青磁碗	胴部		良好	－	－	－	ロクロ		鎬連弁
	5	CD789	ⅠⅡ	青磁碗	口縁部		良好	－	－	－	ロクロ		
	6	C６	Ⅱa	青磁皿	口縁部		貫入	－	－	－	ロクロ		括花文
	7	C６	Ⅰ	白磁皿	底部		良好	－	－	－	ロクロ		陰刻
	8	C６	Ⅰ	土師皿	底部	精緻	良好	－	6.2	－	ロクロ		糸切
	9	D６	Ⅱa	土師皿	底部	精緻	良好	－	9.4	－	ロクロ		糸切
	10	C６	Ⅱa	土師皿	底部	精緻	良好	－	9.6	－	ロクロ		糸切
	11	C６	Ⅱa	土師皿	口縁～底部	精緻	良好	8.6	6.2	1.9	ロクロ		糸切
	12	D６	Ⅰ	土師	底部	精緻	良好	－	－	－	ロクロ		糸切
	13	CD５	Ⅱa	土師皿	底部	精緻	良好	－	－	－	ロクロ		ヘラ切
	14	C６	Ⅰ	須恵壺	肩部	精緻	良	－	－	－	平行叩き	同心円叩き	
	15	C５	Ⅰ	須恵器	胴部	精緻	良好	－	－	－	格子目叩き？	同心円叩き？	
	16	C６	Ⅱa	土師器	口縁部	精緻	良好	－	－	－	ロクロ		内赤
	17	CD５	Ⅱa	土師坏	底部	精緻	良好	－	7.1	－	ロクロ		脚径8.6
	18	D６	Ⅰ	土師皿	底部	精緻	良好	－	7.4	－	ロクロ		ヘラ切
	19	D６	Ⅱa	壺	胴部		良好	－	16.9（胴）	－	ナデ	ナデ	中津野

表６　堂園遺跡Ａ地点縄文土器観察表(1)

挿図	№	出土区	層	器　種	部　位	胎　土	焼成	色　調		器面調整		文　　様	備考
								外　面	内　面	外　面	内　面		
19	20	D11	Ⅲ	轟	口縁部	細粒	良好	暗褐色	褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	微隆起線文	
	21	D10	Ⅲ	轟	口縁部	細粒	良好	褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	微隆起線文	煤
	22	D12	Ⅱ	轟	口縁部		良好	褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	微隆起線文	
	23	D11	Ⅲ	轟	胴部	砂粒	良好	褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	微隆起線文	
	24	D10	Ⅲ	轟	胴部	砂粒細粒	良好	暗褐色	褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	微隆起線文	
	25		Ⅲ	深浦?	口縁部	小礫多	良好	赤褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	粘土紐貼付	煤
20	26	H17	Ⅲ	船元?	胴部	砂粒	良好	褐色		ナデ	ナデ	縄文R→L	
	27	H17	Ⅲ	船元?	胴部	砂粒	良好	褐色		ナデ	ナデ	縄文R→L	
	28	H17	Ⅲ	船元?	胴部	砂粒	良好	褐色		ナデ	ナデ	縄文R→L	
	29	H17	Ⅲ	船元?	胴部	砂粒	良好	暗褐色	褐色	ナデ	ナデ	縄文R→L	
	30	H17	Ⅲ	船元?	胴部	砂礫多	良好	褐色	濃茶褐色	ナデ	ナデ	縄文R→L	煤
	31	H17	Ⅲ	船元?	胴部	砂粒	良好	褐色		ナデ	ナデ	縄文R→L	
	32	H17	Ⅲ	船元?	胴部	砂粒	良好	褐色		ナデ	ナデ	縄文R→L	
	33	H17	Ⅲ	船元?	胴部	砂粒	良好	褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	縄文R→L	
	34	H17	Ⅲ	船元?	胴部	砂粒	良好	褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	縄文R→L	
	35	H17	Ⅲ	船元?	胴部	小礫多	良好	褐色	淡黒褐色	ナデ	ナデ	縄文R→L	
	36	H17	Ⅲ	船元?	胴部	小礫多	良好	褐色	淡黒褐色	ナデ	ナデ	縄文R→L	
	37	H17	Ⅲ	船元?	胴部	砂粒	良好	褐色		ナデ	ナデ	縄文R→L　結節部あり	
21	38	E５	Ⅲ		口縁部	細粒	良好	茶褐色		丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	煤
	39	C３	Ⅱ		口縁部	砂礫	良好			丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	
	40	B４	Ⅲ	南福寺?	胴部	砂粒	良好	茶褐色		丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	
	41	E５	ⅡⅢ	南福寺?		細粒	良好	茶褐色		丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	煤
22	42	I, J14	ⅡⅢ	指宿	胴部	細粒	良好	淡赤褐色		丁寧なヨコナデ	ナデ		
	43	I14	ⅡⅢ	指宿	口縁～胴部	小礫少	良好	淡赤褐色	暗褐色	横位貝殻条痕	横位貝殻条痕	沈線文　口唇凸起部には刺突文	
	44	D３	Ⅲ	指宿	口縁部	砂粒多	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	やや粗いヨコナデ	やや粗いヨコナデ	沈線文	
	45	D３	Ⅲ	指宿	口～胴	砂粒	良好	濃茶褐色		ヨコナデ	ヨコナデ		煤
	46	D３	Ⅲ	指宿	口縁部	小礫	良好	淡赤褐色		貝殻条痕	ヨコナデ	沈線２条	
	47		Ⅲ		口縁下		良好	暗赤褐色		丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	
	48	E５	Ⅲ		胴部	砂礫	良好	褐色		丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	
23	49	E10, 11 H12	ⅡⅢ	指宿	口縁～胴部	砂粒多	良好	褐色	暗褐色	ケズリ	ケズリ	口縁下に沈線２条, 3箇所山形突起 〔穿孔２箇所頂部に刻み目文〕	
	50	E11	Ⅲ	指宿	底部		良好	暗褐色		ケズリ	ケズリ	底面に滑石	
	51	E11	Ⅲ	指宿	胴部	砂粒多	良好	褐色	暗褐色	ケズリ	ケズリ		
24	52	H15	Ⅲ	指宿?	胴部		良好	明褐色	暗褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	
	53	E９	Ⅲ		胴部	砂粒多	良	淡赤褐色		ヨコナデ	ヨコナデ		
	54	F11	Ⅱ		胴部下位	砂礫多	良好	淡赤褐色	褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ		
	55	F11	Ⅱ		胴部下位	砂礫砂粒	良好	淡赤褐色	褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ		
	56	F７	Ⅲ	市来?	口縁部		良好	褐色	明褐色	貝殻条痕	貝殻条痕		煤
	57	F８	Ⅱ	市来	口縁部	細粒	良好	暗褐色	暗褐色	ナデ	貝殻ナデ	斜位連続刺突文	
	58	C５	コドウ2	市来台付皿?	脚部?		良好	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ		
25	59	C5, 6	ⅡⅢ	晩期深鉢	口縁屈曲部	細粒	良好	淡赤褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	60	AC６	Ⅲ	晩期深鉢	口縁部	砂粒	良好	褐色		ヨコナデ	ヨコナデ		
	61	C６	Ⅱ		胴部	細粒	良好	濃茶褐色	茶褐色	丁寧なヨコナデ	丁寧なヨコナデ	条痕	煤
	62	C６	Ⅲ		胴部	細粒	良好	黒褐色		ヨコナデ	丁寧なナデ	条痕	
	63	C, D６	ⅡⅢ	晩期深鉢	胴部	細粒	良好	褐色		ヨコナデ	ヨコナデ		煤
	64	I13	Ⅱ	晩期深鉢	胴部	砂粒	良好	淡黒褐色	暗褐色	粗いナデ	ヨコナデ		
	65	I13	Ⅱ	晩期深鉢	胴部	砂粒多	良好	暗褐色		粗いヨコナデ	粗いヨコナデ		
	66	AD８	Ⅱ	晩期深鉢	口縁部	砂礫多	良好	暗褐色		ヨコナデ	ヨコナデ		煤
	67	AD７	Ⅱ	晩期深鉢	胴部	砂粒	良好	暗褐色		丁寧なナデ	ヨコナデ		
	68	AD４, ５	Ⅱ	晩期深鉢	口縁部		良好	暗褐色		粗いヨコナデ	ヨコナデ		煤
	69	AD８ AE８	ⅡⅢ	晩期深鉢	口縁部		良好	淡灰褐色	明褐色	丁寧なヨコナデ	丁寧なヨコナデ	波状口縁	
	70	AD８	Ⅱ	晩期深鉢	口縁部		良好	暗褐色		丁寧なナデ	丁寧なナデ		
	71	H14	Ⅲ		屈曲部	砂粒砂礫	良好	明褐色		ナデ	ヨコナデ	外面は部分的に調整が異なる	
	72	H14	Ⅲ	晩期深鉢	胴部屈曲部	砂礫	良好	暗褐色	褐色	粗いナデ	丁寧なナデ		
26	73	E, F12	ⅡⅢ	深鉢	口縁～胴部		良好	褐色	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	74	E, F12	ⅡⅢ	晩期	口縁～胴部	砂粒	良好	淡赤褐色	暗淡赤褐色	ナデ〔ハケメ〕	ナデ〔貝殻〕		
	75	E12 F11, 12	Ⅱ	晩期	口縁～胴部	小礫少	良好	黒褐色		ヨコナデ	ヨコナデ		
	76	F11	Ⅱ	晩期深鉢?	口縁部		良好	淡赤褐色		丁寧なナデ	丁寧なナデ		
	77	E12 F11, 12	Ⅱ	晩期深鉢	胴部	砂礫	良好	暗濃茶褐色		粗いヨコナデ	ヨコナデ		
	78	E８	Ⅲ		胴部	砂粒多	良好	黒褐色		粗いナデ	丁寧なナデ		

表７　堂園遺跡Ａ地点縄文土器観察表(2)

挿図	№	出土区	層	器　種	部　位	胎　土	焼成	色　調		器面調整		文　　様	備考
								外　面	内　面	外　面	内　面		
27	79	H14	II		胴部	砂粒多	良好	淡茶褐色	褐色	粗いナデ	粗いナデ		
	80	H13	III		胴部	砂礫多	良好	褐色		粗いナデ	丁寧なナデ		
	81	I13	III	深鉢	胴部		良好	明褐色		粗いナデ	ヨコナデ		
	82	I13	II		胴部		良好	淡褐色		粗いヨコナデ	粗いヨコナデ		
	83	C 5	II		胴部	砂粒多	良	淡赤褐色		ヨコナデ	ヨコナデ		
	84	F12	II		胴部	細粒多	良	淡黒褐色	赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
28	85	AE 8	II	晩期中華鍋	口縁部	砂粒	良好	暗褐色		粗いヨコナデ	ミガキに近いナデ		
	86	E 8	II	中華鍋?	胴部	小礫少	良好	暗灰褐色		粗いナデ	ミガキに近いナデ		煤
	87	D4, 5	II	中華鍋?	胴部	砂粒	良好	暗褐色		ヨコナデ	丁寧なナデ		煤
	88	E 7	II	中華鍋?	胴部	小礫少	良好	暗灰褐色		ヨコナデ	ミガキに近いナデ		煤
	89	D 5	II	中華鍋?	胴部		良好	明褐色		粗いヨコナデ	粗いヨコナデ		
	90	B2, 3	III		口縁部		良好	茶褐色		ミガキに近いナデ	ミガキに近いナデ		煤
	91	AC 6	II	晩期深鉢	胴部		良好	暗褐色	褐色	粗いナデ	丁寧なナデ		
	92	AC 6	II	晩期深鉢	胴部	砂粒	良好	暗褐色	褐色	粗いヨコナデ	ミガキに近いナデ		
	93	AC 6	II		胴部		良好	暗褐色	褐色	粗いナデ	丁寧なナデ		煤
	94	C 6	II	晩期深鉢	胴部	砂粒	良好	暗褐色	褐色	粗いヨコナデ	ミガキに近いナデ		
	95	C 6	II	晩期	胴部	砂粒	良好	暗褐色	褐色	粗いナデ	丁寧なナデ		煤
	96	D 7	II		胴部	細粒	良好	淡茶褐色	明褐色	ナデ	ナデ	土坑65周辺	煤
29	97	H12, 14	II III		口縁部		良好	暗褐色		丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線１条	
	98	H14	III		口縁部	砂粒	良好	暗褐色		ヨコナデ	丁寧なナデ		
	99	H15	II	晩期鉢	口縁部	小礫	良好	暗褐色		ヨコナデ	丁寧なナデ		
	100	H13, 15	II III		口縁部	砂粒	良好	褐色	暗褐色	ヨコナデ	丁寧なナデ		
	101	H14	III	晩期鉢	口縁部	小礫	良好	暗褐色		ヨコナデ	丁寧なナデ		
	102	E, F 8	II	鉢	口縁部	砂粒	良好	淡灰褐色		ミガキに近いナデ	ミガキに近いナデ		
	103	H14	III	晩期鉢	頸部～屈曲部	小礫少	良好	暗茶褐色	暗褐色	ヨコナデ	丁寧なナデ		煤
	104	C, D 5	III		胴部屈曲部径	砂粒	良好	淡赤褐色	淡黄灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		煤
	105	D 7	II	鉢?	胴部	細粒	良好	明褐色	淡黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	106	H14	III				良好	暗褐色	褐色	ヨコナデ	丁寧なナデ		
	107	H14	III			砂粒	良好	暗褐色	褐色	ヨコナデ	丁寧なナデ		
	108	D 8	II	浅鉢	胴部屈曲部	細粒	良好	明褐色		ヨコナデ	ヨコナデ		
	109	D 8	II	浅鉢	胴部屈曲部		良好	暗茶褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	110	E 8	II	黒川浅鉢	口縁部		良好	暗茶褐色	黒褐色	ミガキ	ミガキ	リボン状突起	
	111	B 2	III	晩期浅鉢	胴部		良好	明淡褐色	明淡褐色	研磨	研磨		
	112	E 9	II	晩期浅鉢	胴部		良好	暗茶褐色	暗茶褐色	ミガキ	ミガキ		
	113	E6, 8	II	晩期丸底鉢	胴部		良好	暗褐色	淡黒褐色	ミガキ	丁寧なナデ		
	114	F 7	II	晩期鉢	胴部		良好	褐色	淡黒褐色	やや粗いミガキ	やや粗いミガキ		
30	115	D11, 12	II III		底部	砂礫小礫少	良好	暗褐色	褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ		
	116	G14	III		底部	砂粒多	良好	褐色	淡黒褐色	粗いナデ	丁寧なナデ	底面に滑石	
	117	D11	III		底部		良好	明褐色	淡灰褐色	ナデ	丁寧なナデ		
	118	C, D 7	II		底部		良好	褐色	黒褐色	ナデ	丁寧なナデ		
	119	E 9	II III		底部	砂礫多	良好	明褐色	淡黒褐色	ナデ	ナデ		
	120	I14	III		底部	砂礫少砂粒多	良好	明褐色	暗褐色	粗いナデ	ナデ		

表８　堂園遺跡Ａ地点石器観察表

挿図	№	出土区	層	分　類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石　材	備　考
31	121	F９	Ⅱ	磨製石鏃	4.2	2.05	0.4	2.81	頁岩質ホルンフェルス	
	122	I12	Ⅱ	磨製石鏃	3.5	2.3	0.3	2.68	頁岩質ホルンフェルス	
	123	H12	Ⅱ	磨製石鏃	4.8	1.6	0.4	2.7	頁岩質ホルンフェルス	
	124	H16	Ⅲ	石鏃	2.1	1.2	0.4	0.69	鉄石英	
	125			石鏃	2.1	1.45	0.35	0.84	頁岩	
	126	E10	Ⅲ	石鏃	2.4	1.45	0.3	0.65	頁岩	
	127	H17	Ⅲ	石鏃	2.9	1.65	0.4	0.84	安山岩	
	128	G13	Ⅱ	石鏃	2.5	1.85	0.4	0.78	黒耀石（腰岳類似）	
	129	I13	Ⅱ	石鏃	2.2	1.7	0.45	0.61	頁岩	
	130	I12	Ⅲ	石鏃	2.3	1.7	0.4	0.86	めのう	
	131		Ⅱ	石鏃	1.8	1.8	0.5	1.02	安山岩	
	132	I14	Ⅲ	石鏃	1.5	1.7	0.5	0.77	黒耀石（三船類似）	
32	133	D３	Ⅲ	石匙	9.4	4.9	1.3	53	西北九州系安山岩	
	134	I14	Ⅲ	石匙	2.2	4	0.7	4.44	西北九州系安山岩	
	135		撹乱	石匙	2.4	3.4	0.7	3.41	黒耀石（淀姫類似）	
	136	H12	Ⅱ	石錐	5	1.6	0.9	4.81	頁岩	
33	137	G12	Ⅲ	石核	5	9.3	8.6	510	砂岩	
	138		Ⅲ	石核	4.5	9.5	5.8	220	頁岩質ホルンフェルス	
34	139	I13	Ⅲ	石核	13.5	10.5	4.9	750	砂岩	
	140	E11　F11	Ⅲ	接合資料	10.4	6.5	3.3	150	砂岩	
	141	E11　F11	Ⅲ	接合資料	9.6	8.9	4.7	350	砂岩	
35	142		Ⅲ	磨斧	19.1	7.15	4.05	665		接合資料
	143	H12	Ⅲ	磨斧	14.2	6.5	3.5	405	砂岩質ホルンフェルス	
	144	F12	Ⅴ	磨斧	14.6	7	3.85	500	砂岩質ホルンフェルス	
36	145	I15	Ⅲ	打斧	11.8	4.1	1.5	82.3	頁岩質ホルンフェルス	
	146	D８　E11	Ⅱ	打斧	14.7	5.5	1.8	175.87	頁岩質ホルンフェルス	接合資料
	147	C８	Ⅱ	打斧	7.8	5	1.7	69.69		
	148	D６	Ⅱ	打斧	9.5	4.5	2	89.31	頁岩質ホルンフェルス	
	149	F５	Ⅲ	打斧	12.3	5.6	2	127.47	頁岩質ホルンフェルス	
	150	I16	Ⅱ	打斧	12	5.6	1.6	83.7	頁岩	
37	151	D４	Ⅱ	素材剥片	12.6	4	1	42.59	頁岩質ホルンフェルス	
	152	E12	Ⅱ	素材剥片	12.8	5.1	1.7	97.34	頁岩質ホルンフェルス	
38	153	J14	Ⅱ	掻器	6.7	7.9	2.8	181.54	頁岩	
	154	F11	Ⅲ	礫器	7.2	9.8	3.75	275	砂岩	
	155	H17	Ⅲ	礫器	10.5	10.5	3.5	410	砂岩	
	156	I13	Ⅲ	礫器	10.1	11.1	4.45	570	砂岩	
39	157	F11	Ⅲ	礫器	5.2	9.1	1.2	80.23	砂岩	
	158	D４	Ⅱ	礫器	16.4	12.9	4.7	1280	砂岩	
	159	D５	Ⅱ	礫器	11.9	11.9	3.3	700	砂岩	
40	160	H15	Ⅲ	磨・敲石	11.4	8.4	5.1	670	砂岩	
	161	H13	Ⅲ	磨・敲石	9	7.4	5	465	砂岩	
	162	H16	Ⅲ	磨・敲石	9.6	8	4.1	470	砂岩	
	163	C９	Ⅱ	磨・敲石	14.7	3.4	2.6	200	砂岩質ホルンフェルス	
	164	E８	Ⅱ	磨・敲石	6.6	4.9	2.15	87.34	砂岩	
	165	F11	Ⅱ	磨・敲石	2.9	3.5	2.3	41.88	砂岩	
	166	D７	Ⅱ	磨・敲石	4.8	4.2	3.4	96.28	砂岩	
	167	D７	Ⅱ	磨・敲石	8.8	3	1.4	60.25	頁岩質ホルンフェルス	
	168	I15	Ⅱ	磨・敲石	9.6	3.9	1.5	80.15	頁岩質ホルンフェルス	
41	169	E７	Ⅱ	砥石	9.9	2.7	2.5	135.22	砂岩	
	170	B２　E10	Ⅲ	石皿	15.6	12.7	2.35	850	砂岩	
	171	C５	Ⅱ	石錘？	4.4	4.4	2.7	55.06	安山岩	
	172	E８	Ⅱ	礫器？	24.3	4.8	2.95	340	頁岩質ホルンフェルス	
	173	E８	Ⅲ	軽石製品	10	8.8	4	62.89	軽石	

表９　堂園遺跡Ａ地点弥生土器観察表(1)

挿図	№	出土区	層	器　種	部　位	胎　土	焼成	色　調		器面調整		文　様　等	備考
								外　面	内　面	外　面	内　面		
75	174	F７	Ⅱ	甕	胴下半部	金雲母	良好	淡明赤褐色	淡明赤褐色	丁寧なナデ	細かいハケ目		
	175	F９	ⅡⅢ	甕	口縁部		良好	明褐色	褐色	ナデ	ナデ		
	176	F9, E９	ⅡⅢ	甕	口縁部	石英多	良好	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	177	C３	Ⅱ	甕	口縁部	小礫	良好	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	178	C２	Ⅱ	甕	口縁部	小礫	良好	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	179	E８	Ⅱ	甕	口縁部		良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ		
	180	D４	Ⅱ	甕	口縁部	長石	良好	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	181	I14	Ⅱ		口縁部	角閃石多砂粒	良好	明褐色	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
76	182	C8, D4, D8, D7, E７	Ⅱ	甕	口縁部	石英	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	183	G12	Ⅱ	甕				濃茶褐色	濃茶褐色	ミガキ	ナデ	凸帯２条	
	184	E5, F5	ⅠⅡ	甕	口縁～胴部	雲母少	良好	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	凸帯一条	
	185	C５	土坑	甕	口縁部	小礫極少	良好	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	凸帯	
	186	E５	Ⅱ	甕	底部	小礫	良好	褐色	黒褐色	丁寧なナデ，ミガキ痕あり	ミガキ		雲母見られず
	187	C４	Ⅱ	大甕	口縁部		良好	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	188	C６	Ⅱ	大甕	口縁部	砂粒	良好	淡褐色	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	189	I15	Ⅱ	大甕	胴部凸帯	砂粒	良好	暗褐色	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	190	D７	Ⅱ	甕	胴部凸帯	雲母	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	191	C6, E9, D4, C3, E5, D5	Ⅱ	大甕	口縁部		良好	濃茶褐色	明茶褐色	ミガキ	ミガキ		
77	192	C6, D5, E5, E６	Ⅱ	壺	完形		良好			ハケ目後ミガキ			
	193			壺	完形	砂粒	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ		土坑65内出土
	194	F７	Ⅱ	壺	口縁部		良好	暗茶褐色	暗茶褐色	ナデ	ナデ		
	195	D6, E8, C６	Ⅱ	壺	口縁部	赤色粒	良好	赤褐色	赤褐色	不明	不明		
	196	E７	Ⅱ	壺	口縁部		良好	暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口唇に凹線	雲母なし
	197	C３	Ⅱ	壺	口縁部		良好	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	198	D５	Ⅱ	壺	口縁部	赤色粒	良好	明褐色	明褐色	ナデ?	ナデ?		
	199	C４	Ⅱ	壺	口縁部		良好	暗茶褐色	暗茶褐色	不明	ナデ	口唇に凹線	剥落顕著
	200	E8, E9	ⅡⅢ	壺	頸～胴部	小礫雲母少	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	不明	ナデ	凸帯３条	土坑65周　辺
78	201			彩文壺	口縁部	砂粒石英	良好	肌色	肌色	ヨコナデ	ヨコナデ	丹塗穿孔	
	202	C３	Ⅱ	彩文壺	口縁部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	203	C３	Ⅱ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	土坑51
	204	B３	Ⅱ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	205	B２	Ⅱ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	206	C３		彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	207	C３	Ⅱ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	208	B３	Ⅱ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	209	B２	Ⅱ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	210	C３	Ⅱ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	211	C２	Ⅱ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	212	B３	Ⅱ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	213	B２	Ⅱ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	214	B２	Ⅰ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	215	B２	Ⅱ	彩文壺	胴部	砂粒赤色粒	良好	肌色	肌色	ハケメ	ヨコナデ	丹塗	
	216	D4, D6	ⅡⅢ	蓋	完形	精	良好	淡橙色	淡橙色	ナデ	ミガキ	２か所に２対の円形すかし	
	217	E８	Ⅱ	壺	口縁～胴部	長石砂粒	良好	淡橙褐色	淡黒褐色				雲母小片含む
	218	C４	Ⅱ	鉢	完形	砂粒多	良好	明橙黄褐色	褐色	ハケ目後ナデ	ハケ目		
79	219	D7, E9	Ⅱ	甕	口縁部	角閃石	良好	淡橙褐色	明黄白褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		雲母含む
	220	E8, 9	Ⅱ	甕	口縁部	砂粒	良好	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	221	E9, F8, 9, 10	ⅡⅢ	甕	口縁～胴部			淡茶褐色	淡茶褐色	細かいハケ目後ナデ	ナデ		
	222	F９	Ⅱ	甕	口縁部	長石	良好	明褐色	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	223	D７	Ⅱ	甕	口縁部		良好	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ		
	224	CD４	Ⅱ	甕	口縁部		良好	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ		
	225	D５	Ⅱ	甕	口縁部		良好	明褐色	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	226	F５	Ⅱ	甕	口縁部		良好	明褐色	明褐色	ハケ目?	ハケ目?		
	227	I13	Ⅱ	甕	脚部	細粒	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ		
	228	E９	Ⅱ	甕	脚部	砂粒多	良	淡赤褐色	茶褐色	不明	不明		

表10　堂園遺跡Ａ地点弥生土器観察表(2)

挿図	№	出土区	層	器種	部位	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	文様等	備考
79	229	D9, E 8, 7	Ⅱ	甕	脚部		良好	褐色	褐色	ハケ目	ナデ		
80	230	E 9	Ⅱ	壺	口縁～底部	砂粒多赤色粒		黒斑有	黒斑有	ハケメナデ	ナデ指頭圧痕	刻目凸帯	
	231	C 3	Ⅱ	壺	口縁～底部			明褐色	明褐色	ハケ目		刻目凸帯	土坑37及びその周辺
81	232	D5, 6	Ⅱ	壺	口縁～下胴部					ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	刻目凸帯	
	233			壺	口縁部		良好	褐色	褐色	ケズリ	粗いナデ	頸部に凸帯	土坑53
	234	C 4	Ⅱ	壺	口縁部	赤色粒	良好	淡明赤褐色	淡明赤褐色	ナデハケメ	ナデ		
	235	E8, F 6, 7, 8	Ⅱ	壺	口縁部		良好	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	236	D 5	ⅡⅢ	壺	底部		良好	褐色	褐色	ミガキに近いナデ	ナデ?		
	237	C 3		壺	底部	砂粒極少	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ		土坑37
	238	E7, 8	ⅡⅢ	壺	底部		良好	淡赤茶褐色	淡赤茶褐色	ミガキ	ヘラナデ		
82	239	D 4	Ⅱ	甕	口縁～胴部		良好	赤褐色	赤褐色	細かいハケ目	ケズリ後ナデ		煤
	240	D 5	Ⅱ	甕	口縁部		良好	赤褐色	赤褐色	ハケ目	ケズリ	口縁部はナデ	
83	241	E 4	Ⅱ	大壺	完形	砂粒	良好	明茶褐色	明茶褐色	ハケメ	ハケメ	頸部, 胴部に凸帯	
84	242	D 5	Ⅱ	壺	口縁～胴部		良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ	刻目凸帯	
	243	E4, 5	ⅡⅢ	壺	頸～胴部		良好	褐色	褐色	ハケメ	ナデ		
	244	C 3	Ⅱ	壺	口縁部	砂粒多	良	褐色	褐色	ハケメ	ハケメ		
	245	C 3	Ⅱ	壺	口縁部	砂粒	良好	褐色	褐色	ハケメ	ハケメ後ヨコナデ		
	246	D 5	Ⅱ	壺	口縁部	砂粒	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケメナデ	指頭圧痕ナデ		
	247	C3, 4	Ⅱ	壺	肩～胴部	砂粒赤色粒	良好	淡紅褐色	淡紅褐色			刻目凸帯１条	
	248	D4, 5	Ⅱ	壺	完形	角閃石極少白色砂粒	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケメ後ナデ		口縁部浮文　胴部刻目凸帯２条	
85	249	E 4	Ⅱ	壺	口縁～底部		良好	淡橙褐色	淡灰褐色	ハケメナデ	ナデ	刻目凸帯１条	
	250	C 5	Ⅱ	壺	口縁～底部		良好					刻目凸帯１条	
	251	C4, 6	Ⅱ	壺	口縁～下胴部		良好			ハケメナデ	ハケメ	刻目凸帯１条	
	252	D 5	Ⅱ	壺	口縁～胴部	角閃石輝石	良好	淡肌色	淡灰褐色	ハケメナデ	ナデ	刻目凸帯	
	253	E8, 9	ⅡⅢ	壺	口縁部		良好	明褐色	明褐色	ヨコナデハケメ	ヨコナデ		
86	254	E 5	Ⅱ	壺	完形		良好			粗いヘラナデ		刻目凸帯１条	
	255	B3, C3, 5, 6	Ⅱ	壺	完形	砂粒	良好	褐色	淡赤褐色	ハケメ	ヘラナデ	刻目凸帯１条	
	256	C 3	Ⅱ	壺	完形			橙褐色	橙褐色	ナデ		刻目凸帯２条	
	257	C 5	ⅡⅢ	壺	口縁～胴部		良好	橙褐色	橙褐色	ハケメナデ	ハケメナデ	刻目凸帯１条	
	258	D 5	Ⅱ	壺	頸～胴部	輝石角閃石小礫赤色粒	良好	淡橙褐色	褐色	ハケ目後ナデ		刻目凸帯１条	
87	259	D 3	ⅡⅢ	壺	完形		良好			ハケ目後ナデ	ケズリ後ナデ	刻目凸帯１条	
	260	D 6	Ⅱ	壺	頸～底部		良好	明橙褐色	明橙褐色	ハケメ	ハケメ指ナデ	刻目凸帯１条	
	261	E 4	Ⅱ	壺	完形	赤色粒砂粒	良好	暗赤褐色	淡黒褐色	ハケメ	ハケメ	刻目凸帯１条	
	262	C 5	Ⅱ	壺	完形		良好			ケズリ	ハケメ後ナデ	刻目凸帯１条	
88	263	C3, 5, D5	Ⅱ	壺	口縁～肩部	角閃石多	良好	明橙褐色	褐色	ハケ目	指頭圧痕	凸帯３条	
	264	DE 4	Ⅱ	壺	頸～胴部	角閃石輝石砂粒	良好	淡橙褐色	橙褐色			刻目凸帯１条	
	265	C 4	Ⅱ	壺	頸部～底部		良好	褐色	褐色	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ指圧痕		
	266	B2, 3, C2, 3	Ⅱ	壺	口縁～下胴部	輝石	良好	肌色	肌色	ハケメ後ナデ	ハケメ指圧痕	凸帯３条	
89	267	C 3		壺	口縁～胴部		良好	明褐色	明褐色	ナデ	指圧痕工具ナデ	凸帯３条	
	268	D 5	Ⅱ	壺	胴部		良好	褐色	灰褐色	ハケメ	ヘラナデ	凸帯５条	
	269	D 5	Ⅱ	壺	胴部	砂粒多	良好	褐色	褐色	ハケメ	ヨコナデ	凸帯５条	
90	270	C 5	Ⅱ	壺	口縁部		軟	淡赤褐色	淡褐色	ハケメ	ナデ		
	271	D 5	Ⅲ	壺	胴部		良好	赤褐色	褐色	ハケメ	ハケメ	刻目凸帯	
	272	D 5	Ⅱ	壺	胴部	石英	良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ	刻目凸帯	
	273	D 5	Ⅱ	壺	胴部	砂粒	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	ヘラナデ	ナデケズリ	刻目凸帯	
	274	D 5	Ⅱ	壺	胴部	石英粒少	良好	淡赤褐色	褐色	浅いハケメ	ヘラナデ	刻目凸帯	
	275	D 5	Ⅱ	壺	胴部	砂粒多	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	ハケメ	ナデ指押圧	刻目凸帯	
	276	D 5	ⅡⅢ		胴部		良好	褐色	褐色	ハケメ	ハケメ	刻目凸帯	
91	277	F 9	Ⅱ	壺	肩部		良好	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ	凸帯	
	278	C 5		壺	肩部		良好	明橙褐色	明橙褐色	ナデ?	ナデ?	凸帯	
	279	D6, E 6	Ⅱ	壺	底部			淡明褐色	淡明褐色	ハケメ			
	280	D 4	Ⅱ	壺	胴～底部					ヘラナデ	ナデ		
	281	C 7	Ⅱ	壺	胴～底部	砂粒赤色粒		淡赤茶褐色	淡暗茶褐色	ケズリ	ハケメ		
	282	C 5	Ⅱ	壺	底部	細粒		明淡黄褐色	明淡黄褐色	ナデ			
92	283	C5, 6	Ⅱ	高杯	完形	長石砂粒角閃石	良好	淡明赤褐色	淡赤褐色	ハケメ	ハケメ	坏部と脚部は分離	雲母を含む

表11　堂園遺跡Ａ地点弥生土器観察表(3)

挿図	№	出土区	層	器　種	部　位	胎　土	焼成	色　調		器面調整		文　様　等	備考
								外　面	内　面	外　面	内　面		
92	284	C５	Ⅱ	高杯	杯部	細粒多	良好	褐色	褐色	ケズリヨコナデ	ナデ		
	285	C３	Ⅱ	鉢?	脚部		良好	褐色	褐色	軽いケズリ	指押圧後ナデ		
	286	E４	Ⅰ	高杯	脚部	角閃石	良好	淡赤褐色	黒褐色	ハケメ	ナデ	穿孔５か所	
	287	D３	Ⅱ	ジョッキ型	口縁～底部	精		淡明黄褐色	淡明黄褐色	ナデ	しぼりナデ		
93	288	D３	ⅡⅢ	壺	完形	小礫		赤褐色	赤褐色	ハケメ後板ナデ	ハケメ指頭圧痕		
	289	D３	Ⅱ	小壺	完形		良好	淡暗茶褐色	淡暗茶褐色	ナデケズリ	ナデ		
	290	C４	Ⅱ	短頸壺	完形	砂粒		淡明橙褐色	淡明橙褐色	ケズリ			
	291	D５	ⅡⅢ	壺	完形	角閃石	良好	明橙褐色	明橙褐色	ハケメ	粗いケズリ		
	292	C４	Ⅱ	短頸壺	口縁～底部	小礫		淡橙褐色	淡赤褐色	ケズリナデ			
	293	C３	ⅡⅢ	短頸壺	口縁～底部	小礫		褐色	褐色	ハケメ後ケズリ	工具ナデ		
	294	C３	Ⅱ	短頸壺	口縁部	小礫	良好	赤褐色	赤褐色	ナデ	ミガキ		
	295	B2，３	Ⅱ	壺	肩～底部			暗赤褐色	暗赤褐色	ハケメケズリ	工具ナデ		
	296	E４	Ⅱ	壺	完形	砂粒	良好	褐色	淡褐色	ナデ	ハケメ		
	297	C５	Ⅱ	小壺	胴部	赤色粒	良好	赤褐色	赤褐色	ミガキ	ナデ		
94	298	E４	Ⅱ	鉢		石英粒	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	軽いケズリ			
	299	D３	Ⅱ	鉢		砂粒	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ケズリ		
	300	B４	Ⅱ	鉢	胴部	長石	良好	淡赤褐色	褐色	ハケメ	ハケ目後ナデ		
	301	E４	Ⅱ	鉢	胴～脚部		良好	淡赤褐色	淡赤褐色	粗いナデ	ナデ		
	302	F11	Ⅱ	鉢	口縁～底部	砂粒	良好	淡橙黄褐色	淡橙黄褐色	ナデ			
	303	D，E４	Ⅱ	鉢	口縁～底部		良好	明黄褐色	明褐色	ハケ目後ナデ	ナデ		
	304	E４	Ⅱ	鉢	口縁～底部					ケズリハケメ			
	305	C3，E４	Ⅱ	鉢		砂粒赤色粒	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデケズリ	ハケメ		
	306	D３	Ⅱ	鉢	底部		良好	茶褐色	黒褐色	ナデ	指ナデ		
95	307	E４	Ⅱ	鉢		砂粒	良好	淡赤褐色	赤褐色	粗いハケメ	ナデ		
	308	E４	Ⅱ	鉢		細粒	良好	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ		
	309	E４	Ⅱ	鉢		砂粒大量	良好	明橙褐色	明橙褐色	ケズリ後ナデ	ナデ?		
	310	D３	Ⅱ	鉢			良好	淡暗茶褐色	淡暗茶褐色	丁寧なハケメ	ナデ		雲母細粒を多く含む
	311	C５	Ⅱ	鉢		赤色粒	良好	明茶褐色	明茶褐色	ナデ	ケズリ後ナデ		
	312	C６	Ⅱ	台付鉢	口縁～脚部	長石石英	良好	淡明橙色	淡明橙色	ハケメナデ	ナデ		
	313	E4，６	Ⅱ	鉢	口縁部			褐色	褐色	ハケメ	ナデ		
	314	C５	Ⅱ	鉢		砂粒	良好	明橙褐色	明橙褐色	ハケメ後粗いナデ	ハケメ		
	315	D５	Ⅱ	鉢	胴～脚部	砂粒	良好	淡茶褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	脚端部に細沈線	
	316	C3，E４	Ⅱ	鉢	上半部	赤色粒	良好	褐色	褐色	軽いケズリ	ナデ		
	317	D３	Ⅱ	鉢	底部	礫	良好	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	318	E４	Ⅱ	鉢	口縁部	砂粒	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
	319	D３	Ⅱ	鉢	口縁部	小礫	良好	橙褐色	橙褐色	粗いナデ	ナデ		
	320	C３	Ⅱ	高杯	底～脚部		良好	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ミガキ		

表12　堂園遺跡Ａ地点古代中世遺物観察表

挿図	№	出土区	層	器　種	部　位	胎　土	焼成	口径	底径	器高	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
98	323	Ｅ８	Ⅱ	土師皿	底部	砂粒	良好	－	6.3	－	ロクロ		ヘラ切
	324	Ｅ８	Ⅱ	土師皿	底部	精緻	良好	－	6.0	－	ロクロ		ヘラ切
	325	Ｄ５	Ⅱ	土師坏	脚部	精緻	良好	－	6.4	－	ロクロ		脚径7.0
	326	Ｆ10	Ⅱ	土師坏	脚部	赤色粒	良好	－	6.9	－	ロクロ		脚径7.1
	327	Ｄ６	Ⅱ	土師坏	底部	砂粒少	良好	－	7.0	－	ロクロ		脚径6.8
	328	Ｆ13	Ⅱ	土師坏	底部	精緻	良好	－	6.9	－	ロクロ		脚径7.6
	329	Ｅ９	Ⅰ	須恵器	頸部	精緻	良好	－	－	－	スダレ状叩き	同心円叩き	
	330	Ｆ９,10	Ⅱ	須恵器	胴部	精緻	良好	－	－	－	スダレ状叩き	平行叩き	
	331	Ｃ５	Ⅰ	須恵器	胴部	砂粒	良好	－	－	－	スダレ状叩き	平行叩き	
	332	Ｅ８,Ｆ９	Ⅱ	須恵器	肩部	精緻	良好	－	－	－	スダレ状叩き	平行叩き	自然釉
99	333	Ｅ11	Ⅰ	土師皿	口縁～底部	精緻	良好	8.0	5.7	1.9	ロクロ		糸切
	334	Ｅ10	Ⅰ	土師皿	口縁～底部	精緻	良好	7.8	4.8	2.2	ロクロ		糸切
	335	Ｅ10	Ⅰ	土師皿	口縁～底部	精緻	良好	－	－	1.7	ロクロ		糸切
	336	Ｅ10	Ⅰ	土師器	底部	精緻	良好	－	6.4	－	ロクロ		糸切
	337	Ｅ10	Ⅰ	土師器	底部	精緻	良好	－	4.4	－	ロクロ		糸切
	338	Ｅ11	Ⅰ	土師器	底部	精緻	良好	－	－	－	ロクロ		糸切
	339	Ｆ11	Ⅰ	土師器	底部	精緻	良好	－	5.2	－	ロクロ		糸切
	340	Ｃ５	Ⅰ	土師器	底部	精緻	良好	－	4.5	－	ロクロ		糸切
	341	Ｆ11	Ⅰ	土師坏	底部	赤色粒	良好	－	5.0	－	ロクロ		
	342	Ｅ11	Ⅰ	土師皿	底部	精緻	良好	－	4.2	－	ロクロ		糸切
	343	Ｅ10	Ⅰ	擂鉢	口縁部		良好	－	－	－	ロクロ		
	344	DE11,12	Ⅰ	擂鉢	体部		良好	－	－	－	ロクロ		
	345	Ｆ11	Ⅱ	碗	口縁部		良好	－	－	－	ロクロ		端反
	346	Ｅ９	Ⅰ	白磁皿	口縁～底部		良好	10.1	4.0	2.0	ロクロ		
	347	DE11,12	Ⅰ	青磁碗	口縁部		良好	－	－	－	ロクロ		括花文
	348	Ｅ10	Ⅰ	青磁碗	体部		貫入	－	－	－	ロクロ		鎬連弁文
	349	Ｃ９	Ⅰ	青磁稜花皿	口縁～体部		貫入	12.4	－	－	ロクロ		
	350	表採		青磁碗	底部		良好	－	－	－	ロクロ		
	351	Ｆ11	Ⅱ	白磁皿	体部		良好	－	－	－	ロクロ		近世

第Ⅶ章　まとめ

縄文時代

古殿諏訪陣跡から黒曜石製の石鏃が１点，堂園遺跡Ａ地点から，前期から晩期にかけての土器や石器が出土した。古殿諏訪陣跡から出土した石鏃は縄文時代の資料と考えれるが，時期等についての詳細は不明である。

前期では轟式土器と考えられる土器片が少量出土した。器面に貝殻条痕が観察されるのみで詳細を明らかにできないが，口縁部に粘土紐を貼り付けた資料があることから，轟Ｂ式を含むことが考えられる。これまで南部九州で確認されている前期の遺跡は，沿岸部を中心に比較的多くみられる傾向があるが，今回の調査により，さらに内陸部に位置している堂園遺跡Ａ地点の一帯まで轟式土器の分布圏に含まれる可能性のあることが判明した。

中期から後期にかけては，中期中葉に位置づけられる船元・里木式土器系の土器片がわずかながら出土した。小片のため器形の復元等はできなかったが，１個体であった可能性が高いものと考えられる。指宿式土器では，指宿式土器を特徴づけている特有の胎土色を持つ資料は出土しなかったものの，小型の深鉢が出土するなど，全体量は少ないながらもまとまりのある出土内容を示している。また，市来式土器も口縁部を「く」字状に肥厚させる最も盛行した段階の資料が出土した。

晩期では，上加世田式土器を主体としつつ黒川式土器にかけての資料が出土している。粗製深鉢が主体を占め，精製浅鉢などは比較的少ない。調査区内での分布状況については両者がほぼ重なる状況であるが，完形復元が可能であったのは粗製深鉢が多かったことからすれば，調査区一帯が，当時居住地としてよりも何らかの採集活動中における作業場などとして利用されていた可能性が考えられる。これについては後述したい。

石器は，石鏃や石匙，剥片石器などの利器と，打製石斧や磨石，石皿などが出土している。石器については，磨製石鏃や軽石加工品など形態的特徴から明らかに弥生時代以降に属すると十分に考えられる資料もとりあえず含めて石器としてまとめて提示した。そのうえで，掲載した石器について，２点想定される機能を記してみたい。

まず，堂園遺跡Ａ地点では砂岩のフレイク類が目立った。肉眼観察のみという制限があるが縁辺部の潰れなど利用の痕跡を示すものはほとんどみられなかったために多くを図化しなかったものの，砂岩製の簡易な剥片石器が出土していること，計画的な剥離作業がおこなわれていたことをうかがわせる接合資料が出土していることや，砂岩の石核が出土していることから，調査区周辺で容易にとれる素材を利用して簡便な利器を作成していたことが想像される。なお，剥片石器を剥出したと考えられる石核や母岩などは調査区内からは出土していない。

次に，堂園遺跡Ａ地点で磨・敲石類としてまとめた資料のなかにみられる小形で円形のものである。これらは，すでに先学諸氏により指摘されている土器の研磨具としての使用が想定される。光沢を持つ部分が確認できるものの面としては図化しづらかったため，本報告ではわずかに認められた稜線を描いている。

堂園遺跡Ａ地点から出土した石器の帰属時期については，先述した磨製石鏃や軽石加工品を除くと，ほとんどは縄文時代に属すると考えられ，誤解は覚悟のうえで述べるならば，土器の出土量が

最も多い晩期にその多くが帰属すると想定しておきたい。

以上，縄文時代については，資料数は少ないながらも鹿児島県においては類例の少ない資料がみられるなど，貴重な情報が得られたものと考えている。なお，晩期については，石器の多くが晩期に属するという想定のもとではあるが，山間部に開けた湧水の豊富な台地にあって，粗製深鉢の多さということに石器組成に利器が多いということを加えると，調査区一帯での活動は狩猟などが可能性として考えられるのではないだろうか。今後，当該期の拠点集落などが周辺で発見されていけば，そことの関係を分析していくことで当地の利用状況がさらに解明できるものと考えられる。

弥生～古墳時代

古殿諏訪陣跡から中津野式土器の壺と考えられる資料が出土しているが，遺物包含層からの出土であり，詳細は不明である。

堂園遺跡Ａ地点からは，土坑65基と甕や壺などの遺物が多量に出土した。

土坑について，まず分布図を見て気づくのは，Ｂ，Ｃ区とＤ，Ｅ区に分布が集中すること，一部を除いてＦ区以北に土坑の分布が確認されていないことである。これに，平面形態と深さを軸にしたＡ，Ｂ，Ｃの３種類に分ける形態分類を当てはめてみると，先述した位置的状況とはリンクせず，ＡおよびＣタイプが分布の中心を東側に，Ｂタイプが分布をやや西側にまで広げている様子が確認できる。言い換えれば，分布の位置的状況と個々の形態にはさほどの相関は認められないことになる。一方，土坑の周辺も含めた出土（関連）遺物のある土坑及び赤色顔料が出土した土坑の分布状況をみると，Ｃタイプの53・77・78を除くすべてが北もしくは南の集中域のどちらかに入っているのが認められる。それぞれの集中域で，土坑の数にとりあえず多寡は見られない。

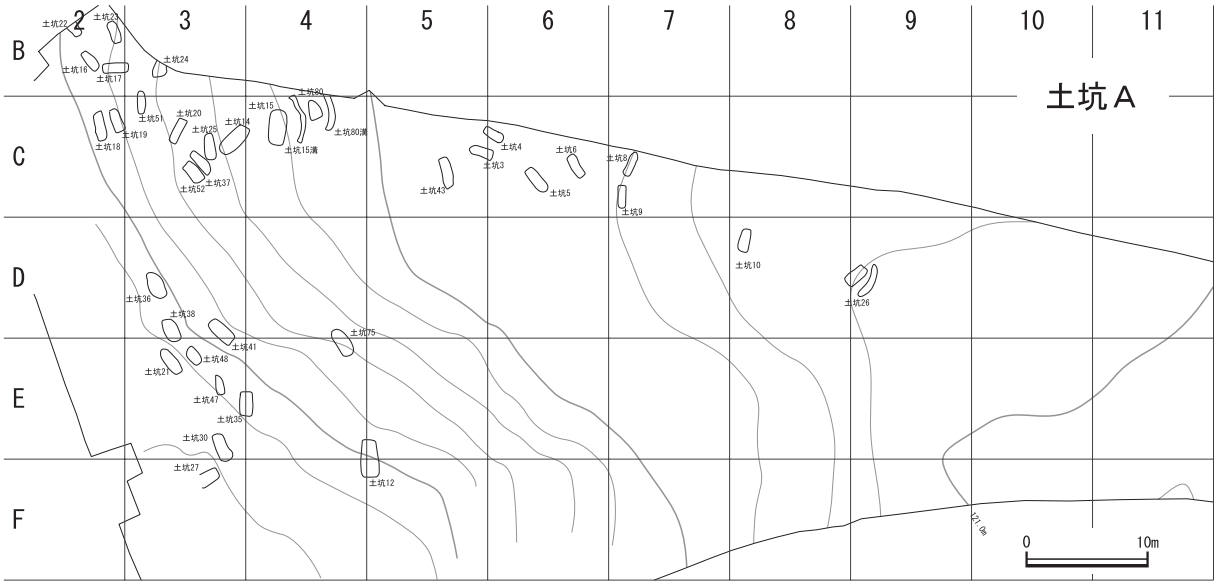
各集中域の状況をもう少しみてみたい。まず南側の集中域には溝状遺構を伴うかも知れない土坑（15号・80号）がある。また，遺物や赤色顔料が発見された土坑の分布に粗密はないようである。ただ，18号と19号，37号と52号や15号と80号，さらに３号と４号など，近接して長軸方向がほぼ揃う土坑があるのが確認できる。また北側の集中域では，遺物や赤色顔料が発見された土坑の分布に粗密がないこと，38号と39号，21号と48号，31号と32号のように近接して長軸方向がほぼ揃う土坑があるのが確認できることなど，南側と同様である。74号と75号も近接するという点では同類とできようか。つまり，調査範囲で見る限り，２つの集中域に分布状況の差異はほとんどないことがいえる。

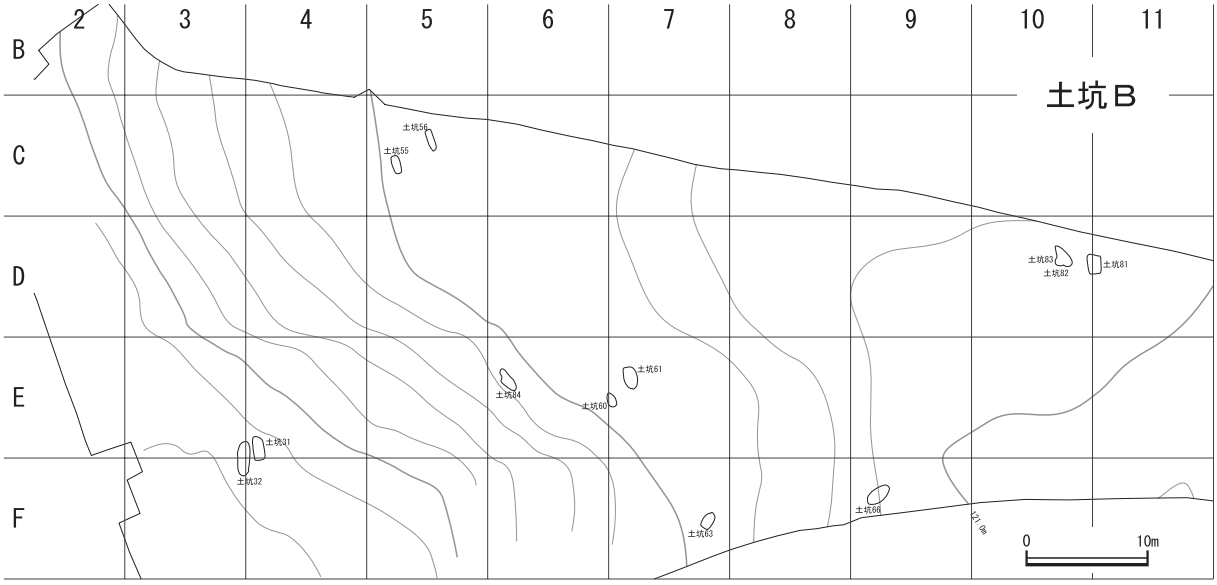
次に，遺物の分布状況について見てみたい。

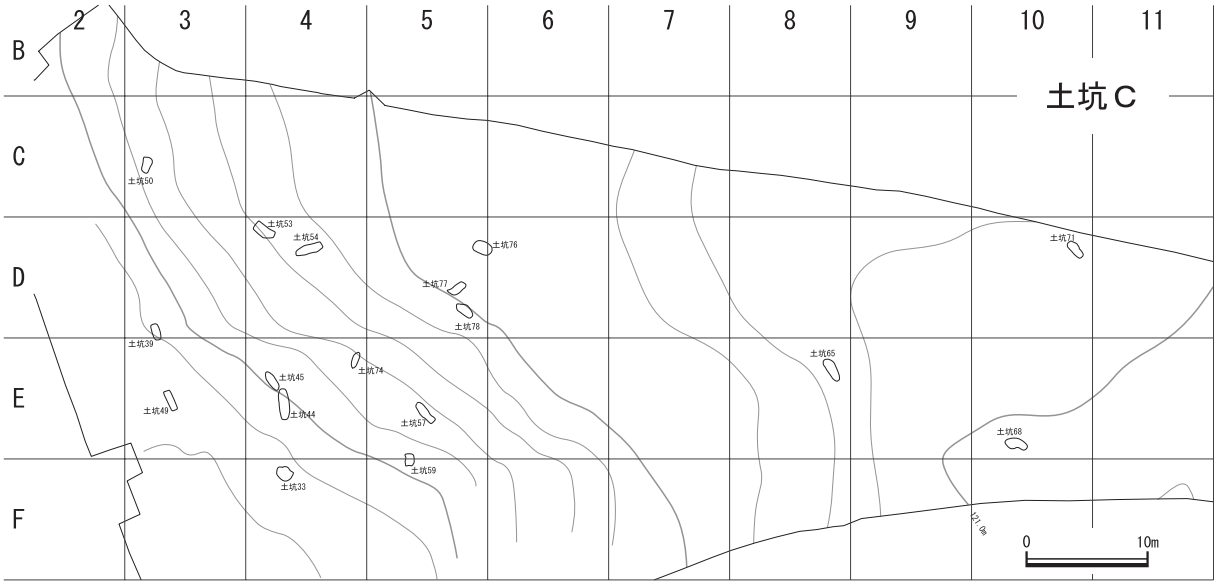
まず，土坑と同様Ｆ区以北に分布がほとんど見られないことがわかる。

時期別にみてみると，弥生時代中期末～後期初頭，後期前半，後期終末～古墳時代初頭の各時期で分布の顕著な偏りは認められない。むしろ目立つのは次の２点であろうか。

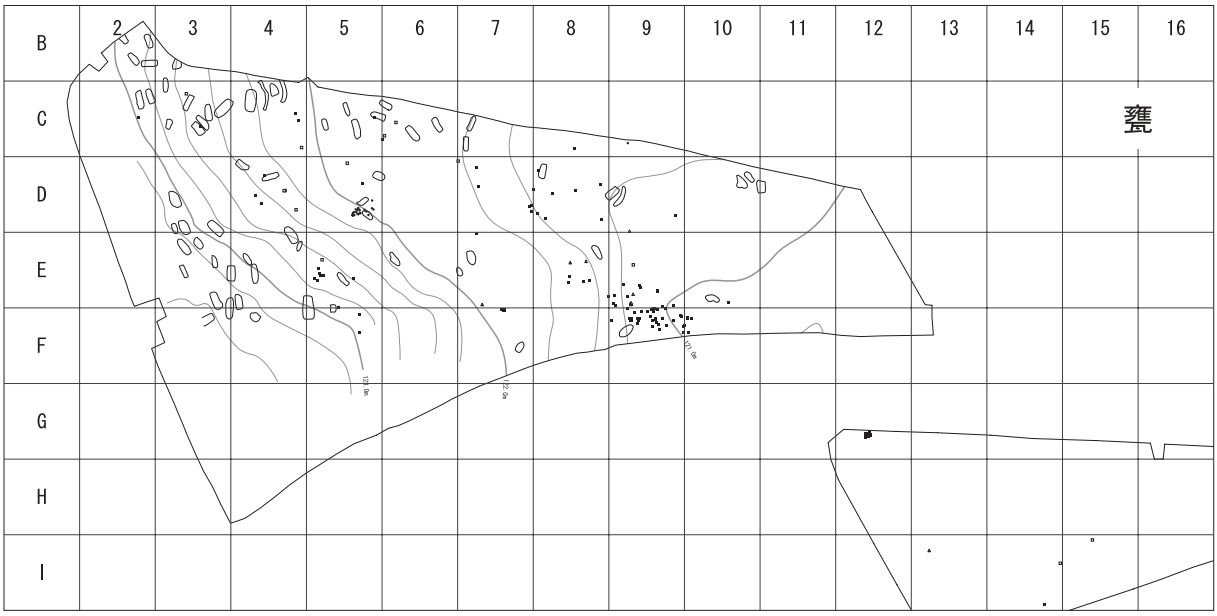
まずは，器種ごとの違いである。壺は，ほぼ全域で認められるが７区以西には破片での出土が目立ち比較的少ないのに対し，甕は，おおむね７区以西に分布がみられる。ただし，山ノ口式系土器の甕は調査区全体に散在する傾向にある。また，小壺や鉢などと免田式土器は，北側の集中域と分布の中心がほぼ重なり，彩文土器や蓋などは，南側の集中域でもさらに南東の一部区域に限られて分布している。高坏は，南側の集中域でのみ出土している。そして，土坑との相対的な出土位置と

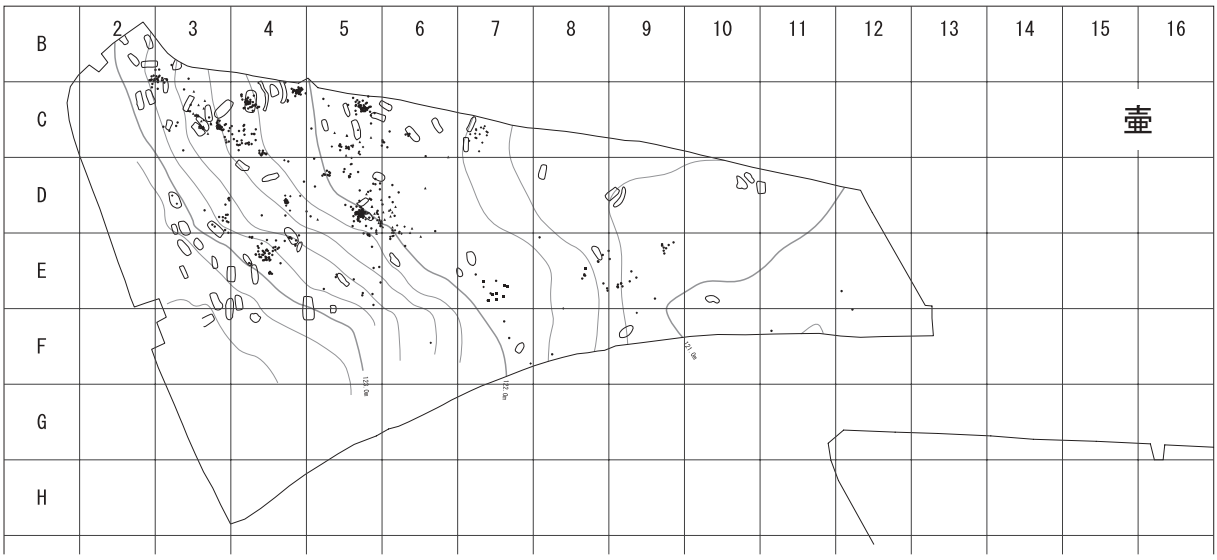


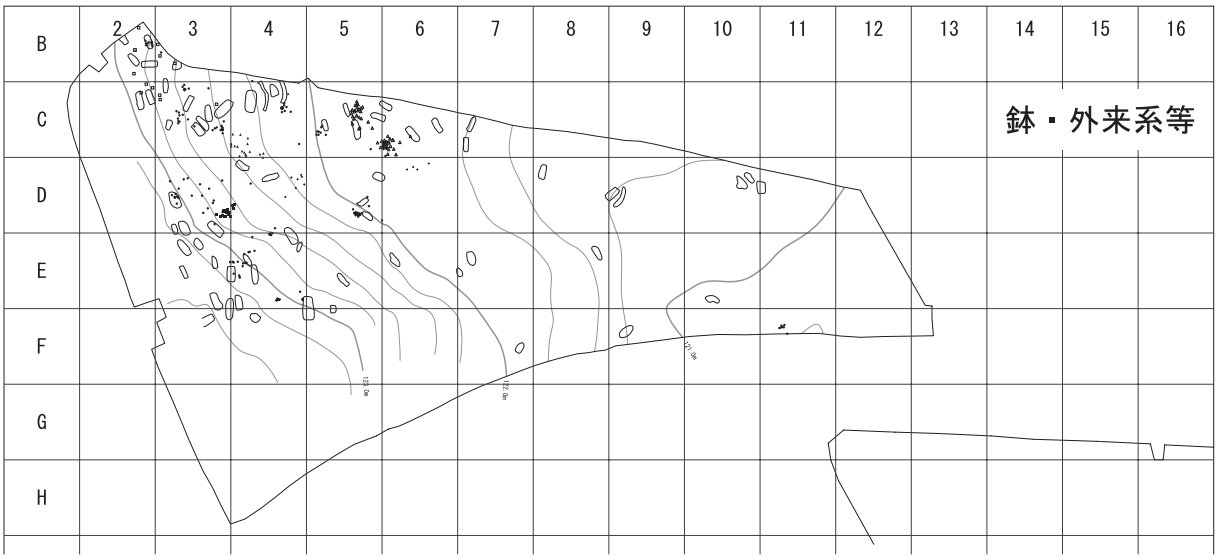




第131図　タイプ別土坑位置図







第132図　器種別土器出土分布図

接合状況である。土坑内からの遺物出土が少ないこととも関係するのであろうが，遺物のほとんどは土坑と土坑の隙間から出土している。そして，最も多く出土している壺で顕著な現象だが，一括して接合する遺物もみられるものの，接合資料の一部が主に出土している地点から離れた地点に遠く飛ばされているのである。それは北ないし南の集中域のどちらかにおさまる場合もあるが，多くは集中域をまたいでいる。つまり，遺物の分布状況でみる限り，弥生時代中期末から古墳時代初頭にかけて，調査範囲全体が同じ規範体系のもとで遺物が使用されていたことがいえる。

次に遺物についてみてみる。

弥生時代では，中期末～後期初頭では，黒髪三，四式土器と山ノ口式系土器が出土しているが，壺は山ノ口式系土器に伴うとされるもののみであった。また，「ボテ口縁」と称される甕と思われる資料も出土した。さらに，彩文土器の壺やその蓋も出土している。こうした様相は，これまで南薩地域で確認されてきた状況と整合するが，「ボテ口縁」甕の出土はこれまでの南限域を考える上で貴重である。

後期前半では松木薗式土器の甕，壺が出土している。数も少ないが，これもこれまで明らかにされてきた当該期の様相と異なるものではない。

後期終末～古墳時代初頭にかけては，中津野式土器と呼称されてきた土器群が出土している。本遺跡で最も多く出土しており，主な活動時期を決定している。中津野式土器については，設定当初の定義から徐々に範囲が広げられてきており，現在それを再設定することが求められている。今回はそうした問題に貢献できるような情報の収斂作業は行えなかったが，編集委員や整理指導者の助言をもとに本文中にあるような形式設定を行い，分類を試みた。中津野式土器関する指導助言の中で共通していた点が，程度の差はあるものの器種を問わず胴部下半外面に「ケズリ」調整がみられるということである。これは本来の「ケズリ」とは異なり外面に施され，器壁を薄くするのにはさほど貢献していない。ただ器形は，この調整のために下半部が直線的な立ち上がりを見せている。底部形態や口縁部形状，また全体的な器面調整や胎土にバリエーションが多い中津野式土器にあって，ほぼ唯一といえる強い土器製作上の規制が，この胴部外面下半への「ケズリ」調整であるようだ。この規制を全ての器種に適用させているのが中津野式土器社会の本質の一端を示しているようにも感じられる。

以上，土坑の分布状況と遺物の分布状況について，主観的にまとめてみたが，その結果，弥生時代中期末から古墳時代初頭を通して，同じ規範体系が働いていた可能性が高いことが判明した。発掘調査時点から，遺跡の状況に対して墓と墓域である可能性が示唆されてきたが，若干の整理を行ってみてもそれらを反証するような情報はみられない。規範体系とは，葬送儀礼と呼べるものであったろう。

このような性格の遺跡は本県で類例がほとんどないために，ここまでまとめたこと以上の見解は出せなかったが，指宿市山川町成川遺跡，枕崎市松之尾遺跡などの成果が活用できた。今後，堂園遺跡A地点の様相については，さらなる類例の蓄積と分析を通して明らかになるものと考えられる。

写　真　図　版

PLATE

図版 1

折戸平遺跡確認調査状況

図版２

堂園遺跡Ａ地点遠景

堂園遺跡Ａ地点（上空から）

図版４

堂園遺跡Ａ地点調査前状況（上）・土層断面（下）

土坑26

土坑80

堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況(1)

図版 6

土坑14

土坑15

土坑19

土坑20

堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況(2)

土坑21

土坑22

土坑23

土坑24

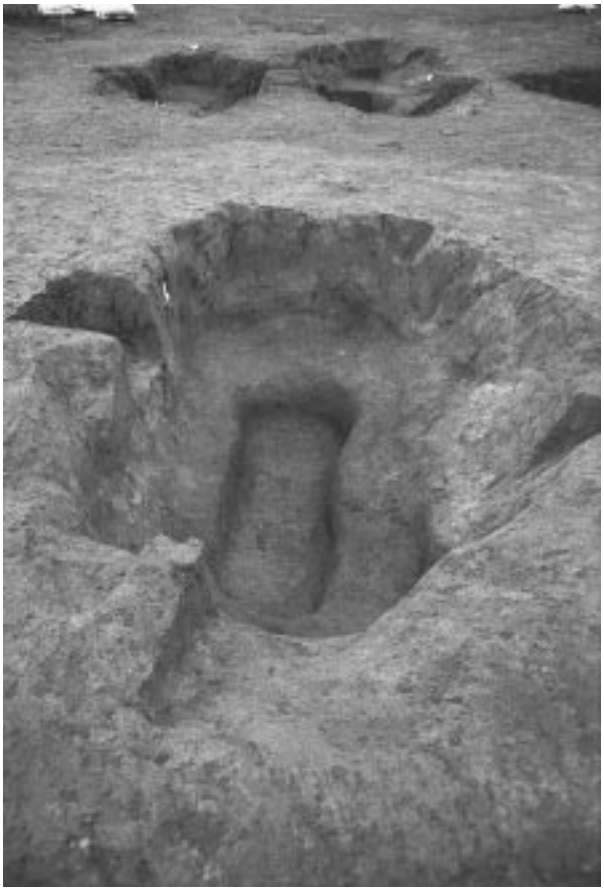
堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況(3)

図版８

土坑25

土坑27

土坑30



土坑35

堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況(4)

土坑36

土坑37

土坑38

土坑41

堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況(5)

図版10

土坑43

土坑48

土坑51

土坑52

堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況(6)

土坑４

土坑５

土坑６

土坑12

堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況(7)

図版12

土坑75

土坑32

土坑55

土坑56

堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況(8)

土坑60

土坑61

土坑84

土坑39

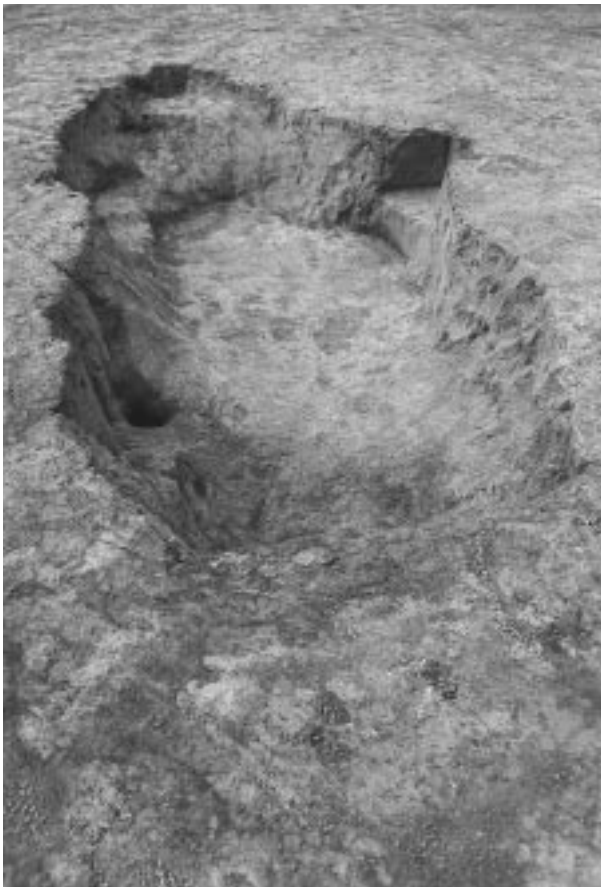
堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況(9)

図版14

土坑44

土坑49

土坑50



土坑54

堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑽

土坑57

土坑71

土坑76

土坑78

堂園遺跡Ａ地点土坑完掘状況⑾

図版16

土坑18

土坑65

鉄鏃

土坑65

土坑65

堂園遺跡Ａ地点遺物出土状況(1)

314

249

262

262

265

290

堂園遺跡Ａ地点遺物出土状況(2)

図版18

263

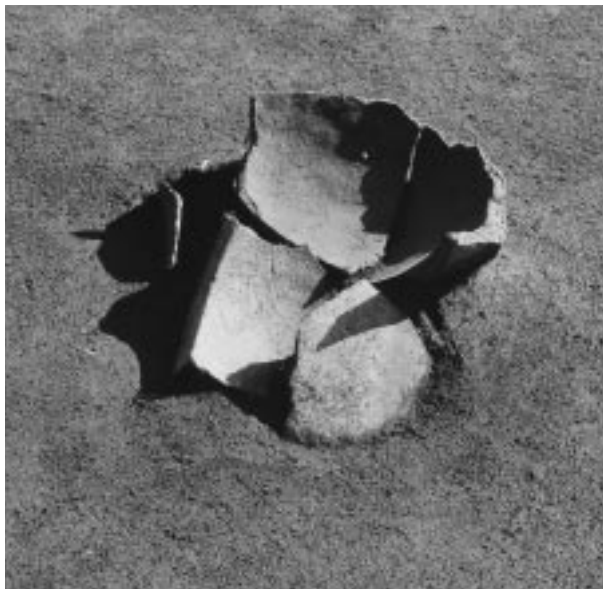
256

土器
集中

壺231
高杯283

堂園遺跡Ａ地点遺物出土状況(3)

174



218

254

289

299

堂園遺跡Ａ地点遺物出土状況(4)

図版20

堂園遺跡Ａ地点出土遺物集合(1)

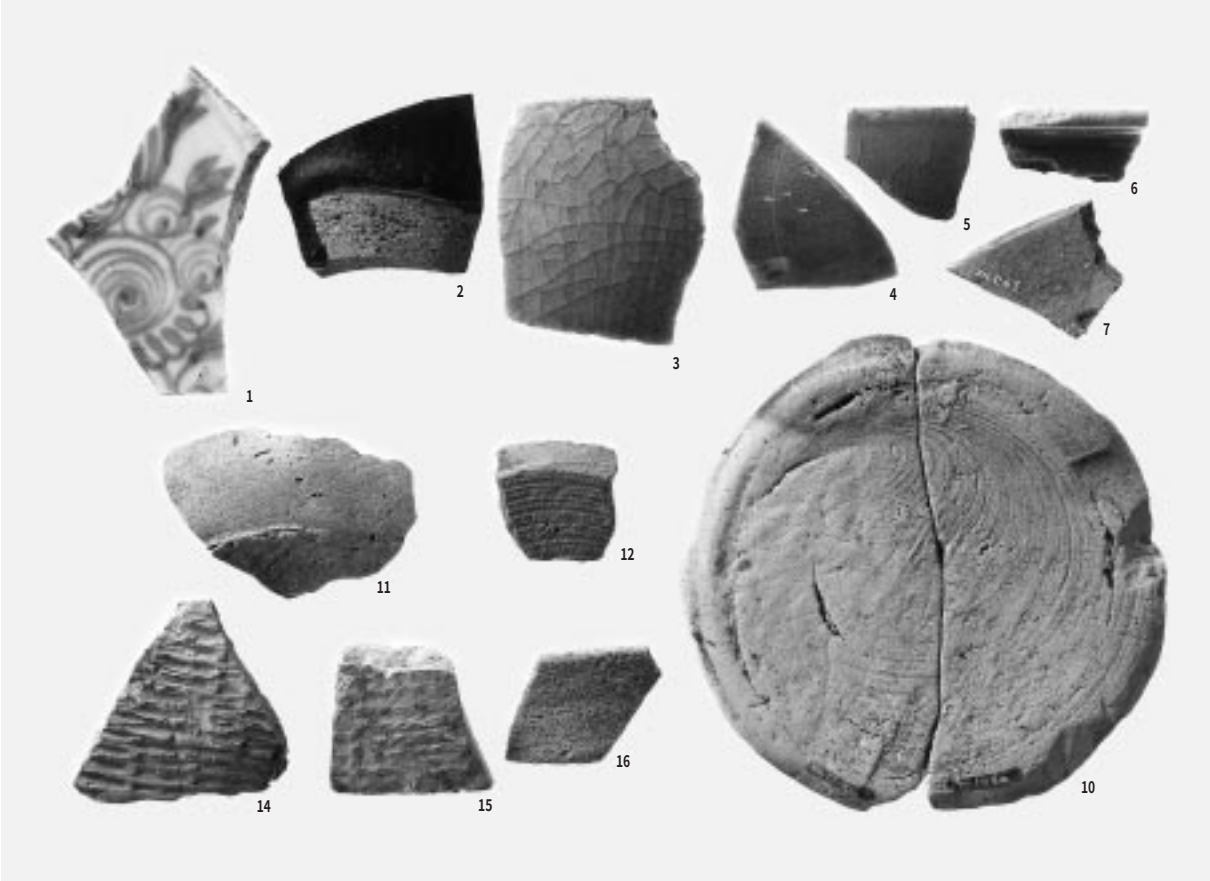
堂園遺跡Ａ地点出土遺物集合(2)

図版22

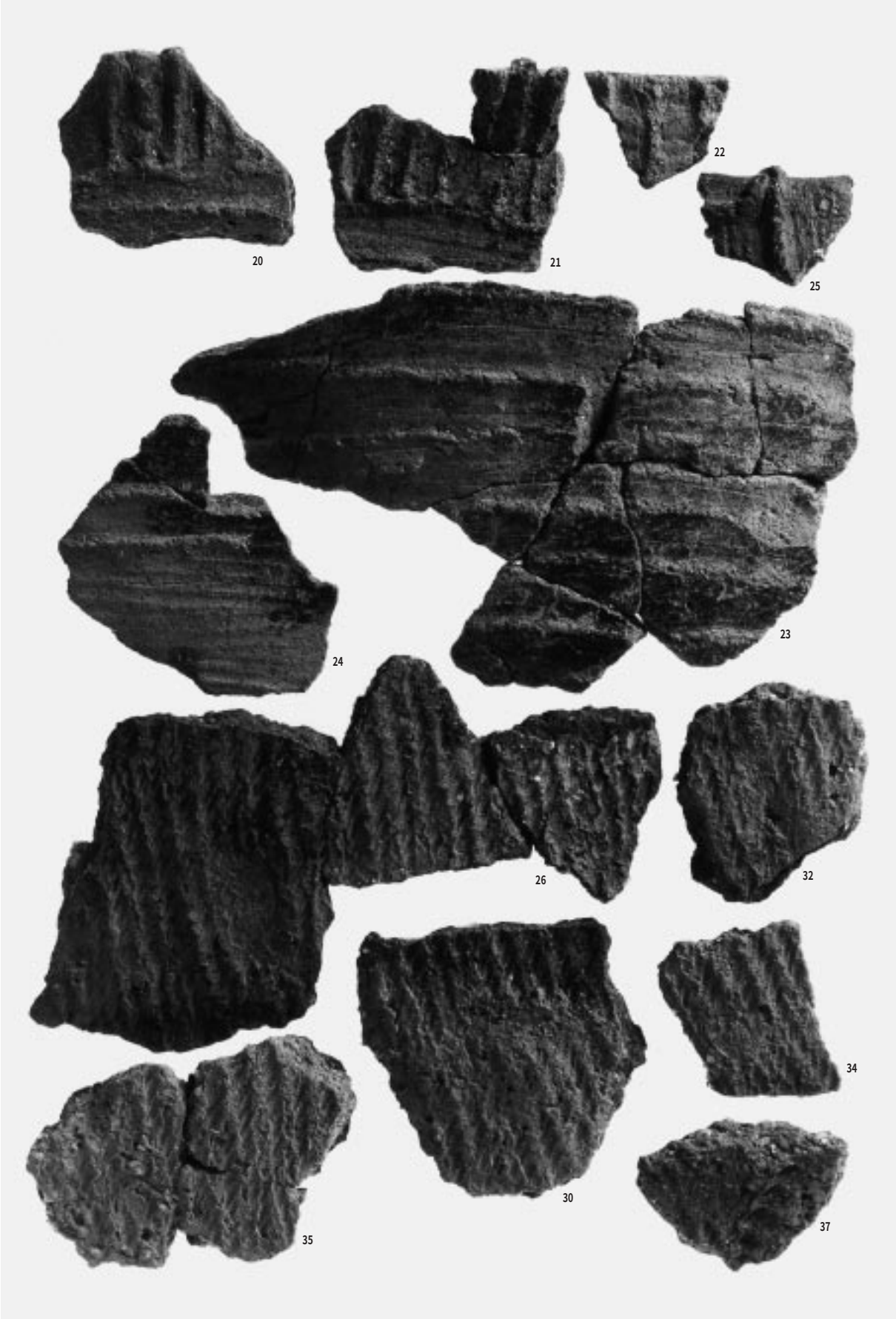
堂園遺跡Ａ地点出土遺物集合(3)

堂園遺跡Ａ地点出土遺物集合(4)

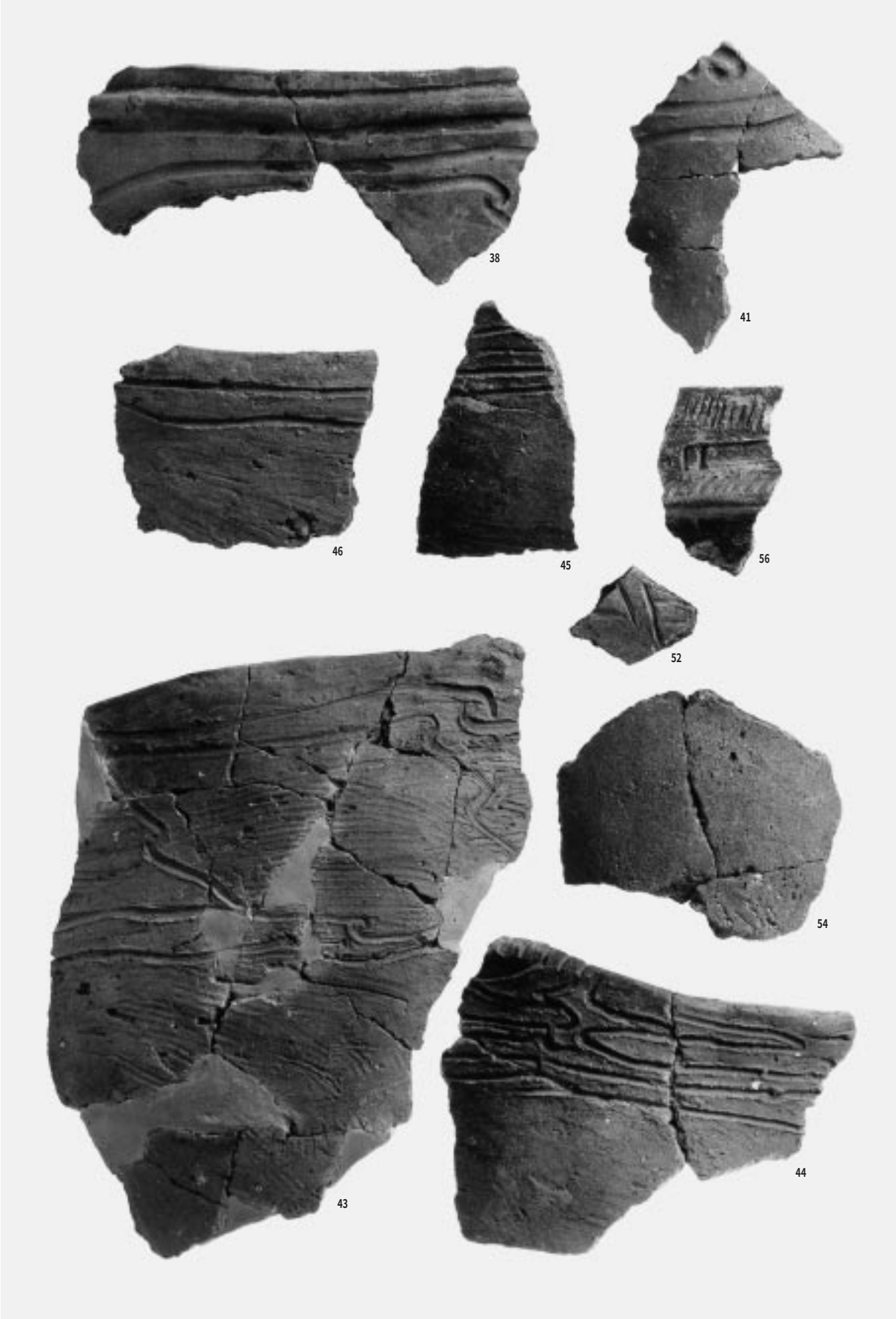
図版24



上：古殿諏訪陣跡出土遺物　下：堂園遺跡Ａ地点出土遺物(1)

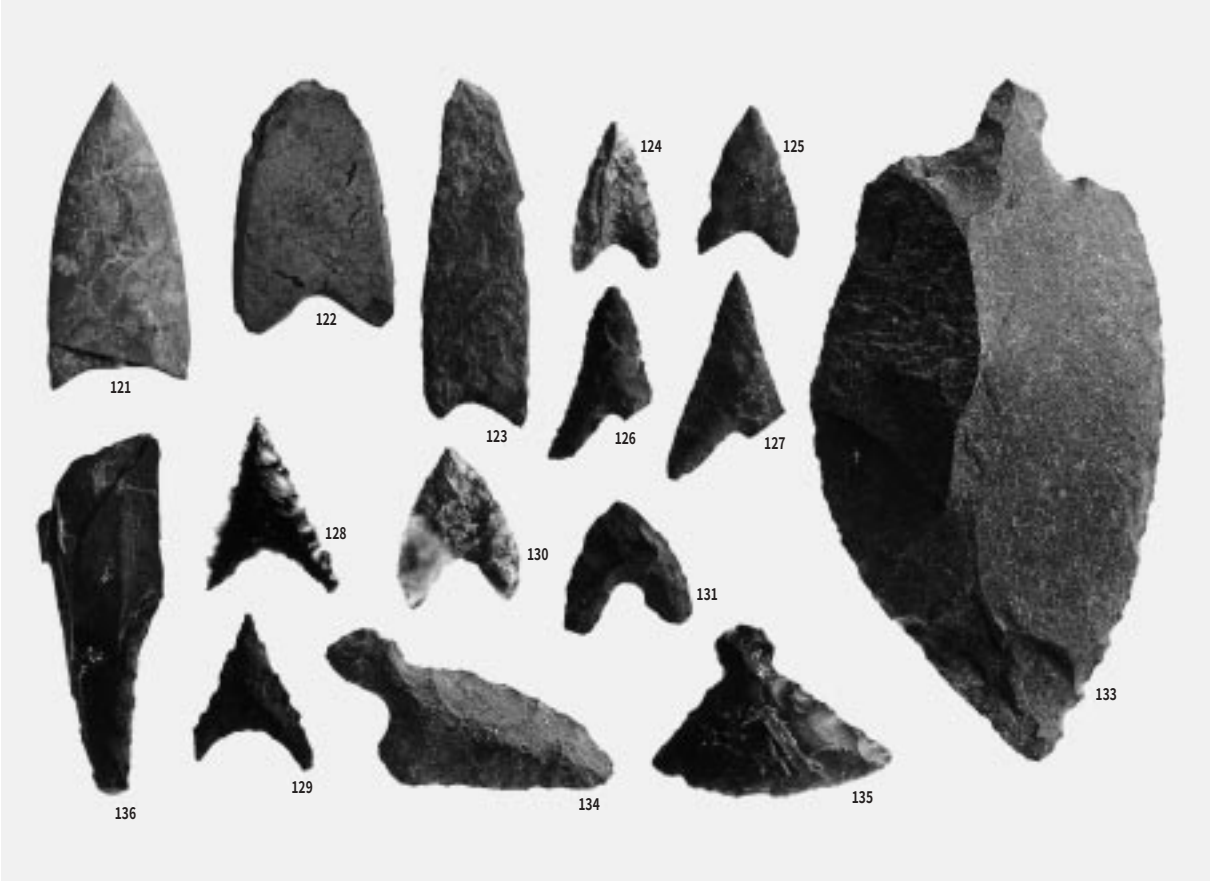


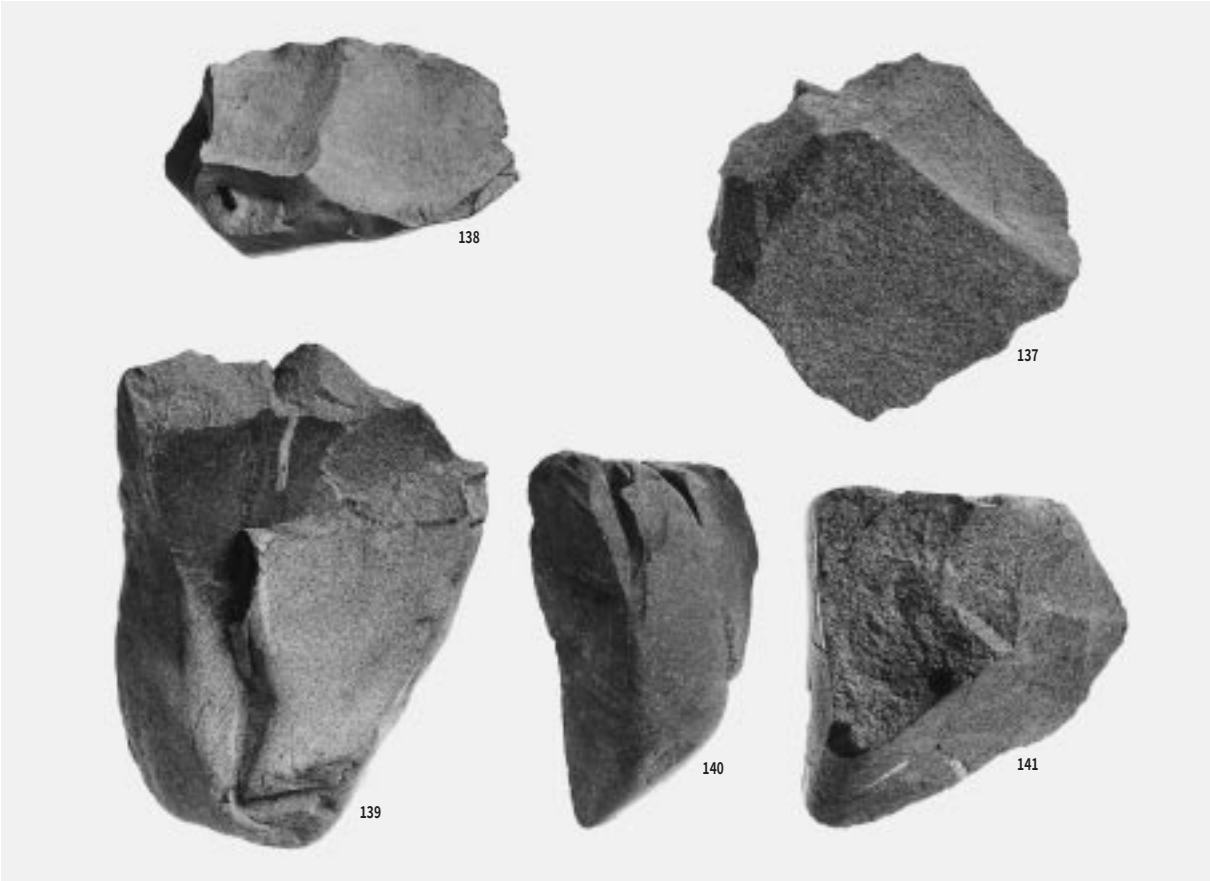
堂園遺跡Ａ地点出土遺物(2)



堂園遺跡Ａ地点出土遺物(3)

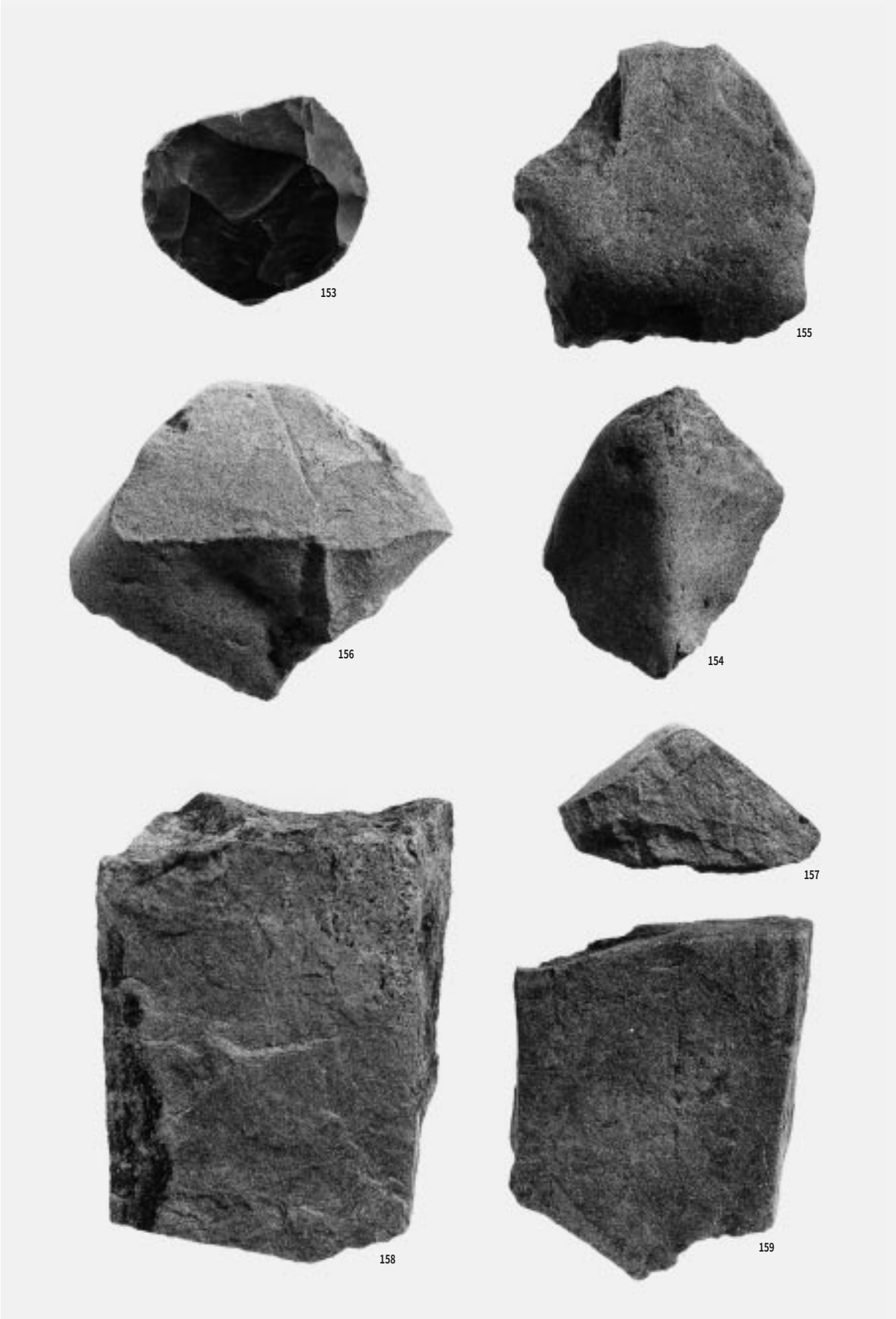
堂園遺跡Ａ地点出土遺物(4)



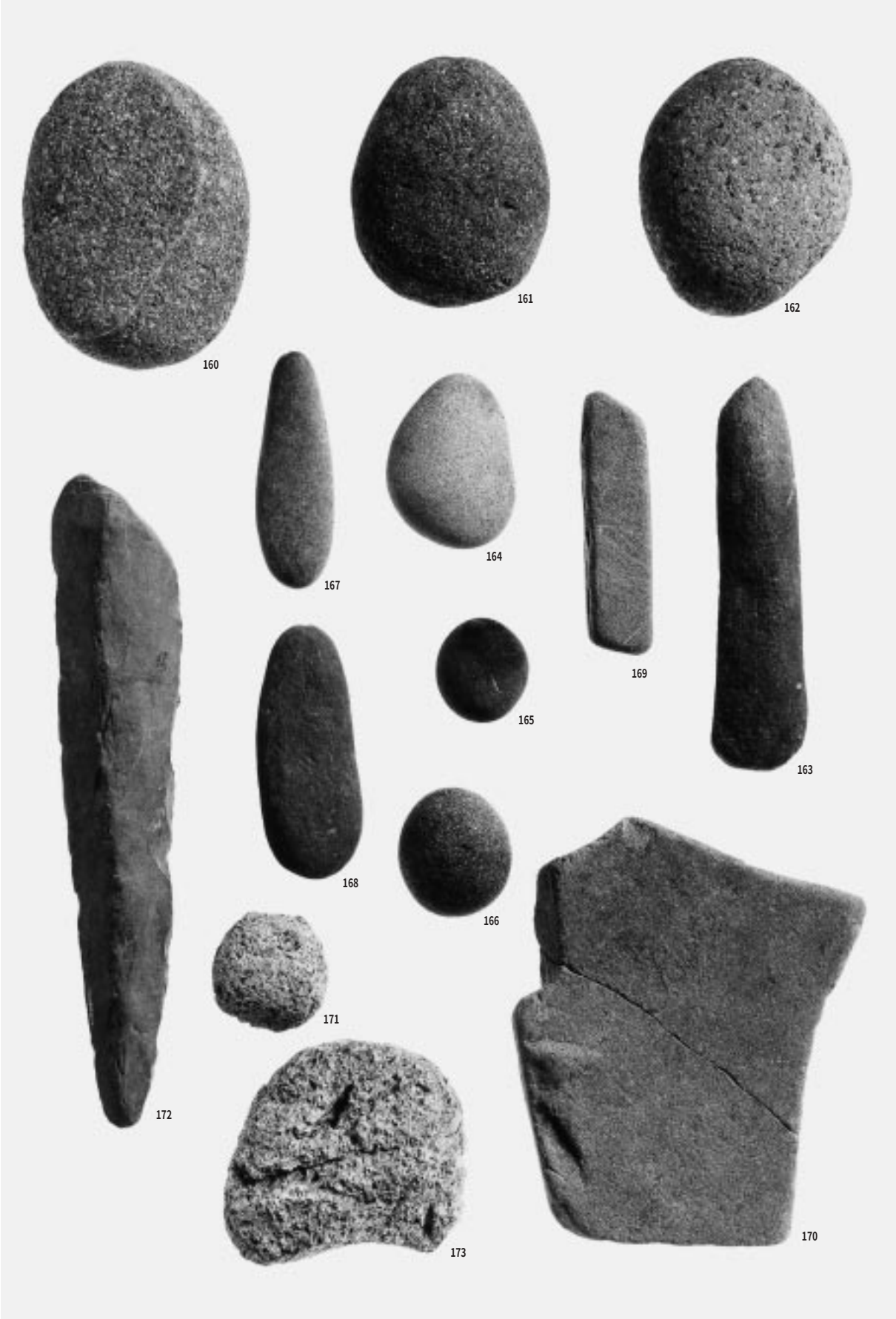


堂園遺跡Ａ地点出土遺物(5)

堂園遺跡Ａ地点出土遺物(6)



堂園遺跡Ａ地点出土遺物(7)



堂園遺跡Ａ地点出土遺物(8)

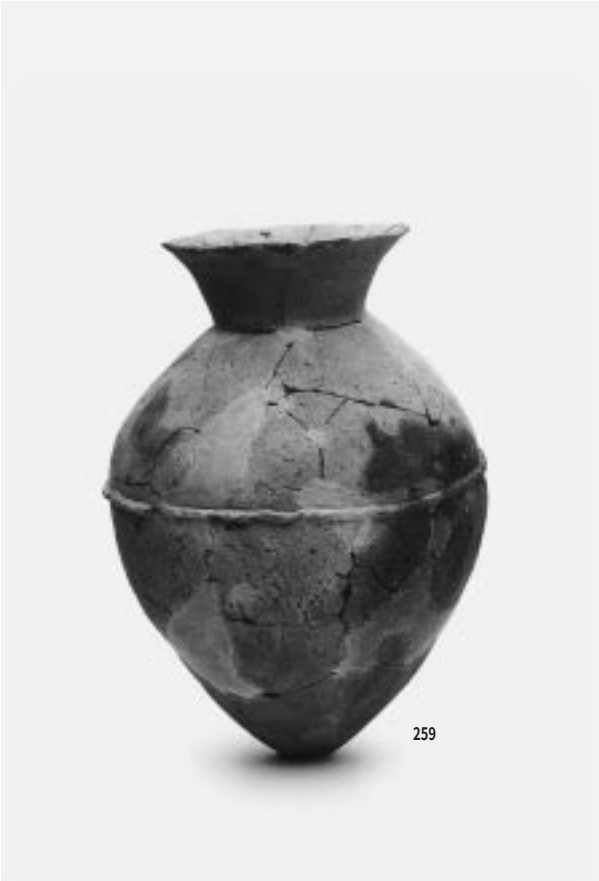
図版32

堂園遺跡Ａ地点出土遺物(9)

堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑽

図版34

堂園遺跡Ａ地点出土遺物(11)



堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑫

堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑬

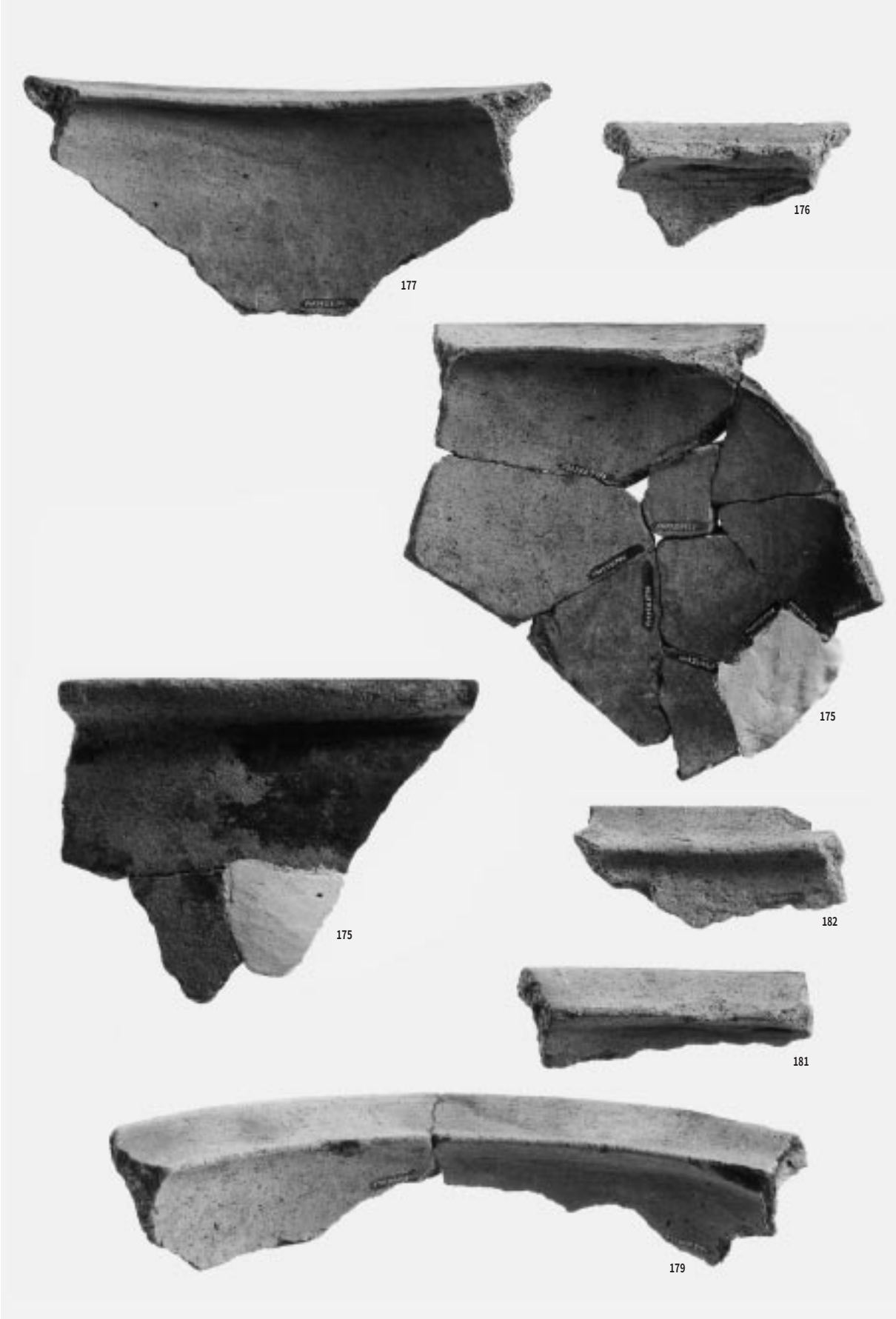
堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑭

堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑮

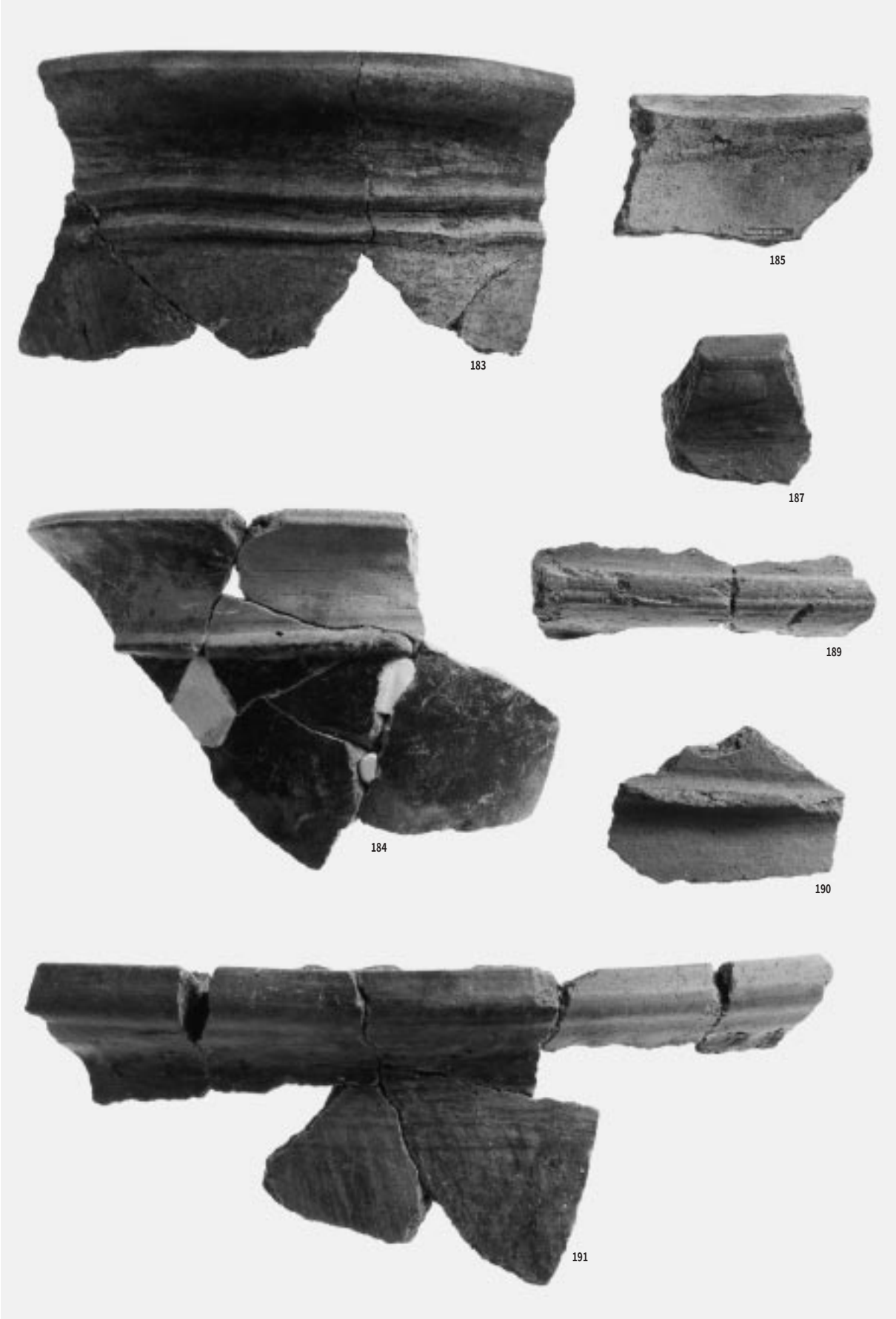
堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑯

図版40

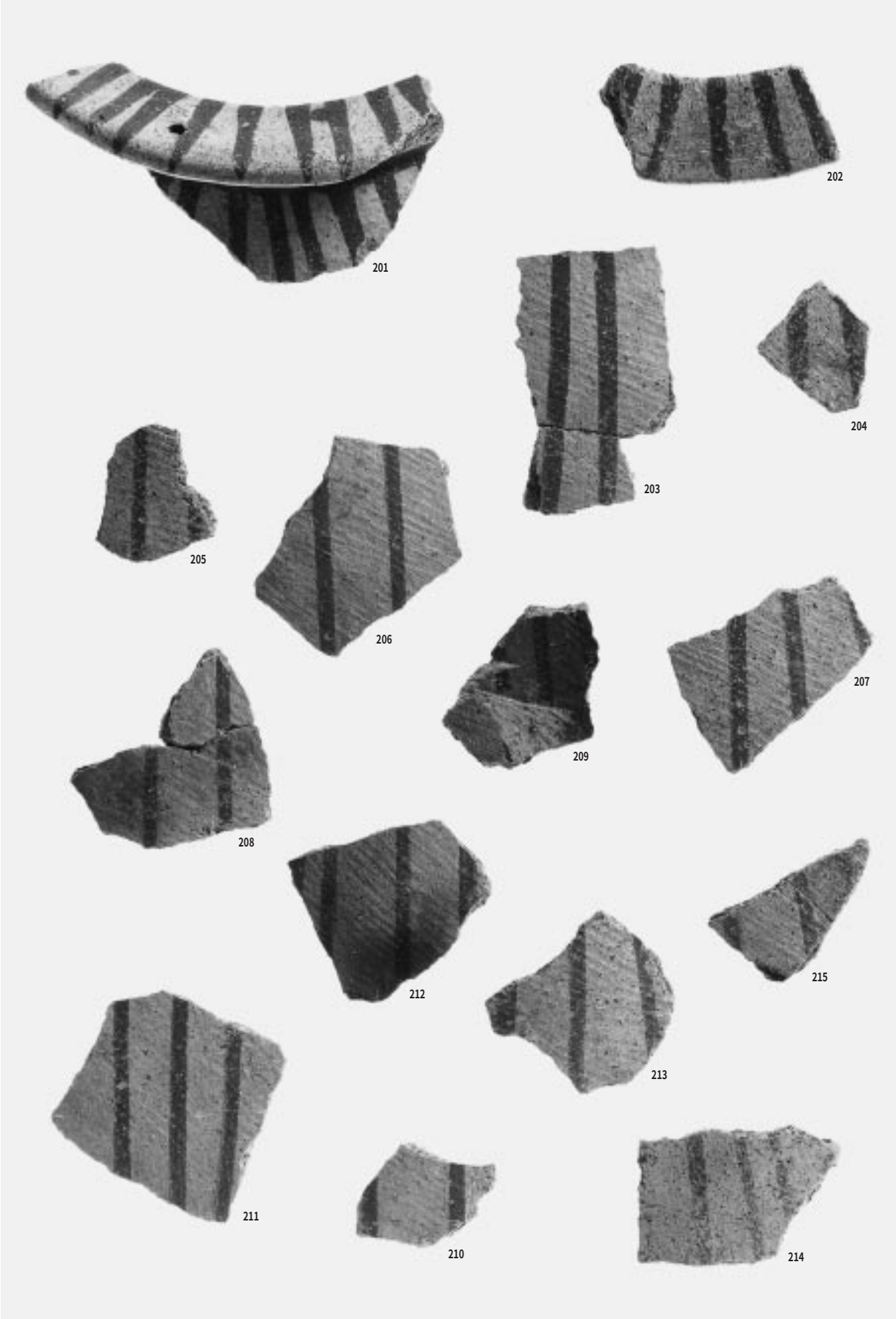
堂園遺跡Ａ地点出土遺物(17)



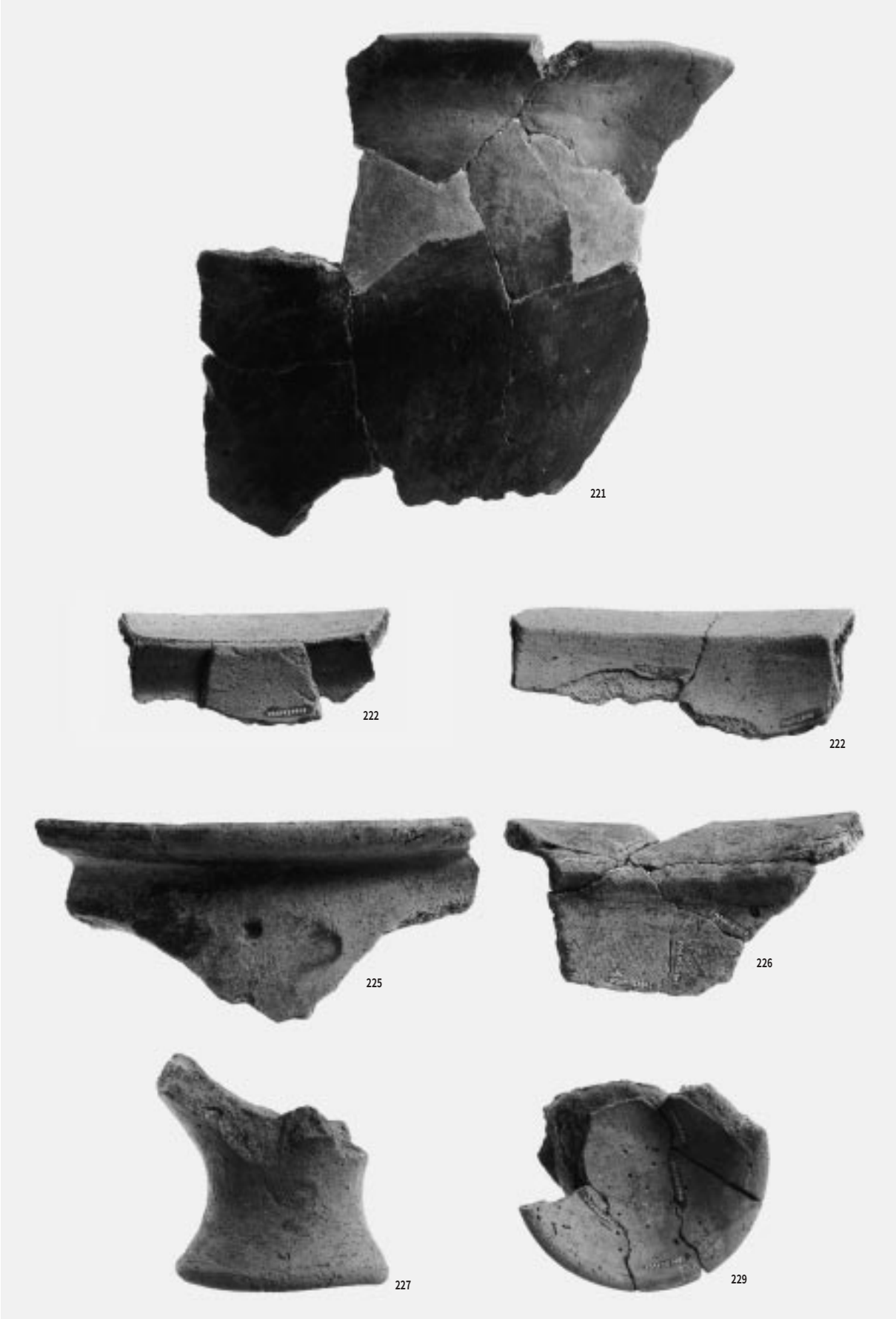
堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑱



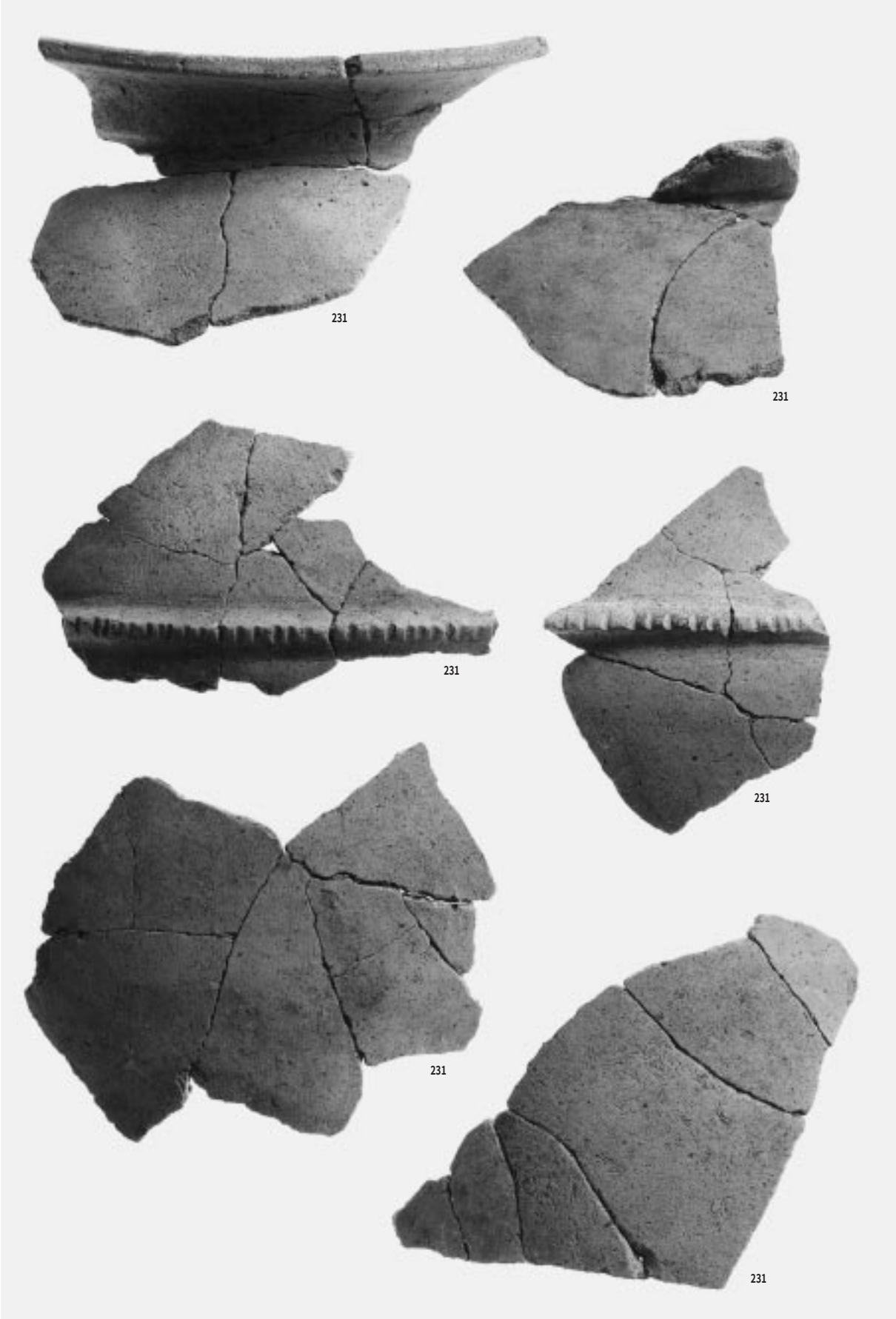
堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑲



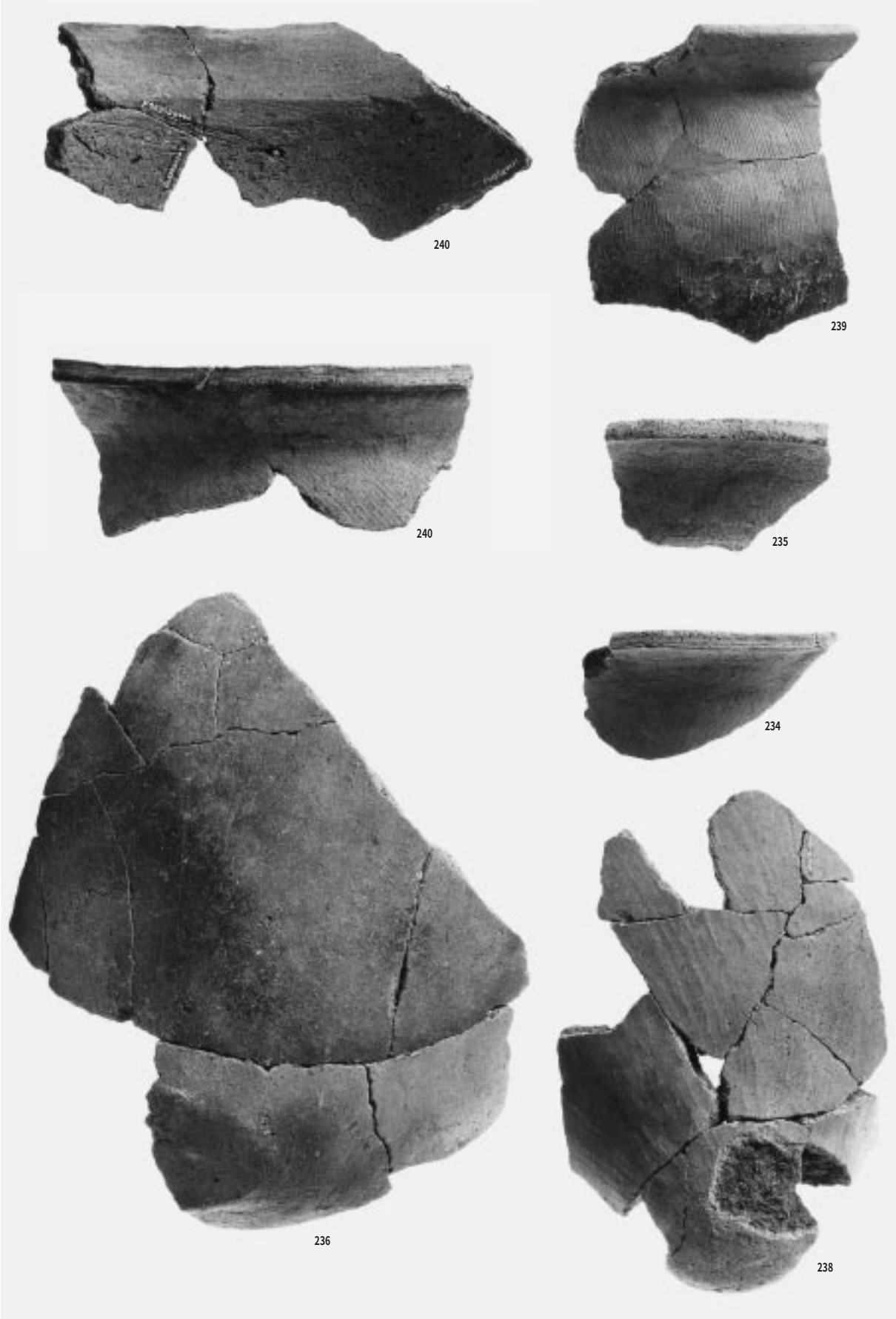
堂園遺跡Ａ地点出土遺物⑳



堂園遺跡Ａ地点出土遺物(21)

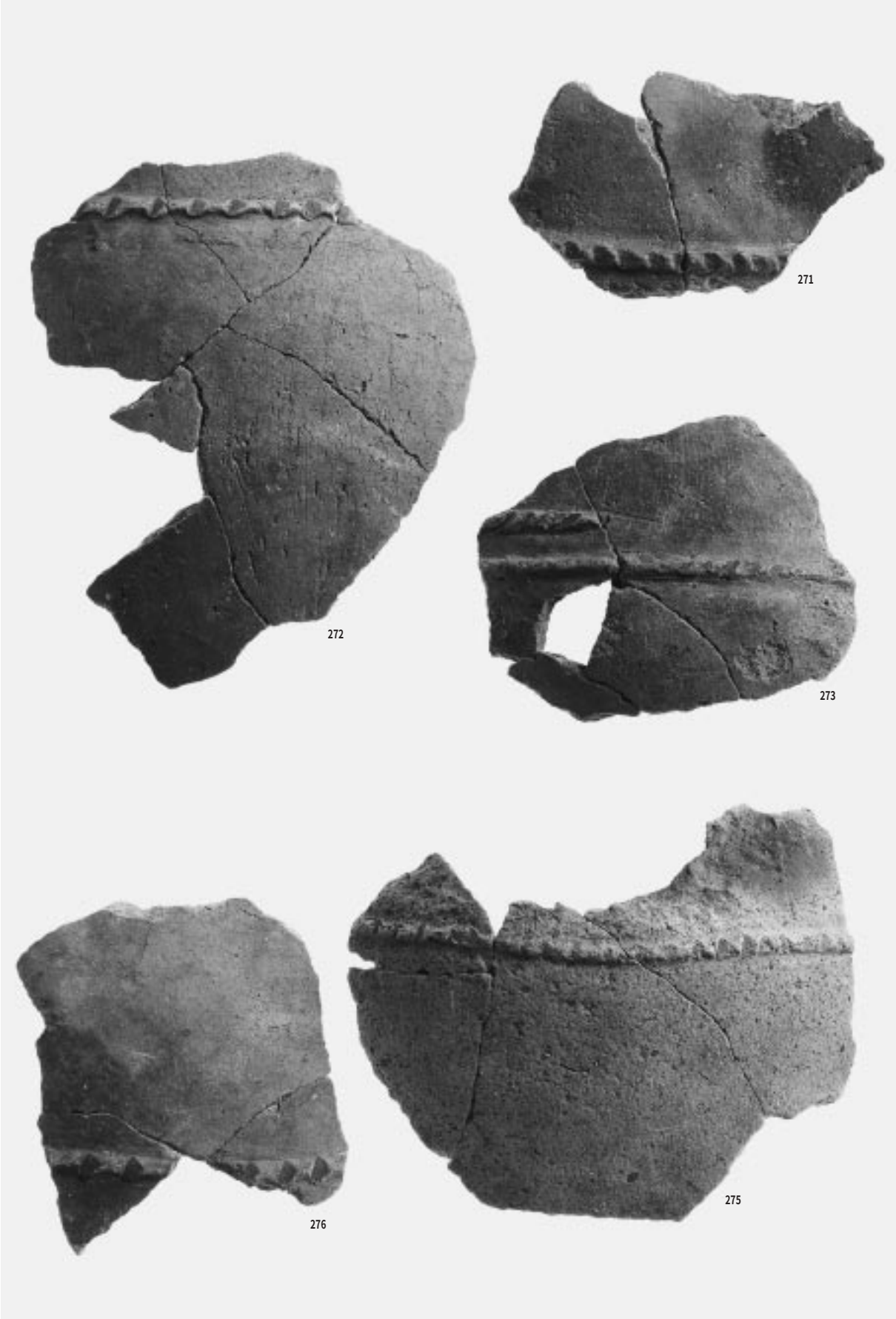


堂園遺跡Ａ地点出土遺物(22)

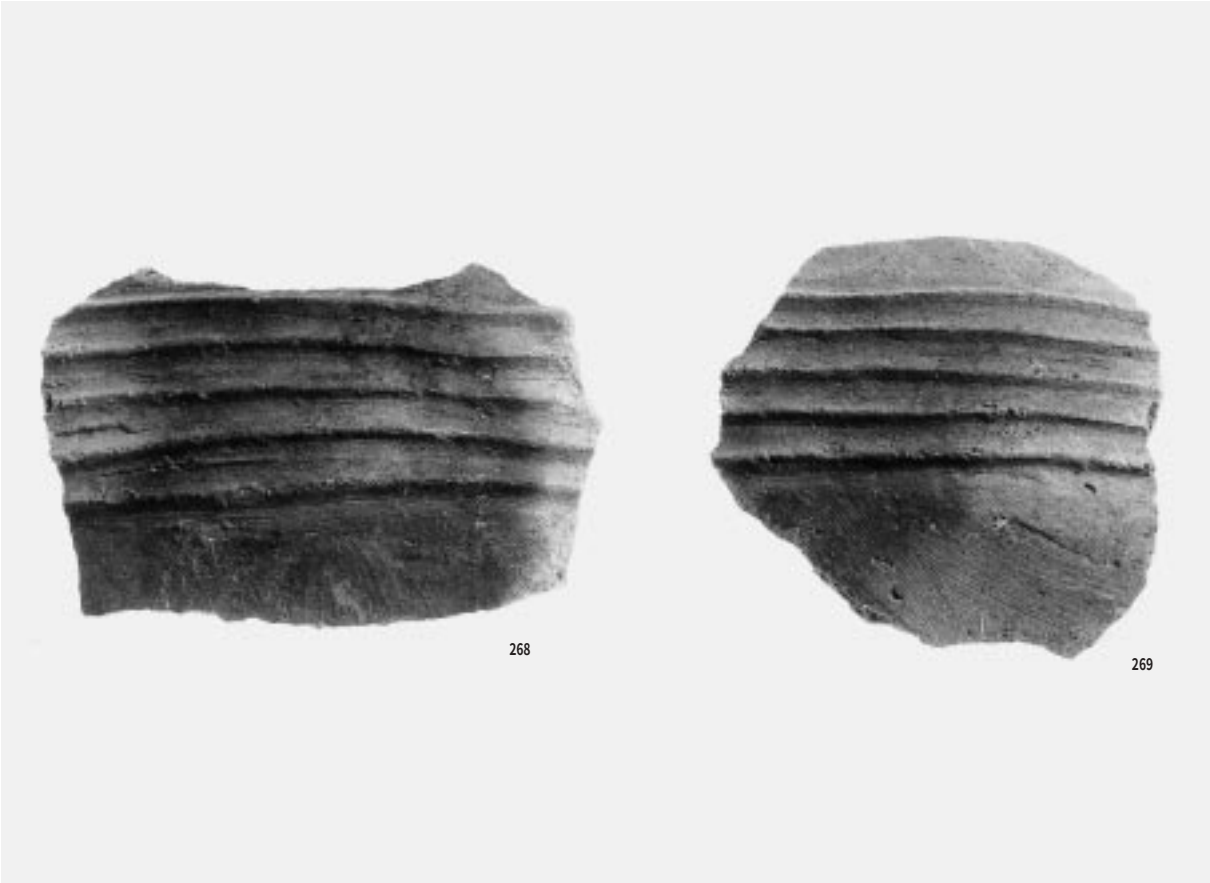


堂園遺跡Ａ地点出土遺物(23)

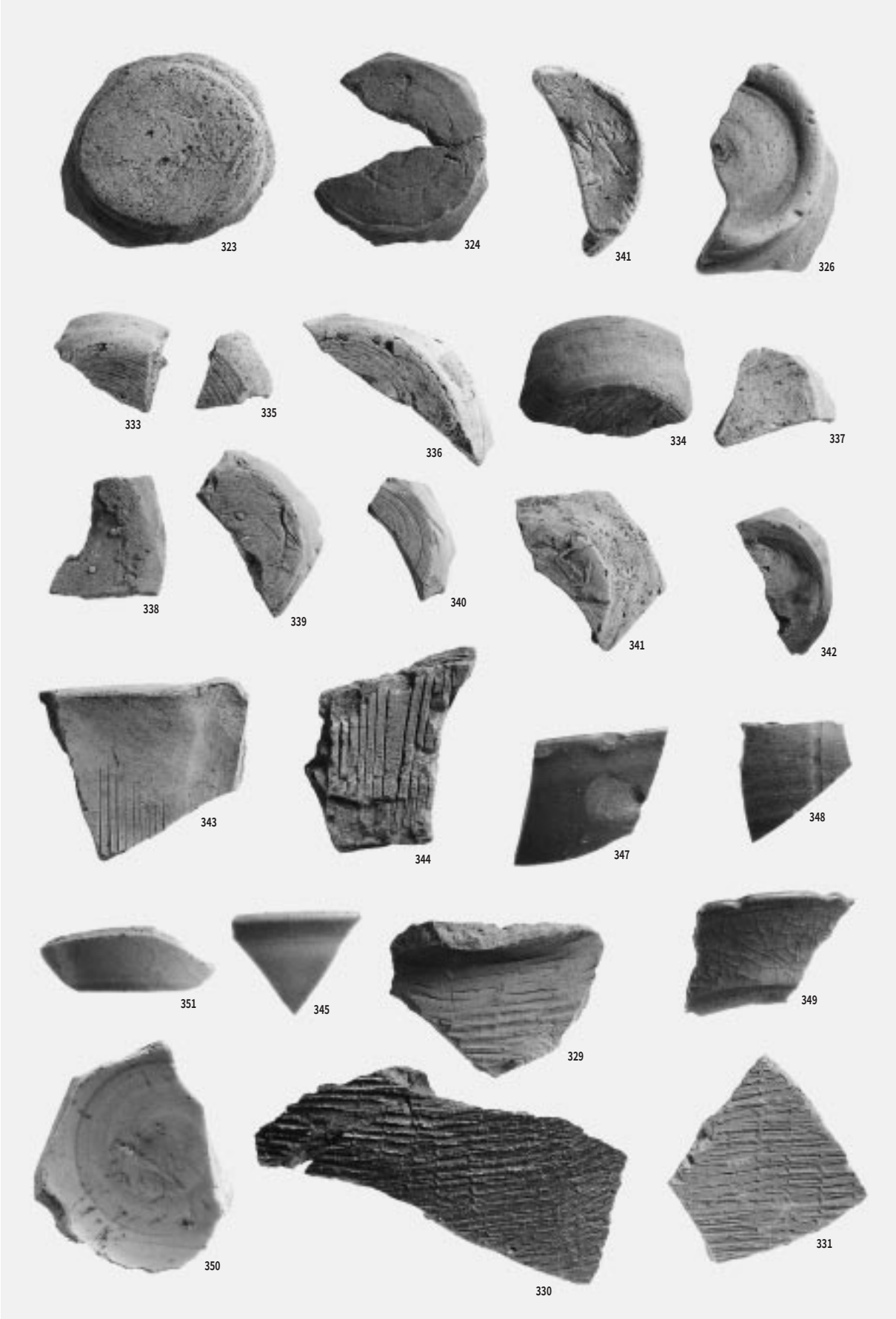
堂園遺跡Ａ地点出土遺物(24)



堂園遺跡Ａ地点出土遺物(25)



堂園遺跡Ａ地点出土遺物(26)



堂園遺跡Ａ地点出土遺物(27)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（108）

南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）

堂園遺跡Ａ地点
古殿諏訪陣跡
折戸平遺跡
山神迫遺跡

発行年月　2007年３月
発　　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
☎0995－48－5811

印　　刷　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
☎099－250－7033